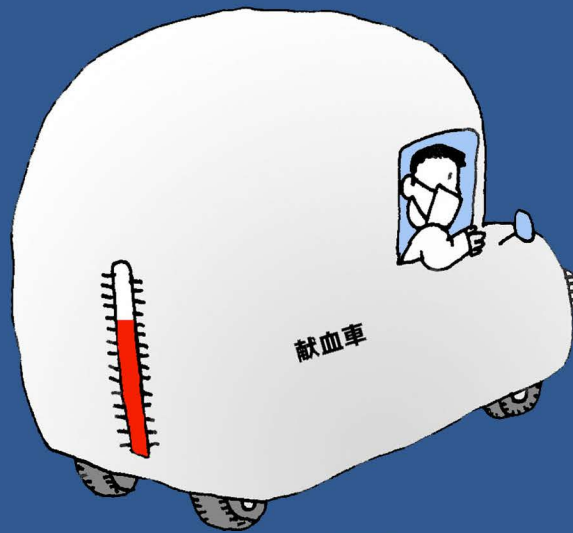


連載専門誌

# 対人援助学マガジン



vol. 12 No. 3

第47号

December 2021

対人援助学会

## No.47 M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野 大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
障害者福祉援助論	千葉 晃央	016-020
臨床社会学の方法 (35)	中村 正	021-032
テレワークで崩壊する組織	団 遊	033-039
カウンセリングのお作法 (29)	中島 弘美	040-045
対人援助学との出会い (3)	藤 信子	046-047
エア絵本 -ビジュアル系子ども・家族の理解と支援-	岡田 隆介	048-060
配偶者を亡くして一年日記 (2)	団 士郎	061-082
社会的養護の新展開 (16)	浦田 雅夫	083-085
幼稚園の現場から (47)	鶴谷 主一	086-091
福祉系対人援助職養成の現場から (47)	西川 友理	092-096
ああ、相談業務	河岸 由里子	097-099
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	100-102
ドラマセラピーの実践・研究・手法 (6)	尾上 明代	103-107
対人援助学&心理学の縦横無尽 (32)	サトウタツヤ	108-112
きもちは言葉をさがしている (45)	水野 スウ	113-118
ノーサイド(36)	中村 周平	119-120
路上生活者の個人史 (4)	竹中 尚文	121-126
男は痛い! (41)	國友 万裕	127-133
役場の対人援助論 (39)	岡崎 正明	134-138
臨床のきれはし (15)	浅田 英輔	139-140
発達検査と対人援助学 (6)	大谷 多加志	141-144
講演会&ライブな日々 (29)	古川 秀明	145-149
家族と家族幻想 (8)	坂口 伊都	150-154
周辺からの記憶 -東日本大震災家族応援プロジェクト- (33)	村本 邦子	155-162
精神科医の思うこと (23)	松村 奈奈子	163-165
馬渡の眼	馬渡 徳子	166-167
東成区の昭和 やぶにらみ日記	柳 たかを	168-175
心理コーディネーターになるために	山下 桂永子	176-178
そうだ、猫に聞いてみよう (24)	小池 英梨子	179-183
先人の知恵から (34)	河岸 由里子	184-189
うたとかたりの対人援助学 (20)	鵜野 祐介	190-193



ああ結婚 (20)	黒田 長宏	194-195
PBL の風と土 (19)	山口 洋典	196-201
接骨院に心理学を入れてみた (18)	寺田 弘志	202-209
マガジン執筆者訪問記(3) 寺田接骨院	大谷 多加志	210-216
現代社会を『関係性』という観点から考える	三浦 恵子	217-221
<b>新連載</b> コミュニティが育つ子どもがいる暮らし	朴 希沙	222-225
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (15)	迫 共	226-229
「余地」—相談業務を楽しむ方法— (17)	杉江 太朗	230-233
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡 園子	234-236
生体肝移植ドナーをめぐる物語 (15)	一宮 茂子	237-247
こころ日記「ぼちぼち」partⅡ	脇野 千恵	248-249
フリースクールでの SW 実践を考える	高名 祐美	250-253
原田牧場 Note (8)	原田 希	254-255
みちくさ言語療法 (5)	工藤 芳幸	256-259
かけだ詩 (7)	川畑 隆	260-264
応援、母ちゃん (7)	玉村 文	265-268
HITOKOMART	篠原ユキオ	269-272
キャリアと文化の心理学	土元 哲平	273-275
コロナ禍の中「幾度となく会い、語りあうことの意味」を考える	本間 毅	276-283
この世界で生きるあなたへ - 国境なき医師団の活動をふりかえって -	河野 暁子	284-286
川下の風景	米津 達也	287-288
一語一絵	畑中 美穂	289-291
福祉教育への挑戦	高井 裕二	292-293
対人援助をリポートするこの一冊 (4)	二階堂 哲 他	294-298
中国のセクシャルマイノリティ支援	劉 強	299-300
島根の中山間地から Work as Life	野中 浩一	301-307
夫の腎臓と笑う私	両角 晴香	308-310
<b>新連載</b> かぞくのはなし	きむらあきこ	311-314
対人援助学マガジン読書会報告&第4回読書会告知	編集部	315-316
対人援助学マガジン執筆者トークライブ報告	編集部	317
編集後記	編集長&編集員	318-319



ハチドリの器 30

見野 大介

*Mino Daisuke*



上：暁紅釉酒器  
中：翠釉茶盃  
下：蒼天釉酒器





## きむら あきこ 新連載

久しぶりに書いてみました。言い訳になってしまうのですが、昨年、手足の末梢神経障害が起きてしまう、CIDP という難病を発病してしまいました。長い時間一つの作業ができません。パソコン操作も同様です。ですので、復帰作ものんびりと。今できることを、今できるうちに…

かぞくのはなし  
P311～

## 朴 希沙 新連載

【Not a サクセスストーリー、But a リアルストーリー】

世の中には様々な子育て本があるらしい。子育て本だけでなく Youtube、漫画、教材…今号から始める「コミュニティが育つ、子どもがいる暮らし」の連載では、根無し草のように親や家族からの援助が得られない私たち夫婦が、どのように周囲から助けを得られたり得られなかったりしながら子育てに取り組んでいるのか、そのリアルなお話を届けたいと思う。そして結果的に、子どもだけでなくむしろ私たち大人、そしてその所属するコミュニティが成長していく可能性に注目したい。つれづれなるままに試行錯誤の日々の暮らしをご紹介します。

コミュニティが育つ  
子どものいる暮らし

## 野中 浩一

今年もこたつから出られない季節になってきた。異常気象という言葉には実感を持つてるが、温暖化という言葉は私には夏の一時期を除いて実感が薄い。

島根の冬は寒い。今年は11月半ばにしてスタッドレスタイヤに替え、トランクにはスコップと毛布を入れて備えている。ガチガチ凸凹に凍った国道をオフロード感覚で運転する時期がやってくる。雪や氷で覆われる冬は危険を感じることも多く、運転が怖い。しかしほとんど雪が降らない稀な年には少し物足りなさを感じるから不思議である。

そんな降雪地域に住み続け、日々仕事に出かけられることは有り難い。早朝から除雪作業をし、氷解剤を散布してくれる土建会社や作業員さんのおかげであり、道路整備の行政サービスがあってこそである。このような従来の「当たり前」がいつまで当たり前であり続けられるのだろうか。ふと思う。

「島根の中山間地から Work as Life」  
P301～

## 畑中美穂



女が3人揃うとさわがしい。久しぶりに帰省して母と妹と話をしている時のこと。「あっ！！ なんと生意気な～！！」

ふと見れば、妹が母のネイルケアをしたとのこと、中年ふたりと比べて明らかにきれいな手の母は、ぴかっと光る爪を恥ずかしそうに前に差し出して、まんざらでもなくうふと笑う。若い頃から化粧気もなかった母である、大いに驚いた。よかったね、お母さんにこのようなきらきらしたことがあって、私はうれしい。

一語一絵  
P289～

## 二階堂哲

(小幡知史・渡辺修宏・二階堂哲)

第1、2回と、渡辺さんの半生と、対人援助実践をレポートした一冊についてご紹介させていただきました。

前は小幡さんより、対人援助実践に関する振り返りと、ジレンマを打開するヒントをくれた一冊をご紹介させていただきました。

第4回目の今回は、二階堂より特別支援学校で働くための指針となっている2冊の本を紹介させていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

対人援助実践をレポートする  
この一冊  
P294～

## 米津達也

あまり実感がなかったが、私が暮らす滋賀では、琵琶湖の水位が下がり続けている。このままいくと取水制限で、いずれ生活に影響が出るかも知れない。

そんな中、湖底に沈んでいた坂本城の石垣跡が水位低下で27年ぶりに姿を現した、とニュースになった。歴史ファンの年寄りに交じって見物した。頼んでもいないのに、講釈してくれる爺さんがいた。

湖上の反対に見えたであろう安土城。そして、振り返れば比叡山延暦寺。歴史の面白さを感じる秋。

川下の風景  
P287～

## 高井裕二

先日、20代後半の先生が終電に間に合わせるためにスマートフォンのアラームを設定されてました。「なんかカラータイマーみたいですね」とコメントしたところ、ポカんとされ、「カラータイマーってなんですか？」と返されました。なるほど。確かに今のシン・ウルトラマンにはカラータイマーがないですもんね。研修でのネタが一つ増えました。

福祉教育への挑戦  
P292～

## 本間 毅

私は今年の7月で64歳になりましたが、これまで特に節制もせず気が向いたとき

にベンチ・プレスをする程度で病気や怪我とは縁遠い人生を過ごしてきました。生まれつき体が丈夫で運が良かったのでしょう。そんな私も、昨年末から血圧が200/100mmHgまで上昇し、多発網膜裂孔（網膜に孔があくが痛みはなく、小さな黒点やクモの死骸のような網膜片が視野に漂います）や高脂血症など身体面の不調が続き、持病の花粉症と不眠も悪化しました。患者さんと役割を交代したのではなく、私の中で医師と患者の役割が錯綜する日々が始まったわけです。その誘因は、認知症高齢者の人格を貶めるマイクロアグレッションにありました。絶え間無く流れる言葉の中の良からぬものを見出し、修正する行動力より精神の流動性が私には足りないのだと思います。自分に向けられた言葉ではないのにうんざりして罪悪感さえ憶える。マイクロアグレッション研究会訳の『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』には多くを学びました。

職場の理解を得て、勤務日数を減らしてストレスから離れ運動を習慣づけたところ、現在は降圧剤無しで起床時の血圧は100/70mmHgまで改善しました。でもストレスが近づくと忽ち血圧は跳ね上がり、その夜は飲酒量が増え睡眠も浅くなります。blood pressure（血圧）とはよく言ったもので、他に原因がない「本態性高血圧」では精神的なプレッシャーが血圧変動の原因にも結果にもなります。私の「研究者としての虚栄心」を尊重しながら併走してくれる「かかりつけ医」は、プレッシャーを調整してくれる精密で有り難い圧レギュレーターのような存在だと思いました。

「幾度となく会い、  
語りあうことの意味」

P276～

## 河野 暁子

10月から新しい仕事に就きました。緊張しつつも楽しみにしていましたが、あまりにパソコン作業が多いことに驚きました。いくつものアカウントやパスワードが配られ、あっちのシステム、こっちのシステムというように、別々の箇所へ入力を求められました。入力方法は、配布されたマニュアルを参考にします。よく分かっていないまま作業をしていると、思わぬエラーが出てしまい、それ以上は進めません。

毎日確認する職場内の連絡事項も、すべて電子化されており、業務に必要な情報にたどり着くまで、マニュアルを開いて格闘します。メールや連絡事項のチェックをしているだけで、時間はどんどん過ぎていきます。まるで機械に私が消費されているようで、仕事を始めた当初は、げっそりしていました。

その一方、手書きで印鑑をつく書類も依然として残っていて、対面で確認しながら提出すると、とてもほっとするのです。シンプルなのが一番だなと思いました。

この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動～

P284～

## 土元 哲平

2021年10月から11月まで、鹿児島県の硫黄島にフィールドワークに行ってきました。大阪から飛行機で1時間+船で4時間と、遠いようで近い場所にあります。学校に毎日通いつつ島で過ごしていると、なんと、慢性的だと思っていた肩こりが治りました。子ども達と毎日走っていたからでしょうか。あるいは、PCに向き合う時間が減ったからでしょうか。大阪に戻ると再発したので、やはり今の生活習慣は見直さなければ、と思った次第でした。



キャリアと文化の心理学

P273～

## 玉村 文

今回は「子どもと感染症」をテーマに原稿を書きました。その後も入院こそしていませんが、子ども達は次々と風邪をひいて看病続き。気がついたら今回の原稿の締切に迫っていました。一人治ってもその次がくる、子どもが複数人いると感染の心配かと当たり前ですが、痛感します。そんな今回は、産休育休をどう過ごすかがテーマです。風邪の看病だけで終わらせない。

産休育休を休みとして使うのではなく、育児中ということを有効に使うと挑戦しています。

応援 母ちゃん！

P265～

## 川畑 隆

前号の「かけだ詩⑥」に載せた「テレビ番組の記憶の底(65歳以上限定版)」のなかで、『若い季節』の出演者の1人を「菅原進」と書きました。自分で書く時には何も思いませんでしたが、発行されたものを読むと「アレッ?! これってビリーバンバンの弟のほうじゃないの?!」と気づきました。『若い季節』に出ていたのは「菅原謙二」でした。

そこに「『まぼろし探偵』はラジオだったか?」とも書きましたが、たしかにラジオでした。その当時『まぼろし探偵』が一番好きでしたが、その声はたしか沼田曜一でした（「一番好き」と書いた時点で、『赤胴鈴之助』を思い出しました。大事な番組を抜かしていました）。

なぜ『まぼろし探偵』がラジオだったと思いついたか。「今日がお誕生日のお友だち」を紹介する番組のコーナーで、「かわばたかきちゃん、5歳」というお姉さんの声がラジオから流れました。母親がハガキを出してくれていたのです。自分の名前が耳に届いてとても不思議な気持ちになったのを覚えています。そして、その番組の前に聴いていたのが、たしかに『まぼろし探偵』でした。

かけだ詩

P260～

## 原田 希

毎年12月は地域の若妻会でクリスマス会をやっています。ささやかな金額でプレゼント交換もあり、仲間が喜ぶ顔を想像して真剣に選びます。自分よりも子どもや親が優先の世代、ささやかでも「私」あてにプレゼントがある！のはみんなウキウキだと思います。

以前、新しい人が会に入った時に、自己紹介ではなく、他己紹介をやりました。仲間が「私」を解説＝紹介してくれるくすぐったいものですが、照れながらも全員が仲間からギフトをもらった気分になりました。ふいの言葉の贈り物もいいものです。



ね。コロナにより集まる回数は減っていますが、来年こそは少しずつ戻していけますように、と願います。

**原田牧場 Note**  
P254～

## 工藤 芳幸

今回は2回分休載し、福祉職として社会人デビューした当時の出来事を振り返りながら執筆しました。20年分程度は仕事の経験を積んで、その貯金で何とかやりくりできていたことも多かったと思われるのですが、新たな研究課題や新しい勤務校の大学生、新たに臨床現場で出会う子どもたちと関わる中で、最近はどうにも上手くいかないことも出てきました。周囲の変化もありつつ、自分自身の見えない変化もあるのでしょうか。もう1度、物事の理解の方法や“わからないもの”と向き合う態度について考えてみようと思い始めたところです。

**みちくさ言語療法**  
P 256～

## 高名祐美

コロナ禍。研修会や会議、打ち合わせなどはオンライン開催となった。会場までの移動が不要なのありがたい。しかしながらどちらかというと、パソコンに関する事は苦手なほうだ。当初は戸惑うことが多かったが、それなりにについていっている。こんなに毎日のように、パソコンの前に長時間座るとは思わなかった。苦手なことも、必要に迫られればなんとかできるものだと思う。もちろん自分ひとりの力でここまでできるようになったわけではない。できないこと、わからないことは、得意な人に力を貸してもらおう。自分のまわりの人的資源に助けられてきた。必要な部分を援助してもらえば、自分でできるようになる。私はパソコンに関してはクライアントだと感じている。

さて2回続けて、自分の家族の話「母のものがたり」を書いた。今回からは現在の職場でのソーシャルワーク実践について書いていこうと思う。（「フリースクールのおけるSW実践」）

**ふりーすくーーでのSW実践を考える**  
P250～

## 岡田隆介

編集部に「いったん連載を終わりにします」と連絡を入れた後、フォトショップで若かりし日の写真をイラスト化する作業にはまってしまい、それを使った原稿を書こうと思いついた。おかしな順序だが、パワポ好きにはよくある話だ、と思う。

次回(後半)の家族システムのイラスト4枚には相当な時間をかけた。「絵」の出来映えに一人悦に入っている、いつものごとく。

**エア絵本**  
**ビジュアル系子ども・家族の理解と支援**  
P48～

## 一宮 茂子

### 【逆縁の悲しみと寂しさの中で】

知人の娘の訃報を電話で受け、とりいそぎ仏壇のお参りに。娘は独身で豪華なマンション暮らし。知人は70代、娘は享年51歳という逆縁です。しばらく会わなかった知人は、ずいぶん足腰が衰え、動作がぎこちない。心労からか体重が10kg以上減少。知人の夫は80代で認知症もあり、デイサービスに通っていますが、老老介護です。今一番困っていることは、娘が住んでいたマンションを売却するための片付けのこと。これなら私は手助けできます。知人は娘を突然失い、いま、ここに娘がいない苦痛、亡くなった悲しみや寂しさ、葬儀や財産処分です浮上した息子夫婦への不信感、分かち合えないつらさが続いています。この苦痛から救われるひとつの道は、死者への思いを誰かよい聞き手に語ること、悲しみをともにし、つらさを訴え、死者への自責やつぐないの気持ちを分かち合うことだと、何かの本で読みました。以後、何かにつけて知人からの電話相談が増えました。私は言葉のキャッチボールが喪の作業になるなら喜んで引き受けた次第です。

**生体肝移植ドナーをめぐる物語**  
P273～

## 松岡 園子

最近、来年に開催されるヤングケアラ一関連の研修会での事例提供を依頼されることが多いです。すでに4件ほどいただ

いています。関心の高いテーマになってきているのでしょうか。

来年2月ごろに出版される、ヤングケアラ一関連書籍の一部も執筆させていただきました。自分の体験をシェアするたびに、ただ話すだけでなく、今、大変な思いをしている人たちに役立つこととは何なのか、支援者の人達に今、役立ててもらえることとは何かと、体験を振り返りながら考えさせられます。

**統合失調症を患う母とともに  
生きる子ども**  
P234～

## 杉江 太郎

児童福祉の現場で働いている杉江と言います。以前、職場内で「カフェドウスギエ」を運営していると書きました。コーヒーを定期購入することで、某メーカーのコーヒーマシンをレンタル出来たので、利用される方にとっては、マシン代の負担なく、1杯単位で、いつでも暖かいコーヒーが飲めると(おそらく)人気でした。人事異動に伴い、移転、リニューアルなどもありましたが、それなりに継続出来ていたので良かったのですが、この数か月で、小さな変化が続いたことで、たちまち在庫過多に陥ることになりました。



その理由は2つあります。1つ目は、コーヒーを毎日飲まれていた方が、休まれたり、退職されたりしたことに伴い、そもそもの消費量が落ち込んだことです。2つ目は、新型コロナウイルスの影響で、コーヒーそのものが輸入されなかったようで、定期購入のタイミングで届かず、やむなく、近所のスーパーで購入してしまったことです。

在庫を抱えているにも関わらず、またコーヒーが届き、さらに在庫が増えるという

悪循環に耐えきれず、ついにマシンを購入する決断をして、定期購入を解約し、旧のマシンはお返ししました。カフェドウスギエ新装開店です。普段利用して下さっている方からは、マシン代をカンパするとのお声掛けも頂いたのですが、マシン代を受け取ってしまうと、所有権が杉江でなくなり、個人商店から合同会社になってしまい、もし人事異動などあれば、持ち出せなくなる可能性があるためお断りをしました。いや一商売は難しい。(ちなみに赤字です)

### 「余地」-相談業務を楽しむ方法- P230~

## 迫 共

衆議院選挙が行われました。私が住む浜松市では参議院議員の補欠選挙が1週間前だったので、あわせて期日前投票に。会場に着くと平日なのにならりと人の列があり、しかも段差だらけ。車椅子の方が進めずに「帰る」とおっしゃっていて、投票前からがっかりした気分になってしまいました。

学生に聞くと、「投票には行かない」という人が圧倒的。どうやら「自分がまちがった選択をするのが怖い」と考える人が一定いるようです。責任回避のために選択を避けるというパターンようです。

そこで、こんなことを話してみました。

「あのね、誰がどこに投票したかなんて、誰にも分からないんだよ。でも『20歳代の男性・女性の何割が投票に行ったか』はデータとして残る。むしろ政治家はそこに注目している。だからある年代・属性の人たちの大部分が投票に行くようになれば、その年代・属性の人たちのことを無視できなくなって、結果的にその人たちのことを考えた政策を作らざるを得なくなる。『投票に行かない』ということは、政治家に『私たちは無視してもらっていいです』と言ってるのと同じなんだよ」。

若い人たちの心に、少しでも響いてくれたらいいのですが…。

### 保育と社会福祉を漫画で学ぶ P226~

## 浅田 英輔

最近、クルマを新調した。MT がすきだ

が、8月まで乗っていたのはATだった。8月末に納車された(中古だからすぐました)のは、7年ぶりのマニュアル。自分で操ってる感がいいんだらうなと思う。メゴくてメゴくて、休みの日は一人で300キロドライブしたり、毎週洗車したりしています。

### 臨床のきれはし P139~

## 三浦 恵子

前回の執筆者短信では、ヘルプマークの取得を決心したこと、実際に着用してみると、1週間のうちに2回「邪魔」と通りすがりに吐き捨てられる経験をしたこと(ある時はエレベーターを駆け降りる人からすれ違いざまに、ある時は酒気を帯びた様子の男性から)、こうしたことがあることは聞いていたが、さすがに心に突き刺さったということを記載しました

「ヘルプマークをつけていることでかえって危険を感じられる場面もあり、今後どうするか考えている」と結びましたが、実際には現時点 R3.10.31 時点ではまだヘルプマークを付けています。



前回の執筆以降、ほぼ毎週介護帰省が重なり、週2回新幹線での往復をしながらか働くこともありました。今回の介護帰省は、社会資源の調整など緻密な連携を行い、義母の病態にマッチした受入先を確保し、無事に義母を当該受入先に定着させるというかなりヘビーな課題があり、デスクワークはともかく、帰省の荷物を持って揺れや混雑のある交通機関での移動に不安を感じることも多かったからです。

しかしこの3か月、転倒時などに助けていただいた経験が多くありました。時には「気付くのが遅れてごめんなさいね」と言ってくださる方までおられました。また、支えていただく時に、不具合のある部分に配慮した支え方をしてくださる方もいらっしゃ

いました。感謝に尽きませんし、私ができることをきちんと社会にお返ししていこうと改めて感じました。次回の日赤救急員の更新はもう難しいかなと諦めていましたが、更新時期に備えて回復を目指そうという目標も出来ました。

義母の施設移行など様々に繁忙な日々が続き消耗していましたが、こうしたことがあると本当に勇気づけられます。

### 更生保護観音署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

### 現代社会を『関係性』という 観点から考える P217~

## 黒田 長宏

『対人援助』って、人だけがやることでもないんじゃないの?と思ったのは、ロボット掃除機のおかげで掃除をするようになったからである。だけどロボット掃除機を作ったのは人間ではある。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

### あぁ結婚 P194~

## 尾上明代

このマガジンでも何回か紹介したことのある、カナダのドラマセラピスト・ダンスムーブメントセラピストの Yehudit Silverman が制作し、数々の賞に輝いたドキュメンタリー映画「自死に隠された顔」(The Hidden Face of Suicide)の邦訳版を、助手の方と協力しながらこの夏に完成することができました。映画字幕の翻訳は初めてで、毎画面の限られた時間の中に入れる作業は大変でしたが、字数第一に意識をするのではなく、内容を正確に表現することに力を注ぎました。

この映画には、自死に関する遺族の語りや変容が含まれています。そして Yehudit の親族に起きた自死に関する彼女自身の探究と、自死遺族へのアドボケイトが実現されています。自死はさまざまな文化圏においてタブー視され、隠されなければいけないような社会の現状があり、それを破りたいという強い願いがこめられています。さらには、この映画自体が、芸術を使った研究(Arts-Based Research)と

もなっているのが特徴です。

Yehudit が運営する映画のサイト→  
<https://tinyurl.com/ank9wbx9>  
(収益金は遺族の自助グループに寄付されています。)

自死遺族についての学び、その変容にアートがどのように活用されるのか等に興味のある方、対人援助者の方、芸術を使った研究方法に興味がある方などにお薦めします。

### ドラマセラピーの実践・手法・研究 P103

## 松村奈奈子

コロナが落ち着いて、秋の京都を楽しむ修学旅行生の姿を久しぶりに見かけるようになりました。そして、診察室に来る京都の高校生達も、信州や鹿児島へ修学旅行に。コロナ前は沖縄や海外に修学旅行に出かける高校生の話をよく聞きましたが、今は期間も短く、場所も近めになっているようです。それでも高校生の楽しそうな土産話を聞いていると、こちらも旅に出たくなりました。



そこで私も、八ヶ岳高原にいたり京都北部に枝豆や栗を買いにいたり、秋の大人の旅をちょっぴり楽しみました。

### 精神科医の思うこと P163~

## 柳 たかを

### 「対人援助」について思うこと

かつて10年間、私立の芸大でマンガを通じ学びを得て来た若者と共に過ごし、逆に私がいろいろ学ばせて頂きました。

学校での集団生活の中で起こるさまざまな問題、級友とのトラブルや進学問題、親の経済状態が子に及ぼす影響など、人の数だけ原因と症状がさまざまでした。

これを病気に仮定してみると、病気が治るというのはもとの健康状態・普通状態に戻ることですが、普通の健康な時に家にばかりいると、無性に外出して歩き回りたいくなります。旅(外出)はいつも小さな体験から大きな感動まで毎回変化に富んだ出来事に出くわしますが、考えてみるとわざわざ苦勞するために旅に出ているようにも思えます。そして何事もなくいつもの普通の生活に戻れることが幸せだと気づく。ところが幸か不幸か深刻な問題に直面した時はどうすればその場を乗り越えられるか分からず、焦りと疲労が積もり時間とともに怒りさえわいてきたりする、最悪です。混乱に心を占領されると冷静さを失い、わざわざ自分から危険(破滅)に飛び込んで行きかねない。そんな時に冷静な心を取り戻すアドバイスをくれる人がいて、そのアドバイザーが日頃から信頼している人だとより効果があるように思います。結局、病気と同じで薬で治るのではなく、薬(アドバイス)をキッカケにもともと持っている自己治癒力が覚醒して自分で自分の心体を元の普通の状態に戻していくということではないでしょうか。たいへんだったけど何とか帰れたというところでしょうね。

いろんなことが同じような「起承転結」のドラマを繰り返しているのかなと、マンガ家の私は考えてしまうのでした。

### 東成区の昭和 思い出ほろほろメモ P168~

## 小林茂

2015年から対人援助マガジンに連載を投稿させていただきましたが、このところ本務の業務で大きな変化が重なり、少しの間連載をお休みさせていただくことにいたしました。

関係している幼稚園の園舎の建て替え、所属している大学の所属学部の新キャンパスへの引越し、内部での役務の増加、新型コロナ関連で仕事の段取りの変化と調整の綱渡りに、ついに音を上げてしまった次第です。

またしばらくしたら戻ってきますので、よろしく願いいたします。

### 対人支援 点描 当分休載

## 藤 信子

先日の週末に、私たちの研究会の開催する年1度の2日間のグループ体験(集団精神療法の研修)を実施できた。

できた、というのは感染状況によっては、会場が使用できなくなり、対面でのグループを中止し、オンラインのグループに変更しなければならなくなることも考えられたからである。会ってみると、1年ぶりに対面で会うことに気付くメンバーもいた。オンラインでPCの画面で顔を見ていたけれど、実際には会えていなかったのだった。2日間のグループを終えた翌日の疲労は、全身、頭も体も疲れているな、という感じで、「そういえば、こんな疲れだった」と疲れの体験を思い出した。オンラインの(オンラインで2日間のグループはとても疲れそうだから、実施していないけれど)何かキリキリした、肩と腰が痛くなる疲れとは違う。オンラインは距離を無くして参加できるメリットはあるけれど、やっぱり早く普通に帰って対面で会いたいと思う体験をした。

### 対人援助学との出会い(3) P46~

## 団遊

アソブロックの社長を退任して2カ月が経った。改めて自分は何がしたかったのか、何ができたのかということ客観的に見てみようと思い「アソブロックとはなんだのか」という冊子を作ることにした。創業からこれまでアソブロックに所属してくれたメンバー全員に声をかけ、原稿をもらおうというプロジェクトだ。

やり始めてみると、卒業後もみなとつながっているつもりだったが、連絡先が分からない卒業生も案外いる。卒業生をリストにしてみたものの、抜け漏れがあるのではないかという不安もある。もちろん良い別れができなかった卒業生もいるし、在社期間が1年に満たなかった卒業生もいる。でも、良かったことも良くなかったことも、すべてが今の礎だから、それらを率直に書いてほしいと思い、連絡先を探し出しては依頼を続けている。

果たして何人から原稿が集まるかは分からないが、このような機会がなければ、卒業生に「退任」をわざわざ報告することもないだろうと思ったのも、冊子を作ろうと



思った理由のひとつだ。

この作業が、ひとり探偵ナイトスクープのようで、案外楽しい。やり取りをすることで思い出す出来事もたくさんある。20年は、やはりそれなりに長い。

### テレワークで崩壊する組織 P33~

## 村本邦子

最終年のプロジェクトは本当に現地開催できるのか!?と危ぶまれたが、何とかやれそうだった。8月末のむつはオンラインとなったが、10月に院生をフィールドワークに連れていくことができた。多賀城、宮古も制限はありつつ、現地に行けた。そして、もうすぐ最後の福島となる。やはり、その土地に身を置き、人々と出会う一期一会が重要なのだ。11年続けてきたプロジェクトもこれでいったんひと区切りする。

連載も今回で2019年度分まで書き終えた。2020年度はすべてオンラインとなったので、間もなく現在に追いつくだろう。こちらも間もなくひと区切りだなあ。

### 周辺からの記憶 一東日本大震災 家族応援プロジェクトー P155~

## 國友万裕

僕の母は83歳です。先程電話で話したら、友達と一泊旅行に行くとのことまで至って元気です。母は若い頃は本当に苦労が多かった人なのですが、年をとるにつれて幸せな人生を歩んでいます。終わりよければ、全てよし。老年になっても幸せでいれると言うのは素晴らしいことです。



僕も年をとるごとに、尻上がりに幸せになっています。10代よりも20代の方がいいし、20代よりも30代の方がいい、30代よりも40代の方がいい、そして、40代よりも50代の方がいい、そういう人生でした。でも、いまだに男性問題が認識されない

のが悲しい現実です。徐々にそういう文献は多くなっているのだけど、それを読むのが一部の人のため、まだまだ世間の大半の人は男性問題なんて知らん!という雰囲気ですからね。

これを知らしめるのが僕のこれからの人生の課題になるかもしれないです。

### 男は痛い! P127~

## 古川秀明

「アフターコロナの時代」

この原稿を書いている日の午前中に、中学生が同級生を刺殺したというニュースがあり、勤務している中学でも話題になっていた。これから学校は大変になる。それよりもっと大変なのは、被害者、加害者双方の家族だ。スクールカウンセラーとして同様の事件をいくつか経験しているので、今から双方の家族に何が起るのかを想像するだけで切なくなる。

学校の教科学習以外の「教え」が、アフターコロナの時代には不可欠になるのではないだろうか…。

### 講演会&ライブな日々 P145~

## 西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

コロナの影響でなかなかスタートされなかった、保育士養成校協議会による、保育士養成校の教員を対象とした保育士実習指導者認定講座が、2022年3月からいよいよ始まります。保育現場(保育所など)の実習指導者に向けた講座は数年前から東京で始まっているようです。私は社会福祉士の実習指導者講習会のお手伝いを少しだけさせていただいていることもあり、保育分野でのこの動きがかなり気になっています。何をもち「指導者」とするのか、何を指導できる人を「指導者」とするのか、社会福祉士の方もスタート前後、だいぶ議論がありました。現在あまり資料がないので、保育士実習指導者講座の中身はまだ把握できていません。でもおそらく、落ち着くまでにはある程度の時間がかかるのではないかなあと思っています。今後

の動向に注目しています。

### 福祉系対人援助職養成の 現場から P92~

## 坂口伊都

前回から今回にかけて、いろいろな出来事が起き、まさに激動という感じでした。自分の中が混乱状態です。

下の子も成人をし、これからの人生をどう生きようかと考えていたところでしたが、コロナの影響もあって、将来の選択を迫れる事態になりました。これは、今動く時なのだとされているのだろうかと感じました。

家族に相談して、友に相談をして、自分の中を整理して行動を起こしました。そうすることで筋道ができ、私の将来も見えてきました。それは、喜ばしい事なのですが、自分の中が全く落ち着かなくなり、胃まで痛くなる始末。私の中で何が起きているのか?と考えていたら、急激な変化に私自身がついていけずいるのだと気づきました。

そう気づくと、スーッと落ち着きが戻ってきました。里親をする時も悩んで悩んで、よしと気合を入れるまでに時間がかかっていたので、その時間が今回はあまりにも短かったようです。

面倒くさい人間でした私。何をするかについては、次回にお知らせします。

### 家族と家族幻想 P150~

## 河岸由里子

【喪中はがき】ここ二日で喪中はがきが10枚届いた。友人知人からのもので、どれも父母、あるいは義父母が亡くなったのでのお知らせである。女性が圧倒的に多く、全員90代である。本当に長寿になったと思う。私の母は行年72歳で亡くなった。私が40歳になる前のことだ。90歳まで生きていけば20年近くも年月があったわけだ。もしその時間があつたら、母は何をしたらどう?元気で頭もはつきりしていたら、茶道や読書、書道や旅行といった趣味を楽しんでいたのだろうか?007の映画と一緒に見に行ったかもしれないし、いろいろな話をしてくれたかもしれない。もっと楽しい、充実した時間を過ごしていたかなと

思う。

人は誰でもいずれ死ぬ。その時期は人それぞれだ。私自身も明日死ぬかもしれない。では自分自身はどうするか？母が亡くなった年齢に近づいてきて、改めて思う。もしまだこれから20年の時間があるとしたら、何をしたいだろう？まだまだ学びたいだろうか？それとも旅行や趣味だろうか？やりたいことは沢山ある。もうこの年になれば、ある程度好き勝手に何でもやれる。う～ん、悩むなあ。とりあえず、ボケないように注意して、寿命が尽きるまで一日一日を楽しんで過ごしていこう。はがきを見ながら思った。

公認心理師・臨床心理士・北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P97～

先人の知恵から

P184～

## 岡崎正明

ようやくコロナが落ち着いた。待ちきれなかった私は、11月早々に家族旅行を計画し、友人から誘われるままに果物狩りなどに出かけた。外食の機会も格段に増えた。

これまでの何もなかった日々を取り戻すかのように、次々とイベントを入れていたが、その集大成(?)として、ついに猫を飼い始めた。



以前から子どもたちには、自分とは異なる種族との同居を味わってほしい。いろんな世界があることを知ってもらいたい。との願望もあり。そんなわけで先日、我が家に黒い仔猫がやってきた。

じつはこれが対人援助マガジンと深い関係があって。なんとこのマガジンの執筆者仲間である、「猫から目線。」の小池さんから、保護猫を譲り受けたのだ。

マガジンに執筆してもうすぐ10年。その間いろんな気づきや出会いや貴重な機会など、様々なものを与えてもらったが、つい

には猫までもらえるとは。

世の中何がどこにつながっていくか分からない。だからこそ面白い。

役場の対人援助論

P134～

## 大谷多加志

前号からの近況…と考えると思い浮かんだのは以下の2つでした。

①保護猫、飼い猫になる

前号の段階で一時預かりをしていた保護猫を、そのまま我が家で飼うことにしました。これまで動物を飼うなんて一度も考えたことがなかったのですが、思いがけない展開で面白いです。一時預かりは私が提案しましたが、今は家族の方が猫にハマっています。

②ウォシュレット壊れる

数年前に買い替えたトイレのウォシュレットが壊れました。ウォシュレットを作動させてもまともに水が出ず、ノズルからジョロジョロと漏れ出てくる感じです。普段はノズル洗浄のボタンを押すとこんな感じで水が出ていたので、じゃあこの状態でノズル洗浄を押すとどうなるんだろう…と思ってスイッチを押すと…、すごい勢いで水が吹き上がり、トイレが噴水のようにになりました。修理は2-3万円、買い替えは3-4万円ほどかかるということだったので、今回はノズルパーツを購入して自分で交換することにしました。これなら5000円ほどです。YouTubeで似たような機械の取り換え手順を見ながら悪戦苦闘すること1時間。無事に取り換え完了し、ウォシュレット機能も正常に働きました。ドライバーで開けられるものは何でも自分で直すという実家の流儀に、今は感謝です。

発達検査と対人援助学

P141～

## 馬渡徳子

時の流れは、本当に早いものですね。論文のスケジュール通りに、進捗せずに、歯がゆいことばかり……。あと、何回修正したら、完成に辿り着けるのだろうか。

そんな、くさくさしている時に、副指導教官より、社会政策関連学会協議会の主催する「論文・博論をふりかえって-大学院生のためのオンライン講座」をご紹介頂いた。

関西地域の大学院で修士・博士過程を修了された、または修士から博士課程の途上にある方々からの体験談を拝聴し、質疑応答の時間もたっぷりの、実に充実した時間だった。

自分と同じような気付きや躓きを、どのように転換していったか、誰にでも起こりうるメンタルの不調とどのように付き合っていたか、指導教官や学内・学外研究者コミュニティと付き合い方についても、率直に語って下さった。

そうか、いつでも、やり直せるんだ。恥は、もう、いっぱいかいてきた。

もう、全然、恥ずかしくもない。逆に、やり直すことに気付けた自分を、褒めてやろうと思えてきた。

「さあ、もういっぺん」

団 士郎さんの『家族の練習問題』にあるこのタイトルの話が、お気に入りだ。小学校就学児検診時の講話の際にも、毎年朗読させて頂いている。

当時、大学進学で混とんとしていた息子がいた。いしかわ家族面接を学ぶ会でのワークショップの折に、団さんに、サインをおねだりし、その後息子は受験の御守り代わりにした。

私も、自分に、おきばりやす!



九州に現存する、馬渡小学校のものだそうです。大学院入学祝に弟から頂きました。

馬渡の眼

P166～

## 団士郎

多忙に日々を過ごしている。でも、するかしらないかを自分で選択できる状況になったので、ストレスはますますない。

やりたいことから順に手を付けるので、能率もきわめて良い。飽きたら気分転換に他の事をする。その中には読書やDVD鑑賞もあるが、これが趣味というのではない。漫画を描いたりzoom講座をしたり、出かけてWSしたり、文字原稿を書き溜めたりと同じレベルのメニューとしてローテー

ションする。

こんな事が可能になったのは「支払いのある作業」と「ない作業」で区別しなくて済むようになったからだ。

出来れば少しは誰かのお役に立つことをして人生の終盤を過ごしたい。こんな事を自分が思うようになるなんて、若い頃には想像も出来なかった。

馬鹿だった時代も懐かしく、そして今を迎えられていることを有り難いと思ったりするのだから、歳をとったものだ。

### 配偶者を亡くして一年日記(2) P61~

## 鶴谷 圭一

先日、一年半ぶりに新幹線に乗って沼津から近江八幡のケアハウスにいる母親の面会に行った。電車という交通機関に乗るのも一年半ぶり、切符の買い方を忘れていないか心配するほどだった。

在来線との連絡が悪いので米原で降りてレンタカーを借りたが、早朝ギリギリで「こだま」に飛び乗ったので米原の駅で何か食べようと思っていたが、駅前のカレースタンドは閉まっている。「何もない！」周辺にもお店らしきものも無いので、車を走らせ屋前に琵琶湖畔のでっかいカインズホームを中心とするショッピングモールの中でやっとマックのハンバーガーにありついた。

帰りは夕方 6 時頃になったが、米原駅のカレースタンドは開いていると見込んで、途中どこにも寄らずに向かったが、当てが外れて閉まったままだった。駅弁を所望したがキオスクですすでに売り切れで、ホームの立ち食いうどん屋さんにあるかも…というので急いで行って見たらやっていた。うどんは無いというのでそばを注文して、最後の一パック乾燥した鱈寿司も一緒に空きっ腹にかき込む。そのあと暖簾をくぐってきたお客さんは「ゴメンナサイ、もう終わっちゃいました」と言われてしまっていた。しみじみ、最後のひと玉だったんだあ…。

一年半ぶりの電車旅行は何もない米原を感じた一日だった。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール [office@haramachi-ki.jp](mailto:office@haramachi-ki.jp)

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P86~

## 水野スウ

前号、はじめてマガジンを一回お休みしたけど、また戻ってきました。ゆっくり休んで充電するってとても大切で必要なこと、としみじみ実感。

今回は7月に東京のクッキングハウスでお話した「文化と憲法」のレポートを書きました。

マガジン原稿をぎりぎり提出したあと、心は広島へ。去年はコロナで実現できなかった「日本のうたごえ祭典」が、今年は広島で開催されるのです。今回の原稿にも登場した「憲法13条のうた ほかの誰とも」を、石川のうたごえ有志の方たちがグループをつくって歌ってくださることになり、その舞台に、なんと私もまぜてもらって一緒に歌います。

今年5月、うたごえ創作講習会へお話の出前に行った時(その報告はマガジン45号の「きもちは、言葉をさがしている」に)、私のほんの数曲しかない歌の中で代表作はなんてたって「ほかの誰とも！」と胸張ってこの歌の話をしたことが「うたごえ新聞」に大きく載り、それを読んだ人が歌のグループをたちあげ、石川のうたごえでこの歌を歌い、広島で歌える推薦をいただき…と、びっくりするような展開です。



10年以上も前につくった憲法の歌が、私を広島まで連れて行ってくれると思うと感無量。あなたもわたしも、その存在はほかの誰ともけしてとりかえることはできないんだよ、というこの歌にこめたメッセージ、広島からせいっぱい届けてこようと思っています。

### きもちは言葉をさがしている P113

## 見野 大介

ようやく秋らしい気候に。未だに秋冬の展示会と注文の山との戦いに目処は立た

ず。

のんびりと正月を迎えることが出来る自信が全く無い。

### ハチドリ器 P4

## 脇野 千恵

最近、一段と読書量が増えた。もともと日本文学を専攻していた人間。眠っていた夏目漱石全集を引っ張り出してきた。高学年の頃、父が「吾輩は猫である」を読めと言って渡してくれたのを覚えている。なぜ夏目だったのか？本好きな父であったが、年頃の娘に何がいいか考えなかったのかなと思った。学校の宿題より重い課題を与えられたようで、読み終えるのに毎日が苦痛だったのを覚えている。実は今、漱石全集を目の前にして、少しずつ読み直してみようと思っている。若い頃に触れた感覚とは、また違った感動が得られることを期待して。

### こころ日記「ぼちぼち」part II P248~

## 中村正

コロナ禍で学生たちがエネルギーを持って余している感じで、「教室から出たい！」という声が強く、ゼミの時間を割いてスポーツの秋を楽しんだ。学部の3年生たちのクラスだ。合計3時間ほど体育館で汗を流した。ドッジボール、バレーボール、バドミントン、大縄跳び、バスケ等、体育館でできるものの多くを楽しんだ。今年の3年生は2000年生まれの21歳。昨年と今年ほとんどがオンライン授業となっている学年だ。1年生の時は対面だったので少々可哀想な感じもする。全員、若い！15名のゼミ生と62歳の老教授。ルールを設けた。本気を出さないこと、50%くらいにセーブすること、残りのエネルギーをスポーツの苦手な学生への配慮に使うこと、勝ち負けではなく楽しむこと、遊び力を発揮することだ。これは日頃からグループワークで心がけていることと同じだ。教室ではみえてこない学生たちの別の個性がみえてくる。クラブをしている学生は迫力があるが、アスリートらしくスポーツの苦手な学生への配慮を率先して行う姿が清々しい。老教授にもやさしい。20分に一回は休憩を取るように全体を指示するリーダーシッ



プを發揮する学生もいる。行動的な女子学生は男子よりも機敏に動く。なんと言っても教室でみるよりもみんなの笑顔が多い。声もよくでている。そして最後の20分、エネルギーをセーブしていた体育会系の学生やクラブ経験者を中心にしたガチのバスケ。これは迫力があつた。若い人の成長や発達に関係しているの、人間の見方を広げていく必要を感じたが、自らの体力の衰えも実感した。幾度となく足もつれて転倒。何力所かの擦り傷、5日たつてもひかない随所の痛み。自分の子どもよりもはるかに若い学生たちというから気持ち若いつもりだが身体はそうでもないらしい。散歩するくらいがちょうどよいのだろう。

### 臨床社会学の方法 P21~

## 千葉晃央

京都の障害者福祉に大きく貢献されたダブディビ・デザインの柘さん。

<https://dabudivi.com/>

今回は、里親さんという生き方を応援し、福祉事業所さんも応援するプロジェクト



「お菓子の定期便 えがおのおやつ」をされています。

[お菓子の定期便【えがおのおやつ】モニター様からのお声をご紹介します | ダブディビ・デザイン - 福祉とビジネスをデザインでつなぎます \(dabudivi.com\)](#)

里親さんにもつながり、

福祉の就労の事業所さんにもつながり、  
おいしくて、体にも優しいお菓子を届ける！マジでおいしかった！毎月届く！そんな夢のようなことを柘さんがくださったので手にしたときにうれしくてパチリ。



里親支援をされているキーアセットさんと

<http://kiiasetto.or.jp/>

福祉事業所さんとコラボ！そんな企画、実現って枠を超えていて、さすがです！というところで、千葉も応援コメント！

「私をいつも心配してくれる人がいる、いつ帰っても迎えてくれる場所がある、こんな状況にある子どもたちを増やしたい。

そんな生き方を選んだのが里親さんたちです。

国連の「児童の代替的養護に関する指針」は、生まれた家族等との同居が困難な場合に、替わりに整えられるべき生活環境を示しています。

その中で「3歳未満の児童の代替的養護は家庭を基本とした環境で提供されるべきである」と明言されています。

私たちがができることから、始めたいですね。

### 家族支援と対人援助 **ちばっち**

[chibachi@f2.dion.ne.jp](mailto:chibachi@f2.dion.ne.jp)

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P16~

## サトウタツヤ

立命館大学総合心理学部では卒業論文の追い込み時期になってきた。研究室にあつまって皆でピザを食べながら頑張るとか、そういう雰囲気、今年は作れるのでしょうか？ 昨年のゼミ生達、同じ部屋で黙々とパソコンを売っていた姿が思い起こされます。

対人援助学&心理学の縦横無尽

P108~

## 鶴野祐介

今回は今年10月に亡くなられた宮城・山元町の民話の語り部、庄司アイさんの

追悼文を書きました。東日本大震災から十年半、震災の記憶を千年後まで語り継ぐこと、民話の力による「心の復興」を目指して走り続けて来られたアイさん、本当にお疲れ様でした。

うたとかたりの対人援助学

P190~

## 中村 周平

前回、完全に提出することを失念してしまい、短信すらお送りしていませんでした。編集長の団先生、本当に申し訳ありません。以後、このようなことがないようにスケジュール管理を徹底したいと思います。

今年も母校のラグビーチームが全国大会の出場を果たしました。OBとしては、嬉しい限りです。ただ、コロナウイルスがまん延して以降、こういったスポーツを含む集客を行うイベントでは人数制限があり、今年も現地での応援は難しそうです。まだまだ予断を許さない状況ゆえに、自宅からの観戦を考えながら、いつの日かまた現場で応援できることを願っております。

ノーサイド

P119

## 山下桂永子

電話の声と地声がすごく変わる人っていますよね。私はかなり変わるらしく、普段よく話している人ですら、気が付かないことが多いです。

数年間一緒にお仕事をさせていただいていた指導主事の先生が、学校の管理職になられて電話をかけてこられたとき、全然私だと気づかずにおられたので、「〇〇先生、山下です、こんにちは」と言ったら本気でびっくりされて、「うわあ！山下さん！声がきれいでびっくりしちゃった！」と言うので、私も少し悪乗りをして「そうなんです、声だけはきれいなんです」と返したら、先生が「本当にそうだねえ！」と言ったのでちよつとすねました。

今回も電話のお話になります。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために

P176~

## 篠原ユキオ

『隣の庭木』

庭木の紅葉が進んで落ち葉が前の道

路にたくさん落ちるようになり、毎朝の掃除が面倒と、思い切ってほとんどの枝を半日がかりで伐採した。

これで周囲の家にも迷惑かけないで済むと、切り落とした枝葉の後始末をしていたら「アア！お庭の紅葉が綺麗やなあ」と毎日楽しみにしていましたのに…」とこれまでほとんどお付き合いの無かったご近所の老夫婦から相次いで声をかけられた。

「秋にこういう落ち葉が道に舞っているのは風情があって良いものですよ」とも言われたが、みんながそんな感じ方ではないだろうと思いながら苦笑いで返した。

昨年、次女が引越しした家で、向かいの奥さんから落ち葉がうちの庭にたくさん入り込んできてと文句を言われ、昨年はきれいに掃除していたものの今年は思いきって根元から切り倒したら、反対に申し訳なかったと謝りに来たという話を聞いていたので、私も落ち葉問題に累わされたくないと思っただけの行動だったが、それぞれに感じ方は違うものだなあと思ったものである。

昔、ピアノ殺人事件というのがあったが赤ん坊やペットの声も近所トラブルの元となり、近年は運動会のマイク音や除夜の鐘にもクレームをつける人たちが多くいる。確かに『風情』が判らぬ人たちが多くなったという事である。



HITOKOMART  
P269~

## 中島弘美

「今日は僕が支払います」

家族カウンセリングでは、親と子、カップル、あるいは両親など複数の人が面接にやってくる。その日の約90分の話し合いを終えて、次の予約の日時を決めたあと、

カウンセリング料金をいただくのが面接の流れだ。

「僕が支払います」とは、自分が働いて稼いだお給料の中から今回のカウンセリング料金を支払う、そう言って、お金の入った封筒を差し出した。

これまでは親が支払っていたカウンセリングの料金は、働き始めた子ども自身が払うので、事前に準備をしてきたという。親子の表情が誇らしげだった。

「えっ、これは働いたそのお金なの？」

「そうです。初給料です」

「はい、確かに受け取りました」

重みを感じた。そして、その封筒は大切に保管した。

カウンセリングのお作法  
P40~

## 竹中 尚文

11月の初旬、妻の母親の五十回忌で東京に出掛けた。今年の2月18日が命日だったけれど、コロナ禍の中を東京まで出掛けることへの躊躇があった。感染者数の減少を見て、東京に出掛けた。ちょうど神戸空港で門徒さんから「今、亡くなりました」と電話をもらった。これから東京に行くところなので、翌朝には帰るので待っていてほしいとお願いした。妻の実家は50年程前に無くなったが、妻には久しぶりの故郷だ。訳があってもう20年近く、故郷には足を踏み入れることがなかった。帰り際に、その住職から「また、お参りに来てください」という言葉が嬉しかった。秋の夕暮れは早い。町を散策することなく宿に急いだ。また来よう。◆私は、東京に出掛けると新橋のホテルを予約することが多い。そこは、羽田空港からも便利だし、東京の各地に行くにも便利だからである。今回も妻の故郷への地下鉄の便がよかったので、新橋に泊まることにした。新橋は私に限らず交通至便と感ずる人が多いようで、出張族を狙ったホテルが多い。どこに泊まるかとネットを調べると、ずいぶんと安かった。浮かれて高級ホテルを検索してみたら、高かった。結局、出張族御用達ホテルに落ち着いた。泊まってみると、やはり客は少ない。コロナ禍で出張は減っているのだそう。オンラインで商談を済ませるらしい。コロナ禍が終わっても、オンライン商談は終わりそうにない。オンラインで済ませら

れば、経費は安くなる。若い人たちから、オンラインでの仕事だから東京の住居を引き払ったという話をよく耳にした。コロナ禍の時代を経て、商談も働き方も変わりそうだ。◆国政選挙があった。変化を望まないという選挙結果だった。今、若い世代は社会変化を望まないようだ。社会現状に大きな不満はないのだから、このままがいいという。その意識は選挙結果と合致する。30年~50年前より、一般の個人所得は減っている。一方で高額所得者が増えたというから、貧富の差が大きくなったようだ。変化を望まなくても、社会はゆっくり変化する。私たちは社会に、変わってほしいこと、変わってほしくないことを求める。変えたいことと変えたくないことも同様である。そのそれぞれを見極める目を持つことが大切である。

路上生活者の個人史  
P121

## 寺田 弘志

接骨院をしていると、いろいろな人に巡り会えます。前から一度お目にかかりたかった編集部の大谷さんが訪ねてこられて、訪問記まで書いてくださって、感激しました。そのあたりは本文のほうにも書かせていただきました。

先日は、立命館大学ホッケー部の学生さんが、大学選手権で優勝したことや就職が決まったことを報告しに来てくれました。こういう報告をもらえると、とてもうれしい。ただ、もうすぐ卒業の時期。ちょっとさびしい季節です。

接骨院に心理学を入れてみた

P202~

## 山口洋典

断らない性格、というか、断れない性格だと常々感じるがあります。それによって首が回らなくなり、かえって周りに迷惑をかけてしまうことも多々あると自認しています。コロナ禍になり、空間的な移動をせぬままに作業や仕事や活動ができるようになったのも、それに拍車をかけているのかもしれませんが。本マガジンの団編集長には、常々お詫びのメールばかりお送りしているのを恥じる日々です。

そんななか、先日、京都芸術大学の大学開学 30 周年・劇場 20 周年記念企画公演として京都芸術劇場「春秋座」で開催された立川志の輔師匠の独演会に参りました。演目は『中村仲蔵』で、東京以外では初となる「仮名手本忠臣蔵のすべて」と掲げ、屏風絵をバックに浮世絵なども織り込んだスライドにより忠臣蔵の 11 段目までの解説を一気に行う「大忠臣蔵」の 2 演目のみという構成でした。看板役者として抜擢された中村仲蔵が、原作では単に山賊として一瞬の登場に終わる斧定九郎を丹念な演出と渾身の演技によって新たな花形へと仕上げた様を、歌舞伎や映画・テレビなどと異なって役者 1 人が演じる話芸ならではの趣向が志の輔師匠によって演じられました。首が回らない、などと自分で蒔いた種で足下がおぼつかなくなってしまうかのような日々を改めて見つめ直し、丁寧に生き抜いていかねば、と、新型コロナウイルスのオミクロン変異株の拡大を前に思うのでした。



PBLの風と土  
P196~

## 荒木晃子

来年2022年3月13日(日)、奈良県初の「団士郎先生の家族理解ワークショップ」を開催する。世話人は、地元出身の立命館大学院の校友。私はそのお手伝いとして関わっている。開催形式は、対面参加の予定(状況によって変更があるかも)だが、何事もはじめての一步に最も馬力が必要で、世話人の校友は苦勞していることだろう。行動制限が解除されたとはいえ、次の第 6 波の報道を耳にするなか、「こんな状況ではできない」ではなく、行動することを選んだ友にエールを送りたい。

また、今年2021年12月19日(日)は、「松江家族理解ワークショップ(島根県)」もオンライン形式で開催される。継続7年目となるこちらの WS も、地元のケアマネ

で看護師の仲間が世話人を務めている。島根県松江市といえば、ご縁のある方は少ないと思うが、参加する山陰地方の援助者たちの“あれこれ”を知る好機でもある。

旅行好きのみなさん、全国の「家族ワークショップを巡る旅」なんて、いかがですか？

### 生殖医療と家族援助 P100

## 小池英梨子

対人援助学マガジンの大谷さんご家族が多頭崩壊からの保護猫ピーコの里親さんになってくれました。

さらに岡崎さんご家族が捨て猫だったピアノちゃんの里親さんになってくれました！

着々と対人援助学会員に保護猫を譲渡していく楽しみを見たいしている今日この頃です。猫を飼いたいなと思っている方、いきなり飼うのはハードルが高いから一時預かりボランティアをしてみたいな。という方はぜひご一報ください。素敵な保護猫さんをご紹介します！

### そうだ、猫に聞いてみよう P179~

## 両角 晴香

先日 Twitter を眺めていると「私は血縁者しか信じない」というつぶやきを見つけた。配偶者も姻族にあたる人も所詮は他人であり真にわかりあえないというのだ。そういえば、私も新婚当初は似たようなこと思っていたよね。けれど結婚 14 年目の今は、夫や義家族との関係性は曖昧になった。「はるちゃんの体には両角の血が流れているんだから糖尿病には気をつけなさいよ」と義母が言うように、私の右のお腹の中には夫の腎臓がある。それは40年前に義母がお腹の中で育ててくれた腎臓であり両角のDNAが組み込まれている。そんな事情を抱えていると、夫や義家族が血縁かどうかなど曖昧になってくる。今では義母を「ママ」と呼び、実母のようになんでも話す。数日前、夫の寝顔があまりに美しいので隠し撮りをしてしまった話をキュンキュン！というノリで義母にしてみた。義母は「うん」とひと言だけ言って、すぐに話題を変えた。さすがに息子夫婦のそう

いう話は聞いていられなかったか。距離感誤り反省。

### 夫の腎臓と笑う私 P308~

## 浦田 雅夫

朝 5 時に起きて暗闇を駅に向かい通勤する。琵琶湖は久々の湯水らしいと報。ライフラインを止める水道局職員の「湯水」(原作:河林満)が主演、生田斗真にて映画化されるらしい。原稿はいつものように遅滞。申し訳ありません。

### 社会的養護の新展開 P83~

# 障害者福祉援助論

- これから現場に行くあなたに！ -

第5回

## 支援者との出会い

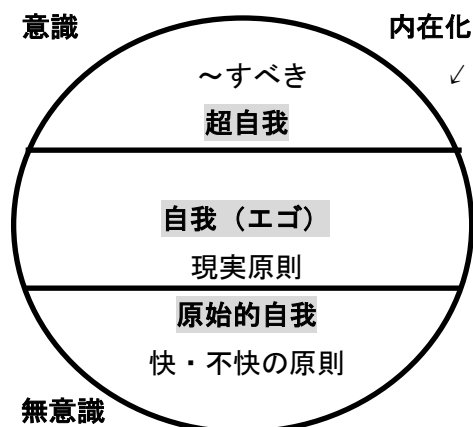
千葉 晃央

制度上は、もちろん利用者さんと支援者は、支援－被支援の関係です。それと同時に、人が人と出会っているという側面もあります。そして、人が人と出会ったとき、相手から何かしらの影響を受けるとされています。支援で試行されるのは、支援者から利用者さんへの、基本的には良質な影響です。より良い方向への可能性が広がるように願い、支援者は影響も意図して行動します。ではそれは、どんなメカニズムが想定されているのでしょうか。その一つを取り上げてみたいと思います。

### 信頼関係構築における一つの考え方

精神分析の創始者フロイトはこんな図で人の心を説明しました。フロイトの心の構造図（他にも言い方複数あり）といわれています。様々な図で説明されていますが、本格的な説明は臨床心理学の皆さんにお任せし、福祉領域において、どのように援用されているかという視点（私視点）について今回は話題にしたいと思います。

人間は生き物です。三大欲求といわれる根源的な欲求は私たちにも当然存在します。それは①睡眠欲、②食欲、③性欲といわれています。眠たくなるのは必然ですし、栄養を取らなければ肉体を維持できません。そして、種の継続や繁栄を志向するのは自然の摂理です。子孫を残そうとするのは生命が生まれて以来の法則ともいえるでしょう。そんな三大欲求を起点に人は突き動かされる。そんな衝動を持っているのではないか。この心の構造図の説明ではその衝動をつかさどるところとし





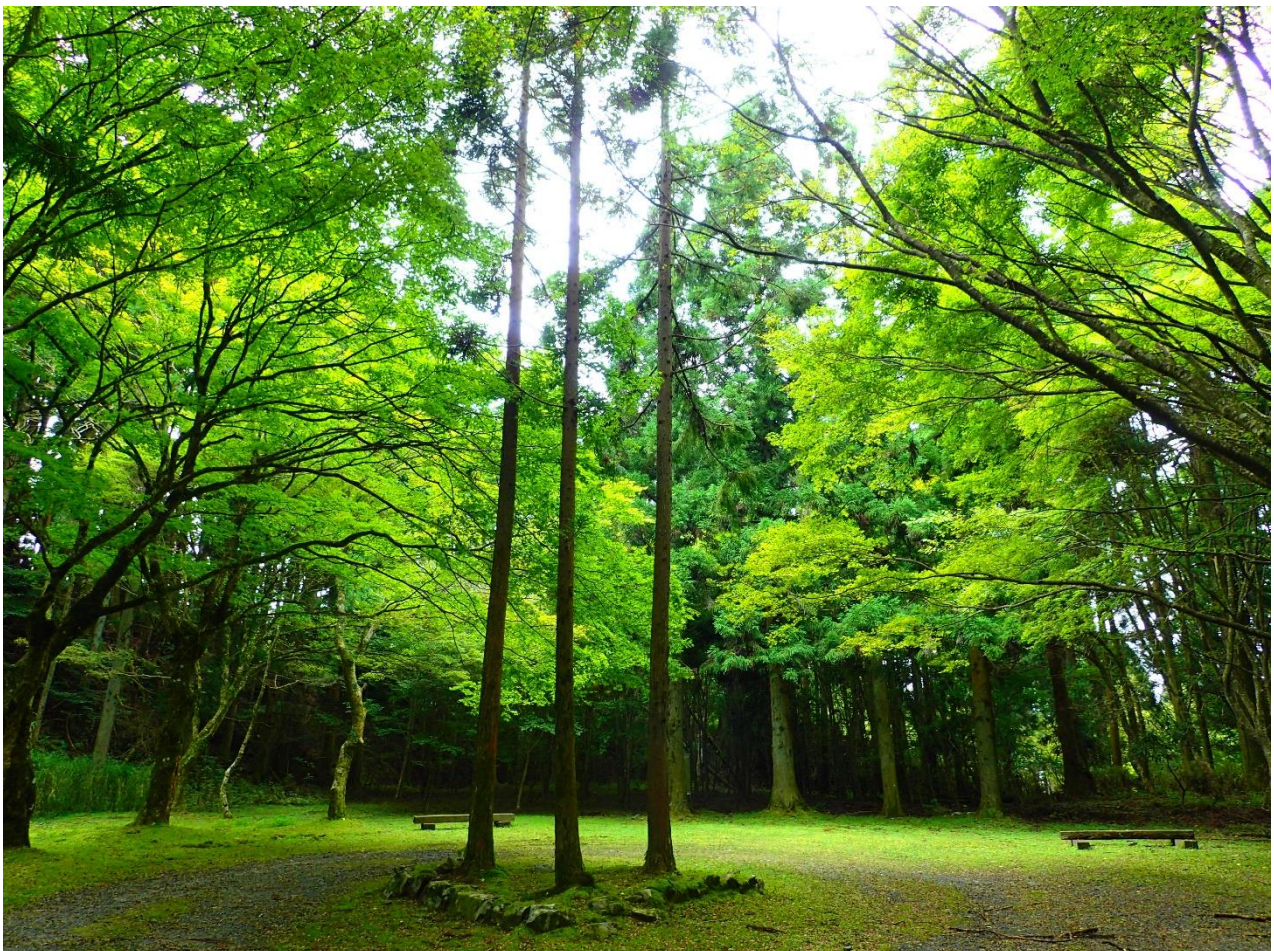
て原始的自我というところがあるとなりました。そして、その欲求が満たされれば「快」と感じますし、満たされなければ「不快」と感じる。そういう部分が人も原始以来持っているでしょう、と説明しました。人がその行動を行う、行わないを判断する基準として快か不快かで行動する。そんなふうにこの構造図では考えられてきました。

## 共同生活に必要な衝動

一方で人間が人間である所以は、理性や知恵など、思考をすることともいわれています。そんな活動から、人間が導き出すのは「〇〇に関してはこうすべし」「××に関してはこうあるべきである」といった価値観や規則性です。そういうことを大切にするところが心にはあるよねとなりました。そ

の部分で「自ら」や「我」を超越したものとして「超自我」としました。そういう気持ちで人は動くこともあるよね、そしてそれが人たる所以とも言われたりします。赤信号では止まるべき、人をむやみに傷つけてはいけない…など人が共同して生活する上で必要ともいえます。そして、秩序のある平穏な暮らしを形成する上では欠かすことができないともいえます。

これら「原始的自我」「超自我」という2つの異なる原則をもつ、心の中にある部分。それら2つを調整する役割を持つところもあるのではないかと。それを「自我」と呼びました。自らとして、我として、今はどう行動するのか？を判断し、実行する。おなかですきました、でも授業中です。おにぎりをカバンから出して食べてはいけません。このように「食べるべきでない」と思い、超自我と原始的自我の調節をして、現実に即した行動をとれるように調整し、行動選択をしていく。その法則性を「現



実原則」といいました。

つまり、人は欲求がある。でもこれはこうした方がいいよねとも思う。それではこの場面ではどうしよう？と考えるべき行動を選択する。こうして、人は行動していると説明できるのではないかとしたのです（あくまで私の理解）。

## 後から取り入れる行動のレポートリー

では、人は生まれながらに、こんな機能を心に持っているのでしょうか。原始的自我はわかります。生き物ですから。しかし、超自我といわれるようなところはどこやって形成されるのでしょうか。

それは生まれて、周囲にいる人から学ぶといわれています。特に人生の初期は親（もしくは日常を監護しているもの）であることが多いです。ここでは「同一人物による無条件絶対の愛情」が必要ともいわれたりします。愛情がベースです。存在自体を根源的に肯定し、そんな人からもらっている「快」を伴う環境を失いたくないので、その人の指示に従おうとする。その人が大切にしている価値観や行動を自分も大切にします。そうすることで、またその「快」を伴う二者関係を継続することができます。親（や親役割機能をしてくれる人）は玄関で靴は揃えて脱ぎなさい！朝起きたらおはようといいなさい！といいます。それをはじめは言われたからする。結果として、それをしたら褒められる。その人にも認められるし、またその行動をしようとなる…。しかし、いずれそんなことを逐一思い出さなくなっていく。「これはこうした方がいい」と思うようになる。それが超自我になっていくのではないかとされています。

これは、その言ってくれていた人を自分の心に取り込んだ状況とも説明されてきました。それを「内在化」と呼びました。心の中で、その人と対話をしているとも説明できるでしょう。コントでは

心の中の天使と悪魔と対話する主人公が描かれることがありますがああ感じます。

「内在化」は幼いころは親や親役割の人から影響を受けて取り込まれますが、それが成長とともに先生になったり、先輩になったり、尊敬する人になったり、友人になったり。「自分もそういうことを大事にしよう」や「自分もあんなりたい」と思い、その行動を「まね」するところから始め、いつの間にかそれが当たり前になり、「これはこうでしょ」となっていく。そうしたメカニズムがあるだろうとしました。そして、このメカニズムは親子間だけではなく、支援者と被支援者との支援関係においても同じようなことが起こるとよいだろうとされてきました。

利用者さんが支援者と出会い、支援者さんからの絶対的愛情を甘受し、それを失いたくもないから、頑張ってみよう、いつもより頑張ってみよう。あの人がああいっているから騙されたと思ってやってみよう、あの人が言っているから顔も立てて、試しにやってみようか…も含めて作用しないかと考えました。

## 失いたくない関係

その前提には支援者からも絶対的愛情、肯定感、理解を被支援者は感じることができているのが前提です。福祉利用者のこれまでの歩みや努力を認め、これまでの頑張りも証明もしてくれる人であり、一緒にいたら元気になることもできるし、また会いたいとも思える…。そんな人に、そんな存在に支援者になることができれば、その出会いから相手も変化する可能性が生まれるのではないかと。

相手を一方的に操作したり、ハウツーでとらえたりするものではありません。人間的な出会いがあってこそといえます。出会いが何かのご縁ですねといえる側面がある。支援者も利用者とも出会うこ





とで学び、自らを磨く。そうした相互作用が人生を舞台に存在するからこそ、やりがいがあります。

そんなことを志向し、一生をかけて仕事にして、生きていく。それが福祉の仕事に就いている喜びでしょう。

## 場やモノも役割を機能させる

先ほど、内在化されたいろんな「〇〇すべき」（超自我）を持ちながら人は生きているのではないかという話がありました。

この超自我、自我、原始的自我を用いた心の構造は、心の中を説明するだけではないのではないかという意見を持つ人が出てきます。フロイトの弟子たちによって様々な解釈や発展を遂げていき

ます。その中に集団の場面にこれら3つの働き（超自我、自我、原始的自我）を置き換えて考えることもできるのでは…と考える説も出てきました。

人が複数いる場面の中に「超自我」的機能を含んでいる人々がいることもあるのではないかという考え方です。学校のクラスで言うなら、まじめなグループの人です。時にはそれが利用者さんと今一緒にいる「支援者」ということもある。それが福祉の支援場面かもしれません。

こうして様々なメカニズムを考えてくると、支援の場は、支援者と利用者さん、利用者さんと利用者さんが相互に影響もしあっています。

## 自分を使って生きていく

時に「仕事を持つことが一番の犯罪抑制」ともいわれます。役割があること、それが他者に認められていることは（反社会的な）行動の抑止にもなります。

また、社会全体に広く目を向けると超自我的に機能している存在はたくさんあります。学問も、職能団体も、政党も、国民性も、県民性も、出生順も、職業も…。●●だからこうあるべき。そして、それが人の行動を規定している。

こうして多岐にわたる社会の構成要素の中で、超自我的な機能、原始的自我的機能、自我的機能を考えると非常に興味深い。そういった相互作用の中で人は生きている。そして支援者としては、利用者の方と出会うときに、自分がどう作用するかを考えておくことがとても大切になります。

以上、私流です。しかし、こう考えることでとても役に立ってきました。

## **BACK ISSUES**

### **「障害者福祉援助論 1～4」**

**対人援助学マガジン 43～現在**

2020年12月～現在

- 1 福祉の独自性とは？
- 2 違反は健康的なのか？
- 3 あたたかさの伝え方
- 4 リスクとジリツ

### **「援助職の未来 1～2」**

**対人援助学マガジン 41～42号**

2020年6月～2020年9月

### **「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」**

**対人援助学マガジン 16号**

2014年3月

### **「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」**

**対人援助学マガジン 6号**

2011年9月

### **「1 工程@1円～知的障害者の労働現場 1～40」**

**対人援助学マガジン 1号～40号**

2010年6月～2020年3月

---

---

## 臨床社会学の方法

### (35) 行方不明の〈加害者〉たち

#### —コミュニケーションの微細な懸隔—

中村 正

---

---

#### 1. Stay Home とエッセンシャルワーカー エッセンシャルワーカーとは誰か

コロナ禍でエッセンシャルワーカーやエッセンシャルワークという言葉が普通に使われるようになった。エッセンシャルワークを無理に訳せば「それがなくては人が生きていけない社会の基幹的な仕事」だろうか。私たちの日常生活における必要不可欠な仕事（エッセンシャルサービス）やそれを担う労働者という意味である。テレワーク、ソーシャルディスタンスの言葉とともにウィズ・コロナ、ポスト・コロナ時代を生きるための新しい言葉である。

ではどんな仕事をしている人たちなのか。健康と命を担う医療・福祉従事者、スーパー等の小売業界で働く人、物流に関する郵便配達員やトラック運転手、ライフラインに関わる仕事に就く人等、日常生活を支えている職種の人たちがエッセンシャルワーカーだと指摘されている。

もちろんそうした言葉がなくても元々生活を支えてきた人たちだ。エッセンシャルワークやワーカーは常に存在してきた。コロナ禍で改めて敬意を表し、正当な評価をすべきだということだろう。しかし数え上げられていないエッセンシャルワーカーが

いることを無視できない。それは主婦である。家事、育児、介護を家庭内で担うことやその担い手は、エッセンシャルワークの類型には入っていない。主婦や母親、つまり女性たちは Stay Home を支えた人であるにもかかわらずだ。Stay Home 政策は感染拡大を止めるための大事な生活の仕方だとすると、その Home を維持する人は最もエッセンシャルだといえるだろう。

参考にこの課題について記したものを末尾に掲げておきたい。「東京都女性相談センター通信」第 42 号（2020 年 9 月発行）に掲載したレポートである。Stay Home で家族の安全が保てなくなる事案が DV や虐待等であり、家族の誰かがその Home の維持にいままで以上に努力することになるので、DV や虐待が増えることの心配もあり、センターに依頼されて書いたものだ。その箇所を引用しておく。

コロナ禍で Stay Home といわれている。仮に、留まりたくない家庭だったらどうすればいいのかという想像力は大切だ。DV や虐待がある家庭の被害者にそれでも留まれといえるのか。家を出た方がいい家庭もあるし、暴力ですでに避難している人もいる。もちろん DV 問題だけではなく一般的

にもコロナ対策と家族について考えるべきことは多い。テレワークが推奨され、学校にいけずにオンライン学習となると、Home は生活まるごと抱え込む。そこをいったい誰がキープするのだろうか。女性依存・妻依存・母依存の様子が目に浮かぶ。Stay Home の新しい生活様式は、古くからある家族主義を強化しただけなのかも知れない。コロナ対策もそうだが、世帯を単位に福祉サービス等が構成されている。たとえば10万円の特定定額給付金政策がある。先の相談件数にはこの点に関する問い合わせは除かれている。実はこの問い合わせにこそDV問題が含まれているだろう。相談の実数は先の数字より多いだろう。DVや虐待で家族から逃れている女性や子どもは現住所以外に住んでいるはずなのできちんと本人に渡っただろうか。マスクの配布もそうだったが、これらはすべて『世帯単位』だった。その世帯に暴力等の様々な困難が含まれている人たちはどうだったろうかと考えてみる」と。そしてこのようにも書いた。「なかでもDVや虐待は、コロナ禍だから増えたということだが、もともとそこにあった問題が顕在化している面もある。しかし、悪化している面も無視できない。①脆弱さに拍車がかかること、②隠蔽されていた女性の貧困が家庭に閉じ込められるのでより深刻になること等、コロナ禍で家族に閉じ込められていた見えない問題が浮かびあがってきたということだろう。いくつかの社会病理も含めていけばジェンダーをとおして家族に問題を閉じ込めてきたという意味での『家族のダークサイド』の存在である。

伝統的で元来のエッセンシャルワーカーである主婦は、コロナ禍のStay Homeでその役割を大きくした。だから多様に例示される仕事のなかに主婦が名指しされないというのはネグレクト(無視)でしかない。存

在しているのに言葉が届かないという事態は、「沈黙化作用」という。この連載でも「サイレンシング」(『臨床社会学の方法(10) サイレンシング(沈黙化作用) —語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮—』『対人援助学マガジン』Vol.6 No.2 (通巻第22号)、2015年9月)として取り上げた。一貫してシャドウワークであり続けているともいえるだろう。

## 2. 行方不明の<加害者>とは

さらに体系的に同様のことを、レベッカ・ソルニットは『わたしたちが沈黙させられるいくつかの問い』(ハーン小路恭子訳、左右社、2021年)や『説教したがる男たち』(ハーン小路恭子、左右社、2018年)で詳述している。「支配的な人間には、自分は見えても他者は見えない」(ソルニット2021:73)という。当たり前すぎて評価されにくい家事、育児、介護等の家庭内エッセンシャルワーカーはいつも無視されている。ここには認知的不正義という事態が生起している。

このことは本連載でも別に紹介した。存在しているのに言葉がないのである。ここには嫌悪ではなく賞賛しつつも認知されないという複雑なミソジニーが介在しているといえるだろう。これはケイト・マン著/小川芳範訳『ひれふせ、女たち:ミソジニーの論理』(慶應義塾大学出版会2019年)の指摘である。この研究はミソジニーの現実を詳細に日常生活に即して描き出したものだ。ミソジニーは「女嫌い」と訳すとその全貌がみえてこない。逆の面も含む。つまり女らしさを讃え、称揚することのなかにもミソジニーは顕在化すると指摘する。とりわ

けケア役割を期待されることのなかに、賞賛されかつ見下されるという両義的なものが横たわるといふ。冒頭に述べたエッセンシャルワーカーは賞賛されるが評価が低い(医師は除く)という矛盾のなかにある。給料が低いことも含めて政策論議の対象となっていることを考えればわかりやすいだろう。

こうした認知の非対称性は、もう一つ大きな領域での不可視化をもたらすとソルニットは指摘する。それは加害者のことである。筆者も加害者臨床で常に体験していることである。それは暴力や虐待についての独特な加害者のナラティブについてである。「アルコールの飲み過ぎで、薬物に依存して、頭が真っ白になって、瞬間湯沸かし器みたいに」等としてその時の状況を語る。さらに刑事事件の判決文でも「感情に任せて暴力を用い」という言葉が頻出する。要するに、自分ではコントロールできないようなものに支配されて暴力を振るったというのが素人も裁判官も使う論理だ。これが社会的に流布している説明の仕方である。これをソルニットは「加害者が行方不明」(2021:229)と皮肉ったのだ。

ジェンダー秩序が強く存在し、男性的特権のある社会では暴力の加害者であることの多い男性はこうした動機説明の次元から保護されている。つまり、暴力の原因を責任ある人間に帰属させるのではなくコントロールできない感情に帰属させる理屈となっているのだ。こうした言い方を許容している社会は加害者と共犯関係にあるともいえる。ここに加害のナラティブの特徴がある。つまり、度を越したという意味での暴

力は認めるけど、加害は認めないという男性をつくりだす。

他にもこんな例がある。「もうそのときは頭が真っ白で」、「瞬間湯沸かし器みたいに点火し、爆発するんです」、「小さいときからの癖でどうにもできない」、「男ってこんなもん。みんなそうですよ」、「気がついたら手が出ている。身体反応です」、「落ち着くと謝るんです。もうしないって」、「暴力は相手が悪いから必要なんです」、「悪いことしたら殴ると以前から話をしていたので同意だといえますよ」という具合だ。

筆者は他にもある言い訳を対象に、次のように類型化した言葉を付けて整理してきた。ハイフンのあとは加害のナラティブを考察するために抽出した概念である。

- ① 「その怪我はたまたまなげたりモコンが跳ね返ってあたっただけなんです。」—過失を強調するが暴力を招き寄せるようにして生きている—
- ② 「それは些細なことからだったんです。」—過小化
- ③ 「これは指導、しつけの一環である。」—マイルールの存在と正義の暴力
- ④ 「相手のために思えばこそ。」—境界を侵犯するレトリックとメタファー
- ⑤ 「自分こそ被害者だ。」—他罰性
- ⑥ 「暴力はコミュニケーションである」—暴力を振るう男性の理解の鍵
- ⑦ 「二人の問題であるし、家族の問題ですよ。」—私的領域の特権化と相互責任の強調
- ⑧ 「社会は関係ない。」—自力で解決できるし、家のなかのことは放っておいて欲しい
- ⑨ 「暴力は愛情の証し。親しいからこそ。」—男と男の関係由来



こうした暴力の言い訳は、特定の関係性のなかでは相手を責めることになる。言葉の暴力や心理的暴力である。特に非対称な関係において他方の側がケアする立場があると追い詰めるコミュニケーション行為となる。

たとえばこんな事例がある。小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』(講談社、2021年)で紹介されていた小説の一節だ。温又柔の『魯肉飯のさえずり』(中央公論新社、2020年)での話。桃嘉(ももか)の結婚と離婚の物語である。夫は桃嘉が作った台湾風豚肉煮込みご飯・魯肉飯(ロバパン)を嫌い、「これは日本人の口に合わない」と毛嫌いし、「ふつうの料理」のほうが好きだと言う。夫は、自分にとっての「あたりまえ」を押しつけるが、日本人全部を代表するのはおかしいだろう。

確かに食文化のすれ違いはありうるとしても、それを埋めるコミュニケーションの仕方や言葉選びをとおしてその懸隔は埋められていくはずだ。しかしこの夫婦の場合はそうではなく離婚に向かう小さな亀裂となっていく。日本人を代表して台湾の日常の食べ物を退けてしまうとは。まるで「蟻の一穴」のようだ。コミュニケーション行為をとおして現れ出る小さな齟齬が関係を崩壊させていく。日本人の嗜好に合わないとして台湾の庶民の味を否定した夫に加害の自覚はない。加害に無自覚なという意味でのマイクロアグレッションあるいは無意識のバイアスそのものだといえる。同じようにこのコミュニケーションにおいても加害者は行方不明だ。

### 3. 無責任なコミュニケーション行為—「好きにしていよ」

こうしたコミュニケーションは日常生活のコミュニケーション行為に埋め込まれている。身体への暴力ではないが、「蟻の一穴」となるような破壊性がある。こうしたことは日常茶飯事であるのだからさらに厄介だ。いくつか例示しておこう。

女性相談・子育て相談をしている知り合いの相談員がこんな事例があったと話してくれた。もうすぐ下の子が小学生になるので、そろそろパートをしたいと考えていて、夫に相談をしたところ、「好きにしていよ。」とだけ返事があったという。そのやりとりに妻は怒りが湧いた。物わがりのよい夫の無責任さを感じたという話だ。そうしたことを言い出しにくいそれまでの関係が背景にあるのだろう。妻はその怒りを飲み込んで相談に来たという。コミュニケーションができている夫婦ならそうなった場合の生活の仕方について話をすすめていくはずだ。

妻がパートにでるということは、夫になにがしかの役割を分担してもらうことになる。「好きにしていよ。」という言葉の次に、「じゃあ、僕は家のことで何かしよう。」という言葉が出てくるべきなのだと思ったと妻はいう。そうしないと好きにはできないからだ。妻の負担が増えるだけだから。これは夫婦喧嘩の元になるかも知れない。夫は「些細なこと」だというだろうし、悪意はない。でも妻は違う。こうしてコミュニケーションがずれていく。こうした例は枚挙にいとまがない。コミュニケーションの微細な懸隔である。ネットで紹介されてい

るリアルな体験だ。そのまま紹介しておきたい。

○「良いパパなんだけど……夫の“育児”が狭すぎる問題——子育て歴4年半の夫の衝撃発言を聞いてください。」というネット記事を紹介しておこう(戸木 亜沙美 BuzzFeed Staff, Japan) BuzzFeed<https://www.buzzfeed.com/jp/asamitogi/ottonoikuji>, Nov 18, 2021.

夫の“育児”はあまりに狭い: 育児って、やるだけがてんこ盛りじゃないですか。食事にお風呂、夜泣き対応もあれば、毎晩おもちゃの片付けもある。どんどんサイズアウトする服の買い足し、予防接種のスケジュールリング、保活に入園準備、園のプリント整理に、イベントや提出物の管理。さらにはファミリーサポートや病児保育に登録したり、習い事をリサーチしたりと暇がありません。それを夫はわかってない。子どもたちを園の送るのは夫の担当。毎朝夫が子どもたちに荷物を持たせ、夫が自転車で送ります。毎朝です。毎朝やってるんです。それなのに毎朝のように聞かれます。「このバッグは持っていくの?」「今日はお弁当いらないんだけど?」「この帽子って必要?」いやいや、毎朝やれば園にもっていく荷物くらいわかるでしょうよ。でも夫はわからない。だって覚える気がないから。自分のタスクだと思っていないから。ただ送り届けることだけをタスクだと思っているから。こんな育児してるって言えます?「俺、お腹すいてないわ!とある休日、家族でドライブしていたとき「夕食どうしようか」と私が尋ねたときに言われたセリフです。いや、別に、ごく普通の返答なんですけど。でも私は驚きました。だってこの日、子どもたちは昼食をほとんど食わず、お腹が空いているだろう状況だったんです。だから私は「子どもが食事できる場所はどこか」ということばかり考えていたんです。子どもが産まれてからというもの、私は食事や睡眠を子どものリズムに合わせて生活

してきたように思います。そうしないと子どもが機嫌を損ねたり癇癪を起こしたり、かえって大変な状況を招くからです。でも夫はそうじゃない。食事は自分が食べたいときにするものでした。そうか、君はまだその世界線を生きていたのか……。

○ワンオペ育児

すぐキレる旦那で困ってます。きっかけは些細なことです。私がうるさく色々文句や愚痴を言うからです。子どもの前でも容赦なくキレて物にあたって家中がごちゃごちゃになり、子どもも号泣して旦那を止めるのですが止まらず、一度警察にお世話になっています。

私は専業主婦で、下の子がまだ小さいので、働きに出ることは考えていません。旦那も子どもは可愛がっていますが、私のことがとても煩く思っているようで、本当なら離婚になってもおかしくないとは思いますが、子どもがいるのでなかなか踏ん切りが付きません。できれば、うまく夫婦関係を継続したいのですが、何か良いアドバイスはありませんか?私も愚痴や文句も、以前に比べると、あまり言わなくなってきたように思います。2人の会話やノリの中で冗談の延長戦で、普段の愚痴を言うとそれが琴線に触れるようで、キレにつながるようなのですが、その琴線がわたしには分からず。もうあまり会話もしたくないのですが、通常時は旦那は私とコミュニケーションを取りたがるので、またここで機嫌が悪くなるとダメだと思い、会話すると喧嘩につながったりします。もちろん普通の会話で終わる時もあるのですが、何がダメなのか全く分かりません。どうしたら良いのでしょうか。(Yahoo!知恵袋)

○自分の思い通りにならないとすぐキレる旦那って幼稚過ぎませんか?2児の母で現在妊娠8ヶ月です。育児はたまーに手伝う程度で、出先ではイクメンのふりをします。家事は一切手伝いません。ご飯の時間を聞いても携帯ばかりで生返事をしてい

たのに。例「7時に食べると言ったよな?もういい。何もなくて。何もしたくないんだろう」何時に食べるのか聞いてもハッキリ答えなかったくせにこの言い様はなんなんでしょうか。結婚してから偉そうな感じは気になってましたが、妊娠中にまで命令口調で色々言われてお腹が痛くなります。

(Yahoo!知恵袋)

○イクメンを自称する旦那に腹が立ちます。  
イクメンを自称する旦那に腹が立ちます。1歳の子どもがいます。私は専業主婦として育児と家事を行い、旦那は在宅で仕事をしています。毎日ご飯を作って食べさせ、遊ばせ、オムツを変え、検診につれていき、お風呂に入れ、寝かしつけるのは私の仕事です。これ自体は何ら問題ありません。しかし友人や私の親に会った時だけ子どもと遊び、「俺イクメンなんで笑」とドヤ顔する旦那に心底腹が立ちます。人前でだけ子供に積極的で何がイクメンだと思います。また、オムツ替え等も「汚い」「無理、できない」と言ってしないので本当に子供と遊ぶだけです。子どもも旦那からの接触がほとんどないため旦那に対してギャン泣きします。最近では冷めた目で旦那を見るレベルまでなりました。とりあえずイクメンを自称したいなら育児をすればいいのと思うし、もしくは自称するなと思います。気にしすぎでしょうか? (Yahoo!知恵袋)

ここで批判されている夫たちには共通点がある。非対称な関係性に依拠していることの自覚に欠ける点である。エッセンシャルワーカーとしての妻・母の役割に無頓着で、自分が中心となっている。そして社会の共犯関係性も背景にある。イクメンとしてもてはやす社会も問題だろう。対比してイクウィメンという言葉はない。妻や母のことは同じようにはもてはやさない。むしろ逆である。虐待した母親に向かう「鬼畜

のような母」というイメージが虐待事件の度に喧伝される。介護する男性も同じだ。あまり流通していない言葉だがケアメンも同じだ。対応してケアウィメンとは言わない。対になる言葉がない時、一方のカテゴリだけに強調があるといえる。そこには関係の非対称性がある。エッセンシャルワーカーとしての主婦や女性はカウントされていない、つまりサイレンシングが作用することを考え合わせるとわかりやすい。ケアの領域に参入する男性は評価されるが逆はない。とりわけ家庭内エッセンシャルワーカーはきちんとやって当たり前なことなのだ。エッセンシャルワーカーへの評価はとりわけ家庭内で低い。

#### 4. ケアする側とされる側の反転—男性がケアをさせてもらえない事態

誰がケアし、誰がされるのかという非対称性さの基本線が浮かびあがったのは筆者の息子介護者としての最近の経験も同じようだった。エッセンシャルワーカーとして長く生きてきた母親が要介護になった。この場合は少々複雑な経過をたどる。

私的なことだが体験として一般化できる課題があるので紹介しておこう。2021年4月下旬、87歳になる母親が硬膜下出血で救急搬送され手術を受けた。それは無事に終了したのだが、前回の判定から認知症の進行もみられ要介護度があがった。転院して地元の主治医のいる病院のリハビリ科に入院した。いままでの在宅での介護サービスを利用した独居暮らしは難しい事態となった。入所施設を探すこととした。その後、認知症が進んだこともあり、一人暮らしの在宅介護は心許ないという担当ケアマネジャ

一のすすめもあり特別養護老人ホームへの入居申込みをしていた。介護保険の法律はよく変わるが特養は要介護度の高い人を優先する。三ヶ月程の待機で地元のホームに入居することになった。2021年9月にひっこしとなった。しかしコロナ対策で面会ができない。地元の間人もだめだという。ひっこしも家族は手伝えない。すべて施設同士が担当するという。家族は単に契約にいくだけだし、面会はオンラインだ。他府県の私はオンラインで対話をする事となる。果たしてうまくいくか。

特養ホームまでつなぎの施設はサービス付き高齢者住宅(サ高住という)である。考えてみると、緊急手術をした病院—リハビリ科のある地元の病院—しばらく在宅での生活—サ高住—特養ホームを転々としていることになる。この経過のなかで息子介護者問題(異性介護問題)を体験した。なかでも転々と居場所を変える「リロケーションストレス」への対応には苦慮した。めまぐるしく続く環境の変化、そして認知症が深化していることもあり、ついていくことができないかも知れないストレスだ。当然のことだろう。忍耐強く付き合いながら対話になりにくい対話を試みる。

話をしながら、仏壇の心配と90年住んだ家の心配があることは当然のこととして、まだ自分で一人暮らしができ、自立しているという認知症特有の思いが強いということも分かってきた。老いるということの意味を教えてくれているようでもある。地元は三重県の伊勢志摩なので遠距離介護体験となる。地元に住む弟夫婦らと協働している昨今だ。遠距離になるが授業や会議がオ

ンラインでできることもありこの面では助かる。

もちろん病院も福祉施設もコロナ禍で面会ができない。施設の入り口でタブレットを使ったデジタル面会がせいぜいだ。意思疎通がさらに困難になる。コロナ禍で認知症の高齢者とオンラインで対話することになろうとは。性急に話を進めようとしなないことが大切だと分かる。弟夫婦の子どもが地元の市役所に勤務しているのでアドバイスもらったり、近所の付き合いに支えられたり、担当のケアマネジャーのネットワークに感心したり、地域医療に熱心な主治医の仕事に敬服したりしながら地域福祉の重要性を実感している。そして転々とした暮らしも落ち着き、地元の特養ホームでの生活となった。

こうした経過で体験したことが息子介護・男性介護問題である。男性であることがケアされる母親の意識にのぼる。息子に母は介護をされたくない様子なのだ。特に排泄の介助は嫌がる。当然だろう。女性による介護を望んでいることがわかる。そういえば、認知症の兆候がでて、足腰が弱りだしたこともあり、実家に帰るたびにトイレ掃除をし、母の手の届かないところにはたきをかけて綺麗にしようとしたのだが、その時も、あまりよい顔をしなかった。特に、冷蔵庫の整理や台所の片付けは嫌がっていたことを思い出す。

長く家を切り盛りしてきた母親が息子にそんなことはさせまいとしていた意識なのだろう。この嫌悪感はどこからくるのだろうかとその時から考えるようになった。そして今回の介護拒否的な態度だ。90歳近い女性の家族への思いが垣間見える。

とはいえ老いた身体の実現と認知症の進行はそれではすまなくなる。在宅介護を続けていけばいずれはそうした関係も変容していくのだろうし、息子介護だとしても受け入れてくれるのだろう。弟の妻による介護はすんなり受け入れている。同性だからだろう。息子介護の受容は、私の介護技術の次元のことではなく存在している長くケアをしてきたエッセンシャルワーカーとしての母親の気持ちと自ら折り合いをつけないと意識なのだろう。

男性問題研究からするとやはりユニークな体験をしていることになる。この歳になって息子という立場が躍り出る。ケアマネジャーらには息子さんといわれる。息子介護は、夫介護とならんで男性介護問題としてホットなテーマだ。実家に帰る機会が多くなる。そこでは親族や近所の人たちも同じく私を息子としてみる。あたりまえだが京都にいとそんな立場は前にでてこない。なんだか子ども時代に戻ったみたいだ。

伊勢志摩は海の幸が豊かで食べ物がかたく安くて旨い。しかしそれを長い間、手料理で振る舞ってくれた母と食卓を囲むことができない。一時帰宅も許可されないからだ。唯一この点が同じ息子でも以前とは異なる。寂しい感じがする息子だし、ケア役割を担ってきた母親もそう思うのだろう。長くケアしてきた側が老いてケアされる側になる際の心理と意識への配慮が求められると思った。

つまり、ケアの関係に息子や夫が介護者として取り組む場合の齟齬がある。筆者の介護技術問題とは別に、ケアを受け入れる側の心理的準備の課題もある。それを埋めていく作業が男性介護者問題の一角にある

のだろう。そしてこれは先に紹介してきたコミュニケーションが微妙にずれる無頓着な夫たちとはまた異なる位相にある事項だと思う。ケアする者の配慮、ケアされる者の逡巡である。

## 5. 親密な関係のなかに隠れていく加害

ケアをめぐる家族同士の葛藤、虐待や暴力は日常生活に埋め込まれている。ここを震源にして小さな齟齬が大きな変化へといたる。親密な関係におけるコミュニケーション行為のマイクロな懸隔は心の壁や機微に関わる繊細なものでもあるとして放置できない。コミュニケーション行為から生成する暴力性を帯びることがあるからだ。コミュニケーションは相互行為なので互いに拘束しあう駆け引きのようなことも含む。次のような事例がそうだ。加害者臨床で出会うひとたちには相互行為の境界設定が混乱していることが多い。男性の側のコミュニケーションにもとづく相互行為のなかに、愛情、嫉妬、束縛、依存、嫌悪、忘我等が混在する。筆者の相談記録ノート（被害者聞き取り）から紹介しておこう。こんなことを聞いてきた。

1. 「自分のものを買うときにいつも一緒に付いてくる。僕の好みの女性になってほしいと言う。自分が自分でなくなっていく感じがする」
2. 「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。運転が下手だからって言う。だからいつも彼の車で行動することになる」
3. 「習い事をしていると言うと、それは男性から教わるのかって聞いてくる」
4. 「同窓会に行くと言うと嫌な顔をする」

5. 「DV を受けているのに彼といる方が安全だと思ふような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着くから」
6. 「今日は何をしていたのかといつも聞いてくる」
7. 「『死んでやる』。と言われると別れられない。元の関係に戻ることが多い」

加害者臨床ではこう考える。こうしたコントロール型のコミュニケーションに加害が隠れており、「加害者が行方不明（不可視）」になる。言葉を換えると親密な関係性に隠れていくといえる。暴力が生起するコミュニケーション行為には、暴力を振るう人々の生活の仕方、思考の枠、問題解決のやり方が反映されている。

こうした過程をみても非対象な関係性に根ざして自らの立ち位置を理解することが大切となる。「行方不明の加害者」は社会がその非対称性のなかに宿す権力性の勾配の上に無自覚にあぐらをかいている。社会が保持する暴力容認の陰に隠れていく。無意識のバイアスやマイクロアグレッションとして指摘されていることがそれである。

### <閑話休題>

ジェンダー平等が世界一位のアイスランドの映画「〈主婦〉の学校」(The School of Housewives、監督・脚本はステファニア・トルス、アイスランド、78分、2020年)を観た。「自分ごとの、家しごと。」とキャッチコピーがついている。1942年から現在まで続く男女共学の家政学校「主婦の学校」の記録映画だ。

この学校はアイスランドのレイキャビクに1942年に創立された。寮で共同生活を送りながら生活全般の家事を実践的に学ぶことができる。一学期(三ヶ月)定員24名の小さな学校だ。かつて、義務教育後に進学の手機が少なかった女性たちを、良き主婦に育成することを目的としていた家政学校(花嫁学校)は世界のあちこちにあった。その多くが衰退していくなか、この学校は、1970年代に男子学生も受け入れて男女共学となり、現在まで存続している稀有な存在だという。今では「主婦になるために行くわけじゃない」「自分のことは自分で面倒を見られる人間になりたい」と、性別に関わりなく、「いまを生きる」ための知恵と技術を求めて学生たちが集まってきている様子が丁寧に描かれている。

時代の移り変わりと共にその役割を変化させてきたという。1990年代には男性も受け入れ男女共学となった。驚いたのは学費。定員は24名、三ヶ月の住み込みの学校生活にかかる費用は学費で40万円、寮費が63000円だという。それなりに高い。85%の出席で卒業となる。8時30分に始まる朝食から学校が始まる。映画の冒頭のインタビューで「自分のことは自分で面倒を見ら

れる人間になりたい。」と語る若い女性が印象的だ。

アイスランドは男女平等の世界ランキング 12 年連続 1 位である。ちなみに日本、2021 年度は 120 位。比べものにならない。この映画を撮った女性監督のステファニア トルスも、女性が社会進出している現代に最初はわざわざ家庭科を教えるなんて時代錯誤と思ったとインタビューで語っている。しかし「主婦」の仕事こそがいま求められている持続可能な社会づくりと重なりあうと判断したタイトルだと語る。SDG's に先駆けること 70 年前になる。70 年代からは「家政学校」と改名をしているにもかかわらず、映画のタイトルは設立当初の「主婦の学校」にしたという。エッセンシャルワーカーへの敬意ともとれる。コロナ禍の Stay Home 時代にこそ相応しいと思ったのが見終えた感想だ。「良い奥さんになるために入学するのではない」と学生たちは話す。もちろん若い人だけが学んでいるのではない。

この主婦の学校、男性にこそ必要なものだったと思った。かつて「花婿学校」という取り組みがあったことを思い出しながら観ていた。横浜市女性協会の主催だった。樋口恵子・板本洋子・斎藤茂男編集『花婿学校—いい男になるための 10 章』（1990 年、三省堂）が成果としてまとめられている。主催者の板本洋子さんに請われて講師をつとめたことがある。

講座では DV やデート暴力の話をした。もう 30 年前になる。少子高齢化とともに進行する男性の結婚難が焦点だった。本来の

意味での花婿修行こそが必要なことだと語っていたことを思い出す。家族を成して生きていくことの重要性を伝える修練の場所のようでもあった。さらに男性に対しては、結婚願望、結婚して一人前意識等を払拭するというねらいもあったようだ。花嫁修業なんか吹っ飛ばしてこれからは花婿学校だという個性的な取り組みだった。結婚願望に囚われないようにすべきこと、これからは離婚もありうるのもその心づもりもしておくべきこと、DV や虐待についての法制度や社会問題としての理解、家族中心社会ではなく個人の尊重等にくわえて、コミュニケーションの練習、料理教室や介護の基礎知識等の実践もしていた。

「行方不明の加害者」に自覚を促すポジティブなアプローチとしての花婿学校を再開したいと思いつつ観ていた映画である。

立命館大学教授  
社会病理学・臨床社会学  
2021 年 11 月 30 受理



# 東京都女性相談センター通信

第42号 令和2年9月 日 編集・発行：女性相談センター

## コロナ禍におけるDV問題の加害と被害

立命館大学教授／内閣府女性に対する暴力専門調査会委員

中村 正

新型コロナウイルスの影響で、外出自粛や経済不安が長期化する中、DV被害や児童虐待の相談は今後も増加することが危惧されます。DV被害女性等の支援者においてもコロナ禍におけるDV被害の現状や背景について理解を深め、DV被害者に対し適切な支援を行っていく必要があります。そこでDVについて長年、研究を行ってきた中村正先生にコロナ禍におけるDV問題の現状や今後の課題について御寄稿いただきました。

### 【相談の現状】

DV被害対策もコロナ禍で臨時に講じられている。相談件数は増えている。速報値によるデータは次のようだ。

表1 配偶者暴力相談支援センターの相談件数  
(内閣府資料・7月27日までの速報値)

2020年4月	13,471件 (前年同月比30%増)
5月	13,259件 (前年同月比20%増)
6月	12,450件 (前年同月比20%増)

さらに「DV電話相談+ (プラス)」も設けられた。4月20日から7月26日までの98日間の件数は次のようであった(内閣府速報値)。

表2 DV電話相談+ (プラス) の件数  
(内閣府資料・7月27日までの速報値)

電話相談	9,524件 (一日平均97件)
メール相談	2,431件 (一日平均25件)
SNS相談	2,286件 (一日平均23件)

コロナ禍でStay Homeといわれている。仮に、留まりたくない家庭だったらどうすればいいのかという想像力は大切だ。DVや虐待がある家庭の被害者にそ

れでも留まれといえるのか。家を出た方がいい家庭もあるし、暴力ですでに避難している人もいる。もちろんDV問題だけではなく一般的にもコロナ対策と家族について考えるべきことは多い。テレワークが推奨され、学校に行けずにオンライン学習となると、Homeは生活まるごと抱え込む。そこをいったい誰がキープするのだろうか。女性依存・妻依存・母依存の様子が目に浮かぶ。Stay Homeの新しい生活様式は、古くからある家族主義を強化しただけなのかも知れない。

コロナ対策もそうだが、世帯を単位に福祉サービス等が構成されている。たとえば10万円の特別定額給付金政策がある。先の相談件数にはこの点に関する問い合わせは除かれている。実はこの問い合わせにこそDV問題が含まれているだろう。相談の実数は先の数字より多いだろう。DVや虐待で家族から逃れている女性や子どもは現住所以外に住んでいるはずなのできちんと本人に渡ったのだろうか。マスクの配布もそうだったが、これらはすべて「世帯単位」だった。その世帯に暴力等の様々な困難が含まれている人たちはどうだったろうかと考えてみる。

〔次項へ続く〕

### 〔考察〕

こうしたコロナ禍のDV事情は世界も同じである。世界中で、ロックダウン（都市封鎖）、外出自粛そしてStay Home政策がとられている。UN Women(国連女性機関)が発表している「COVID-19と女性・女兒に対する暴力報告書」から引用しておこう（6月20日段階）。たとえばフランスはDV30%増加（ロックダウン（3月17日）以降）、ヘルプラインの電話等で、キプロス30%増、シンガポール33%増だという。アルゼンチンでは緊急相談が25%増だという（3月20日以降、いずれも前年同時期比）。カナダ、ドイツ、スペイン、英国、米国では緊急シェルターへの入居要請が増加しているという。

虐待問題からDV対策との関連をつける必要性の指摘がある。被害者は子どもだが、母親もまたDV被害者といえる千葉県野田市の事件もそうだった。家族は夫の強いコントロールのもとに置かれていた。これと重ねると、Stay Home政策は家族の凝集性を高める。家族的生活が強まっていく。特に面前DVがコロナ禍で増加していると推測できる。この一番の問題は子どもが夫婦の姿をとおして男女関係の基本を学習してしまうことにある。もちろん心の傷となるが、その傷は暴力行動や攻撃行動として発現することもあり、多面的な影響を与える。これは発達被害といえるだろう。こうして家族はジェンダー学習の特別な場所となる。暴力の再生産に他ならない。関係性の家庭学習である。虐待する父親の多くは子どもの頃、暴力を受けていたと指摘されている。私の男性相談（虐待とDVを振るう父親向けのグループワーク「男親塾」）にやってくる人もそうした人がほとんどである。

さらに経済的影響も女性が受けやすい。もともと脆弱な層、失業等が重なると何重苦にもなる。貧困の女性化と貧困の隠蔽がある様子がみえてくる。UN Womenは「コロナ禍で見えてきたジェンダー平等問題」と指摘している。

この報告書によれば、経済的不利益とジェンダーの重なりは、元来、女性が多い職業分野で打撃が大きいことからわかる。たとえば、家事労働分野は女性が70%を占めているがすでにそのうち80%は職がない。さらに宿泊や食を伴うサービス業領域も54%が女性で同じように職を失いつつある。助産師、地域保健師、看護師、介護等、健康にかかわる職も70%が女性、感染対策の最前線にいる女性たちの健康の危機は高く、感染リスクは平均より3倍高いという。また、イタリアのケア労働者の72%は移民労働で成り立ち、なかでも移民女性やマイノリティ女性が多く、失業のリスクに曝されている。

これは日本も同様だ。私たちが暮らしていくのに必要なことにかかわる仕事がたくさんあり、Stay Homeが可能になるにはこの人たちの働きが欠かせない。生活必需品を購入できるのは農家や漁師、食品製造業などが生産活動を続け、コンビニやスーパー、ドラッグストアなどが営業しているからだ。

ネットの存在感が高まるが、それを支える仕事も数多い。ドライバー、宅配業者、デリバリースタッフだ。この人たちの子どもを育てる保育関係者もそうだ。求人動向を見ても、介護、看護、ドラッグストア、スーパー、コンビニ、デリバリー等の分野は急増しているという。ジェンダー社会のなかでエッシャルワークは女性に多く割り当てられてきた。

他にもコロナ禍は日本社会の持つ社会病理を際立たせている。①こうしたエッシャルワーカーへの圧力、②DVや虐待の家庭内暴力、③サイバーバイオレンス（感染者や医療関係者への差別、偏見、憎悪）、④自粛という名の規制や移動制限等があり、これらへの対応が重要だろう。

なかでもDVや虐待は、コロナ禍だから増えたということだが、もともとそこにあった問題が顕在化している面もある。しかし、悪化している面も無視できない。①脆弱さに拍車がかかること、②隠蔽されていた女性の貧困が家庭に閉じ込められるのでより深刻になること等、コロナ禍で家族に閉じ込められていた見えない問題が浮かびあがってきたということだろう。いくつかの社会病理も含めていえばジェンダーをとおして家族に問題を閉じ込めてきたという意味での「家族のダークサイド」の存在である。

こうした事態に対して、物理的な距離を置くソーシャルディスタンスではなく、Home以外のソーシャルコネクションのいろいろなかたちが大切となる。これがないと距離を置くことが社会的孤立を深めるだけになる。家族以外の安心・安全のための人間関係をつなぎ直していく新しいコネクションとシェアリングの機会になるといだろう。「夜の街」がシェルターのような「避難所」となっていた人たちやネットカフェに居た人たちも同様に、家族という意味でのHomeが安心・安全ではない人たちが居ることができていた場がロックダウンされているのでその欠落を補うこともコロナ対策だろう。コロナ禍で街が閉ざされていくと、家族に閉じ込めていた「ダークサイド」がみえてくる。家族にすべてを依存するコロナ対策ではない工夫を凝らすことで社会活動とコロナ対策の両立を図る時期へときている。DV・虐待対応はStay Home政策の一面性をつきつけている。家族や家庭という形態の絆や場だけではなく、また別のかたちのコネクションをつくる機会になるといいだろう。

### <執筆者紹介>

中村 正（なかむら ただし）

所属：立命館大学教授、立命館大学教養教育センター長、内閣府女性に対する暴力専門調査会委員

研究分野：社会学、社会病理学、臨床社会学、社会臨床学、男性学



# 人を育てる会社の社長が 今考えていること

vol. 12

## テレワークで崩壊する組織

最近、会社を経営している友人からや講演のテーマとして

【テレワークでも崩れない組織をどう作るか？】

と聞かれることが増えた。

背景には「予想外の退職意向を受け取るケース」や「テレワークでメンタルがやられるメンバーが出るケース」などがあるようだ。出社が常だった頃には気付けた「予兆」がなく、組織問題として認識されることが増えているのだろう。

そこで本稿では、先日某社にて同テーマで行った講演の内容から一部を抜粋し、記してみようと思う。

\*\*\*

皆さんはじめまして。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私は20年前にアソブロックという会社を創業しました。メンバーは写真の通りですが、だいたい20人くらい、年齢層は20代から私が47歳でほぼ最年長、そんな成り立ちの会社だと思ってください。



この会社の大きな特徴のひとつが、兼業必須という制度を引いていることです。もう 10 年ほどになりますが、結果、テレワークが必然の会社になりました。オフィスはありますが、ほとんど誰も会社に来ることがありません。

そんな状況を自ら作り上げて、最初から上手く組織マネジメントができたのかというと、全然ダメでした。そこから現在までの過程の中での気づきを「テレワーク組織の作り方」として、マネージャーの皆さんにお伝えできればと思います。

まず、なぜ上手くいかなくなるのか？ 原因から考えます。私なりに導いた結論は「オフィスには“指名された人がやる仕事”と同じぐらい“誰かがやる仕事”であふれているから」です。

「これは企画の団さんの仕事」とか「総務の斎藤さんの仕事」と決まっているものも多いのですが、オフィスにみんなでいた時って、やっている方も任せている方もそれほど意識していないのですが「そういえばこれは誰々さんがやってくれているな」みたいな仕事がたくさんありました。受け持っている方も、やらされ感はそれほどないような、そんな仕事です。

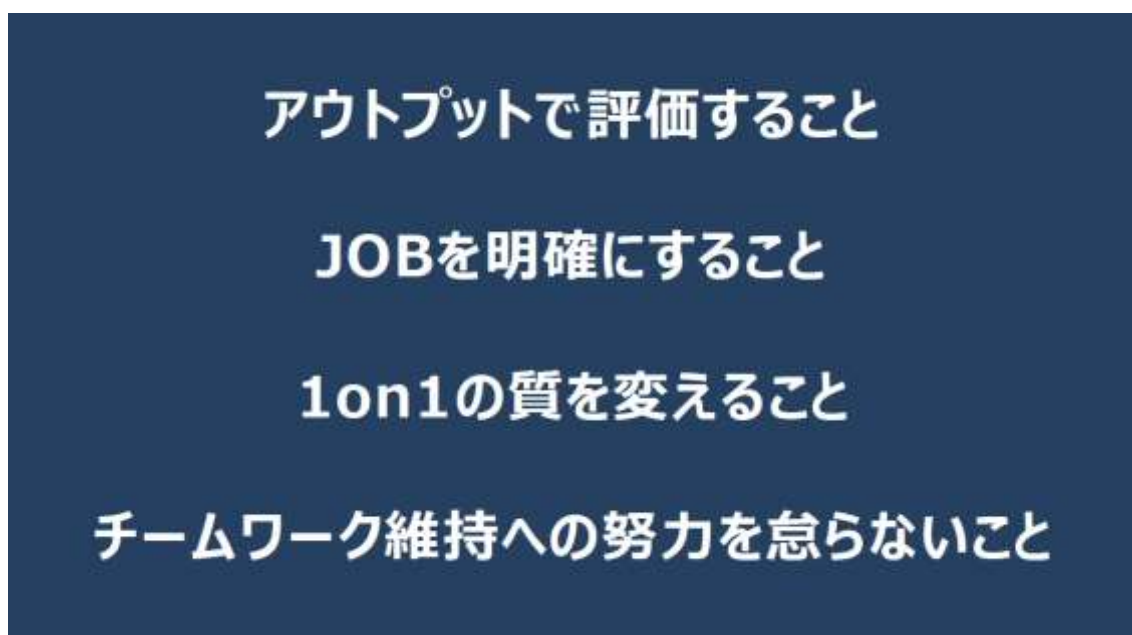
これがテレワーク体制になると、一気に誰もやらなくなります。物理的にできないから



です。けれども、それらすべてがテレワークになったからといって「やらなくていい仕事」なわけではありません。そこが躓きの一歩目だと思います。そこで、今日はそんな背景を踏まえて、私がテレワーク体制構築に必要だと感じている4つのポイントを解説します。

\*\*\*

最初に4つのポイントを列記します。



ひとつずつ解説していきます。

冒頭でマネージャー向けの話だと言いましたが、メンバーの方は、今から申しあげることが意識してマネージャーとコミュニケーションしてあげると、マネージャーに対してとても支援的な姿勢だということでもありますので、そういう意識で聞いていただけたらと思います。

### **POINT① アウトプットで評価する**

物事は過程が大事だということはテレワークになっても変わりません。ただ、いかなせんテレワーク体制になると見える範囲が狭くなります。問題は、オフィスワークが常識の環境でマネージャーへの階段を登ってきた人は、過程を評価するマインドが染み付き過ぎていることにあります。

もちろん、最近では日本も成果主義色が強くなっていますから、アウトプットも見られていると思いますが、とはいえ、「Aくんはよう頑張ってる」や「大変気が利く」みたいなことを評価に入れがちです。

それらを見せよというのではなく色合いを薄くする。メンバーを評価する際の基準を、これまでよりもアウトプット中心に切り替えるべきだということです。私の経験から言えば、これは意識的にマインドを変化させないと、中々書き換えられないものだと思います。それは、今、マネージャーをされている皆さん自身が、そこを評価されてきた面があるからでもあります。

アウトプットを評価軸に据えておかないと、例えばオンライン会議で顔を合わせたときに「寝癖がついている」ことが妙に気になったり（直前まで寝ていたのではないか…）、昼間のワイドショーの話題にやたらと詳しいことで勤務態度を疑ったり（テレビ見ながら仕事しているのではないか…）、見えないが故に「ちゃんとしているのか？」という猜疑心をマネージャーとメンバー間やメンバー同士の間でも生みがちです。

ですから、態度やプロセスも大事だが、あくまで評価はアウトプットだという姿勢をマネージャーが強くと示し、メンバーにも慣れていってもらうことが大事だと思います。

## POINT② ジョブを明確にする

アソブロックの例で言えば、オフィスで「誰かがやる仕事」として日々のゴミ出し、シェアキッチンの管理、郵便の仕分け、事務用品管理、フロア清掃、コピー機やルーターといった機材管理、などがありました。

ところがある日から、郵便が会議デスクに放置されるようになりました。そこではじめて「これは誰かがやっていたのだな」と私は気付きます。そういうことが、職場に伝じてたくさん出てきます。

その状況をマネージャーが放置しておくと、結局「若いやつがやれ」みたいなことが起こりがちです。でも今の時代、それをやると若い子はすぐに辞めてしまいます。ですからマネージャーはそれらをジョブとして確立し、担当を決め、評価に反映させる必要があります。ここをルーズにしておくと、マネージャーのみならず、メンバーにもストレスが溜まります。あるいは、特定の誰かにもものすごく負担が偏り、さらに見えないが故に評価もされず、誰かのために陰で頑張っている人が、孤立感を深める結果を招いたりもします。

ちなみにアズブロックの場合、一番扱いに困ったジョブは「電話対応」でした。テレワークがメインになっても、相変わらず会社の電話は鳴ります。そのため、電話が鳴った時に、「カラー出力をするため」や「どうしても押印が必要な書類があるため」に仕方なく出社したメンバーが対応を強いられます。電話を取ったらたまたま自分宛だった、などということはほとんどなく、そこにいない誰か宛です。

そうなると、帰社予定を確認されたり、伝言を頼まれたり、本人にとって不本意な想定外のジョブが積み重なっていきます。これが非常にストレスだということが問題になったのです。電話対応なんかも、オフィスワークが常だった頃は、お互いに気遣い合いながらやり過ごしていたことなのだと思います。

このように、オフィスが常だった時代に「誰かがやっていたジョブ」を慎重に扱うことが大切だと思います。

### **POINT③ 1on1（面談）の質を変える**

マネージャーの皆さんは、半期に一度とかクォーターに一度とか、何かしらメンバーの面談をされたり、書面のやりとりをされたりがあると思います。ここで大事なものは、今まで以上に相手のプライベートに意思を持って踏み込むことです。

理由は、今まで以上に見えないからですね。例えば 1on1 もオンラインでやると 1 時間くらいなら作り笑顔でやり過ごせちゃいます。以前のようにオフィスで度々顔を合わせていれば「あれ最近ちょっと元気ないなあ」とか「プレゼンが上手くいなくて落ち込んでいるみたいだなあ」とか、わざわざ伝えられなくても、同じ空間にいてことでキャッチアップできていた情報がたくさんありました。

ところが、これが見えません。だから当然マネージャーは、「最近どう？」とか「元気にしているか？」とか聞くのですが、その時に必ずしも相手が「実は最近ちょっと鬱っぽくて」みたいな打ち明け話をしてくれるかというと、前提としてあなたはそんなに信用されていないと思った方がいいです。

また、オフィス勤務が常の頃は、例えば「団さんご存じですか？ Aさんのところに二人目ができたそうですよ」とか「Bさんのお父さんが身体を悪くされたみたいで、休みの日は介護の手配で頻繁に実家に戻られているようです」とか、別に告げ口とかではなく、

日常のコミュニケーションの中でマネージャーが知っておくべき大切な情報を届けてくれるサポーターというのが結構いました。

ところがそんなサポーターもテレワークになると、メールでそのことを伝えるまでには至りません。雑談の延長だったものが、報告事項みたいになってしまうからです。最近では、そういったプライベート情報には踏み込まないのが常ですから。でも、これを知っているかどうかはマネジメントに大きな影響を及ぼします。知らないと、労わりの言葉ひとつ掛けられません。その結果失う信頼もありますし、相手も孤立感が深まります。

ですので、テレワークが常の組織においては、マネージャーの側から相手のプライベートに踏み込み「知ろう」とする努力がないと、マネージャーだけが満足をする上滑りの1on1になりかねません。

#### **POINT④ チームワーク維持の努力を怠らない**

アウトプットを評価軸に据え、ジョブを明確にしていくと、個人主義的になるのは避けられません。自己完結型で、皆がきちっと仕事をしてくれる状況になるのも悪いことではありません。ただ、その変化をうまくコントロールしていかないと、チームであることの良さとか、会社に所属していることの意味とかがメンバーの中でどんどん希薄になっていきます。そうすると、最悪なケースとしては、メンバーの不本意退職が突然に起こります。会社にいると「兆し」に気が付いたりしますが、テレワークではそれも難しい。

退職までいかなくとも「これならフリーと同じじゃないか」という不満や「こんなはずじゃなかった」という孤独感などが渦巻き、チームから心が離れるケースはままあって、結果的にチームパフォーマンスを下げてしまいます。マネージャーは、その点を強く意識して上手くコントロールしなければなりません。

コントロールの仕方は部署の大きやメンバーの性格によって様々でしょうが、例えばオンライン会議の冒頭に、必ずお互いのプライベートなことをコミュニケーションする雑談時間を取るなどされているケースは多いようです。

ちなみに私は「鬱陶しいほどにビジョンを語る」ということを心掛けました。この会社は何のためにあるのか、何を目指しているのか、度々声に出すことで、何故チームである必要があるのかを伝える。それが、私的には結果が伴ってきたやり方でした。



## さいごに

以上の4つのポイントを、マネージャーの方はぜひ頭に置いて組織づくりをされると思います。また、メンバーの方も、ポイントを理解した上で支援的な姿勢でチームに貢献されると思います。もちろん、組織に応じた5つ目、6つ目のポイントがあるはずですから、それも開発して行ってください。

ご清聴ありがとうございました。

文/だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な8つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開。独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国で講演も行う。

団遊の組織論 ; <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論 ; <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めたくなくなったときに ; <https://goo.gl/bFQdpC>

## カウンセリングのお作法 第二十九回

CONカウンセリングオフィス中島 中島(水島)弘美

# ● カウンセリングと薬物療法

### 通院中の友人から相談

あなたは大学の四年生です。将来、心理職に就くことを目指して、カウンセリングなどを学んでいます。

先日、久しぶりに高校時代の友人に会いました。

「ちょっと、教えてほしいことがあるのと深刻そうな様子です。」

「今、調子を崩していて、医療機関に通院中で、医師からうつ状態を回復するための薬を処方されている。けれど、あまり改善がみられない、もしも、信頼できるカウンセラーを知っているのであれば、教えてほしい」

そのような話を持ち掛けられました。

あなたは、友人が困っているようなので、何かできることはないかと考えます。カウンセ

リングを勉強していると知っている友人ならではの相談のようです。このようなとき、どのように、協力するのが適しているのでしょうか。

今回は、どんなときに心理療法が適しているのか、カウンセリングなどをスタートするときの留意点について話します。

### カウンセリングが身近に

最近では、カウンセリングを受ける機会が増えました。

小学校中学校高校や大学には、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、キャンパスワーカーがいます。

子育て中に何か困り、気になることがあれば、地域の子育て関係の相談所があります。

職場でも社員相談室を設けているところも増えました。

いずれも、相談の費用は無料の場合が多く予約などをして、気軽に利用することができ

ます。相談スタイルも直接に訪れること以外に、電話やラインなどを匿名で相談することもできます。

### さまざまな情報に触れられる環境

さらに、ネット上には、いろいろな体験談や支援の情報があります。うつ、相談などとキーワードを入れて検索すると、同じような状況にある人がどのようにしているのかなどを調べて知ることがもできます。

困りごとがあれば、何かにすがりたい気持ちになることも想像できます。いろいろな考え方や意見を聞いて、参考にするのが、よりよい解決や改善につながると思いがちです。

しかし、要注意です。

## 友人からの相談にどう対応するか？



「病院に通って薬をもらっているけれど、  
改善しない  
信頼できるカウンセラー教えてほしい」



あなたは大学の四年生です。  
将来、心理職を目指して学んでいます  
友人がとても困っている  
こんなとき、どうしたら、いいのかな？



## カウンセリングと薬物療法

# 相談するところは統一する

### 相談するところを統一する

ここで、原則を確認します。

それは、相談する場所は一か所にする事です。

元気がなくなって通学や通勤ができなくなるなど、生活に大きく支障をきたす状態になりました。そこで医療機関に行き、状況を説明し、薬を出してもらいました。つまり、病院に相談に行ったということです。

そのため、病院での治療に専念することがまずは何より大切になります。

自分の判断で薬をやめたり、増やしたりせず、医師からの指示に従って薬を服用します。

薬によっては、すぐ効き目が出てくるものや、改善を実感するまで時間を要し、二、三週間あとにあらわれるものもあります。

また、医師は、どの薬が適しているのか、効き目や副作用を確かめながら、薬の種類や組み合わせを考える場合も多くあります。

いまの状況にぴったりと合う薬がわかるまで、何回かの通院が必要なことも珍しくありません。

そのようなときに、改善がみられないと判断して薬よりも心理療法の方が良いのとは、異なる方法を考えがちですが、ここは、慎重な行動が求められます。

### なんでもためしてみたい

困った状況になると、回復の可能性があるのなら、なんでも取り入れたいと考えることがあります。

人によっては、心理療法やカウンセリングは素晴らしいものだど効果を強く期待している場合があります。

読めば元気になるという書籍、食べ物を変

えれば気分が回復するという食事療法、リラックスメディアの音楽、気分転換になる運動、呼吸法などなど。

回復したいという強い思いから、何か良い情報はないかと次々に飛びつきます。このようなことは頻繁にあります。

### 心理療法については医師が判断する

もしも、投薬と心理療法などを同時にすすめていくことが、効果的であると考えられる場合は、原則として医師が心理療法を紹介し多くの場合、病院内外の心理療法担当者との面接をすすめます。

そして、現在の診療情報を担当者に提供し、心理検査や認知行動療法など具体的に治療方針を伝えます。

投薬と心理療法の担当者がひとつのチームとなって回復のための治療にあたります。

## 医師の判断



医療機関に通院中 投薬治療の場合は

→心理療法やカウンセリングの効果があるかどうか  
の判断は医師が行う

薬の効果を実感するのに時間がかかる場合もある

薬の種類や組み合わせの調整

心理療法などが効果的と考える場合は医師から説明がある

カウンセラーは

医師の医療情報提供を受けて、カウンセリングをスタート

医師と心理職が連携をしてチームとして治療にあたる





## ● カウンセリングと薬物療法

### 担当医師とのコミュニケーション 困っていることを伝える

#### 担当医師とのコミュニケーション

現在、服薬中で、さらに心理療法を希望する場合は、担当医師に必ずその旨を申し出ることが大切です。

冒頭の友人からの相談の話にもどります。薬を飲んでいるけれど、改善しないと感じている場合は、そのことを担当の医師に伝えることが何より大切になります。

そして、自分はカウンセリングなどを受けてみたいと思うが、いまの自分に適しているか、効果が期待できるどうかの判断を医師に確認します。

医師に相談をせずに心理療法やカウンセリングに通うことは、避けましょう。

また、心理療法やカウンセリングに通うときに、医師から薬をもらっていることを必ず伝えることも同じく忘れてはならないことです。

黙って、二カ所以上のところに通うのはマ

イナスであると考えられます。その理由は、方針が全く一緒ではないことです。

#### 混乱しないため

医師の治療方針と心理職の考え方が少しでもことなる場合は、ご本人は、何が良いのか、何が優先なのか、わからなくなり、混乱します。

例えば、医師は、今は薬を忘れずに飲んでゆつくりしましょう。特に睡眠と休養が大切ですと話したとします。

一方、カウンセリングの場面で、少しでも行動できることがあるとしたらどんなことですかと尋ねられ、家でできることは何かを考えるとという流れになったとします。

方向性は似ているようでも、少しずつ異なります。

あっちとこっちで言われることが同じでない、考え過ぎてややこしくなります。

この混乱は避けるべきです。

#### 医師に話しづらい

また、医師にはなかなか話せないということを耳にします。

診察の時間が限られていて、医師からの質問に答えるだけで精一杯で、こちらの思いを伝える余裕はないといえます。

「以前と同じような状態が続いています」と現在の様子を説明し、困っていることを明らかにします。そして、心理療法を受けたいという希望がある場合は、いまの自分にとって、適しているのか、いないのか、などを尋ね、説明をしてもらえるようにしましょう。

この友人の相談については、「もししたら担当の先生に困っていることをわかってもらえるのか、その伝え方を友人といっしょに考えること」そんな手助けがよいと考えます。

## 何が適切なかわからなくなる

休養する

できることはやる

睡眠が大切



混 乱



CON 子さん 心理カウンセラー

確認しましょう！

## 医師とのコミュニケーション

大切なのは改善されていない様子を医師に詳しく伝えること  
診察時間が限られていて医師に伝えるのが難しい場合も  
心理療法を希望する場合はそのことを伝え、判断を仰ぐ



「どうしたら、困っている状況を担当の医師に  
わかってもらえるのか、どう伝えたらいいか」  
友人といっしょに考えようっと

## 対人援助学との出会い（3）

### －環境との相互作用－

藤 信子

望月（2007）は対人援助を、次の3つの機能から成立するとしている。

①援助（assist）：先送りすることなく「今」当事者の行動を成立させるための環境設定。当事者の行動を、これまでなかった新しい物理的・人的環境を導入することで、可能な限り時間遅延なく成立する作業。

②援護（advocacy）：援助作業は、従来環境には存在しなかったものである。そのため、行動が成立することを、恒久的に実現するためには、当事者が生活する社会環境の中に、その援助作業を定着させる作業が必要になる。そのため環境に向けて要請作業を行うことが「援護作業」である。

③教授（instruction）：これは従来の学校教育における指導教育や、福祉施設における療育と呼ばれるもので、行動の反応形態を変化させたり、行動の頻度を高める作業であるが、対人援助学の中では、「教授」は絶えず、当事

者にとってはより負担の少ない行動成立のための「援助」と、その普及のための「援護」を前提とすることが望まれるとしている。

上記のような援助の機能の前提には、「障害」を個人の生物学的属性ではなく、環境との関係性の上に生じる現象（望月 2007）という捉え方がある。関係性によるものであれば、「障害」を持つ当事者が、本人の努力によって「障害」を解消するという一方向の観点ではなく、環境設定を整えることで、行動の違いを埋めることを目指すのである。従来の「教える」「治す」という教育・治療モデルではない、対人援助の可能性を主張している。

このような機能は、望月がその発想を起こしたところの（多分）「障害」の重い当事者への援助から、他の「障害」や「問題」へより広範に広げられないかと考えてみた。そして思い出すのは、統合失調症の人の援助に携わっていた時、家族や周りの人が、病気である

ことを認め受容する時に、患者さん本人は自分の病気そして思考や認知の特徴について考えることが出来るようになる、という印象だった。社会は精神病に関して、本当は結構な割合で、罹る病気であるにもかかわらず、あまり見ないで済ませようとしているように、私には見える時がある。そのように社会が病気の存在を見えなくすることが、患者さんに自分が病気であることを見つけにくくする、と感じていた。病気や障害に関して、自己受容の前に、社会が病気や障害であっても良いと受容できるような社会でないと、病気や障害を持ちながら暮らすことはつらいことになるけれど、そんな社会がなかなか変わらないなと思い、応用人間科学研究科で働き始めてから 20 年経ったにもかかわらず、同じことをまだ考えているなと思った。

例えば統合失調症の人にとって、援助 (assist) とは、どういう種類の行動になるだろう、と考えてみた。医療スタッフとしては、家族に対して病気の特徴を一緒に考えてもらい、本人が気持ちの余裕をもって、生活し考えることができるようにすることだろう。その中には例えば休職する場合は生活の援助が必要になるかもしれない。

援護 (advocacy) はこの場合、病気の当事者、家族が孤立して悩まないように、支えるシステム、例えば患者の会、家族の会などを作る、そして病気に関する偏見を持たないような教育をするように働きかける、というよ

うなことも必要になるだろう。そして教授 (instruction) は、当事者に必要な医療処置、また療養のポイントなどを相談することが含まれるだろう。

このように考えると、対人援助は環境設定・調整から始めるという面が見えてくる。ただこれを書いていて、20 年前にも同じ社会受容の話をしていてを思い出し、社会はなかなか変わらないと感じているが、それは私が社会の側に支える組織、システムを現実には作っていないためだろうとも思った。そういう場合、病気や障害のある人が暮らしやすい社会環境ということ、どのように作るかということが課題である。対人援助の観点から、精神病の人が暮らしやすい環境設定をどのようにできるのかということ、続けて考えてみる必要があるだろう。対人援助の 3 つの機能の連環を見ながら、自分のかかわる分野を考えると、必要な機能が見えてくるように思える。

## 文 献

望月 昭 (2007) 対人援助の心理学とは。望月昭編、対人援助の心理学。朝倉心理学講座 17。朝倉書店。1-18。

ビジュアル系

子ども・家族の

理解と支援

## 十三 仮想事例検討（前編）

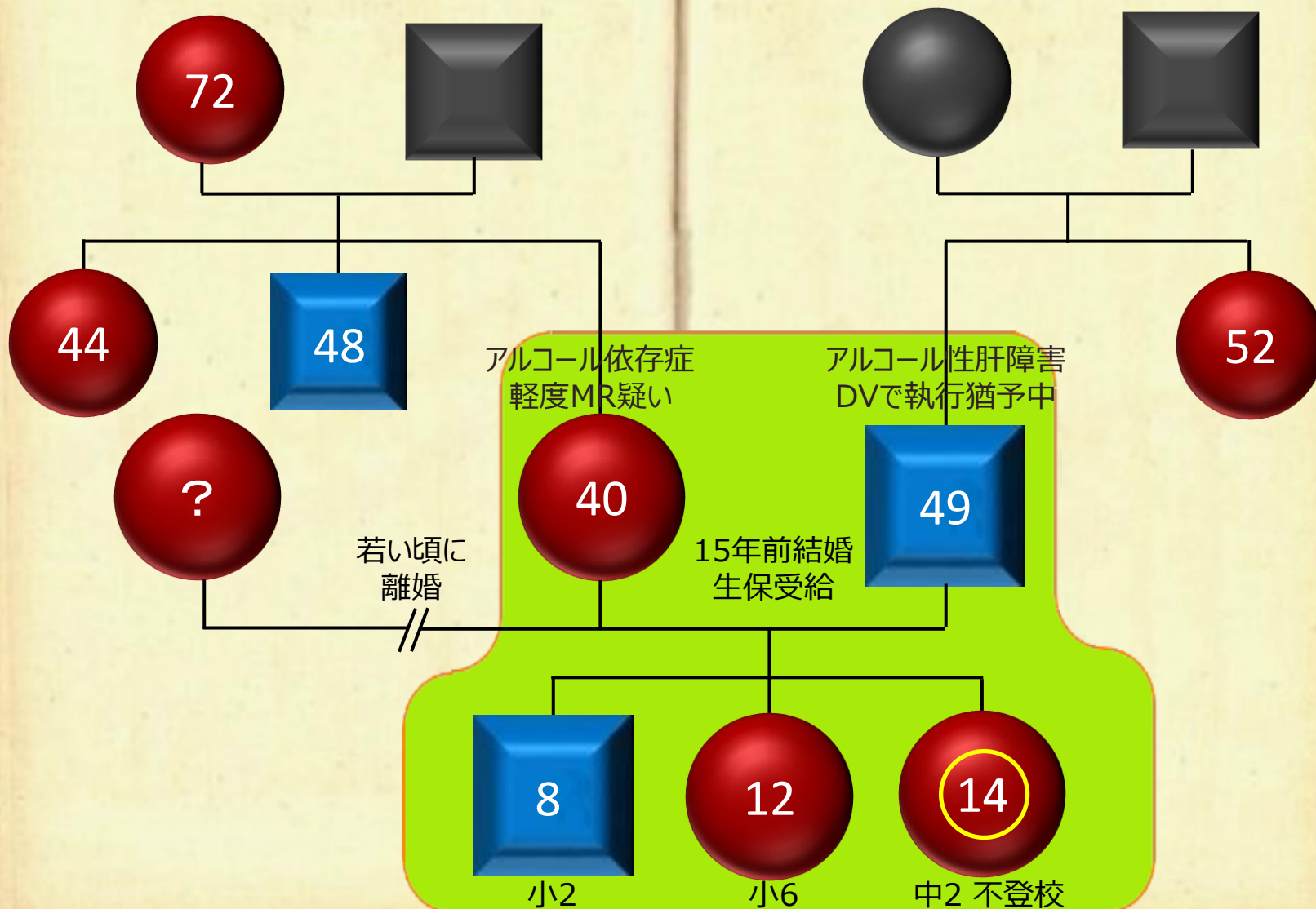
いつまでも団編集長のマンガを使わせてもらうのは気が引けるので、今回はフォトシヨップに頑張ってもらった。

その遠い昔の顔で「究極のソーシャルデイスタンス会議」を作ってみた。





事例検討のための実在しない家族です。



## 両親について

母親は、三人兄弟の末っ子。幼少時に父親が死去し、その後、生保受給。高校を中退し、様々なアルバイトした。二五歳の頃、友人の紹介で働いていた飲み屋で現在の夫と知り合う。三人目が生まれ、手が回らなくなるにつれて酒量が増えた。最近は昼ごろに起きることも多く、家事も滞りがち。軽度の知的障害が疑われている。母方兄、姉はそれぞれ結婚しており、ほとんど行き来はない。

父親は、若い頃に離婚歴のある建具師。結婚後、妻と飲酒することが習慣化し、アルコール性肝障害になる。現在は断酒している。半年前、酔った妻に暴力をふるい、それを止める子どもたちを突きとばして逮捕・起訴され執行猶予中。

母親はよく離婚を口にするが、一人で子どもを育てる自信がなくその気はない。父親も、自分がいなければ子どもたちが困るからと離婚は考えていない。

## 子どもたちについて

長女は、中学2年。小学校時代は、担任から食事・洗濯・宿題等のサポートを受けて登校していた。成績はよかった。中学に入ると学校からの配慮はなく、いじめもあって休む日が増えていった。現在は週に一度、昼ごろにふれあい教室をのぞく。家事や妹たちの世話が行き届かない母親を嫌う。父親が家事をするときは、すすんで手伝っている。

小6次女・小2長男は、いずれも怠学傾向がある。身なり・宿題・登校など、父親に強く言われるとしぶしぶ従う。両親が口論すると必ず母親をかばう。ふたりとも通常学級で低学力、学校は様々な配慮をしている。



## 今回の経緯

母親の飲酒を父親が叱っているとき、長女が「いい加減にしてよ！」と叫び、それに父親が「学校を休むやつが偉そうに言うな」と怒鳴り返した。父親の態度に驚いた長女は、発作的にリストカットをして家を出た。しばらくして近くの交番に行き、家に帰りたくない、生きていても仕方がないと訴えて児相で保護された。

母親は、児相に呼び出されて事情を聞かれ、たうえに長女からは帰宅を拒まれ、飲酒に歯止めがきかなくなった。激昂した父親が手を上げそうになり、心配した次女が児相に電話。結局、子ども全員の一時保護となる。

話し合いの結果、母は断酒のために通院する、父親は暴言を控えると約束。次女・長男は家庭引き取りとなった。長女は迷ったあげく父親の提案を受け入れ、保護所で今後のことを考えることになった。

これからロールプレイを交えながら、みんなでこの家族のことを考えていきます。あらかじめ、班で面接担当2名と両親・子どもの役割を決めておいてください。

その後、講義でお話ししたジョインイングのポイント①～④を話し合ってください。のちほど、協議結果を発表してもらいます。

内容はこちらで整理して板書します。





① 解決努力のねぎらい  
この状況でありながら、  
父親は断酒し暴力を控  
えている。

▼ 長女が家事をして父の  
負担を減らしているか  
ら、父親は怒りを抑え  
ることができている。  
▼ 母親がついに通院の決  
断をした。  
▼ とりあえず、家族はバ  
ラバラにならずに頑  
張っている。

②

長女の困りごと  
(時間の関係で長女分  
だけ)

▼ 酔った母が養育・家事  
をちゃんとやらない。  
▼ 父がそれをカバーして  
いるけど、また以前の  
ように暴力的にならな  
いか心配。  
▼ 学校のことや将来のこ  
とを考えなければなら  
ないが、そんな気にな  
らない。

③ 家族に備わってい  
る強み

▼ 母親は次女・長男に  
頼られ、孤立を免れ  
ている。

▼ 父親は長女の家事サ  
ポートを受け、仕事  
も続けている。

▼ 両親とも離婚は考え  
ていない。

▼ 長女は父親の提案に  
より、自分の今後を  
考える機会を得た。

▼ 学校のサポートで、  
次女・長男は安定し  
ている。

▼ 外庄とか外部との軋  
轢がほとんどない。

※ 家族のリスク

▼ 母の通院、父の暴力・  
飲酒の自制が安定して  
続くか。

▼ 長女の不登校に父親が  
耐えられるか。

▼ 父親と長女のわだかま  
りが修復できるか。  
▼ 長女が家庭から離れた  
ら、父親が孤立し抑制  
が効かなくなるかも。

はい、ありがとうございました。文字が小さくなりましたが、だいたいこんな感じでしょうか。



では、ロールプレイでジョイニングしましょう。時間があれば、役割を変えてもいいです。  
終わったら、各班の家族役の方々に面接時の感想を発表してもらいます。

講義でも触れたように、誰でも自分の“問題”理解のストーリーと、それに基づく解決努力にはこだわりがあります。それゆえ、あまり効果がないにもかかわらず延々と同じ解決策を続ける、ということが起こりがちです。

それが怒りをかきたてて、解決のための努力が逆に“問題”を維持強化するということになってしまうわけです。



というわけで、この家族の解決努力のパターン化を探ってみましょう。それらのつながりを図にすると、問題維持システムがわかりやすくなります。

## “問題”と解決行動のパターン

(※ 解決努力)

母親：朝から飲酒、行き届かない家事・養育。

↓  
父親：家事をカバー<sup>※</sup>するほどに妻に怒り。

↓  
長女：母親の飲酒や父親の暴言を制止<sup>※</sup>できず、怒りと無力感を抱える。

↓  
両親：夫婦の会話で怒り<sup>※</sup>をぶつけ合い、長女にも向かう。

↓  
長女：通じていたはずの父親からなじられて落ち込む。  
いっそう登校意欲を失う。



図のようなパターンは特定の文脈（ストーリー）の中で起きています。というわけで、次に家族の問題理解の「文脈」をテーマを話し合ってください。時間の制限がありますので、これまでと同じく長女をとりあげましょう。

長女はどのような文脈で現状を“問題”としていますか。その根拠となっているのはどんなことでしょうか。そして、その文脈に沿ってどんな解決のための努力をしていますか？

また、ディスカッションのまとめを班ごとに報告していただきます。





お疲れ様でした。  
みなさんの協議内  
容をまとめてみま  
した。



▽ (問題) 自分が無  
力なこと。そのた  
め、家・学校に居  
場所がなく登校で  
きない。

▽ (根拠) 母の飲酒  
も父の暴言も止め  
られない。逆に自  
分の不登校で両親  
ともストレスがた  
まり、母の飲酒・  
父のイライラにつ  
ながっている。

▽ (対処) 家事や妹  
たちの世話をして  
いる。だけど、学  
校を休んでいるか  
らなにをしても評  
価してもらえない。

今回は長女を取り上げましたが、他の家族もみんなそれぞれ自分なりの“問題”理解のストーリーをもっていることは言うまでもありません。

ではここで、休憩をはさみましよう。ここまでみなさんと家族について考えてきました。後半は、この家族支援について考えましよう。

カギは、連鎖を作り出している「文脈」です。2月までの休憩の間に忘れてしまわないようにしてください。



# 配偶者を亡くして一年日記

(2)

## 団士郎

妻が亡くなって一年三ヶ月経った。少し遅らせて一周忌も済ませた。遺骨は相変わらず我が家の一階の居場所に鎮座している。帰宅すると「ただいま」と声をかけて、時にはお線香も。

日常生活は一人暮らしである。しかし意識として「独身」になった感覚はない。不思議なことだが不在感はそう大きくないのだ。これが何に起因するものか自分では分からない。ただ実感的事実としてそうなのだ。

生活の役割分担はぐんと増えた。一人なのだから当然だ。ゴミ出しに洗濯、食事の片付け、家の清掃(これは新規参入した「ルンバ」に励まされている)、メンテナンス。不具合家電の調整から、不測の事態への対応。宅配の受け取り。地域住民として町内会の分担。そんなたくさんのことを一人でやりながら、その報告を遺骨にしている。

相変わらず妻のことで涙することはなく、喪失や寄る辺なさを感じることもない。今に至っても、「人生最大のストレスは配偶者の死」なるストレス理論の実感はない。今後どうなるかなど予想できるものではないが、できるだけ今の自分の言葉で、自身内にある実感に添って残りの人生を過ごしたいと思う。

紛れもなく日本の高齢化社会ゆえだが、少々やかましくさえすぎの「高齢者マーケット」狙いの輩やそんな言説とは距離をとっておきたいものだ。そんなに歳をとってもいない者達が口にする老後の不安など、市場目当ての流行語なのだと見破っておけば、必要以上に振り回されることはない。いつかちゃんと死ねるから安心しておけ！である。

\*\*\*\*\*

2020

11/16

先輩やもめ男(漫画集団「ぼむ」メンバー8人中、3人が妻を先に亡くしたことになった)の誘いで、漫画家三人衆で旅に。

この顔ぶれは遥か昔、エジプト旅行に出かけたメンバーだ。山代温泉のこの宿は go to トラベルで全館満室だとか。コロナで騒いで、景気で慌てて、割引旅行で煽るなんて、正気とは思えない。利用はさせて貰ったが、海外の騒ぎもたいがいだが、落ち着いたらどうなの。



11/17

高齢者の流行でしょうか、越前朝倉氏の一乗谷を散策。まもなく NHK 大河ドラマでは信長に攻められる谷間。S運転の可愛い FIAT チンクエチエントとやらに乗って、秋ウララ。



11/18

キッチン前の出窓に妻が残したカランコエの鉢がある。今、花はつけていないが肉厚の小さな葉がかわいい。仲間をと思って知識もなくカランコエの小鉢をネットで注文。届いたときは葉と蕾だったのが綺麗に咲いた。家の周りにはどこからか飛んできたのかツワブキ等が咲いている。晩秋のこんな時期に花盛りだ。



11/20

浜松から H 君が話しにやってくる。C 君の市内共同オフィスで三人、長々と懇談。彼の手土産

は文春新書「農業新時代」に登場したピーナツバター。本物すぎて、市販品に馴染まされた味とのギャップに驚く。その後三人でロシアレストラン「キエフ」に。訪問時に食べたウクライナ料理の記憶からすると、とても日本風に寄せてあった。



11/22

昨日は一日自宅で原稿を書いたり読書したり。夕刻、次男が立ち寄ったので、車で飯を食いにしかけた。食器乾燥機のタイマーが壊れて買い換えたかったが、持ち運ぶには大きすぎ。良い機会だと、帰路 K's 電気に立ち寄って購入完了。

今日は KISWEC に家族面接を一件見に行つてその後お茶、歓談。



11/23

五年前の今日の呆れたツイートが出てきた。今ではしなくなったことが多い。授業をしなくなった、一人暮らしになった、コロナで外国に行けなくなった・・・、数年で状況はコロコロ変わる。「今」な



んて、ホントあてにならないヨ。思い詰めやすい人、時代を鵜呑みにしやすい人に言ってあげたい。



11/23

晩秋は落ち葉だ。まわりの家には常緑樹が多いのか、向こう三軒両隣の路上の落ち葉は、ほぼ我が家のものだと気付いた。

人生初、お隣さん、お向かいの路上の落ち葉掃き。昨夜は自治会役員の当番が次年度だとお知らせあり。いろいろあるなあ。



11/23

今朝の天声人語が心に留まった。いつの時代も安穩に過ごせた訳ではないといえそうだ。

でも、今から生きる若者の暮らしに、団塊世代の関心が薄い気がしてならない。人口の多い世代の男性が占めている国会議員は、お得な政策以外考えられないのか？安物の政治だなあ。



11/24

想定外はいつも起きる。孫のところに祖母(妻)の遺したピアノを届ける手筈になっていた。業者が来てくれてさてというところで、部屋の扉幅が、ピアノより狭いことが判明。ピアノを分解するか、部屋の扉の立て付けを解体するかだということで、出直し。

ならば、そもそも部屋にどうやって入れたのだろうか？そんな経験、ありますか？



11/25

夕刊フジのこのシリーズの取材を zoom で受けた。asoblock と繋がりのある人で、経歴を以前、息子から聞いていたフリーのライター。

長話になってもいいつもりでセットしてあったが、それにしても四時間は、我ながら呆れる。面白い経験の人なので対人援助学マガジンへの連載をおすすめしておいた。



11/26

季刊「対人援助学マガジン」第43号の編集に取り掛かっている。55人以上の連載執筆者の原稿がワード版25日、PDF版30日締切で続々届く。新連載も二名あり盛況である。いろんな現場の人たちが現在の記録を積み重ねていける場を10年以上、継続維持出来ているのは誇りだ。この意義は後でわかるだろう

三年前、既に読んでいた本の書評を読みかえした。ツイートもした。やはり、今でもとても印象に残り続けているグラフィックノベル。私はこんな要約も解説もできないなあと思ったことも思い出す。世界はこんな風なのだね。国内だけ見ると、コロナとオリンピックしかないみたいだけど。



11/27

家電を搬入に来てくれた人と話していたら、「団さんってKBS 京都に出てはりました？声そのままですわ」と言われた。懐かしい！昔、ラジオでいくつかの番組に、数珠つなぎのように出していた。諸口あきらさんの番組、いくよるよさんの番組、そして昼の情報番組の村上アナ。声の記憶か。



11/27

昨夜から家事野郎だ。夕飯はステーキを焼いた。ランチはだし巻きと納豆、椎茸昆布、煮豆。昨日届いたTVショッピングのこれでレンジ周りを掃除。誇大広告ではなくきれいになった。落ち葉掃きも二度目。届いた原稿を整理しながら、明日の講演のパワポの詰め。そして今夜はみぞれ鍋に初挑戦。



11/28

小規模対面の講演会にJRで亀岡に。初夏に続いて二度目。主宰者の北村君は長い付き合いの人。15歳年下だと言われてエツと思ったが、それでも58歳。若くはないね。教育分野の頑固さにチャレンジして20年、継続していることに賛。私としては自分が頑迷な老人にならないことを自戒するばかりだ。



11/29

三宮から高速バスで、今このあたり。雲の種類が多いのか？いい気分。



鳴門うどんを食べて、この俘虜収容所に。映画になった話に聞き覚えはあったが、何故、ドイツ人捕虜が徳島に？中国、青島から連れてこられた第一次世界大戦の話。なるほどそうか。



夕食は徳島駅前。以前、前を通って気になった店でピザ。誰かと食事をしているのも楽しいが、1人で食べているのも悪くない。洋梨と生ハムのサラダがおいしい。ピザも久々でおいしかった。



11/30

当然のことながら、徳島は観光に来たわけではなく、朝からの1日プログラムのための前乗りだった。駅のJR系ホテルの朝食、混雑もなくスムーズ。さて、六時間のメニューに出発。-



12/01

コロナ、妻の死と波乱の2020が師走をむかえて。ありがたいことに私は、新しい仕事やプランを用意してもらって、元気に年末を迎えられそうだ。

「士郎さん.com」ホームページでその情報が、週刊連載コラムと共にご覧頂けます。是非、どうぞ。

発売中のこの雑誌に、連載「木陰の物語」とは別に、こんな記事が4ページ。書いたのは私ではなくライターさん。だから簡潔でわかりやすい。だらだらと長いのが特徴の私は少し反省。反省だけならサルでもできる、って古い？知らんか？



12/02

月刊福祉2月号用の記事の校正中。6ページにまとめてくれているものを読む。でも一番目につくのは、髪が白くなったなあってこと。ここでも話題になる「木陰の物語、連載を再開したらいいのになあ・・・」。読者から、「楽しみにしていましたのに・・・」って私に言われてもねえ。



12/03

朝は久々の人が相談に。相談室のあるビルの一階。二軒のテナントが相次いで閉店。ガラーンとしている。コロナがじわりか。午後は髪を切りに行ってからドトールで連載原稿を書く。この店、偏

って高齢男性率が高い。自分もそうだから文句ではない。夜は仕事場で福島、楡久里からの zoom トーク参加。

12/04

夕刻からここに。いつもの講演会とは違って、若い漫画家とやりとりできた。教室で zoom とライブの混合。お相手は静岡にいる。いよいよ孫の方が歳が近くなった学生たちに、伝わるようにと思いつつ、結構、高度なことを誤解もおりこみ済みで話す。熱は伝わただろうから、それでよし。



12/05

今年度ラストの東日本家族応援プロジェクト福島。午前の私の担当は何だか早口になってしまった気がした。

午後は福島の実践を振り返った現地からの報告を聞いた。「孤塁」のことは、HP(士郎さん.com)のコラムに書いたものが月曜日にアップされるはずだ。FUKUSHIMA は誰も一口では語れない。





12/06

こんなに楽しめたアニメも久しぶりだ。可愛らしくエレガント。パリの街を散歩するような、でも不思議な物語が展開する。「ディリリとパリの時間旅行」



12/06

今日は一日、PCの前でzoom。東日本家族応援プロジェクトの今年度最後の回。福島の様々な問題が語られ、知らされる。長く関わってきたので知っていることも多いが、課題は進化するから、あらためて気付く事も。その間に、自宅 zoom なので昼食、夕食を作って食べる。我ながら感心なものだ。



12/07

今夜は対人援助学マガジンの編集日。午後、仕上がっていた自分の原稿を消してしまうポカ。焦ったが、校正用にプリントアウトしたものがあつたので、それを音読入力して復活させる。何とかなるもんだなあ。千葉、大谷編集員と三人で恒例のCoGo 壱カレーを食べながらウダウダ。今回も300頁越えた。



12/08

ずいぶん昔、京都御所側のギャラリーに版画家山本容子の作品がたくさん展示されていた。その中から映画「道」をテーマのものを一点購入して自宅に掛けてある。

先日、丸善ギャラリーで久々に個展を見た。気に入ったものが一つあったが、今回はやめておいた。それが掲載された25年前の図録を買った。



12/08

鴨川は広いし、何がいてもいいんだけど、こんなのがいると、つい撮ってしまう。鳥だあ、でもいいんだけど、何だこれ？。多分、鶯だよな。花とか鳥とかの固有名詞のレパートリーが貧弱だ。花鳥風月に疎いのか。風月って何だ？モダン焼

きしか思いつかん。七十も遠に過ぎてこのざまか。



12/09

連載者五十人越えとなると、いくら合理的な編集方針といっても、処理要件は半端ない。今朝は自宅起きてからずっと、昨夜も午前3時前までやってたんだけど、編集作業。

自分の原稿の校正を調査者の次男に頼んだら、几帳面なものが戻ってきた。凄い。その間にチラチラ読んでいたのがコレ。



12/10

朝、相談を一件。午後からは仕事場にこもって、マガジン43号の原稿を最終確認して発行所へ送信。30以上のデータだもの間違いはあるなあ。その後、土曜日に予定している第二回 zoomトークライブの二つの話をパワポにまとめる。今回も定員いっぱいまで締め切ったと聞く。面白いものになりたい。

12/11

朝から、アップライトピアノの解体運搬が始まった(先日失敗、断念したやつ)。三十年ほど前、やはりそのようにして入れてくれた業者さんが判明してお願いすることに。



開口一番、「前にもやっているの外しやすい」と言われた。妻がやっていたことで、私は関心もなく、現場に居合わせたこともないので全く記憶になかったのだ。

よくあることではないが、今回はギリギリまで、話の準備をしている。明日のトークライブ、第一話に一コマ漫画家から木陰の物語作家に転じていった経過を、作品や当時のトピックスも含めて話す。三十年近く続けてきたことからの転身だった。







12/12



さあ本日これを無事終えて、早々と一息つける年末に突入。来週のWSがコロナで延期になったので、ちょっと早めだけど、良い感じで2020年分はこなし。マガジンの発行はまだ校了にはなっていないが概ねよし。年末年始は漫画関連で複数の書籍の分担部分に取り掛かるが、良いペースだ。

12/13

久々の立命館茨木キャンパス。オンラインと対面、混合の研究会。発表者のテーマの細部が輻射していて、興味深さと、何とも言えなさが自分の中で渦巻く。頭がついていかんことも。でも、脳トレだと思って聞く。面白い。終了後はいつもの三者で延々。



12/14

あれやこれや、したいことの山が12月前半に重なった。頑張ってひとつずつ片付けたので、今日から連休。自宅では映像三昧に。

まず大型TVにサウンドバーをセット。そして選んだのはこれ。グラン・ブルー完全版。映画館で観たことがあるが、改めて観て素敵だった。BDは本当に映像が綺麗だ。



12/14

玉ねぎ、ジャガイモ、キャベツ、人参にベーコンを加えた具沢山野菜スープをつくった。味は、コンソメ顆粒で仕上げに胡麻油少々。これで冷蔵庫に残っていた野菜が片付いた。味が単調になるかと玉葱の輪切りをソテーしてポン酢の一皿も。それにバナナとキウイのスムージーを添えて。健康な夕食。

12/15

予定通り、対人援助学マガジン43号がアップされた。人によって関心は様々だろうが、連載五十本以上もあると、どれか心動くものもあるのではないかと思う。ぜひお知り合いにシェアしてあ

げていただけると嬉しい。



12/16

先日の第二回 zoom トークライブで、第一話に一コマ漫画の話をした。そのジャンルで一番頑張っているのが永年の友人篠原ユキオ。対人援助学マガジンに一年前から連載を始めてもらった。今回、文章も含めて良いですよ。その一枚を。



12/17

編集という仕事、言葉に関心を持ち始めたのは、ずいぶん昔のこと。公務員時代、京都で開催されていた編集者講座に夜間1年通ったこともある。当時、肩で風を切っていた編集者、見城、花田の講演も聞きに行った。時代を編集する感覚は今も通用するだろう。文春編集部の物語を楽しむ。



12/17

届き物を待つために在宅。その間に韓国映画を一本。画面の細部に作り込まれたものが興味深く、楽しめた二時間ちょっと。夕飯は豚コマとトマト、玉葱の炒め物。醤油、酒、砂糖、ニンニク少々で、初めて食べたが美味しい。少し火を入れすぎたがるのは好みだから、黒っぽくなるけど美味そう。

12/19

連載コラムに海外旅行のゴタクを少々書いた。そこに使った写真がこのスーツケース。いろいろ試して、今は無印良品のこれが気に入っている。ひとまわり小さい色違いも持っている。この落書きは空港のターンベルトでも目立つ。旅のウキウキにちょうどよく賑やかだ。



12/21

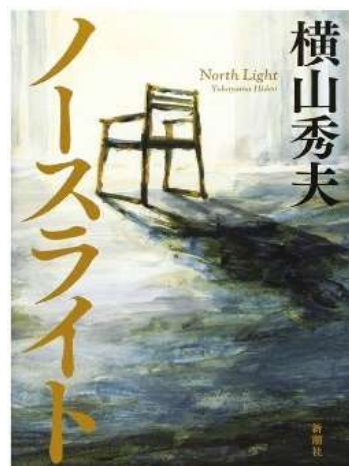
たまたま Kindle の読み放題でこれを目にしたから、専門と総合という話題が出てきた。スペシャリストとジェネラリストの事は私もよく話題にする。専門の細分化が強みであり、弱みでもあるという話にする。

そして別枠の論点として、家族システムの事に触れることになる。世界には他にも道がある。



12/21

好きな小説がドラマ化されるのは微妙な感じがある。多くの人が言ってきたことだ。でも、映像化されると気になるのでみてしまう。NHK 土曜ドラマで二週連続のこれを観たが、私には良かった。タイトルのノースライトの良さというのは、いまいち本でも映像でも届かなかったが、登場する役者が皆よかった。



12/22

夜中に見た「マザーレス ブルックリン」は、久しぶりに映画らしい一本だった。1950年代のNY、出てくる役者が良くて、切り取られた街がとてもスタイリッシュ。大都会の孕む欲望、権力を描くにピッタリ。物語は複雑な小説が原作なので、わ

かりにくい欠点もある。しかし映画のムードは満点だ。



12/23

何度かかすった事はあったが、小説を読んだ事はなかった池波正太郎。ムックに手が伸びて、思い出すこともあり、何度もTVドラマ化されている「剣客商売」を読み始めた。面白い！上手い！しばらく小説の部は池波ワールドだな。たくさんの人が楽しんで読んでいる物の凄さ。この文庫版 33刷だ。



12/25

新編集の一冊のため、「木陰の物語」の一話ごとの扉絵を作っている。結構手間がかかる年の瀬の作業になった。

そんな自宅一人作業の友は YouTube の講演。中でも河合隼雄さんの最終授業の中身に驚いた。



知らず知らず学んでいたことがいっぱいあったということなのだろうか？こんなに重なるかな？



12/27

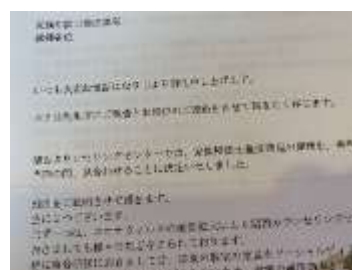
仕事場から好天の鴨川を渡って家族面接を見に KISWEC へ。なかなか面白い面接二つに思い出すことが色々ある。このところ非常にゆっくりした日々が続いている。お楽しみのこれは三巻目。年末に向けて、映画に読書の日々だ。創作も一つ手をつける予定。身近な人の人生の転機話を興味深く聴く。



12/28

年の瀬、請求書他いろんな郵便物が届く。その中に、読書仲間の W さんが SNS で本がダブっていると呟いたのを見て、下さいとお願いしたこれ。早速、読み始める。

名誉館長之証はクラウドファンディングの返礼品。そして、長らく続いてきた講座を閉じるというお知らせ。コロナの影響が避けられない。



12/28

夕方、「大津警察署です。突然失礼します。今、逮捕した詐欺グループ十八人の書類から、あなたの個人情報が…」と話し、私の住所氏名を言って、間違いはないですかと問う。

しばらく聞いていたが、話し言葉が薄っぺらい。通話録音をセットして引き続き相手をした。だがそれ以上に深まる展開にはならず、住所氏名、電話番号くらい情報とも思わないので詐欺だと認定してガチャ。

12/29

波乱の一年が閉じようとしている。一年前には思ったこともなかった事態を、それでも受け止めて年末を過ごす。出かけて行く仕事はないが、準備すべき事は次々あって暇にはならない。午後から今年最後の京都の仕事場詣。自宅とニヶ所を使い分けながら、道中、山科の無印カフェで原稿仕事。

12/30

思いがけず仕事場での作業にかかり切っている。年末だから程々にと思ったのに、書いたり、読んだり、企画を考えたりと忙しい。今日の手作

業の友はイザベラ・バードの日本紀行。以前コミックスで読んだが、朗読が面白い。三谷幸喜のナビで一時間半。YouTube は色々な物がみつかるなあ。



12/31 大晦日。新作木陰の物語のペン入れをしながら、これを聞いた。臆病者の嘘つきが、広告代理店のようなブレインと共に、大衆を煽り立ててゆくプロセスは、今も繰り返されていると言われて、腑におちる。そして 20 世紀に経験したこういう問題への策を、まだ我々の世界は持っていない。そうだなあ



2021/1/1

とんでもなく寒い元旦。昨夜から特に変化なく、やりたい仕事を続けている。昼飯には鶏肉をソテーしてケチャップソースを絡める。ごはんが進む。午後から次男が息子を連れて来訪。夕刻、飯を食いにかけた。

前にも書いたが 10 年前の大晦日のツイート。それが満願だ。続ければ叶う。

1/2

新年早々、ファミリーヒストリーのフィールドワークに。65年程前の小学生時代、一度訪れたことがある三重県旧阿山村の私の祖父の実家。

何の前触れもなく、交流もない不審者の突然の訪問なのに、88歳の女性が確かな記憶(私の父、五士郎)を話してくれた。息子さんも交えて、Y家の家系図を見せながら次男が話す。



調査ドライブのついでに関宿に。想像以上に東海道宿場町らしい場所だった。しばらく前、ニュース番組の特集で見た記憶があったが、江戸時代の街道そのもの。フィールドワークと併せて、いい正月になった。



1/3

昨日は夕刻から仕事場に来て、集中的にやりたい作業を。今朝、野菜ジュースを一本飲んで歩



きに出かけた。鴨川を北に下鴨神社まで、途中から「初詣」の人の流れにのる。

その後、京都御苑を抜けて、烏丸丸太町の以前も来た店でナポリタンを食べる。ここで 10800 歩。なかなか疲れる。



1/4

告知。2020 年 8 月、12 月とたくさんの方に参加いただいたトーク・ライブの三回目をやります。本来ここは東京での家族理解ワークショップの日程だったのですが、コロナ禍は慎重に対応と考えて中止しました。そこに第三回を入れました。まだ、中身は決まっていますが、一時間漸を二本立てで。



1/5

正月の雰囲気のあるものを身近に探してみた。これは 6~7 年前、中国雲南省麗江に行った時にのぞいたトンパ文化博物館で、書の先生に書いてもらったもの。団士郎と書いてある、らしい。

なかなか魅力的なトンパ文字が街中あちこちにあった。



自宅で三つの仕事の準備をしながら、昼食と夕飯の用意。その間に、年末年始のお楽しみのこれを見耽る。Netflix の長いシリーズものに手を出してしまったが、でも面白いんだなあ。小説も暮れから、これにかかりきり。シリーズ物って、あたりがついて安心して楽しめるところが怠惰ではあるな。



1/6

観るかどうかを迷っていた「えんとつ町のプペル」。人に薦められ観て正解！志の輔さんの長台詞がとにかく良い。それに DAN なんて人もいい奴で登場。コロナのこの時期に公開になる西野君の運命、使命にも感服。自分の物語をかたる強さを改めて思う。



1/8

昨夜から zoom による隔週 6 回連続の講座。季刊誌「かぞくのじかん」の読者中心に、初めて聞いて下さる方の多い催し。心残りは zoom 画面のちょっとした不具合の影響でアクセルを踏みすぎた気がしていることだ。連続ものなので、次回はもう少し落ち着いてなんて思って気持ちをおさめている。



1/9

亡くなった妻が担っていた諸契約を解約、変更しなければならない。しかしこれが本当に面倒。つつい放置しておく、利用実績はないのに課金され続ける。昨日、長男がそれを一つずつ、整理してくれた。まだ残りはあるが、とにかく一つ一つ片付けてもらうしかないようだ。ありがとう。

夏は中止になった KISWEC 家族療法 WS。冬期 step1 をなんとか開催に。一人一人に机を入れて、フェイスガードでこんな風にスタート。直前に欠席になった方も四名。致し方ないよね。



1/10

ちょっとした時間の隙間に、書評が目についたこの短編集「コロナと潜水服」の一話を風呂で読む。こなれた展開、心地よいストレスの解放、上手なおとぎ話が楽しい。

一緒にこの第二巻も購入。s.アレクシエーヴィチは長いことかけて読んでいた大部、「セカンドハンドの時代」の著者でもある。



1/11

今月号の月刊福祉にこんなインタビュー記事が 6 ページ掲載されている。近くにあったらご覧ください。



溶接技術者研修会みたいな雰囲気だが、そうではない。もっとも、くっつけたり、切り離したりと関係なくもない。3日目、最終日のワークだ。





1/13

ファミリーヒストリー関連で次男とあれこれ話すことが多い。昨日、こんな本「頼介伝」を読んだけど、この人の調査には敵わないと言って本をくれた。松原隆一郎氏は何かで記憶にあった。関連書の「書庫を建てる」を何処かで目にしていたのだろう。読み始めると面白い。家族史は近代史なんだよね。



1/14

朝は相談一件。元気に帰っていかれた。午後、新刊の表紙絵と後書きを仕上げて発送。ちょっと久しぶりにキングコングの二人の YouTube を見ていたら、うっかりして 19 時スタートの zoom 会合に遅刻。照明にネットと女優ライトとやらを買ったら、こんな小さなサイズだった。子役用か！あまり役立たず。



1/15

週末の金沢、来週の浜松と続けてワークショップを延期にした。準備も不要になったので時間的余裕がたっぷり。ならばと毎年続けてきて、昨年で一区切りした東日本家族応援プロジェクト木陰の物語を、今年のぼむ展用にカラー掛け軸版制作でスタート。試行錯誤で色や背景を探る楽しみ。



1/16

今日は亡き妻の 71 回目の誕生日。でも、もうそんな祝いはないなと思っていたら昨日、この花束が届いた。何？と思った。ハッピーバースデーの言葉と一緒に送ってくれたのは、典子の葬儀を受けてくれた僧侶、竹中君だ。もう命日のことを語るだけかと思い込んでいた。そうだね、忘れる事はない。



1/18

年末、映像と音を楽しみたいと思って、75 インチ大型 TV とスピーカーシステムを導入した。私には珍しい高価な買い物だ。これで観るのは新作もいいが、名作の再見がいい。ブルーレイの画像は本当に綺麗で、映画館で観た時とは違った感動が届いてくる。アラビアのロレンス、映像に感無量。





1/19

2017年の今日、こんなことを書いていた西野君が制作した「えんとつ町のプペル」が今公開中だ。実は絵本の絵があまり好みではなかったので、ためらったのだが、観てよかった。とてもよかった。アニメのキャラクターは絵が変わっていた。シンプルなメッセージの物語がいい。

国士郎 @kunitarou 1/19(日)  
 二年前、NYで家族映画を観る直前に、西野君がクラウドファンディングで集めた資金でNYへ帰国をしたことを知り、その経緯を本とぬいぐるみも読んだ。次々と意思を固くして、行動し、結果を出してゆくのが素敵です。今あるものの次の一歩を模索している姿に共感とエールを送ります。  
<http://twitter.com/kunitarou/status/770939308...>



1/19

朝、ストレッチに。丸善で初見の本を二冊購入。翻訳物の方から読み始める。また併読書が増える。これは小説だから、面白ければ加速するだろう。平日に丸善で本棚を眺めた後、ランチするなんてとても優雅だ。出版予定原稿の感想を求め

られている。テンポよく読めるものになっていて面白い。



1/21

朝は相談室で一件。嬉しい決意表明の方と三度目の面談。また半年後に報告に来ますと軽やかに語る。嬉しい。夜は二度目の zoom 講座。一般の方の参加も多いプログラム。本日は家族の境界の話をする。私流に実用化アレンジをしているのだろう。常に新たな気づきがあるのが語りの面白さだ。



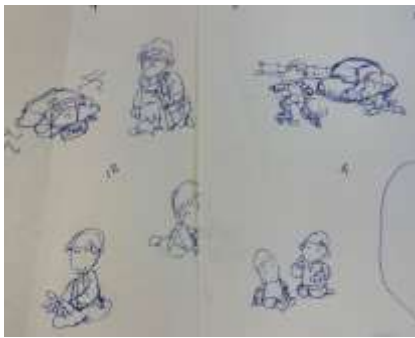
1/22

妻のスマホの解約にソフトバンクへ出向く。死亡診断書を持ってこいという。契約は簡単で、解約は面倒なんて商習慣を、世の中が支えている。息子がやってくれているけど、とっても面倒。その前にいくつかのクレジットカードの解約。そして、自動引き落とし口座に指定されていた通帳の変更も。



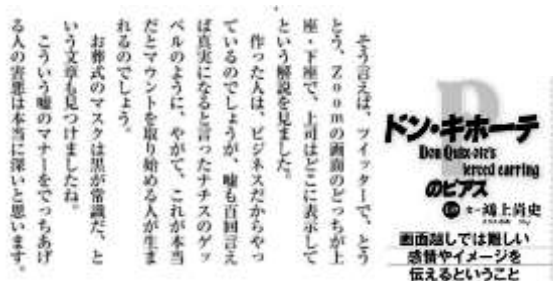
1/24

連日の小雨空。灰色で気持ちが寒々しい。緊急事態宣言下でもあり、家を出ようという気にならないので3日間、こもっている。その間に木陰の物語新作を描き始める。合間に食事、家事、入浴、映画、読書など挟みながら、快適に過ごす。一人でいるのが割と好きらしい。



1/24

雑誌の鴻上さんのコラムでこんなことを読んで爆笑した。そんなことを真面目そうな顔で言っている輩が浮かんだからだ。こういう人って、ニュースショーのコメンテーターと同類だろう。何でもかんでもちょっと思いついて喋るもんじゃないうと思



1/25

マイナンバーカードなんて使わないよ！と言っていたのに、コンビニのマルチコピー機で年末年

始、二度も印鑑証明を取った。便利！マイナンバーカードのコピーを講演先の事務局からあちこちで求められるので正式のを去年作った。それでもブツブツ言っていたのに今やこのザマだ。3月にも又、印鑑証明を取ることになる。

1/26

新作のペン入れ完了。新刊「こどもが小学校にあがる前に読みたい木陰の物語」用のイラストを編集者、デザイナーとやりとり。

東日本家族応援プロジェクト絡みのMさんの新刊のイラストも思案中。合間に、目についた映画。カナダのこの監督の作品、前作も記憶にある。これもザワザワする映画。



1/27

昨年末、取材に来てくれたライターの記事が掲載された。生涯現役、そう思っているから、一生働く！という記事のタイトルが気に入った。今日もあれこれ楽しく忙しい。



1/28

ランチがてらに、碁盤の目に区画が作られた京都市街地ならではの散歩方法を試してみた。あみだクジ式で四角を必ず曲がる。その結果、近くでも通ったことのない街並みが沢山あることに気づいた。観光客はほぼ見かけないので、お店



の人は親切だ。なんだか余裕を感じる。ホントは大変なんだろうけど。



1/28

校正が届いた木陰の物語新刊本。初めてコマ割りの枠に入っている。各話の始まりには扉絵も。「子どもが小学校に上がる前に読みたい木陰の物語」全二十話。半分ほどが初書籍化作品。お馴染みの作品とのハーモニーで、ズバリ！書名が発行趣旨。その方達に届けたい。3月には発売。お楽しみに。



1/29

一つ仕事を終えて、確定申告の為の帳簿に手をつけ始めた。ヨシヨシと自分を褒めておいて、夜はこれ。ダイアン・キートンはずうーっと昔から好きな女優さん。いい歳の取り方をして、気持ちの良い役を軽やかに。歩いてるだけでかっこいい。



1/30

土曜の朝、又寒いなあと思ったら、窓の外はうつすら雪景色。滋賀県の大津は現在摂氏2度。しばらく暖かかったので、寒く感じる。朝から読書のお供は、バナナと人参のスムージー。そして残ったバナナ。どんだけー！



1/30

こういう映画に出会うために、あれこれ見ているんだなあと思った。第二次世界大戦直後、イギリス海峡の島。そこの人々は、戦時中に受けた心の傷を引きずっていた...こう書かれたコピーに引き寄せられてビンゴ！の夜更かし映画会だった。さあ、寝よう。





映画「アース アメイジングデイ」を観ていたら、ナレーションに掴まれた。アフリカの諺「早く行きたければ、一人でゆけ。遠くに行きたければ、みんなでゆけ」同じことを思ってきた。

だから同時に「連帯を求めて、孤立を恐れず」にもうなづいてきた。近年やっと、みんなで行ける仲間ができた気がする。



2/1

連日の夜更かし映画会。狙いを定めてこれ！いい勘かなと思ったのに、それほどでもなかった。なんだろう、見たい感じは、こういうのではないんだよね。



2/2

十日かけてゆっくり読んだ。手にした時想像した映画的なものより、ずっと文学寄りの素晴らしい読書になった。誰もスッキリはさせて貰えない。子供っぽい白黒で出来事を語らない。フィクションゆえの強さだろう。現実は多分、根気がないからハッキリしたがるのだ。人はそれより長く生きる。



確定申告の帳簿整理をしている。昨年6、7月頃からこういった日常生活の買い物レシートが多く紛れ込んでいる。妻が入院、自宅療養生活に入ったからだ。まだそれなりに元気だったので、「余命一年かあ」と、時々夕空を見上げていた頃だ。8月に亡くなってしまうなんて思ってもみなかった。

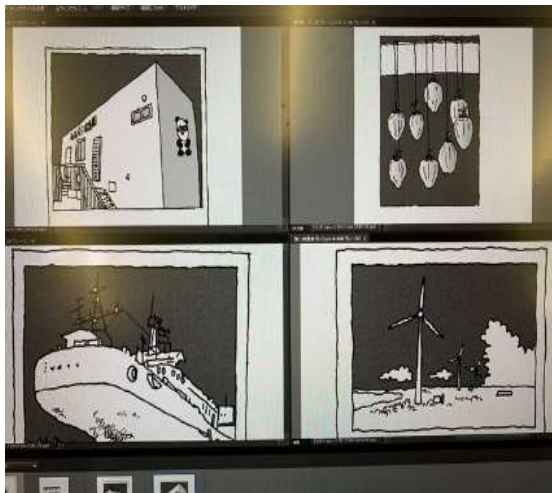


2/4

進行中の作業は、確定申告の準備。70%くらいできたかな。やはり去年、特に後半は売り上げ？がガクッと落ちている。

依頼されて書籍の挿絵を二十数枚描くことに決定。まだ三分の一くらいだが、漫画寄りではな

い描き方を選んだ。こういうやり方もちょっと楽しい。



2/5

zoom 家族理解講座の3回目。久しぶりにネクタイを試してみた。だいぶ慣れてきて、落ち着いて話せるようになってきた気がする。

中身は相変わらずで、想像つくでしょう。来週末はトークライブの第3回目。申し込みが100人を超えて締め切ったらしい。



2/6

週末、かかりきっているイラスト作業。BGMは神田伯山の講談。それも通し読みで「畔倉重四郎十九席」。なかなかの聞き応え。こんなに楽しく聴けるとは。小説「剣客商売」もだが、このところ時代物にはまっている。



2/6

定期購読しているキネマ旬報が届いた。今号は邦画、洋画の年間ベストテンが発表されている。リストに観たものチェックしていくのが恒例の習慣だ。しかし今年、びっくりするぐらい観た作品が少ない。これではもう映画ファンとは言えないなあ。ガッカリしてしまった。



2/8

三時間半かぁ・・・と躊躇はあった。でも、どこかで観ておきたいと何度も思った「アイリッシュマン」を、今夜こそとNetflixで。

良かった。観たことのある世界を、スコセッシ監督、デニーロ、パチーノ、ペシでたっぷり描く。みんなおじいさんだけど、観ている自分もそうなのだから、懐かしき映像文化。



2/9

wowow とスカパーで録画し続けたBDの映画タイトルが制御不能な数に。五～六作品収録のデ



イスクが200枚以上ある。そんな時、宮崎の読書友達W君のFacebookでこれを見た。書店で見ているような気がするがバックナンバーになった雑誌を購入。早速、ビンゴ。直ぐにも観ようと思うタイトル二つに遭遇。有難い。



全く知らない映画「COLD WAR」。細野晴臣が語る音楽センスのいい監督論という記事に登場していた作品。モノクロ映画がこんなに綺麗だとは、、、。



2/10



週末から来週にかけてスケジュールが混んでいる。だからその準備に慌ただしい。先ず事前に資料が欲しいという先の予定分を片付ける。そして週末のトーク・ライブの二席、なんて言っちゃっ

たら演芸会だね。何を喋るかおまかせメニュー承知の方が大勢。是非とも楽しんで頂かなくてはと工夫する。

2/13

第3回目のトークライブが無事終了。

現在252話になっている「木陰の物語」が雑誌で新連載になる前後、21年前に連なるさらに前の物語を第一話に。

いろいろな意味で創作者として関わってくださった上野瞭さんとの記憶を第二話に、計二時間。今回も100名あまりの参加で有難いことだ。



2/14

鮮烈な印象の「明日に向かって撃て」以来、ずっと格別だったR.レッドフォード。近年は関心が薄くなっていただけだなあと思った。俳優引退作でも、スクリーンのこちらに向かって、指鉄砲で撃っていた。相手役のシン・スパイセクも懐かしい。衝撃の怪作「キャリア」からだもの。





# 社会的養護の新展開 16

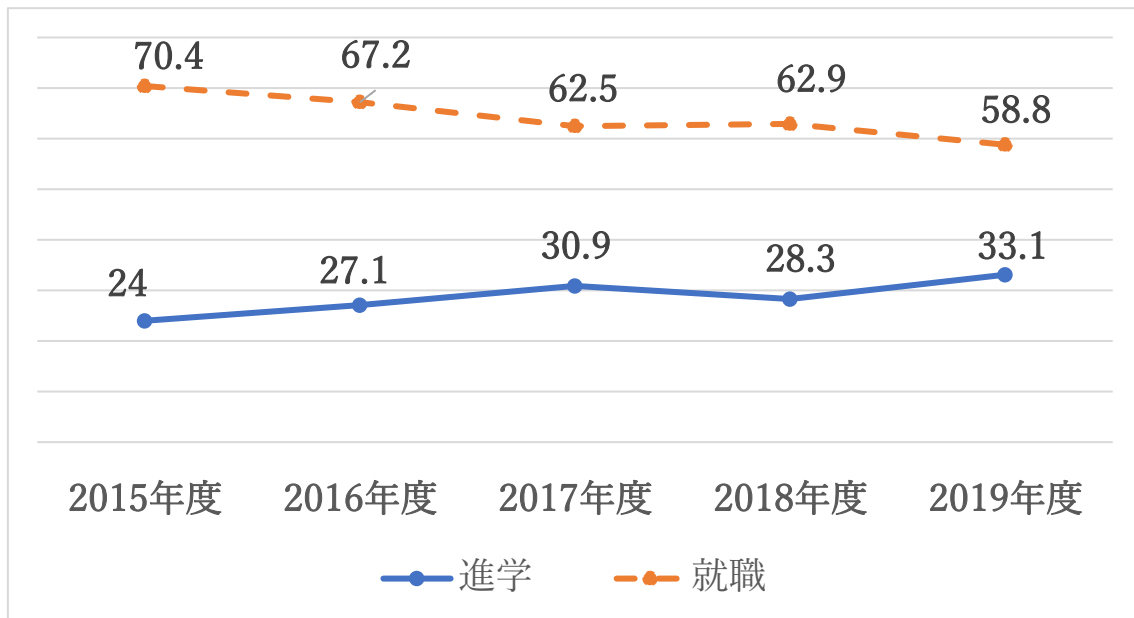
## —親と離れて暮らす子どもたちの養育とその後 4—

浦田 雅夫  
大阪成蹊大学

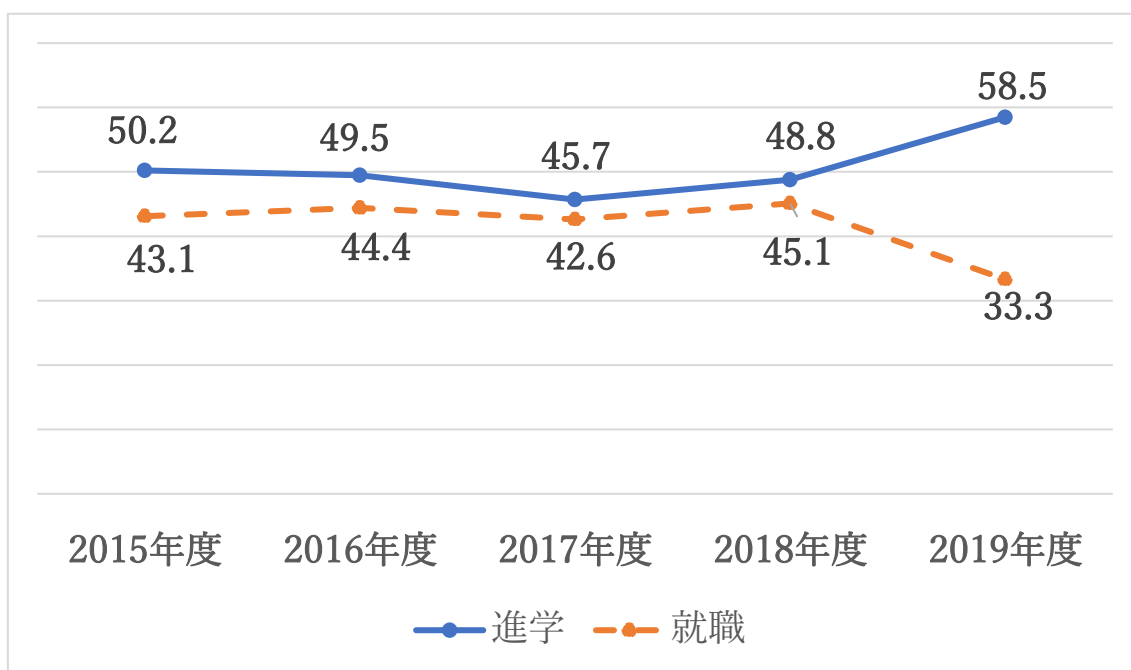
進路をめぐる、「本当に大学に行きたいの?」「借金を背負って生きていくってことをわかっているの?」「どうやって生活するの?」云々さんざん施設の職員から言われたという方は少なくない。失敗したら自己責任。「あなたのためだから」

ブローハン聡さんは自身の体験を綴った『虐待の子だった僕』(2021)のなかで施設では進路選択のなかで「ドリームキラー」な大人が多く、すごく残念であるという。「その子が『やりたい』ということにどれだけ寄りそって考えるか。子どもの選ぶ権利を尊重できる大人が増えるといいと思います。」と記す。

長年、児童養護施設から大学等へ進学する者はひろく一般の高校生と比較すると極端に少なく、ほとんどが高卒で就職をする状況であった。しかし、近年、大学等(専修学校含)へ進学する者が増加している。里親委託の場合は、さらに進学率は高くなり、就職する者よりも進学する者のほうが多くなっている。



児童養護施設における高卒後の進路割合 (%) の変化  
(厚生労働省の資料をもとに筆者作成)



里親委託児の高卒後の進路割合 (%) の変化  
 (厚生労働省の資料をもとに筆者作成)

2018年からは、本格的に日本学生支援機構の給付型奨学金制度がスタートし、さらに2020年度からは学費と生活費をトータルでサポートする「高等教育の修学支援新制度」がスタートした。また大学によっては、経済的に困窮する学生に対する経済的支援を行うところも増えてきた。これによりいままですら以上に社会的養護を終えた若者は大学等に進学する者が増えるだろう。しかし、金銭的ニーズだけではなく、複合的な課題を抱える若者に経済的支援だけでは不十分である。

「私の大学は学費の免除があることから施設の人が多いです。ですが、金銭面の管理ができずに辞めたり色々な事情をかかえ辞めた人が多くいました。私は施設の【支援コーディネーター】の方のおかげで金銭面はなんとかかなり、孤独は施設の先生が気にかけてくれたりとサポートしてくださりました。それでも、大学は施設の出身者を入れて入学者を増やしたいだけだと疑心暗鬼になりました。辞めたいと何度も思いました。でも辞めたら借金だけになると思い辛い気持ちのままです。幸いにもある素敵な大学の先生に出会ったことでその気持ちも薄まりましたが、私の心はその時の思い残ったままです。」

(令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「児童養護施設等への入所措置や里親委託等が解除された者の実態把握に関する全国調査」三菱UFJリサーチ&コンサルティング 2021年 自由記述より)

この方が指摘されるように、金銭管理は大きなテーマである。また、出身施設や大学等の進学先、アフターケア事業所等とのつながりとサポートが必要である。

「土俵際」、「崖っぷち」で戦い続けるのは辛すぎる。足を滑らせたら、奈落の底である。自己責任なのだろうか。

### 【ご案内】

対人援助学会第13回大会では、2022年1月30日（日）ブローハン聡さんをお迎えし、「ステイホームとケアリーバー〜ケアリーバーがコロナ禍の社会を生きるということ〜」というテーマでお話をさせていただきます。詳しくは以下のHPをご覧ください。

<https://www.humanservices.jp/meeting/meeting-program>

# Book

傷を負った子どもは、どのように過去を糧にし、どんな社会を思い描いて進むのか。30年分とは思えない嵐のような人生の記録。

定 価：1650円

発売日：2021年10月6日

発 行：さくら舎



amazon.co.jp



楽天ブックス



セブンネットショッピング

## 47・親子ソーラン節

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

今年も新型コロナの影響をかいくぐりながら無事に運動会を行うことができました。

コロナ以前は幼稚園と保育園が合同で「赤ちゃんからおばあちゃんまで全員で参加して」お昼のお弁当を家族で囲む楽しみも含めてのフェスティバルスタイルでしたが、年少以上の幼児種目のみ実施し、参加者は保護者と兄弟までに限定し（祖父母の皆さんごめんなさい(T-T)）午前中に終了する、というスタイルになりました。子どもたちの発達を実感していただくという目的からすれば必要最小限にコンパクト化することができて、コロナをきっかけに良い見直しとなったと考えています。

さて、その中でも新しく始めたことが「親子ソーラン節」です。

原町幼稚園では1993年から「ソーラン節」を導入しました。それまでは子どもたちの鼓笛隊（マーチング）を伝統的に披露してきたのですが、これが子どもの「やらされ感」がハンパなく発達に良い影響も無いだろうということで、私が原町にやってきて3年目に強引にソーラン節に切り替えることにしました。

ソーラン節は私が東京の幼稚園に勤めているときに覚えたもので、荒馬座という民族歌舞団の大人用ソーラン節を子ども用にアレンジして踊っていました。

<http://www.araumaza.co.jp/>

今は小学校でも「よさこいソーラン」などアップテンポな曲がよく踊られているようですが、ウチでは脇目も振らず同じものを続けてきました。そして約30年経ったので、そろそろ伝統と言っても良いのかなあ、という境地に達しています。

ソーラン節の良さについては、次頁の園便りの中に書かれていますが、毎年同じ踊りを年長児に伝えてきて、毎回子どもたちの意欲や成長が実感できるのでマンネリにならずに続けてこられたのだと思っています。

思いつきは、4年前の運動会でビデオ片手に我が子の姿を撮影するお父さん達の様子を見て「こんなにエネルギーの有り余っている父親たちのもっと有効な使い方は無いものか……。そうだ！一緒にソーラン節を踊ってもらおう！」そして、その年の運動会後に園便りに次のような文書を書いて『予告』しました。





親子ソーラン節の実施を予感させる手紙を1年前に発出。この時点では自分でもまだ迷っている状態でした。(^^)

## ソーラン節・新しいステージへ

ソーラン節とのつき合いがこんなに長くなるとは思ってもみなかった。東京で幼稚園に就職するときの採用試験で踊らされたのが一番最初だった。第一次ディスコブームのまただ中に思春期だった僕は「洋楽じゃなくて民謡で踊るなんてダサイじゃん！」ってノリで、イヤイヤ踊っていた。それが年長を担任したときソーラン節の素晴らしさに目覚めたのだ。マスゲームのようにみんなで揃えることが目的ではなく、個々が自分の踊りを完成させることに力を注ぎ、それが群れになって踊ることによって見ている人にも力強さを演出できる！なによりクラスの子どもたちがソーラン節によって成長したり、自信を持ったりした経験が僕の認識を変えた。

原町幼稚園でも、僕が赴任してきた翌年に運動会の花形だった鼓笛をやめてソーラン節に取り組んだのが26年前だから、いま32歳以下の卒園生はソーラン節の経験があるということで、ずいぶんな歴史になったなあ、と感慨深い。

運動会の花形はなんといっても年長だ。年中少以下の組ではその年齢ごとに達成する「ねらい」はあるが最終的には年長につなげるための布石ともいえる。例えば年少組のリズムは、みんなで曲に合わせて楽しく人前で動く事ができればそれでよし、次に年中組になって花笠音頭を踊るが、年長に比べれば単純な振り付けを繰り返し踊ることで、民謡のリズムに合わせてたり足腰を鍛えていくことがねらいで、最終的に翌年のソーラン節につながってくる。年長組では、人前で踊ることの楽しさや合わせることを知った上で鍛えられた足腰を使って、より複雑な動きでソーラン節のストーリーを表現することができる。今のところこれに代わるものは思い付かない。

さて今年の運動会が終わって、**この素晴らしいソーラン節という活動をより高みに持っていけないものか**、つらつら考えていた。

運動会本番に、ビデオ片手に本部席の前で一生懸命撮影して下さるのはお父さん方が多い。まだ若くエネルギーも満ちているお父さんたちが、見て撮影だけとはもったいない、と思ったのだ。我が子の活躍を観覧することと、我が子と一緒に経験をすること、これを比較したとき、後者のほうが勝ると確信した。

人が尤もものを覚えるのは「人に教えた時」である。子供が教える立場になっても効果が高い。それに何より一緒に同じことに取り組むと言う事は、親子であってもありそうでなかなか無かったりする。それだけにかげがえのない体験になるだろう。

厄介だなと思うことを乗り越えた時に感じる喜びを親子で味わい、家族の行事の折にふれて踊ったり、成長した我が子と一緒に踊ったり、少なくとも「一緒に頑張ったよなあ〜」という体験は残るわけで、**二人の間にソーラン節という絆が生まれることを願いたい**。どんなふうに具体的に進めるのかは今後職員とも相談していかねばならないが、今のところ実現したいと思っている。

(2018年11月 園便りより)

## ソーラン節やります！

翌年6月にはこの園便りで、自分の腹も決まり「やる！」ということを告知しています。こうして1年越しの思惑は動き出したのです。

昨年の園便り11月号に「ソーラン節・新しいステージへ」という文章を載せましたが、年長の皆さん（昨年は年中組だったので気にもしていなかったでしょうが）覚えていらっしゃるでしょうか？ いよいよそのときが近づいてきました。

そうなんです、今年のソーラン節はお父さん方も踊って頂きます。原町でソーラン節を踊り続けて26年、初の試みとなります。「なんだよ一面倒くさいことになっちゃったなあ」「よしてくれー」っていう声もあるでしょう。(^^;)カカ双…

5/28日に起こった川崎市登戸駅付近の路上で起きた殺傷事件。ひきこもりで孤立した51歳男が包丁で次々と通行人やバス待ちの小学生を刺して自殺した。この事件に日本中が大きな衝撃を受け、全国で60万人とも100万人とも言われる大人のひきこもりの人たちにも大きな波紋が広がった。

僕も子どもたちを守ることに、育てることの両方で考えさせられた。

この犯人は小さい頃に両親が離婚し叔父の家に引き取られ育成環境もよくなかったようだが、子どもの頃はきっとかわいい時代があったはずだ。成長していく過程で世間への敵対心が醸成されていったということだろうか。今後専門家の皆さんが分析をして、推測は出してくれるだろうけど本当のところはわからない。本人が生きていたとしても分からないかもしれない。とにかく家族や世間との関係を良好に保つことは大事だよ！ってことは日本中が感じたはずだ。

そこで、「なんでソーラン節なの?!」ってところですが、親子の繋がり（絆と言うべきか）を考えたときに、「絆を深めることがだいじ！」っていうのは誰でも言えることだけど、じゃあなにをしたら絆が深まるの？、と聞かれたとき何を思い浮かべるでしょう。家族の団らん、思いやり、一緒にあそぶ、家族でお出かけをする、スポーツの応援をするなどいくつか思いつくでしょう。どれも大事なことです。さらにレベルアップして我が子と趣味を共有できたというステキなケースもあるでしょう。でもなんだかふわふわしていてコレだ！という核心的なものではない。それに大人の側からのアプローチなので、ほんとに子どもに気持ちが醸成されているのかどうかは定かではないし、大人の自己満足に終わることもあるだろう。

しかし、実際のところ、そんなところで十分家族の絆を感じられる人が大半なのだと思います。

そこに…お節介なことかもしれませんが…

『親子ソーラン節を運動会で発表する』というミッションも加えて欲しいのです。

親子関係って、大人が子どもに教えたり伝えたりすることが圧倒的に多い。それは当然なんですけど、子どもの側から「教える・伝える」というスタンスで家族に関わっていくことを促し、受け止めてもらい、作り上げた喜びを味わって欲しいし、より一層関係を深めて欲しいと願っています。

子どもとの関係ってずーっとうまくいくとは限らない。趣味を共有している親子だって子どもの成長につれてギクシャクする時もある。そんなときでも、確かに「一緒にやった！」ってことを思い出すだけでもいいじゃないですか。ぜひ、このミッションをコンプリートして、将来生きてくるかもしれない大切な絆を一本作ってほしい。頑張ってください！

最後に、なぜお父さんにターゲットを向けたかという点、お母さんは子どもとの関係性において、一歩も二歩もリードしている家庭が多いからです。お父さんがいらっしゃる方はお母さんでも家族でも結構、同じ効果を得られると思います。（2019年6月園便りより）

手紙にも書いてあるとおり、父親達のソーラン節は、我が子から「踊りを教わる」というところが肝心なところで、園からは動画などの“資料”は出さず、踊り方の書いたお手紙と、YouTubeにUPした音楽のみで各自自主練習していただくこととなっています。

### 子どもが教える。子どもに教わる。

これがいろんな意味で教育的効果が高いわけです。しかも教わった結果をみんなの前で披露するという「舞台」も整っているので親子の姿勢も問われてきて、いい加減にスルーすれば「チカラ抜いたな！」という評価を甘んじて受けねばなりません。

実施初年度、母親たちからは絶賛されていましたが肝心の父親達はまだまだ重い腰が上がりませんでした。

今年、実施3年目の園  
便りは「やるもんだ！」前提  
でシンプル、かつ理屈で押し  
ております(^\_^)

仕事から帰ってから練習ってキツイ。  
子どもがしっかり覚えてきてくれない。  
ナンデこんなことやらされるのか。  
などの悲鳴が聞こえてきていました。  
それでも、我が子の担任から「がんばってください♡」と言われればやらざるを得ないので  
す。(^-^)

そして今年は3年目、コンセプトが良かったのか素晴らしいスピードで親子ソーラン節は定着し、踊りのレベルも評価も上がって参りました。多少強引でも、園が良いと思うことはやってみる価値があるものだと改めて思ったのであります。

## 親子ソーラン節に向けて

2021.10.1.原町幼稚園 園長 鶴谷主一

ソーラン節の練習は進んでいますか？ここでもう一度、親子ソーラン節の目的を確認しておきましょう。子どもたちが親に伝え教えるという経験を楽しく一生懸命にやる(←ここがキモです)ことで、幼児期に育てねばならない「非認知能力」の中の対人関係や、グリットと言われるやり遂げる力を伸ばすこと、親が踊れるようになってくることで自己肯定感・自己効力感がアップすることも目的としています。ただ単に踊りを覚えることが目的では無く、お子さんから伝えてもらうことを真剣に受け止めて(踊りの上手下手はおいといいて)同じ目標を持って努力することがだいじです。運動会が終わった後に『親子関係が以前より深まったね!』という結果が出れば嬉しい限りです。(後略)

## ソーラン節

1番  
やーれんそーらん そーらんそーらん やれんそーらん はいはい！  
おとこどきょうは ごしやくのからだ  
どんとのりだせ なみのうえ  
ちよい やさ えーえんやーさーのー どっこいしょ  
はーどっこいしょ どっこいしょ

2番  
やーれんそーらん そーらんそーらん やれんそーらん はいはい！  
ふねもあたらし のりても わかい  
いちじょうごしやくのろもしなる  
ちよい やさ えーえんやーさーのー どっこいしょ  
はーどっこいしょ どっこいしょ

3番  
やーれんそーらん そーらんそーらん  
やれんそーらん はいはい！  
にしんきたかと がもめにとえば  
わたしやたつとり なみにきけ  
ちよい やさ えーえんやーさーのー  
どっこいしょ  
はーどっこいしょ どっこいしょ

※4番は1番の振りで踊ります





今年の運動会が終わって、年長組保護者の、主に母親からいただいた感想からソーラン節に関するものをご紹介します。こういう生の声に成果を感じます。

保育園母

パパとのソーラン節

の練習も毎日欠かさずに、多い日には一度に10回以上踊っていました。息子の教えかたがなかなか上手で思わず笑ってしまうほどでした(笑)

保育園母  
年長1番の見せ場  
であるソーラン  
節。

落ちこぼれ生徒(パパ)に熱血指導をしつつ、本人も細かい動きを何度も確認しながら家で練習をしていました。練習の甲斐もあり、皆んなの動きが揃っていて迫力があって子供達の成長を感じながら少しウルッとしてしまいました。

幼稚園母

ソーラン節は直前に息子から夫への最終チェックがあり、いろいろダメ出しをしていましたが、なんとか納得したようです。

保育園母

ソーラン節も振り付けを何度も確認私にももう1回やり

と、かなりスパルタで教えてくれましたw関係の無い2番3番までやらされましたw練習の成果もちゃんと出せたソーラン節だったと思います(^)みんなとても上手だった♪そして周りのお父さんお母さんが上手すぎて私もちゃんとやっつけば良かったと反省笑

幼稚園母

筋トレを真面目に

ながら「手はこうかな？」  
「足はこっちを先に出すんだ」とコツコツと練習していました。

パパとの親子ソーランは、2人とも腰も低く、大きな声ですが親子！！とパパも最高の思い出ができたと喜んでいました。

保育園母

お父さんと一緒に踊るその瞬間は息子が最も待ち望んでいたものでした。そして、終わりは壮観で感動的でした！

保育園母

16年間保育園に通った記憶

が走馬灯のように蘇ってきました。とくに運動会は我が家にとって思い出の強いイベントです。(中略)ソーラン節では表情が一変し、普段のおちゃらけは全く無くカッコいい漁師の子どもみたくでした。初めての親子ソーランは「ちがう！ここはこう！」と父に教えている姿に成長を感じ、父も共演できることを「幸せなこと」としみじみ。並ぶ位置が最前列センターと分かり「完璧に踊れるようにがんばる！」と全力の父のソーラン節は大爆笑となりました。

何かがおかしい！？

幼稚園母

特にソーラン節は

小さな頃は引っ込

み思案で恥ずかしがり屋さんの娘があんな逞しい表情でしっかりと踊ってくれた事、そして私に毎日踊りを教えてくれた事に頼もしさを感じてしまいました。

親子共々良い経験をさせて頂きました。

ソーラン節に取り組んでみようという方がいたらご連絡ください。振り付けのプリントをお送りします。(^^)/





原町幼稚園 園長 鶴谷主一（60歳）  
 HP : <http://www.haramachi-ki.ed.jp/>  
 MAIL : office@haramachi-ki.jp  
 Twitter : @haramachikinder  
 Instagram : haramachi.k

▶ご感想・ご意見ご質問等ありましたら  
 気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- |   |   |
|---|---|
| <p>第1号 エピソード (2010.06)</p> <p>第2号 園児募集の時期 (2010.10)</p> <p>第3号 幼保一体化第 (2010.12)</p> <p>第4号 障害児の入園について (2011.03)</p> <p>第5号 幼稚園の求活 (2011.06)</p> <p>第6号 幼稚園の夏休み (2011.09)</p> <p>第7号 怪我の対応 (2011.12)</p> <p>第8号 どうする保護者会? (2012.03)</p> <p>第9号 おやこんぼ (2012.06)</p> <p>第10号 これは、いじめ? (2012.09)</p> <p>第11号 イブニング保育 (2012.12)</p> <p>第12号 ことばのカリキュラム (2013.03)</p> <p>第13号 日除けの作り方 (2013.06)</p> <p>第14号 避難訓練 (2013.09)</p> <p>第15号 子ども子育て支援新制度を考える</p> <p>第16号 教育実習について (2014.03)</p> <p>第17号 自由参観 (2014.06)</p> <p>第18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09)</p> <p>第19号 こんな誕生会はいかが? (2014.12)</p> <p>第20号 ITと幼児教育 (2015.03)</p> <p>第21号 楽しく運動能力アップ (2015.06)</p> <p>第22号 〔休載〕</p> | <p>第23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12) 2019</p> <p>第24号 お話あそび会その1 (発表会の意味)</p> <p>第25号 お話あそび会その2 (取り組み実践)</p> <p>第26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える)</p> <p>第27号 おもちゃのかえっこ (2016.12)</p> <p>第28号 月刊園便り「はらっば」 (2017.03)</p> <p>第29号 石ころギャラリー (2017.06)</p> <p>第30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09</p> <p>第31号 幼稚園の音楽教育 (その2・こどものうた) 2017.12</p> <p>第32号 幼稚園の音楽教育 (その3・コード奏法) 2018.03</p> <p>第33号 〔休載〕 (2018.06)</p> <p>第34号 働き方改革・一つの指針 (2018.09)</p> <p>第35号 働き方改革って難しい (2018.12)</p> <p>第36号 満3歳児保育について (2019.03)</p> <p>第37号 満3歳児保育・その2 (2019.06)</p> <p>第38号 プールができなくなる!?! (2019.09)</p> <p>第39号 跳び箱 (2019.12)</p> <p>第40号 幼稚園にある便利な道具 (紙を切る) (2020.03)</p> <p>第41号 コロナ休園 (2020.06)</p> <p>第42号 コロナ休園から再開へ (2020.09)</p> <p>第43号 ティーチャーチェンジ (2020.12)</p> <p>第44号 除菌あれこれやってみた (2021.03)</p> <p>第45号 マスクと表情 (2021.06)</p> <p>第46号 感染予防と情報発信 (2021.09)</p> <p>第47号 親子ソーラン節 (2021.12)</p> |
|---|---|



福祉系

対人援助職養成の

現場から<sup>④7</sup>

西川 友理

#### 実習目標と実習計画表

社会福祉士実習でも、保育士実習でも、学生たちは実習前に、自分なりの実習目標と実習計画を立てます。実習計画についてはこの連載にもたびたび書いています。実習目標を考え、実習計画表を作成する過程で、学生のその専門職に対する価値観がどんどん明確になっていくので、私はこのプロセスを大事にしたいと考えています。実習目標を立てるところから、実習は始まっ

ていると言ってもいいくらいです。

さて、がんばって考えた実習目標と、それを達成するための実習計画表を学生が持ってきました。

気合の入った実習計画、チェックするこちらにも熱が入ります。皆、自分のしたいことと、実習先で出来る事、国のカリキュラムとしてやるべきこと、この3つを織り交ぜて実習目標を立て、これを達成させるためにどうすればいいのか、一生懸命考えて、

自分なりの実習計画表を作成しています。  
しかし、中にはうーん惜しい、もうちょっと何とかならないかなあ…という実習目標を学生もいます。

“利用者にとって最善の利益になるような支援をする” “利用者のニーズに沿った支援計画を立てる”

…うーん？

「ダメですか？」

「意気込みは素敵なんだけど、あなたは実習生だから“支援をする立場”じゃないからね…支援をするのも支援計画を立てるのも職員の仕事なんですよ、実習生の仕事やないの。」

えー、支援出来ないなら何しに行くの、とでも言いたげな不服そうな学生です。

“利用者とのかけがえのない関係性を構築する” “利用者との信頼関係を深める”

…何のために？

「え。何のためって、そりゃあ、信頼関係を構築するのは支援の基本だと思うから…。」

「利用者さんにとって、限られた期間しかない人と関係性を深める意味は何？すぐにお別れしちゃうのに？」

あー、確かに…そっか…と落ち込む学生です。

“現場の役に立つような働きをする” “保育者の仕事のお手伝いをする”

…いや待って待って！

「お世話になるのだから、実習先の役に立たないと、と思って…。」

「いや、実習先の役に立ちに行く必要ないから！そりゃ、実習先でお掃除やお洗濯を

することもあるだろうけど、実習先の役に立つためにそれをするんじゃないですよ。」

ええっと、じゃあ実習生は現場で何をやるんですか…と顔が？マークの学生です。

これらの学生に伝えることは1つ、共通しています。

「実習生は仕事に行っているわけでも、友達になりにいってるわけでも、アルバイトやボランティアにいってるわけでもなくて、勉強しに行ってるの！」

「それを考えると、実習目標は「～を学ぶ」「～の技術を習得する」といったものになるんじゃないの？ちょっとの間、その場にお邪魔して、学ばせていただく人としての態度ってのがあるんじゃないの？」

そう伝えたと、学生たちはそうかあ、なるほどねえ、という顔をして、再び実習目標を練り直します。

実習目標や実習計画書について、私は長年そうやって教えてきました。それで済んでいました。ほんの最近までは。

しかし、最近この自分の姿勢に疑問が生じてきました。

## 実習生という不思議な立場

基本的には考え方は変わっていません。実習生は教えを乞う人であり勉強しに行くであり、技術の習得を目指す人です。でも、本当にそれだけでしょうか。

実習生は支援したり相談に乗ったりしてはいけないだろうか、と言われれば、専門職ではないので、良いことではないと思います。そもそもその専門的な方法を学んで

いる最中で、無責任にも支援をすることはいけないことだとも言えます。実習はお金を払ってピアノやお花やスイミングを習うように、実習費を支払って、現場に勉強させていただきに伺うものです。

しかし、例えば一回の実習で、短ければ保育士の実習で10日間、長ければ社会福祉士の実習で1か月、利用者の方や職員の方と、同じ空間で、同じ時間を共有するのです。一緒に過ごす中で、関係性や相互作用は自然にできてくるのではないのでしょうか。また、そこが利用者にとっての生活施設ならばなおさらです。実習生はもちろん、職員も、そして利用者も、お互いが気を使いあい、譲歩して、なんとなく思いやって、あるいは八つ当たりをして、ぶつかって、甘えて、腹を立てあい、笑いあい、気ますぐなり、お互いが自分の「生活の場」であるように、その空間を作ります。

そんな場で過ごす実習生を「教育のために、そこにいつとき存在するだけなのだから」とそこにいるという影響自体を無視していいものなのでしょうか。

現場の邪魔にならないように 支援の妨げにならないように、現場には現場の支援計画や保育計画に基づいたかかわりがあるのだから、そこに裨差するようなことは避けて、礼儀正しく、慎ましく。一方で、自分から何か出来ることはないか考えて、明るく、積極的に、さっさと動いて、色々と質問し、考えを深めて、覚えて、知って、学ぶ。そして、実習契約期間満了時には、そこにいた形跡を残さず、サラッといなくなる。実習生にはなかなか高度な社会性が求められます。

誰が求めているのか？…養成校が、現場が、求めます。そしてそれを受け、学生自

身が自分自身に「そうあらねばならぬ」と求めます。

…最近、長年そのような講義をしてきた自分が、とても不自然なことを実習生に課している気がし始めています。

## 実習生に求められることは

昔関わった学生が、

「実習の時の俺のメンタリティってさ…彼女の実家に初めて行って、彼女の家族と居間で過ごしている時に、たまたま彼女がトイレとか行って、で、その場にいなくなって、なんとなく彼女の家族メンバーから品定めされているような、お手伝いの一つもしなきゃみたいな、そんな気分になっている時の俺…ってというのが、一番近い。」

と言っていたことがあり、確かに！とクラスみんなで笑って盛り上がったことがありました。

その時は笑い話にしていましたが、実はそのたとえ話はなかなか秀逸ではないか、と思うのです。

人間関係をおそろおそろ始める時は、実習生だけでなく、利用者や職員だって同じように「この人はどんな人かな」「どういう距離感で接したらいいかな」と考えるのではないのでしょうか。つまり、「実習生が現場に」どうかかわるか、というよりも、「実習生と現場が」どうかかわっていくか、という相互作用が発生するものです。

彼女の家のお父さんやお母さんにどう見られているか、どうか関わろうか、と考えている時に、彼女のお父さんやお母さんも、どう話しかけようか、どう接しようかと考えているのと同じように、です。



## 「伴走型支援」が注目される中で…

近年、厚生労働省は、対人支援において今後求められるアプローチとして具体的な課題解決を目的とするアプローチである「問題解決型支援」と、繋がり続けることを目的とする「伴走型支援」が大切だという見解を示しています。前者は「本人が有する特定の課題を解決することを目的とする支援」です。後者は「暮らし全体と人生の時間軸をとらえ、本人と支援者が継続的につながり関わるための支援」です。

長年、対人援助の支援というのは、「問題解決型支援」が中心でしたが、ここ10年ほどの間に「伴走型支援」の重要性が非常に注目されてきました。

この動きを背景に、支援者は「利用者に対して何をするか」だけでなく「利用者とともにどう居るか」ということを今までよりも意識せざるを得ません。それが、今までの私の中にあった「実習生像」をじわじわ侵食してきています。

### 実習指導の方向性

以前は実習直前の学生たちに息巻いて、「実習生は勉強させて頂きに行く人なんですよ！」

「支援をしにいくんやないよ！おこがましくも支援しにいこうと思ったらあかんよ！」

「でも行動としては積極的にいくんですよ！ちゃんと自分からガンガン質問しに行くし、現場のお手伝いも率先してやるねん

で！」

そう言っていたのが、最近何だか恥ずかしくなってきました。

今は、大体こんな感じです。

「実習生は勉強させて頂きに行く人です」  
「支援をしに行くわけではない、現場を荒らしに行く人でもない、んだけど…気づかぬうちに、支援になっている可能性もあるかもしれない。逆に何かの妨げになる可能性もあるかもしれない。その支援の場の性質によって、あなたがどう作用するか、今の私にはわかりません。」

「でも、少なくとも、倫理綱領や法律を勉強しましたよね。何がやったらあかんことか、何が大事なことなのか、もう知ってるよね。」

(と聞くと、頷く学生たち。)

「それに、現場の妨げになりたいと思っ  
ていかないでしょ。支援の邪魔をしたいと思  
わないでしょ。出来れば、利用者さんとも、  
職員さんとも、そしてあなた自身も、機嫌  
よく過ごしたいと思っているでしょ。」

(と聞くと、さらに大きく頷く学生たち。)

「それでも、変なことしていたら、あなた  
の常識と現場の常識が違っていたら、“ヘン  
やな、おかしいな”と思われるような行動  
をしていたら、多分、職員さんや利用者さ  
んが指摘して、教えてくださるんじゃない  
かしら。」

すると学生が言います。

「ヘンやで、とか、おかしいで、と指摘さ  
れたら嫌ですやん。指摘されへんようにど  
うしたらいいか教えてくださいよ。」

ううむ、と頭をひねる私です。

「うーん、でも、何がヘンでおかしいこと

になるのか、厳密には私もわからへんもの。それで指摘されるのが、一番の勉強になるんやないかなあ。学生の中に、実習で、いっぱい失敗しに行くんやで。それだって、失敗したいと思ってやることなんてないでしょう。ヘンなこと、おかしいことをしたいと思ってやっているわけじゃないでしょう。倫理綱領や法律をしっかり勉強した上で、正しいこと、よいこと、あるいは、こうするしかしゃあない、と思ってやるでしょう。だったらめったに酷いことにはならないでしょう。」

「専門職として、実習生として、というより、そこに一定期間、勉強のために入らせていただく人として、どのようにそこにいるのか。たぶんそれもまた、専門職という社会人になる勉強じゃないかなあ。」

「大丈夫、実習は養成校と現場の契約でやってるねんしな。責任は、養成校が取るから。思い切り勉強してきて、ヘンなのかお

かしいのか正しいのかいいことなのか、自分で考えてきてくださいよ。そんでいっしょに考えよう。」

## 実習指導のあり方の変化

誰かと共にあるとはどういうことか。それを、実習でどのように感じ、考え、学生なりに得てくるのか。そんなこと、10年前には実習指導の最中に考えもしていませんでした。最近の自分の実習指導のスタイルがかわりつつあります。

それにしても、年を経るにつれて、学生に対して断定的に「こうしてきなさい」ということがどんどん言えなくなって、「わかんないや、一緒に考えよう」と言う割合がどんどん増えていきます。

その方が、学生も私も地に足がついた学びが出来る気がしてきています。

# ああ、相談業務

## ～弥生ちゃんの話～

7

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

### 弥生さん家族

弥生さんの家族構成は、弥生さん 33 歳、夫 41 歳、長男 4 歳、長女 1 歳の四大家族。弥生さんは専業主婦、夫は会社員、長男と長女は集団には入っていなかった。家は、民間のアパートで、夫の転勤に伴い道東から転勤してきた。

### 相談の始まり

弥生さんと関わるようになったのは、保健師さんの連絡からである。転入でもあり、下の子の検診の案内ということで母親と話したときに、長男も 3 歳児検診を受けておらず、母親の様子も、長男の様子も気になったということで、家庭児童相談員につないだということであった。

保健師に言われて、相談窓口にいらした弥生さんは、1 歳の長女を負いひもで背負い、長男にアレコレ大声で注意をしており、疲れ切った表情であった。

まずは相談室でお話を聴くことにした。

### この家庭の情報

弥生さんご自身は 3 人兄弟の真ん中で、お兄さんと弟がいて、それぞれ遠方で働いているようだが、連絡も取っていないとのことだった。父母も遠方に住んで二人とも働いているが、弥生さんは父母との関係を断っており、連絡を取っていないそうだ。三人兄弟の中で、「女の子であることで、ひどい扱いを受けていた」ということであった。家の中の事を手伝わされたが、上手くできなくて、度々母親にどやされたり叩かれたりしていたという。高校も行かせてもらえず、家の手伝いを叩かれながらやらされることに耐えられず、19 の時に家出をして、最初は水商売で働こうとしたがうまくいかず、路頭に迷っていた時に、親切的な食堂で住み込みバイトとして雇ってもらった。前時代的であるが、地域によっては男子ばかりが大事にされ、女子は家事手伝いとしか扱われないという家が、まだある。弥生さんの実家もど

うもそういう家のようなだった。

夫とは、弥生さんが食堂でアルバイトをしていた時に知り合って付き合い、すぐ妊娠したため結婚した。夫は本州の出身で、兄弟が沢山いるらしいが、よく知らないとのこと。夫方の両親は本州で健在だが、結婚のときも会っていない。どうやら結婚に反対だったらしい。それでも孫が生まれる時は、夫が両親に伝えたようで、産後の扱いに義母が来て一週間ほどいてくれた。長女の出産時も、手伝いに来てくれたそうだ。弥生さんは義母が来てくれたことが嬉しかったと言っていた。ご飯を作ってもらえるだけでも助かったし、二人目を出産した時は、長男の対応が大変で、義母の存在は大きかったと話していた。

夫は朝 6 時半に出て帰宅は 20 時過ぎ。土日は休みだが、休みの日はほとんど寝ているか、パチンコに出かけるなどで、家事、育児の協力はあまり得られないとのことであった。

## 相談経過

面談を通じて、弥生さんの知的な問題と、夫の対応、そして弥生さん自身の壮絶な過去がわかってきた。

弥生さんの話では、夫は暴言がひどく、暴力も振るってくるという。昨日も背中を殴られたというので、相談室で背中を見せてもらった。すると、殴られた痣が一つあるにはあったが、それよりも、細長い跡が腰のあたりに何本もあるのが目立った。それは新しい傷ではなく、焦げ茶色に変色した、古い傷跡であった。

殴られた跡は少し赤くなっている感じで、DV の証拠である。しかし、古い傷は何なのかと聞いてみると、子どものころおねしょやおもらしのたびに、焼き火鉢を充てられたと言っていた。つまり折檻の跡である。今であれば虐待で保護されたであろう人である。

なぜ夫に殴られることになったのかを確認すると、料理が出来ないことを責められたことから喧嘩になったという。子どもが二人いて、一人で大変なのだろうなと思っていたため、そういう意味で料理が手抜きになっているのかなと聞いてみると、そうではなく、分量を上手く図ることができないため、カレーだと 1 週間分になるほど大鍋でたっぷり作ってしまい、その結果余ったものが腐ってしまうとのことであった。

子どもたちの食事も、作るというより買ってくる形で、夫にしてみれば、家事もろくにできないし、お金の使い方も無駄遣いが多く腹が立つという事のようにであった。弥生さんは自分が悪いのだがと言いつつ、できないものは仕方がないと居直っている。

子どもたちはといえば、長男は多動で指示が通りづらかったので発達検査を勧めた。長女についてはまだ小さいので、今のところ大きな発達の問題はなさそうである。弥生さん自身も長男の扱いに困っていたこともあり、発達検査を受けることは直ぐに承諾したので、予約を調整した。おそらく、しっかり養育されてこなかったからではと思ったが、発達検査を受けておくと安心である。今までどうして検診などを受けてこなかったのかを尋ねると、「面倒だったから」と話していた。

弥生さんについては、どうしたいかを確認すると、子育ても、家事もしたくないという。責められたり殴られたりするのでは、夫とも離れたいと。シェルターに逃げることもできるが、子どもたちを置いていくわけにはいかない。当時は夫婦喧嘩で暴力があったとしても、子どもたちの保護には至っていなかった。

さて、どうするか？実家に帰ることを提案しても、弥生さんはかたくなに拒否をした。実家の両親との関係が悪いのは、背中の傷からもなんとなく納得できた。「旦那様と話したい」と伝え、それは構わないというので、夫と話をすることにした。行先などが決まるまでど



うするかと尋ねると、それまでは家で何とか頑張るといふ。カレーを作ったら毎日一回は火を入れないとすぐにいたむなど、伝えられることを伝えて、何かあったらすぐ連絡をもらうよう伝えて、一度家に帰ってもらった。

数日後、夫に来てもらって話を聞いた。夫からは、子どもが一人の時は、まだ何とか夫が手伝うことでできたこともあったが、二人になってからは、家を片付けない、子どもたちの躰もできない、食事も作らない、作れるものが限られていて、カレー、シチュー、鍋くらいで、用意した野菜をすべて使い切るので、量が半端ない、その結果半分は腐らせて捨てることになるとのこと。結婚したは良いが、妻としても母親としても落第なので、離婚して子どもたちは引き取りたいと話していた。叩いたり暴言を吐いたりすることについては反省していたが、我慢しきれないのだと。

双方の話を聴くと、弥生さんは子育ても家事もしたくない、夫と別れたいと言っているし、夫は弥生さんと別れて、子どもたちを引き取りたいと言っているので、争いはないわけである。

弥生さんは子どもたちと別れて大丈夫なのか？支援を入れて一緒に過ごすことは考えないか？家族としてこのままの形を維持できないか？何度も確認した。夫にも、何とか今の形を続けることは無理なのかを確認した。しかし二人の意志は強かった。そうであるなら、夫は子どもたちを引き取って、どのように子育てをするのか、育てられるのかという点が問題となるし、弥生さんについては、一人になってやっていけるのかという問題がある。夫には子育てについての計画を考えてきてもらうこととし、弥生さんについては、知的レベルの確認をした方が良いのではと思い、総合相談所で検査を受けるということを提案した。

その後の数回の面談の中で、長男には発達障がい診断がつき、妹と二人を父方実家で祖父母が育てるとの案が浮上、弥生さんもこれを納得した。弥生さんについては、検査の結果

IQ52で、医師の診断も受けて、知的障害者として年金の申請をし、障がい者としてグループホームに入り、福祉制度の中で生きていくこととなった。

## まとめ

このケースはかなり前の時代背景での話だが、今このケースが相談に上がったらどういう形になるだろうか。まずは夫のDVということで、大抵は妻が警察を呼ぶだろう。この程度では逮捕まではいかないものの、子どもたちが面前DVで児童相談所に通告されるだろう。家庭児童相談員と児童相談所職員が訪問し、児童の安全を確認する。夫婦の話を聴く中で、今回と同様に子どもの発達検査の話が出るだろう。母子がシェルターや女性援助センターに避難するかもしれない。母親の知的問題にも気づいて、同様に検査となるだろうし、夫婦が今後どうするのか、子どもたちをどうするか、それからの流れはあまり変わらないかもしれない。調停で話し合いなさいとなるのかもしれない。できればいろいろな支援を入れて、何とか家族の形を維持できないかという話もするであろう。知的障害があれば、ヘルパーの活用、保育所の活用、料理についてもヘルパーと一緒に作ることで学べることもあるだろう。家族がそのまま暮らせたなら子どもたちにとっては一番である。

子どもたちと母親が離れなければならないというのは、望ましい形ではない。知的な問題を抱えながらも一生懸命子育てをしてきた母親の努力は認めるべきだし、何か支援を入れて、家族が家族として成り立つように支援するのが本来の支援だと思うのだが、このケースでは結局、母子を引き裂く形になってしまったのが残念であった。

# 生殖医療と家族援助

## ～不妊とLGBTQ～

荒木晃子

### いま一度、振り返る

前号を休み、そろそろ、連載がお約束の「対人援助学マガジン」執筆者のブラックリストに載りそうな危機感を覚えている。こんな時は、いま一度、対人援助者としての原点に回帰し、あらためて己の立ち位置を見つめなおす必要がある。「不妊」を原点に、「家族」に焦点を合わせ筆(キーボード)を進めてきた筆者が、いま、何故LGBTQにたどり着いたのか。その思考の足跡をたどり、言語化することで断片的なキーワードを関連付ける“自分なりの何か”が見えるのではないか。本稿に、その“何か”を言語化し、足跡を残したい。

今号は、前回から継続する内容ではないが、次号につなぐための点検・確認作業になるだろう。何事も、つなぎ・つながるためには、その接続部分=接点は重要で、単に原稿の連載のためでなく、思考や問題意識の関連性や共通点を探す、もしくは、何をもって、何を根拠に新たな援助の対象に思いを馳せるのか、何故新たなテーマ・新領域に入ろうとするのかを明らかにすることもある。二つの領域の接点・関連性が明確になれば、不妊とLGBTQの二つの定点に共通する家族援助の課題や問題が明らかになるのではないか。双方の当事者家族の援助体系が連動する(かもしれない)根拠も浮上すると期待している。ここでいう、二つの定点とは、不妊

当事者の家族支援と性的マイノリティ(=LGBTQ)当事者の家族形成の援助をいう。

本マガジンの創刊以降、筆者がテーマとする「生殖医療・家族援助・不妊」に加え、数年前から「性的マイノリティ・LGBTQ」の家族援助が対象として拡大した。筆者にある問題意識が「不妊当事者+LGBTQ当事者」の家族が援助対象となった。その根拠は、3つのテーマ「生殖医療・家族援助・不妊」にあることは疑う余地もない。それを明らかにする目的で、まずは本稿で言語化したい。子を望み不妊治療を選択した筆者の当事者性が、今在る問題意識の原点故に、一部、本連載の過去の編との重複をご容赦いただければと思う。

更に、振り返り過程の概要の記述に、太文字×下線が7か所あり、それぞれに番号を付記している。これらは、不妊がLGBTQの家族形成支援につながる共通の問題意識と推察した筆者の論点を示すものである。論述(論文)としては考えられない記述となるが、対人援助マガジンならではの自由さ故と捉えていただきたい。筆者の独断で、問題意識という思考の言語化の過程に必要な校定と、こちらもご容赦願いたい。

### “不妊”は、ひとことで語れない

筆者は、待ち望まれた第一子として、両親の溢れんばかりの愛情をうけ誕生したひとり

娘である。成人後は、大恋愛の末、生涯を誓い合った男性と家庭を持ち、自分がそうであったように、子に恵まれることを願った。しかし、婚姻後5年待っても①自然妊娠がかなわず、不妊治療を選択。妊娠を目指し、約5年間生殖(を)補助(する)医療施設に通院した結果、その間、妊娠率を上げるために服用・注射したホルモン剤の副作用で重篤なアレルギー反応を呈し緊急搬送。その治療のための入院中、投与した抗生物質等(特定できない)の薬剤が原因で、重篤なアナフィラキシー症状(スティーブンス・ジョンソン症候群)を発症し、今度はステロイドの投与を中心に、数か月の継続入院。退院後は、内臓以外に、粘膜、皮膚症状等、全身に覆い隠すことのできない後遺症を残し、その快復のための通院継続を余儀なくされた。子を望み医療にわが身を託した5年の歳月は、筆者の人生の通過点となり、大きな分岐点ではあったものの、決してその後の人生を決定付けるものとはならなかった。

不妊治療で始まった生殖補助医療とのかかわりは、最終的に使用薬剤の重篤な副作用の治療で終結を迎えることとなった。②一連の、我が身に起きた理不尽にも思える出来事への説明責任の矛先は、スタート地点である生殖医療施設に向かった。不妊患者が主治医を相手に、法廷で日本初の不妊治療による医療過誤訴訟の原告となった。当時、生殖医療施設を被告とした裁判は過去に判例がなく、依頼した弁護士からは「医師を患者が訴えても勝訴する見込みは皆無」と事前に伝えられていた。しかしながら、医療過誤裁判の原告である元患者が主治医を訴えるということは、裁判に勝つことのみが目的ではないように思う。③真実を知りた

い、理由を明らかにしたい、疑問を払しょくしたい—原告になった筆者の願いはこのように実にシンプルなものであった。日本の裁判は、訴えを提起した原告が証拠資料を照会し、被告の有罪を立証しなければならない。裁判官に提出するための証拠保全、原告答弁の記述書面の作成、入院・治療中の状況説明など、副作用を抱えながらの作業は5年間続き、結審を迎えたとき、原告は生殖年齢の限界を超えていた。

もし誰かに、「あなたにとって、不妊とはどのような体験ですか?」、または、「あなたの不妊体験を語ってください」と尋ねられたら、筆者は一気にここまでを語るであろう。今でも、30年前の④不妊体験をひとことで語るのは困難だと感じる、まさに本稿のような場面に遭遇することがある。

## 不妊と“家族の変化”

筆者にとって不妊とは、その原因のない体に、不妊治療を続けた結果、薬害により妊娠の可能性が皆無となった経験であった。事実関係を明らかにする目的で提訴した時点で、医療過誤訴訟の原告となった夫婦(筆者と婚姻関係にあった男性)は、5年を経て結審時は別居状態にあり、裁判の終結後、離婚に至る。結審の日、筆者は、裁判長の判決文をひとりで聴き、その場で泣いた。判決内容は、5年間支えてくださった⑤弁護士、毎回傍聴席にいた友人たちと共に喜び、分かちあった。この時の記憶は、25年を経た現在も、鮮明に残っている。また、不妊治療から医療過誤裁判の終結までの10年間を心を痛めつつ静観し、見守ってくれた今は亡き両親への感謝も決して忘れることはない。

⑥望まれて生まれ、次に産むことを願った結果、起きた出来事は、家族の誰もが望んだことではなかった。しかし結果として、家族に大きな変化をもたらしたのは事実である。子どもが生まれると、家族が増える。子が成長し、新たな家庭をつくれれば、やがて我が子を望むかもしれない。パートナーがいてもいなくても、家族は常に変化を遂げる小さなコミュニティであり、⑦変化しないことも問題となり得るのである。

えることができないのだろうか。この点も検証が必要である。

次号に続く

## 付記

不妊体験を記述した下線部分の7か所は、いま、まさに問題意識の検証が必要な個所となった。引き続き、次号からその検証作業に取り組もうと考えている。

あらためて、不妊当事者としてのキャリア？は長く、現在も生殖医療施設で不妊に悩む当事者に向き合うことを生業にしている筆者ではあるが、子を望む全てのLGBTQ当事者を理解し、彼らの家族形成を支援することを容易とは考えていない。個人の抱える問題や苦悩を、統計的に結論付けるつもりもなく、また、しようと思わない。一方、彼らが家族をつくり、子どもとの家族形成に困難を抱えていることは、容易に理解できる（と思っている）。妊娠・出産に必要な体の構造と生殖機能は、すでに医学的な解明がなされており、望んでも子どもを迎えることができない苦悩は、不妊心理と考えるからである。本来、性別違和や性自認、性的指向や表現する性といったLGBTQ当事者の特性は、こと生殖に限定すると、医学的には問題にならないはずである。妊娠・出産の医学的条件に、LGBTQ当事者にある特性は含まれていない。ではなぜ、健康な若者たちが子どもを迎



## ドラマセラピーの実践・研究・手法

虐待を受けた子どもへのドラマセラピー その1

尾上 明代

今号から何回かにわたって「発展的変容 (Developmental Transformation)」という手法を用いて実施された、虐待を受けた子どもとの長期セッションについて、米国のドラマセラピスト・James、Forrester、Kim の3人の研究論文(2005)から紹介する。私自身が実施していた児童養護施設の子どもたちへのセラピーの様子は、このマガジンの創刊号から連載していたが、その活動の初期のころに、私が多いに支えられた研究報告であり、著者の一人、Forrester さんには直接お会いしてアドバイスをいただいたこともあった。

### 背景

劇やドラマを使うという本来の性質から、ドラマセラピーはグループで実施されることが多いが、これから紹介するのは、セラピストと子どもが対面で歩んだ2年間に及ぶセラピーである。登場するのは、ジャマーという8歳のアフリカ系・アメリカ人の男の子である。

ジャマーは、両親の薬物乱用により、ネグレクトやドメスティック・バイオレンスを受け、里親に預けられることになった。あいにく、男児を預かる里親がなかなか見つからず、やっと決まった預かり先は、彼の家に向かいの家に住むシャーリーという女性だった。ジャマーは、学校で暴力をふるったり、男友だちに「性的な行為」をしようとするなど「問題児」と思われていた。夜は、頻繁におねしょをし、また「チャッキーが窓から侵入してきて、ナイフを突きさすんだ」と言って、一人では眠れない様子だった。

困ったシャーリーやケースワーカーは、何度か医者連れて行った。診断は智恵遅れやADHDなど、医者によって変わり、さらに精神病とされたときは、

その薬が処方されたりした。何人かのセラピストにも連れて行ったが、うまくいかなかった。

シャーリーに預けられて1年が過ぎたころ、ジャマーは、両親と一緒に住んでいたとき、16歳の叔父からたび重なる性的虐待を受けていた事実を彼女に告白した。無理矢理、性交させられていたこと、他言すれば、家族に危害を加えると脅迫されていたことなどがわかり、性的・身体的・感情的虐待があったことが判明した。

しかし、このプロセスは、彼をさらなる苦しみに導く結果になったと思われる。つまり、勇気をもって虐待のことを告げたのに、そして多くの「白人の」大人たちから、根掘り葉掘り聞かれた話に答えたのに、結局、虐待者は向かい側の両親の家にまだ住んでおり、彼は大変な恐怖を感じていたのだった。

加えて「虐待者である叔父の生活は何も変わらず、自分が家を出なければならなくなった。両親とも離ればなれになった」という事実から、ジャマーは、この事件はすべて自分のせい、自分が悪かったのだと思い込んでいた。繰り返される虐待のたびに、叔父から「誰にも言うな。言ったら酷いことが起きるぞ」と脅されていたので、告白したせいで、本当に酷いことが自分に起きたのだと自責の念をもったのだ。彼は次第に記憶を抑圧し、同時に学校でもシャーリーの家でも、言うことをきかない「問題児」になっていったのだった。

## ドラマセラピー開始

そこで彼はドラマセラピストのところへ紹介されることになった。

ドラマセラピストは、まずジャマーにパペットを与え、そのパペットが彼に「夜、自分の部屋にいるのは安全だよ」と語りかける（つまり、ジャマーがパペットを動かしてジャマー自身に話しかける）練習をさせた。彼は、これを大変気に入ったという。もちろんパペットは家にもって帰ってもらった。夜中に悪夢にうなされたりして、1人で寝るのが怖い彼にとって、とても役立つクリエイティブなアイデアだと思う。

このドラマセラピーに使われたのは、「発展的変容」というアプローチである。（この手法は当マガジンでも紹介したことがあるので、詳しくはこちらを御覧ください。→ [17.pdf \(humanservices.jp\)](#) ）

この手法の特徴は、部屋にはドラマセラピストとクライアント、そして play space と呼ばれる空間だけで、（セラピストが、セッション中に少しだけ距離を置きたいときに使う敷物としての円形の小さな布とクッション以外は）何も無い。対象者は問わないが、子ども対象のときであっても、おもちゃなどは一切使用せず、すべて想像上のものだけでセッションを進める。つまりセラピスト

とクライアントが初めから直接対峙して身体的に関わる点が、プレイセラピーとは一線を画するところだ。

上記の理由で、このセラピストがジャマーにまずパペットの実物を使ったのは例外的であることがわかるが、夜に恐怖を感じる彼の切実な状況を考えての素晴らしい介入であると言える。

## 初期のセッション

「おもちゃはどこ？」と聞くジャマーに、セラピストは、「わたしがおもちゃだよ」と答えた。ジャマーはニコツとして、すぐに想像のバスケットボールが始まった。ジャマーは、決してセラピストに点を入れさせず、自分だけがシュートを成功させる場面を続けた。これまで多くの大人から裏切られてきた彼は、人を信頼して遊ぶことができないのである。当然、しばらくの時間が必要となる。

毎回セッションの最後に、セラピストはジャマーに「魔法の箱」を開けることができる「想像上の」鍵を渡す。その鍵を使って箱を開けられるのは、二人だけである。セッション内で二人が創ったすべてのものに名前をつけて、その箱に入れる。このようなドラマ的儀式を行うことは、架空と現実をしっかりと分けることにも役立つ。

初期のセッションで、ジャマーはセラピストによくぶつかって来た。実際に殴ったり飛びかかったりしようとしたのだ。彼は、内側にある強い怒りをどうしたら良いか、わからなかったのである。ジャマーの中にある強い怒りの感情を安全に表現させるためには、このような身体性を伴うドラマ的な構造が必要であり、とても有効であると思う。しかしセラピストを殴るなどの、攻撃的な行動は、「ふり」だけで本当に殴ってはいけない、というルールを学んでもらわなければならない。

そこでセラピストは、人を攻撃したい衝動を、遊びの空間でどうやって表現するか教えた。「君みたいな行動をしていたら、家でも学校でもすぐにトラブルを起こしてしまうよ。ここでの約束ごとは『ふりをすること』。そうすればトラブルにはならない」と。ジャマーはこれを熱心に聴いて、同意した。

彼は赤ちゃんのころからネグレクトを受けており、また、彼の「子守」をしていたのは、テレビやビデオゲームの攻撃的なキャラクターたちだったのではないかと、セラピストは感じていた。このような子どもは、想像力を使うことが難しいことが少なくない。しかしセラピストの導きによって、ジャマーの想像力は少しずつ開発されて、彼はドラマを楽しみ初めた。たとえ「ふり」でも、真の感情を込めてセラピストを「殴ったり」、「銃で撃ったり」、「手榴弾で吹き

飛ばしたり」できるようになった・・・！ とにかくジャマーは、非常に強い攻撃者に同一化しており、全く無傷で絶対に負かされない役だけを演じるのであった。反対にセラピストは、いつも弱くて無力で、やられっぱなしで傷つけられる役。セラピストが、このパターンを変えることを、ジャマーは決して許さなかった。この頃、セッション中のジャマーの激しい怒りの叫び声が、部屋の外まで、よく聞こえていたようだ。

あるとき、ジャマーは想像のナイフでセラピストを刺し、またあるときは、セラピストを切り刻んで食べる場面を演じた。ここでドラマセラピストは、あることに気づく。ジャマーは、“怖くてどうしていいかわからない、屈辱的な虐待をされる気持ち”（里親のシャーリーに保護される前の生活で感じていたであろう気持ち）がどのようなものだったのかを、自分に教えてくれているんだ、と。

私自身も児童養護施設の子どもたちと長期セッションを行っていたとき、このドラマセラピストとまったく同じような経験をしていた。ドラマの中の彼らの「攻撃」は、虐待された苦しい状態や気持ちを私に「教えて」くれている行為なのだ、というこの論文のくだりを読んで大変助けられたことを思い出す。また、そのときは5人の子どもたちとセッションをしていたので、私が執拗に「いじめられる」ドラマでも、別の子どもが私を「助ける役」を自発的に担ってくれることもあり、そのような新しい「役」を子どもの中に早く生み出せたという効果もあった。同時にセラピストとしての私のしんどさも救われて、さまざまな興味深いプロセスが発生した。

ジャマーのセラピストは一人で対峙していたので、さぞ大変だったことだろう。このようなセッション内容が半年続いたというのだ。一口に半年、というのは簡単だが、来る日も来る日も同じことが繰り返される最中は、しんどかったと思う。しかし、非常に苦しい虐待を受け続けていたジャマーが、次の段階に進むためには、これだけの時間が必要だったのだろう。そして、これだけの怒りの表出を繰り返すことが必要だったのだ。そしてその間、ずっとセラピストが受容しながら関わったことで、繰り返しのループから抜け出るときが来たのである。

## 半年後

半年後、ジャマーは「怪獣に襲われて捕らわれの身になっているセラピスト」を救出して怪我の世話をする、というドラマを演じたのであった。半年かけて醸成されたものこそが、次のステップを生み出したのだろう。セラピストとジャマーは、この時を準備していたのだ。このようなストーリー展開は初めてで、



その後、ジャマーとセラピストの親密さが深まったのを2人とも感じたようだ。

程なくしてジャマーは、とうとうセラピストが強い怪獣の役になることを許すようになった。他者を助けることができるようになった彼は、ようやく自分を守る、という行動に出始めたのだ。もちろん、まだドラマの中である。しかし、彼はそれを実行する「気分」に変化したのだ。しかし、「強い怪獣に襲われる」というドラマは、当然、彼のトラウマが再燃する危険を孕む。そこでセラピストは、ジャマーが（興奮しすぎたり、解離してしまう前に）いつでも使える「フリーズガン（それを発射すると怪獣はピタッと止まって動けなくしてしまふ銃）」を与えた。もちろん想像上の小道具だ。現実的なものは何も使わない。このこと自体がクライアントの想像力と創造性を掘起こし、かつ、本来遊べないもの（トラウマ）を楽しい遊びの中で昇華させることができる仕掛けになるのだと思う。さらには、どんなに強い怪獣が襲って来ても、逃げ込むことができる、絶対に安全な「洞穴」や「お城」の場所を決めておいたり、また想像上の竜や鳥の翼をジャマーに事前に与えておき、彼が飛んで逃げられる手段も整えてあった。このような架空の道具を使って現実のトラウマを乗り越えてもらうアイデアは見事である。

これらを使ってセラピストと遊ぶうちに、ジャマーにとってこの「怪獣ドラマ」は恐怖の象徴としてだけでなく、ワクワクするものになっていった。このころから、彼は日常生活においても自信が付き、またリラックスできるようにもなり、学校でのけんかもなくなったという。このような展開に、こちらまでワクワクしてくる。

そしてこのあとよいよ核心へ、つまり性的虐待に関するテーマに近づいていくことになる。

<次号へ続く>

## 文献：

James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C. (2005). Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment (pp.67-86). Taylor & Francis Group.

# 対人援助学 & 心理学の縦横無尽

## ( 3 2 )

### サトウタツヤ

(立命館大学総合心理学部)

#### 1 はじめに

TEA (複線径路等至性アプローチ) は 2004 年にその原型が発表され、2005 年には最初の研究論文 (安田、2005)、2006 年に理論的論文 (サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー、2006) が発表されたことで発展してきた質的研究法の 1 つである。発表から 15 年以上を経て、日本国内では心理学のみならず発達・保育・言語・看護・キャリア・教育・スポーツその他もろもろの領域で広く使われる研究法となった。

TEA 研究会と称する研究会でも各種の講習会や研究会を行っているものの、TEA についても学ぶ場は少ない。そこで、TEA に関心をもった方々は関連する本や論文を読み、独学に近い形で研究を進めていてくれる。

最近、本学のある大学院の院生さんが TEA を用いて修士論文を書いていることを知った。そしてその方の指導教員が指導のために熱心に TEA について勉強しながら院生を指導してくれているということを知った。この指導教員とはとある会議でいつも隣に座っている方である。そこで聊か勝手ながら院生さんの話を伺ってアドバイスをすることにした。

そしてこの院生さんの研究を聞いてあれこれ考えてアドバイスしている中で、TEA における 1 / 4 / 9 の法則について得るところがあったので、ここに書き記しておくことにした。多くの方はご存じと思うが、私はモノゴトをまじめに考えて何かを発表するというよりは、何かをしながら喋ることで考えがまとまっていくタイプである。今回もそうした機会となったので、そこで得たインスピレーションを文章にしておきたいのである。

#### 2 1 / 4 / 9 の法則とは

1 / 4 / 9 の法則とは、TEA (複線径路等至性アプローチ) の研究において、概ね 1, 4, 9, 16・・・つまり  $1^2, 2^2, 3^2, 4^2$ ・・・ごとに、研究成果の意義が異なるものになるということである (安田・サトウ、2012)。つまり、ここで重要なことは量的研究のように人数が増えればその分リッチな成果が得られるというような単純な関係ではないということである。

質的研究では一人に話を聞くより二人に聞いたら二倍良くなるということはない。中途半端な比較になるだけである。同様に、5 人より 6 人の方がいいということもない。百人に聞いたら百倍良くなることもない。そして、ある種の人数のまとまりで、研究成果の意

義も異なってくることも分かってきた。こうした関係は一経験的に分かってきたことであり一対象者数の1/4/9の法則と言われている（表1）

**表1 TEA 研究における1/4/9の法則**

対象者数	分かること/できること
$\cdot 1^2 \pm 0 \rightarrow 1$	個人の径路の深みが分かる
$\cdot 2^2 \pm 1 \rightarrow 3 \sim 5$	径路における共通性と多様性を可視化できる
$\cdot 3^2 \pm 2 \rightarrow 7 \sim 11$	径路の類型化ができる
$\cdot 4^2 \pm 3 \rightarrow 13 \sim 19$	時期推移の骨格が見える
$\cdot 5^2 \pm 4 \rightarrow 21 \sim 29$	社会構造の骨格が見える

このように、対象者数が1、4、9、16、25である場合について、それぞれに長所があるし短所もあることを示したのがTEA研究における1/4/9の法則（何事も、利点は欠点、欠点は利点である）である。あえて問題点を言うなら、TEAに限らず質的研究において25名くらいを対象にすると細かなところが見えにくくなり、質的研究の良さが失われるというか、労力をかけただけの豊かな成果を得ることができない、ということであろうか。

### 3 ある実例から得たインスピレーション

前述のように筆者が勤める大学の他の大学院でTEA（複線径路等至性アプローチ）を用いて修士論文を書く院生さんがいることを知った。ありがたいことである。その研究について話を聞く機会があった。実際の例とは少しずらして、コミュニティにおける居場所づくりに取り組んでいる人たちの研究をしているということにしておこう。そして、一定の条件を満たせば国による補助金が出るということにしておく。対象者数は6名である。これは表1に照らしてみると、 $4 + 1 = 5$ だし、 $9 - 2 = 7$ だから、あてはまるどころがない。この場合、切り上げよりは切り下げとなる。つまり6人を対象とする研究は9人の研究に近いというよりは4人の研究に近いことになる。つまり、径路の類型を描くことはできないが径路における何らかの多様性を描くことが可能になるはずである。

この架空例の場合、EFP（等至点）は、「コミュニティにおける居場所づくり」の完成であるから、そうした経験のある人をご招待してお話を伺うことになる（HSI＝歴史的構造化ご招待）。そして「コミュニティにおける居場所づくり」というEFP（等至点）には、当然ながら「コミュニティにおける居場所づくりをしない」というP-EFP（両極化した等至点）があり、それが時間と異なる次元を構成することになる。こうすることで、TEM（複線径路等至性モデリング）の骨格が定まる。

まずやるべきことは、個々人の対象者からお話を聞くことである。可能な限り、時系列を意識してもらうことが重要である。ただし、時系列に聞いたことをそのまま並べるのは

TEM（複線径路等至性モデリング）ではなく年表であるから、二次元を意識してそれぞれの出来事の変動がわかるように可視化させる必要がある。そして、BFP と OPP を定めることが必要である。この BFP と OPP は、時期区分をするためにも重要である。逆から言えば BFP と OPP で区切った時に良い時期区分ができるのであれば、その BFP と OPP は良いということになる。この架空例では BFP は「居場所づくりをしよう」と思ったこと、OPP は「国の補助金システムについて知る」ということになる。

今、説明を簡単にするために「コミュニティにおける居場所づくり」という EFP（等至点）に至るまでに、一つの BFP（分岐点）があり、一つの OPP（必須通過点）があるとしてみたい。そうであるならば以下の図のようなものが、Minimal（必要最小限）な TEM（複線径路等至性モデリング）ということになる。

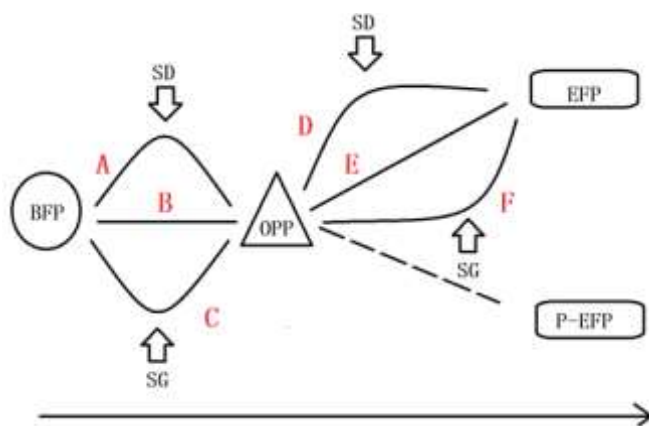


図1 TEMにおけるBFP,OPP,EFPの最小限の径路モデル

この図1において、BFPからOPPへの径路を考えるなら、(A)何もなくす一つと行く径路、(B)一度盛り上がってそのままEFPに行けそうだったけどSD(社会的方向づけ)によって下降した径路、(C)一度は遠ざかったけどSG(社会的助勢)によって上昇してOPPにたどりついた径路、という3種類が考えられる。そして、OPPからEFPへの径路も同様に3種の径路があるだろうと想定できる(D~F)。この架空例に則していえば、居場所づくりをしようと思った(BFP)人が何かの理由でそれが難しくなったのだが、SGを得て国の補助金のことを知り(OPP)、その後は地域の居場所づくりがスムーズにうまくいった(EFP)ということがあったかもしれない(図1上ではC→Eとなる)。むしろ架空例だからこういう単純化ができるのであり、実際にはより多くの出来事(様々なイベント)を経験しているはずだから、これほど単純ではなく上下変動も激しいだろう。

さて3つの点(BFP、OPP、EFP)の2点間においてそれぞれを結ぶ径路が3つずつあるとするならば、この最小限のTEMにおいてさえも3(A,B,C)×3(D,E,F)で9の径路が可能となる。4±1=3~5人の方をご招待して研究を行う場合には、全員が異なる径路であったとしても9通りにはならない。可能な径路のうちの限られた径路しか辿らないの



は当然である。そうであるからこそ、 $4 \pm 1$ の方の経験のどこが共通していてどこに差異があるのかを描いていくことが重要になるのである。共通性と多様性の発見が面白いのである。

さらにBFPが3つ、OPPが2つ、EFPが1つというような例であれば径路の可能性は $3 \times 3 \times 2 \times 3$ で54通りとなる。そのような場合でも、 $4 \pm 1$ のケースを扱う研究では、どこで多様性が表れるのかを注意深く見ることが重要だし面白いということになる。

いずれにせよ、6人の径路を注意深く聞いて、BFPとOPPの間の径路のあり方について、大まかに言えばどのような径路(A~Cのいずれか)、OPPとEFPの間はどうだったのか(D~Fのいずれか)を意識することで、共通性と多様性を感知することができるかと期待できる。たとえば、BFPとOPPの間は全員が同じようであったが、OPPとEFPの間は人によって異なった、というようなことが分かるかもしれない。

以上は、3つの点(BFP、OPP、EFP)で考えた最小のTEMの話であるから、実際にはもう少し入り組んでいるだろうが、共通性と多様性を理解できるのが $4 \pm 1$ の事例数の良いところである。

蛇足ながら、 $9 \pm 2$ の事例数であっても、径路の組み合わせ総数からすれば決して十分な数ではない。図1の最小限のTEMでさえ $3(A, B, C) \times 3(D, E, F)$ で9の径路があったことを思い起こそう。しかし、面白いことに、 $9 \pm 2$ の事例数を扱うならば、径路自体が3つ程度に収まってしまふことが経験的に分かっている。BFPが3つ、OPPが2つ、EFPが1つというような例(径路の可能性は $3 \times 3 \times 2 \times 3$ で54通り)であっても、3、4個の径路に収まるということが起きるのである。おそらく、それこそが文化の力なのである。よく言えば親心のようなものであるし、悪くいえば社会からの抑圧によって、人は選択肢があったとしてもサイコロを振って選ぶように自由には選べないということなのである。心理学には水路づけ(Canalization)という概念があるが、まさに文化は秩序だった水路を示すものなのかもしれない。だからこそ現実に歩むことができる径路の数は、選択肢の単純な確率計算にはならないのである。エントロピーを拡大させないのが文化だ、と言えるかもしれない。径路の類型を通して文化の力を見ることができなのがTEMにおける $9 \pm 2$ の事例を扱う強みである。

#### 4 ヒストリーかストーリーか

最後にライフヒストリーかライフストーリーか、という問題について簡単に考えてみたい。初めて買ったレコード(楽曲)は何か、ということを取りあげてみる。私自身のことで恐縮だが、小学生のときに伯父(父の兄)からもらったお小遣いで買ったレコード(楽曲)が「自分で買った最初のレコード」だと思っている。具体的には大田裕美「木綿のハンカチーフ」である。伯父の思い出と大田裕美さんの魅力と自分からは遠い大人びた恋愛模様の描写、すべてがセットになって自分の歴史を作っている。

と、思っていたのだが、実際に調べてみるとこの楽曲は1975年にリリースされており、

1962 年生まれの私は確実に中学生になっていたのであった。とはいえそのことが分かってからも自分の中では、この出来事は小学生時代の最後の冬の出来事として位置づけられている（それにはそれなりの理由があるはずだ）。

ライフストーリーとライフヒストリーの比較ということで考えてみると、ヒストリーを重視する立場にたてば、(年月日も含めて) 実際にあったことを重視すべきだし、ストーリーを重視する立場にたてば、語り手の物語を重視すべきだということになる。どちらの立場もありえる。とはいえ TEA (複線径路等至性アプローチ) においては、まず対象者の考える時系列を重視すべきである。うっかりすると、聞き手である自分の論理構成で時間を再構成してしまう可能性があるからである。対象者が自分で物語化することは許容されるとしても、聞き手が自分の論理で時系列を歪めることは避けるべきである。

ライフストーリーであってもライフヒストリーであっても、対象者がどのように捉えているのかを丁寧に確認しつつ TEM 図を作っていく必要がある。トランスビューを実践するためには最低 3 回はお会いしましょうね！

#### 文献

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヴァルシナー=ヤーン 2006 複線径路・等至性モデル 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 質的心理学研究、5、255-275。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/5/1/5\\_255/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/5/1/5_255/_article/-char/ja/)

安田裕子 2005, 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程 質的心理学研究, 4, 201-226.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/4/1/4\\_201/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/4/1/4_201/_article/-char/ja/)

安田裕子・サトウタツヤ 2012 TEM でわかる人生の径路 新曜社

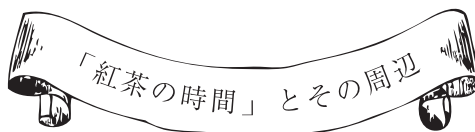
#### 謝辞

この小文を書くきっかけを与えてくれた立命館大学スポーツ健康科学研究科・博士課程前期課程の嶋晴菜(しま・せいな)さんと立命館大学スポーツ健康科学部長積仁(ながづみ・じん)教授に感謝します。

#### 蛇足

良い大学というのは指導教員以外から刺激を受けられることだと思っている。指導教員が面倒をみるのは当たり前。それ以外の研究者から指導を受けられるのが良い大学である。今回も(余計なお節介ではなく)そうした例になることを願う。私の弟子たちも学内の多くの方に育てられたきた。感謝しかない。

# きもちは、 言葉を さがしている



## 第45話

水野 スウ

### 17年目のおはなし会

東京調布のレストラン、心の病気をした人たちの居場所であり働く場所でもあるクッキングハウスでのおはなし会は、今年で17回目となりました。代表の松浦幸子さんから毎年違うテーマでご注文があり、今年のそれは「文化と憲法」。最初にこのテーマをいただいた時、一瞬何を芯に話そうか困惑したけど、ほどなくタイトルが「ともに生きる文化としての憲法——憲法はあなたのそばにいつもいるよ」になったと連絡をもらう頃には、私自身でもいくつかの新しい発見があり。まさにそのようなことを話そうと考えていたので、はからずも松浦さんの思いとシンクロしました。

年に一度、「スウさんのピースウォーク」の通しタイトルのもと、クッキングハウスで語ることは私にとって自己定点観測のようなもの。今回のマガジンは、今年の観測を振り返りながら、その後のうれしいニュースもあわせてご報告したいと思います。

### 「文化」のブレインストーミング

時はオリンピック間近の東京、ウイルスに感染した人の数がどんどん増えつつある時期と重なり、おはなし会は去年に続いて、お客さま向けとメンバーさんたち向けの2部制として、2日に分けて開かれました。

両日ともまず最初は、「文化」という言葉のはいる単語か、「文化」というワードから連想するものを、思いついたそれぞれが自由に出しあうブレインストーミングから。

文化、という言葉がはいるものとしては——多文化／異文化／文化会館／文化祭／食文化／文化活動／文化勲章／伝統文化／文化庁／文化大革命／文化人／文化住宅／文化生活／文化財／江戸文化／福祉文化／文化の日／文化交流／文化放送／文化服装学院／文化包丁／文化度／文化圏……etc.

文化包丁、文化住宅、にはちょっと笑いが出ました。今はほとんど使われない言葉だけど、当時は、新しいこと、先進的なこと、の代名詞だったのかも。文



化人、という言葉も、わかるようなわからないような。

文化からイメージしたものとしては——芸術／一緒に歌を歌う／言葉・文字をつなぐ／余暇を持つ／人間の品位／人間らしい／お互いの気持ちを語り合える環境、……etc.

そんな言葉がでるたび、あ～あ、うんうん、といった声もれます。

いずれにしても、文化はものすごく幅広くて、括ることがむずかしくて、一つの言葉でこうと定義できないものみたい、と共有しあったところが、この日の話の入り口です。

### クッキングハウスの文化

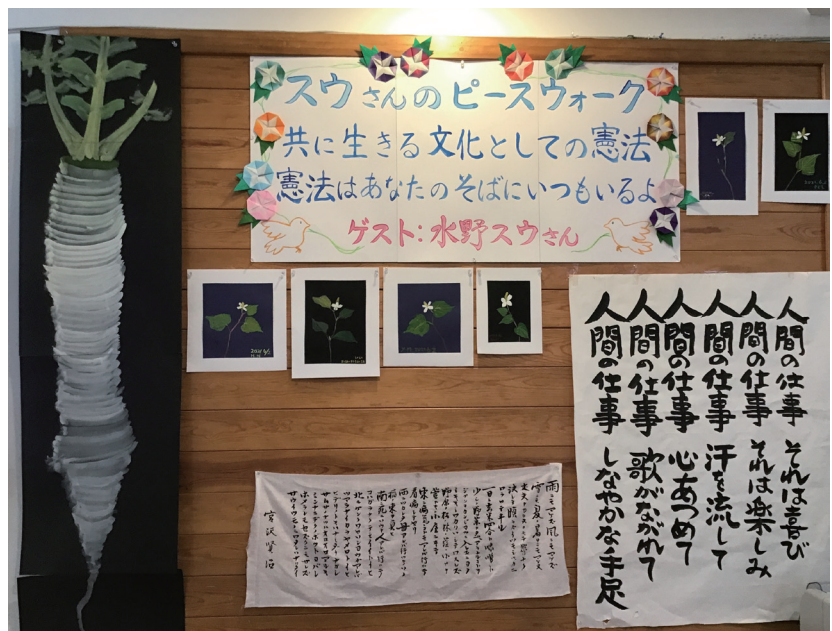
ブレンストーミングで「食文化」という言葉が出てきましたが、クッキングハウスにはまさにおいしい家庭食文化があります。

おはなし会の日のレストランのランチメニューは、夏野菜たっぷりカレー、椎茸しめじのうっすらあんかけ茶碗蒸し、信州の織座農園から定期便で届く有機無農薬野菜の彩り豊かなピクルス、コリコリ歯ごたえのお漬物、じっくりといねいに出しをとった科学調味料無添加のお吸い物。食材には、クッキングハウスを応援する全国の人から送られる自家製野菜がふんだんに使われています。

そもそもクッキングハウスは、34年前のワンルームマンションの時代から、松浦さんとメンバーと一緒に食事をつくり、そのごはんを一緒に食べ、おいしいね、から元気になっていく場としてスタートしたのです。レストランを始めるより先に、クッキングハウスの原点にまず、一緒につくり一緒に食べる、「食文化」があったのでした。

ブレンストーミングでは芸術という言葉も出てきましたが、クッキングハウスにはメンバーさんたちの描いた絵が壁のあちこちにかざられていて、レストラン全体がアート空間のよう。ほぼ毎週、「キミ子方式で絵を描こう」というプログラムがあって、上手に描こうとしなくていい絵を、自由に思い思いに描くのです。紙が足りなくなったらどんどん紙を足して行って描くので、大根もこんなに伸び伸びしています。

大根の絵の右にあるのは、この日のおはなし会の看板です。クッキングハウスでイベントがある時はいつも、こんな看板をメンバーさんが手づくりしてくれて、私のおはなし会の時も、毎回、このやさしい看板を背にして語ります。お話しする私、そして、この場に集う一人ひとりを、「ようこそ」とあたたかく迎えてくれるこんな空気もまた、クッキングハウスに根づいている文化の一つです。





## 対話する文化

クッキングハウスでは、心の病気について学ぶメンタルヘルス市民講座、コミュニケーションを練習するSST、サイコドラマ、リハビリを語りあう会、といった豊かな学習プログラムがありますが、どの会も最後に必ずシェアリングの時間を持ちます。メンバーさんたちの土曜ランチ会の後も、もちろん毎年のピースウォークおはなし会の後も。

その時間に一人ひとりが感じたことを言葉にして語り、みながいてねいに聴き、気持ちを分かち合う。クッキングハウスではそれが当たり前だけど、ほかの勉強会や講演会では必ずしもそうでないことも多いから、シェアリングタイムの自由で平らな空気に、初参加のお客さまの多くが感動します。はじめ緊張していた人も、メンバーさんたちの素直で率直な感想を聞き、そうか、ここはカッコつけたこと言わなくていい、思ったままを言っているいい場所なんだ、とだんだん正直なきもちを話せるようになっていく、そんな場面をこれまで何度となく見てきました。

フィンランドの精神病院ではじまったあたらしい治療法、オープンダイアログのことを、近頃は日本でもよく聞くようになりました。医師が一方向的に病名をつけて薬を出すのではなく、患者本人が一番困っていることを、その人とつながる人たち、家族やドクター、医療スタッフが一堂に会して、その人がどうなりたいかを聞き、どうすればその人の希望に近づいていけるかを話しあって、本人とともに見つけていくというもの。クッキングハウスでもそのやり方を学んで、最近ではメンバーの話をする時には松浦さんとスタッフが一緒に聞きあい、ひらかれた対話でそのメンバーさんにとっての一番いい方法を探るようになってきたそうです。その根底にある理念は、もともとクッキングハウスがもっていた文化と通じている気がします。

オープンダイアログも、シェアリングも、毎朝仕事始めにする気分調べも、クッキングハウスではあらゆる場面で気持ちを言葉にして、聴きあって対話する、そのことを何より大切にしているのです。

## この場は何だろう

最初にしたブレインストーミングで、文化のとらえ方は実にいろいろあるとわかりました。文化勲章や文化庁から補助金が出るものだけが文化ではないということも確認しました。それらが上から押し付けられたり、お墨付きを与えてもらう文化だとしたら、食べること、表現すること、語り合うこと、歌うこと——クッキングハウスでしているこうした日々の営みは、まるごとピープルの文化です。

今日のテーマは「文化と憲法」だけど、じゃあこの文化はどんなふう憲法とつながっているだろう。たとえば、私がいま話しているこの場は、憲法とどんな関係があるでしょう、と問いかけると——「こういうおはなし会ができるってこと、表現の自由の21条だと思う」と、参加している方から声があがります。

本当にそうです。こうして集うことも、平和や憲法について語りあうことも、表現の自由の21条に支えられています。

自分の思ったことを言えたり、違う意見や感想を持つことができるのは、「思想および良心の自由はこれを侵してはならない」とする19条で心の自由が保障されているからです。

安心しておいしい食事が食べられることは、人間らしく生きるのに欠かせない、健康で文化的な生活をおくるための25条の生存権です。クッキングハウスでは、生活保護が必要なメンバーさんが保護をうけられるよう、ソーシャルワーカーの松浦さんが手伝ってその手続きをしますが、それも25条を使うこと。

一人ひとりが個人として尊重される、と謳う13条は、クッキングハウスが常日ごろもっとも大切にしていることで、今日この場に満ちています。「ここでは誰もが平らだから、法の下での平等の14条かしら」という声も。

でも前の憲法のもとでは、自由に集まったり、表現したり、自分の考えていることを話したりすることには制限がかけられていました。人々が、集い、語りあい、学びあって育んでいくピープルの文化は、

今ある憲法がいつもそばにいて、私たちの自由や権利を下支えしてくれているからだったと気づきます。人類の叡智がつまっていると言われる今の憲法は、ある意味、文化のかたまりみたいなものなのかもしれませんね。

## 土壌の話



この本の表紙の人は、ベアテ・シロタ・ゴードンさん。彼女は、GHQの憲法草案委員会の人権条項を担当した一人として、今の憲法にある、法の下での平等、男女同権の14条、婚姻は当事人

の合意によってのみ成立するという24条を、1946年、日本国憲法草案の中に書いてくれた人です。

だけどそれがすんなり憲法に書き込まれたわけじゃありません。ベアテさんは草案を書いただけでなく、日本政府とGHQが草案を検討する場で通訳もしていました。ベアテさんの書いた人権条項、特に男女平等については、政府側から「日本には女性と男性が同じ権利を持つ土壌はない。日本女性には適さない条文が目立つ」と目の前で批判されて、あやうく没になるところだったそうです。(『1945年のクリスマス——日本国憲法に男女平等を書いた女性の自伝』より ベアテ・シロタ・ゴードン 柏書房)

松浦さんから最初に「憲法と文化」のお題をもらった時、その二つは保守の文脈で語られることが多かったの、実は一瞬、ん？ととまどいました。たとえば、自民党憲法草案2012年版の前文には「長い歴史と固有の文化」という表現がでてきます。固まった文化、揺るぎない文化、というイメージ。これって、何十年前に「日本には女性と男性が同じ権利を持つ土壌はない」と日本政府側が言い切ったあの言葉と、根っこで重なる気がします。

男性と女性が同じ権利をもつ土壌はないってどう

いうこと？ 自分で決めたり、選んだり、政治に参加したりすることを、男性には認めて、女性には認めない、そういう不公平なままだが“日本らしい”ということ？ それって人間らしくない気がします。一人ひとりが人間らしく生きられない文化ってなんなのだろう。文化は、ピープルが生きることとともにあるのではないの？ 松浦さんからお題をもらったとき、これは改めて私が、政府から押し付けられる「文化」でなく、ピープルが生きることとともにある文化を考える挑戦だ、と思いました。

## キーワードは「耕す」

「文化」をあらわす英語は culture。似ている単語に「農業」を意味する agriculture があります。

クッキングハウスで話す今年のテーマを夫に伝えたら、即、半世紀以上も前の思い出を聞かせてくれました。高校3年生の夏休み、石川から上京して代々木ゼミナールに行った初日のこと、たまたま英語の長文を訳す授業があって、その時初めて彼は「agriculture」という単語が「農業」を意味すると知ったのだとか。アグリは土、カルチャーは耕す。だから、土を耕すで農業なのか！と。夫の代ゼミ体験はその日かぎり、後はまったく授業に出なかったそうで、そのひと夏に彼が学んだのは、唯一この英単語だけだったそうですが(笑)。

そう、culture という単語には文化だけでなく、育てる／耕作する／栽培する／手入れする／世話する／守る、という意味もあるのです。語源はラテン語の cultura。ちなみに cult は、称える／神を崇拝する。cultivate は、栽培する／心を耕す／教養／文化、といった意味があります。なんと幅広い概念でしょう。

文化と憲法をセットにしてクッキングハウスで語るなら、その日のキーワードはきっと「耕す」だ。土をふかふかに耕し、そこにタネを蒔き、世話をし育てる、そういう営みが文化に通じているのではないか。そう、このとき確信したのです。

耕すがキーワード、と思いついたとき、もう一つ思い出したエピソードがありました。

この5月、全国うたごえ創作講習会によばれて話

をした時（その時の報告はマガジン45号44話に）、私にはほんの数える程しか歌づくりの経験はないけど、代表曲(!)は、なんてたって「13条のうた ほかの誰とも」です、と言い切りました。

もとは2009年に、娘が憲法13条の「個人の尊重」——「一人ひとりが個人として尊重される」という条文に深い意味を見出して、それを「わたしは、ほかの誰ともとりかえがきかない」からはじまる、やさしい日本語に訳してくれたことが始まりでした。

その訳文はまるで詩のようで、ああ、これを歌にできたらいいなあ、と思っていたら本当に歌ができて、それを憲法のおはなし出前の最後にいつも歌い、ついにはCDブックまでつくってしまった。13条のなんともめざましい進化に私自身、びっくりです。

それから何年もたったある日、娘がぼろりとこんなことを。

「私はたしかに13条を発見して私なりに訳したけど、でもそれっきりであとはほったらかした。私の13条に水をやって、太陽にあてて、風を通して、ここまで育てくれたのはあなただよ。そうでなかったらあの13条、とっくの昔に干からびてたと思う」

干からびてた！ この表現がリアルでおもわず大笑いしたけど、そうか、娘の訳した13条を、私は私なりに耕し続けて歌にして、何度も歌ってきたのか。耕すってこういうことか、と実感しました。今回のキーワードが「耕す」だと思った時、娘とのこの日の会話も鮮やかに思い出されたのでした。

### 干からびさせないために

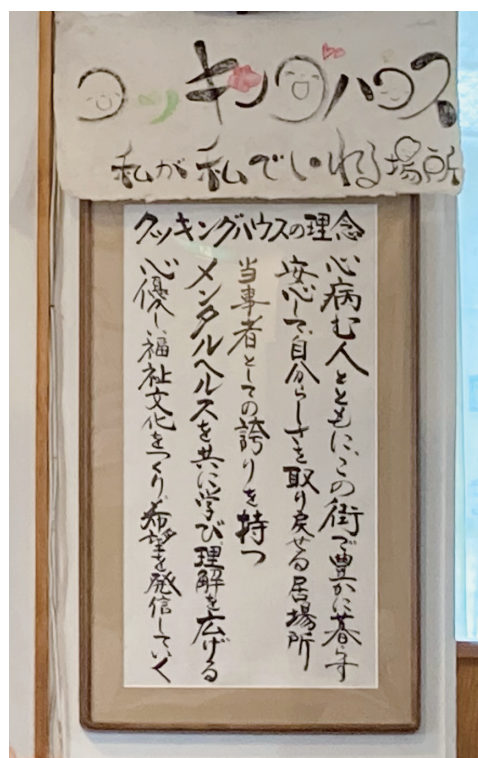
男女が同じ権利をもつという土壌は日本にないのだ、と政府の側が反対する中で、ベアテさんが、日本国憲法というまだ固い土の中に植えてくれた「男女平等」のタネ。だけど、憲法に書き込まれたらそれで終わりじゃなくて、それを受けとり、そこから勇気ももらって、水をやり、耕し、育てた戦後の人たちがたくさんいます。

日本のジェンダーギャップ指数が156カ国中120位と低い(2021年)のは、日本の土壌がまだまだ硬くて耕し足りないことの証拠。それならその土がふかふかになるまで私たちが耕していけばいいのです。

クッキングハウスの通信には、「一緒に」「ともに生きていくために」という松浦さんの言葉が何度も何度も出てくるけれど、それはひとりが人間らしく生きていくのにパンだけでは足りないことを、松浦さんが誰よりもよく知っているからだと思います。他者とまじわり、仲間をつくり、一緒に文化を育てて、ともに味わう。それが、人間らしく生きるということ。

心の病気の人々がレストランで働くなんで無理だ、と言われた時代。憲法に「法の下での平等」と書き込まれていても、まだまだ心の病気の人々への偏見が強く、必要な制度も用意されていなかった、そんな時代から35年。松浦さんは仲間とともにクッキングハウスという畑を耕し続けました。平等、という理念が干からびてしまわないよう、水をやり、耕してきたのです。

毎日のおいしいごはんや歌や絵が、一つひとつは小さな対話の積み重ねが、クッキングハウスの畑を豊かに耕し続けてきました。やわらかく耕されたクッキングハウスの土は、心の病気を体験したメンバーたちだけでなく、レストランで食事をするお客さま、講座やイベントに参加する市民の方たちの心をも耕し、そうやってともに心やさしい福祉の文化を育んできたのだと思います。





クッキングハウスの松浦さんはその功績が認められ、2005年に第2回精神障害者自立活動支援賞（リリー賞）を受賞、今年11月には、調布市より社会福祉功労賞の表彰を受けました。

### タネを蒔いた人

これまでクッキングハウスのいろんな文化を述べてきたけれど、クッキングハウスを語るとなったら、やっぱり歌の文化を抜きにして語ることはできません。なぜならクッキングハウスはいつも歌がある場所だからです。そのタネを、四半世紀余りも前、クッキングハウスという畑の土に最初に蒔いたのはフォークシンガーの笠木透さん。

笠木さんとの出会いをこの場で松浦さんにお聞きすると、こんなふうに語っていただきました。

——1987年にクッキングハウスをはじめた時、小さな居場所で私も不安だったので、何か私自身を励ましてくれるような歌を求めていたのです。そんな時、笠木さんの歌を知りました。いつかこの方をクッキングハウスでお呼びできたら。そう願い続け、クッキングハウス5周年のときによくお呼びすることができました。

笠木さんにはじめて会った時は、ゴリラみたいな人！（笑）と。でもそのコンサートの間中、いつもはちっともじっとしていない自閉症の男の子がしっかり歌を聞いていたの。それから、かん黙症で言葉の出ないメンバーが、笠木さんの歌う替え歌がすごく気に入って、よろこんで歌い、言葉が出るようになっていった。

笠木さんは、「心の病気をした君たちだからこそ、歌がつかれる。歌いたい思いが、伝えたい気持ちが、あるでしょう、歌をつくってごらんさい」そう言って私たちに歌づくりを教えてくださいました。

### 自分たちの歌を持つということ

「♪不思議なレストラン 心の居場所 ここにいてもいいのですね」今やクッキングハウスのテーマ

ソングになっている「不思議なレストラン」という歌の歌詞をプレゼントしてくれた笠木さん。その後、笠木さんが手ほどきするかたちで、メンバーや松浦さんやスタッフたちの歌づくりがはじまりました。

めいめいが書いてきた歌詞を発表して一つひとつシェアし、時には別の人の歌詞を足し、何人もの曲があわさって一つの歌になっていったり。そんな歌がクッキングハウスにはもう30曲以上あるそうです。25周年、30周年記念コンサートの大舞台で歌われた歌はどれもみな、クッキングハウスのオリジナルソングでした。

笠木さんが歌づくりのタネを蒔き、それをクッキングハウスの人たちがせっせと耕し、大切に育ててきた。笠木さん亡き後は、彼の歌仲間の増田康記さんが引き継いで一緒に耕し続けてくれています。

これは自分たちの歌だ、そう呼べる歌をいっぱい持っていて、しょっちゅう一緒に歌って、この場にいつも歌があること、これもまたクッキングハウスのすばらしい文化です。

クッキングハウスでは、来たる2022年の35周年を祝うコンサートで歌うための、新しいオリジナルソングの練習がもうはじまっているそうです。35年間耕され、育ててきた歌は、クッキングハウスの畑に咲く彩り豊かな花や実りのようなもの。その歌は歌われることでメンバーたちの、そして聞かせてもらうことでお客さまたちの、心の土壌をさらにふかふかに耕すことだろう、と確信して、来年11月のコンサートを私は今から心待ちにしています。

クッキングハウス35周年を祝う会

「私のリカバリー 私達のリカバリー  
～心の居場所から、希望のプレゼント」

日時：2022年11月17日（木）13:30-16:00

場所：調布市グリーンホール（大ホール）

参加費：3,000円

お申し込み・お問い合わせ：

042-498-5177（クッキングハウス）





# ノーサイド

## 禍害と被害を超えた論理の構築

( 3 6 )

### 中村周平

私の中で事故当事者同士のつながりやネットワークの存在意義を強く感じさせられた、実際に活動を行っているもう一つの団体は、「全国柔道事故被害者の会」という組織です。

この団体は2010年3月、柔道事故によって子どもを亡くした遺族や、重度障害を負った子どもの家族らによって立ち上げられました。その背景には、1983年から2011年の29年間で中学・高校の学内における柔道事故の死亡者が118名に上っている事実を、名古屋大学大学院准教授の内田良先生が2009年の研究で明らかにしたということがあります。

このような現状を打開するため、当該団体は事故被災者家族や遺族、大学研究者、スポーツ事故に詳しい医師などが登壇するシンポジウムを東京・大阪・名古屋・松本の4ヶ所で開催し、柔道事故における脳振盪の危険性や有効な安全対策について発信してきました。その様々な取り組みが成果を見せ、2012年から2014年までの3年間は死亡事故0件という結果に大きく貢献しました。現在は、再び発生した死亡事故と減少の兆しが見えない重篤事故を0件にすべく、全日本柔道連盟と協力しながら活動を続けています。

私も前述のシンポジウムに参加させて頂きました。当時は、まだ同志社大学で研究

を始める前で、これから自分がどのようなことを学び、どのような情報発信をしていくべきなのか悩んでいた時期でもありました。

実際にその活動の様子を目の当たりにし、当事者の方、そして研究者や医師の方々が、同じ目的をもって活動されていることに、心を動かされました。また同時に、そのような情報発信の在り方に大きな可能性を感じました。

これら2つの団体は、立ち上がった時期や活動内容にこそ違いがありますが、スポーツ事故被災者やその家族に対して耳を傾け相談を担う役割、マスメディアや全日本柔道連盟などと協力しながら学校やスポーツの安全に対する取り組みを発信する啓発的な役割を兼ね備えていると私は感じました。とりわけ、事故被災者という同じ境遇に置かれた経験から、互いの状況や抱えている課題をよりよく理解し、時には適切な助言をしあえるピアサポートとしての役割が非常に大きいと思います。

また、「全国学校事故・事件を語る会」や「全国柔道事故被害者の会」のこれまで

の活動によって、スポーツを含む多くの事故当事者や遺族の声はまとめられ、すでに様々な形で発信されていました。

「自分以外の事故当事者や家族の声を聴きたい」

この思いを叶えるだけならば、この2つの団体の関係者の方々に自身の考えを伝え、つながりを持つことで十分であったと思います。実際に、「全国学校事故・事件を語る会」の集会や、「全国柔道事故被害者の会」のシンポジウムに参加させて頂く中で、自分と同じように、スポーツによる事故に遭い、介護や事故原因の究明、裁判などによって、これまでの生活を一変させられた方々と顔を合わせて話をすることができました。

ただ、そのような体験をしたうえでも、自分にまだできることはあるのではないかと、そのことが頭に浮かびました。

# 路上生活者の個人史

## 第4回(番外編)

竹中尚文

依然としてコロナ禍のためにホームレスの人たちにインタビューをできない状態が続いている。だから、今回も個人史の掲載はできない。代わりに、対人援助と宗教の関係についての考察を試みたい。これは11月25日(木)に「対人援助学マガジン トークライブ」のご縁で話した内容と重複するものである。

### I. 共感

お寺の活動として大阪の扇町公園でホームレス支援をしている話は、前回に書いた。今回は、なぜお寺がホームレス支援なのかという話をしたい。

一般に宗教者のホームレス支援というのは、善行を積み重ねて死後に天国に迎え入れられるとか、善行を積むことが修行であるように受け取られることが多い。私がホームレス支援をしてみると言っても、ほとんど何もせずに声を掛けているだけである。その程度の善行が私の煩惱の埋め合わせになるわけがない。私の行為に関しての善悪の収支は完全に赤字である。

善行ではないので、私のホームレス支援の動機は「共感」である。寒空の下、屋外で寝るのは寒いだろうなと思う。美味しいモノを食べたいだろうなと思う。夏の暑い日に冷房の効いた部屋で眠りたいだろうなと思う。こうしたことが、「共感」である。

ところが、「ホームレスは好きでやっている」とか「ホームレスは働きたくない人たちだ」という人がいる。これは自分が関わりたくないと言っているのに等しく、ホームレスは自分とは関係のない人だ、と言いたいのだろう。これは、分断の意識だろうか。

分断の意識は、現代社会のいろんなところに表れる。今、地域社会への不参加を表明する人も多い。あちこ

ちの自治会で担い手不足に悩んでいる。地域の子供会がなくなり、婦人会もなくなった。青年団があったのはどのくらい昔のことだろうか。若い人たちから、出会いの機会がないと言う声を耳にする。今、コロナ禍の中でますます人との分断は進みそうだ。

このようなことはお葬式にも見られる。近年は「葬儀は家族、近親者のみによっておこないました」という話をよく聞く。かつては、結婚式は招待がなければ出席できないが、葬式は招待がなくても行くものだ、という言葉があった。お葬式に行ったとしても、「香典は辞退します」という札に出くわす。

私の記憶の限りのことであるが、かつて、お葬式には誰もが香典を持って行った。集まった香典で、葬儀屋さんに支払い、坊さんにお布施を包んだものだ。そして、余ったお金で、お寺の仏具を寄付したり、地域の集会場の備品を買ったりしていた。ウチのお寺にも昔の寄付の仏具がある。お葬式を出すお家は、お金の心配をする必要がなかった。香典をどのように使うかは地域の中から役を選ん

で、その人が運営した。お葬式を取り仕切る人は、みんなで賢く選んだ者だった。だから、葬儀を出す家族は経済的な心配をすることなく、悲しんでいればよかった。葬儀屋さんが葬儀会社になった頃から、香典を受け取ると香典返しが必要だといって、葬儀社が香典返しの品を準備するようになった。会場も葬儀社の社屋を使うようになり、葬儀費用が香典でまかなえなくなった。それならば、香典を受け取らず、小規模なお葬式にして、葬儀費用を抑えた。そうして葬儀費用は、喪主が支払うようになった。経済的に苦しい生活をしている人は、お葬式に困るようになった。私は葬儀社に煙たがられながら、葬儀費用の仲介をすることもある。みんなで、香典返しはしないと行って香典を受け取るようになると、経済的に苦しい生活をしている人は助かるかも知れない。

## II. 共感と仏教

さらにお葬式を共感という言葉を中心に考えて見たい。



ペット葬というものがある。私はその依頼を受けたことがないのだが、飼い主の気持ちも分かるような気がする。現代社会は、人と人の分断が進み、人は孤立して暮らしている。その中でペットの果たす役割が大きいのも分かる。そのペットが死んだら、喪失感はかなり大きいと思う。私がペット葬をする自信が無いのは、死んだペットに共感を持ちにくいからである。

私は、かつて犬を飼っていた。その犬はまるで家族の中心であるかのような存在であった。そして、老衰で死んだ。その日は、忙しくて火葬場に運ぶことができなかつたので、葬儀屋さんでドライアイスをつけてもらった。菊の花をつけてくれたので、ダンボール箱にドライアイスと菊の花をいれた。ペットを亡くす悲しさを覚えているが、その犬の死に共感することはなかつた。

私が僧侶としてお葬式をつかさどるのは、第一に亡くなった方への共感である。どんな思いで生きてきた。どんな思いで息を引き取った。今、どんな思いだろうか。第二に遺族への

共感である。お葬式とは、死者への「とむらい」である。「とむらい」とは死者を中心とする葬儀であり、死者にたいする静かか会話である。

死者への共感は、死に対する悲しみという感情が中心にあるように思う。愛する者の死は、まず何よりも悲しい。こうした、感情は続かない。愛する人を喪った悲しみに対して、「時が癒やしてくれる」と慰めの言葉を見聞きすることがある。そうした言葉掛けに同調はしないが、感情は時間の経過で薄らぐのも知っている。

このように感情は続かないが、明確な論理は続く。その例として、鎌倉時代の叡尊(えいぞん・1201-1290)の話をしたい。奈良の西大寺を中心として活躍した僧侶である。とくにハンセン病の患者の救済で有名だった。ハンセン病という診断が明確にできなかったので、死に至る病の患者を介助した。当時は、死を忌むべきことと考える人が多くいたようだ。死期の近い人間は無用の存在と考える人もいたかも知れない。だから、死がせまる人を叡尊の所に運んだ。叡尊の行動は、現代的に言えば看病、看取り、

葬儀であろう。死んでしまうと、人として意味をなさなくなったという考えに対して、叡尊は葬儀をおこなった。日本の仏教が葬儀に関わるようになったのは、叡尊からだといわれている。

こうした行動によって叡尊は人々から支持を受け、鎌倉幕府からも高く評価された。鎌倉仏教の有名な祖師の一人は叡尊の受戒を批判する。これは叡尊に対するやっかみの気持ちであったかもしれない。また、叡尊の臨終が近くなった頃、西大寺の上空に紫雲がたなびいた。それを見て奈良の人々は叡尊を心配して続々とお寺に集まったという。その日の夕刻に叡尊は多くの弟子に見守られながら、息を引き取った。その死は、多くの僧侶や一般人に悼まれた。

ほぼ同じ時代を生きた親鸞(しんらん・1173-1263)は叡尊ほど多い人たちに看取られての臨終ではなかった。その葬儀も当時の京の庶民と同じようなものだった。当時の社会でほとんど無名といえる生涯だった。叡尊は抜群の有名な人だったし、親鸞は無名の存在であった。それが、今日、

叡尊は無名に近い存在であり、親鸞は鎌倉仏教を代表するかのよう語られる。

叡尊の行動は日本における対人援助の先駆者のようなものである。当時の社会からもそのような評価を受けていた。しかし、親鸞との違いはその思想・信仰にあったと思う。叡尊の信仰は多元的であったといわれる。言い換えれば迷いがある。伝統的な五性各別(ごしょうかくべつ・仏に向かう人間を区別分類していく思想)を受け入れたわけではないが、戒律を重視していた。したがって、受戒を大切にしていた。ここに戒を受ける人と受けない人の区別ができてくる。しかし、親鸞は人間に対して絶対的な平等感を示していた。こうした姿勢は、当時の仏教では特異な姿勢であった。

### III.死とは、仏とは

ここで、死をどのように理解し、仏をどのように理解するのかを考えて見たい。死に対する共感という感情的な受け入れから、論理的な理解としたい。

死と仏について、「今の私」と「仏」を一直線に考えていただきたい。この一直線上に「死」がある。

今  
の  
私

死 仏

---

上図で「今の私」の左側が過去で、右側が未来である。未来に「仏」がある。この仏は未来の私ではない。「私」を離れた、ただ仏である。そして、私と仏との間に死がある。釈尊は仏の右側に死があったわけだが、多くの方は、この二つの間に死がある。ここでいえることは、死は通過点であり、終着点ではない。

死が終着点であると考える人には、仏の存在を受け入れられない。「ほんとうに仏さまはいるの？」という問いになる。仏の存在に対する疑念は、存在ということに対しての理解が必要になる。仏教の論理では、存在は関係性の上に成り立つという。例えば、私が誰も知らない無人島に一人で暮らしていたとする。それは誰からも存在確認ができないのだから、存在しないのも同じことになる。また、私

がAさんと一緒に居たとするとき、私はAさんの存在を認識できるし、Aさんは私の存在を認識できる。他の時に、私はBさんと会ったとする。私はBさんの存在を認識できるし、Bさんも私の存在を認識できる。しかし、AさんとBさんはお互いに存在を認識することができない。そうすると二人はお互いに存在するかどうか分からない。そうすると普遍の実態のない私たちの存在は、何を普遍の実態とするのか。それを仏とするならば、仏に向き合うことで私の存在が意味あるものになる。

#### IV. 仏にお参りをする

私は、仏にお参りをすることで私が意味ある存在になる。先ほど私は仏を普遍の実態といった。他の表現として絶対的善といえる。

お参りをするというと、死者の成仏を願うと理解する人もいれば、死者の生前の思い出を語るという人もいる。しかし、お参りをする対象は仏であるから、仏に成仏を願うというはおかしなことだ。

先日、妻の母親の五十回忌だった。妻の母親のお墓は遠方のお寺にあった。五十回忌を済ませてから墓を撤去することにした。遠方であるため、お墓参りもできないので、お母さんのお骨を持って帰ることにした。帰ってから、お母さんのお骨を仏壇に置いた。すると、隣に一年前に亡くなった私の母親のお骨があった。二人はどんな挨拶を交わすのだろうと思った。心配しながら顔をあげた。すると、仏壇の奥に阿弥陀仏が立っていた。

そうだ、どちらの母親も挨拶を交わす必要はないのだ。どちらも極楽浄土という阿弥陀仏の世界で仏に成っているのだから、何も心配はいらない。

妻の母親が亡くなったのは、私も妻も中学生だった。その時、私は妻の存在も知らず、その母親の交通事故も知らなかった。しかし、お母さんが亡くなる時の思いに心を寄せることはできる。どんな思いで亡くなっていったかと想像をすることができる。ここに共感がある。この共感を普遍化するというのは、仏とし認識す

ることである。

仏とは絶対的善である。こんどはこの絶対的善に手を合わすのが、お参りである。お参りをするとどうなるか。それは絶対的善に向き合うと、自分の矮小さが見てくる。一方で、仏はどうしているのか。仏は、私を見つめているのだと思う。お母さんは妻を50年間ずっと見つめてきたのだ。

その眼差しはとってもやさしいものだと思う。ずっと見つめているということ、監視されているように受け取るべきではない。立派な人生をすごすことができないのは、仏の側からはすべて承知であろう。だからこそ、やさしく温かい眼差しを向けてくださる。その眼差しを受けながら生きるということは、とても意味ある人生だと思う。

## V. まとめ

対人援助の基本は、共感だと思う。その共感を普遍化させるところに、仏教の働きがあるのだと思う。



## 1. PayPay と SUICA

ここ数ヶ月の最も大きな変化と言えればあれこれ PayPay で払うようになったことだった。これまでもカードを使っていなかったわけではない。チャージして使うカードはいくつか持っていた。ところがここに来て、もう全て PayPay にまとめてみようかという気持ちになった。意外にやってみると快適だ。PayPay はあちこちの店で使える。

思えば、日本はキャッシュレス化がまだまだ進んでいない。アメリカに行くと日本のお札は本当に綺麗だと思う。アメリカはどの金額のお札も色やサイズは一緒だし、ぐちゃぐちゃに丸めている人が多い。これは昔からだ。アメリカは日本人ほど現金を使うということはないからなのだろう。俺がアメリカに留学していた 33 年前はチェックブックで買い物をしていた。綺麗な柄が入った小切手で小さな額のやつでも、これで買い物できる。だから現金なんてチェックブックを受け入れてくれないところ以外では使わない。ちなみに 1 年間アメリカで生活してチェックブックを受け入れてくれなかったのは、映画館とバスだけだった。他は全て使えたのだ。

2 年前にアメリカに行った時は、マネークリップというやつがあって、クリップでお札を止めて、それをポケットなどに入れていることがわかった。どっちみち大きな現金は使わないからということなのだろうか。お札を裸のまま持っているというのもアメリカらしくていいなあと思ったものだった。

これからは俺も PayPay に変えよう。これで小銭入らず。使ったお金の記録も残る。一石二鳥、断捨離である。

最近になって、京都の市バスでトラフィカカードが使えなくなった。これまで 1000 円で 1100 円分使えていたのでいつも愛用していた。一日券も 600 円から値上がりして 700 円になる。京都のバス賃は 230 円なので、これまでは 3 回乗るんだったら一日券を買った方が得だったのだが 4 回乗る



# 男は 痛い



國友万裕

第41回

『老後の資金が  
ありません！』

んでなくては得じゃなくなる。

それで、これからは徹底的に SUICA を使うことになった。これ、確か東京に行った時に作ったもので、関西は ICOCA を使っている人が多いのだが、どっちみち名称が違うだけで内容はほとんど同じなのでこの頃は SUICA ばかり、しかもスマホのアプリなので極めて楽である。これで京都でバスに乗る時ももっぱらスマホだけあればいい。さらに SUICA はコンビニなどでも使える。PayPay にお金が不足しているときは SUICA で払えばいいのだ。

これで通勤の時もスマホひとつで行ける。また一つ断捨離である。

PayPay と SUICA の生活は極めて快適で、スマホだけあれば出歩ける。これからお札の顔を見ることがどんどん減っていくだろうなあ。

この頃は映画のレンタルももはや配信の時代である。TSUTAYA にはほとんど行かなくなった。本はもっぱら Amazon で買っている。しかも俺はできる限り kindle 本を買うことにしている。スペースを取りたくないのだった。さらに、服もこの頃ヤフーオークションで安く買っている。支払いも現金ではなくクレジットカード。

徐々に生活は身軽になっている。まさにネット時代の断捨離生活である。できる限り、面倒なことは減らしていくそういう生活になってきたのだ。

## 2. いつかは「死」になる。

久しぶりに友人と会った。彼とは大の仲良しなのだが、コロナのせいで会うことができず、半年くらいぶりである。お互いお風呂好きなので、場所は大阪のスパワールドだが、スパワールドに来たのはコロナになって初めてだ。彼と親しくなって 20 年。もう何十回もスパワールドには来ているが、前回来てから 2 年ぶりくらいかも知れない。いつも通り、風呂に浸かって、風月のお好み焼きを食べた。

帰りに気づいたのは通天閣のフグがなくなって

いることだった。

「もうだいぶ前からですよ」と彼からは言われた。スパワールドの近くの空中にあがっていたフグのバルーンは 1 年以上前にづぼら屋が閉店することになったためなくなっただけだ。悲しいけれど、フグは断捨離されてしまったのだった。なんとなく寂しかった。それまでスパワールドに来るたびにこのバルーンを見ると大阪に来たという気持ちになったものだったのに……。通天閣の界隈はいまだに串カツ屋さんや囲碁道場みたいなドヤ街の風物が立ち並ぶ、大阪らしいところなのだから、フグも残しておいて良かったところなのに。

でも仕方がないことなのだろう。京都には文化財として保護されている古い建物がたくさんあるが、お店の宣伝のためのバルーンまでいつまでも保護しておくわけにもいかない。また一つものが消えて、新しいものが生まれていく、新しい文化が生まれていく。世は無情なのだ。世の中、全てこんなもの。地球の歴史は何億年も続いていくので、どれだけ長く存在したものでも、ある日そっけなくなくなる日は来るのだった。

人生だって、同じだ。不幸な人でも、幸せな人でも、人間なんて最終的にはみんな死ぬ。そのことだけは避けられない。この原稿を書いている最中にも細木数子が死に、瀬戸内寂聴が死んだ。母は細木数子と同じ 83 歳で今でも元気なのだが、いつ何が起こるかわからない。今度実家に帰った時はお墓の相談もしなくてはならない。俺も弟も結婚していないので、母が死んだらお墓の世話をする人がいなくなる。子供が減っているのは俺の家だけじゃないから、そのうちお寺も潰れていくだろう。新たな納骨制度が始まるのではないか。俺は故郷を憎んで生きてきたため、死んだら西本願寺に入るか、キリスト教の墓地に入れてもらうかどっちかだと思っているが、俺が死んだ後、母や先祖の墓参りは誰に頼んだらいいのか。死んだ後のことなんてほっときやどうにかなると若い時は思っていたのだが、流石に 60 近くになると気になってくるのだった。

11月になって突然ある先生から連絡が来た。その先生は定年退職なさってから京都に来られていなかったのだが、久々に京都に来ることになったので食事に誘ってくださったのだ。まだコロナは終わっていないらしくて木屋町にある名店なのに、ほとんどお客さんは入っていない。そこで豆腐料理を食べながら先生と話した。この先生はとても良い先生だ。真面目で威張らない人だし、いつだって奢ってくれる。

俺がその先生と出会ったのはまだ30ぐらいの頃だ。それからもう四半世紀。30代の前半だった俺は50代後半となり、40代後半だった先生は70代になられた。その間に俺は平和に見えて波乱の人生を歩んだ。いや、俺の心は嵐の日が多かったが、そこで掴み取るものも多かった。この15年くらい、俺は幸せだ。それなりに恵まれた人生だった、だからこそ、人生の終わりが気になるのだろう。

その日は、その先生と「死」について語り合った。その先生が言うには、宇宙飛行士の人は宇宙に出ると「死」の存在を理解するということだった。宇宙にいくと全くの沈黙という時間が長くあるらしい。しかも光も射さない。真っ暗な世界。これがおそらく「死」なんだと彼らは感じるみたいだ。そうなのだ、この世で暮らしていると全くの沈黙ということはまずない。今俺はパソコンに向かってこの原稿を打っているが、夜の寝室でもヒーターの音が聞こえている。この世に全くの「静」なんて存在しないのだ。

その先生は、今は仕事はしていないのだが、家で過ごすことになっても退屈はしないとおっしゃっていた。俺は家にいると退屈してしまうのだが、それは今、仕事をたくさんしているからで、家にいるのがメインになったらそのモードにはいつてしまうのかも知れなかった。家にいてもそれなりにすることはあるのだそう。今はこれまで溜まっていたものを断捨離しているとのことだった。その先生と俺は16歳違いだ。俺はまだ15年くらいは頑張らなくてはならない。まだ断捨離とか終

活をするには早いのかも知れないと思った。

だんだんアラ還に近づいているので、1日に一度は死ぬ時のことを考える。死後の世界についての本を読んでいた時期もあったが、どっちにしろ、死の恐怖はなくなる。臨死体験をした人たちは、一様に死後の世界は怖くない、臨死体験をすると死ぬことが怖くなくなると言っているとのことである。とはいうものの、彼らが目撃したのは本当に死後の世界なのかどうかの確証はない。いくら考えても誰にもわからないことなのだ。死後の世界について思い巡らすこともしばらく断捨離しようと思った。

二人で2時間ほど話をした後、先生はいつも通り、俺の分も奢ってくれた。もう何十回目かなあ。俺はこの先生と食事をして、自分が払ったことは一度もないのだった。

久しぶりにかつての教え子とも会った。彼とはSNSで繋がっていたのだが、突然メッセージが来て彼の方が誘ってきた。彼は20代後半で最近になって結婚し、しかも奥さんとは俺のクラスで知り合ったらしい。今奥さんは単身赴任中で、彼一人のため、たまたま気が向いて俺に連絡してくれたみたいだった。まだ子供はいない、共働き世帯で、奥さんがこっちにいるときは、料理は彼女がしてくれるのだが、片付けや掃除、洗濯は彼がしているとっていた。

いつの間にか男性が家事をするのは常識となってしまった。彼もナチュラルでそのことを嫌がっているわけではない。当然のこととして受け入れている。ほんの数10年くらい前までは「男子厨房に入らず」なんていう言葉があったことを考えれば、男女関係は信じられないくらいに変わっているのだ。そういえば、昔は既婚の女性が単身赴任なんていう話も聞かなかった。

彼とはうちの近くの焼き鳥屋さんで2時間ほど食べながら食事をした。やはり二人で食事をするのならば2時間が目安なのだろうか。今度は俺の方が奢った。

彼とはSNSで繋がっていたことで、長年のブラ

ンクがあるのに再会できた。そのことを考えれば、SNSは断捨離しないほうがいいだろう。この頃、SNSはアカウント持っているだけで見ていない人が増えているし、繋がっている友達の中には名前すら覚えていない人もいるので、そろそろ断捨離しようかとも考えていたのだった。

### 3. 身体を治癒し、心も断捨離

猫背改善ベルトを買った。猫背は子供の頃からだ。俺は大体胸を張って生きてことがない。常に誰かに気を遣っていた。俺は常にカーストの一番下の男子だった。したがって、性格が体型にまで影響してしまったのだ。

装着して数日は快適に思えた。これをつけておくと肩こりが治ると聞いていたのだが、事実数日はマシなようにも思えたのだ。しかし、その後痛みが激しくてどうしようもなくなっていって。

これまでとは違った姿勢で生活することになり、どこかに無理が来てしまっているのだろう。スパワールドでは、1時間かけてマッサージをもらったのだが、もみ返しと湯疲れが来てしまったみたいで翌日はつらかった。近所のリラくるに駆け込んで、30分だけマッサージしてもらった。それでもつらい。その後今度はいつものマッサージの人に家に来てもらったが、まだしんどい。その後、ボクシングに行って、整体師のお兄さんにマッサージしてもらった。なんと週に4回もマッサージ。これではお金が持たない。何とかしなくては！

猫背は腹筋が問題しているみたいで、猫背矯正ベルトも肩の形を矯正するのではなく、腹を矯正するベルトを買った方がいいとのことだった。腹筋かあ〜俺が一番苦手な分野だ。単純に家で少しずつ腹筋すればいいのだろうが、翌日どうなるかが怖くてできないのだ。翌日、筋肉痛で仕事できなくなったら・・・俺はそういうことを心配しなくてはならない歳になってしまったのだ。

また、最近になって漢方薬も買った。頻尿なの

だ。前にミニドッグを受けた時に言われたのは、年齢的に尿の問題が出てくる歳なのだそうだ。トイレに行っても尿は出ないのだが、尿意だけがあって、何度もトイレに立ってしまう。これをどうにかしなくてはならない。漢方薬を飲むようになって、多少は尿の出が良くなってきたようには感じる。でも気のせいなのかも知れない。まだまだ道は長い。

俺の人生はもう終わりに近づこうとしている。それが最近になって感じることだ。昔ほどがむしやらしするような気分でもなくなっている。そこそこに頑張って、そこそこにやっていければそれでいいかという気持ちだ。これは投げやりなのではなく、居直りなのだった。自分の限界がわかってきた。人間の人生は運によるものが大きい、したがって、報われようが報われまいが、それは全て運なのだという気持ちになってきている。

幸い、人の不幸を喜ぶこともなくなってきた。人と比べて優越感を感じることもなくなった。永遠に生きたいとも思わなくなってきた。もうこの世での生活に徐々に疲れが出始めているのだ。俺はこれから先30年生きたいとは思わない。とは言うものの、死ぬのは怖い。人生に対する執着が全くなかったわけではないのだ。

今、スポーツクラブはお金は入れているのだが、ほとんど行っていない。勿体無いのだが、やめてしまうと全く縁が切れる。スポーツマンでは無くなってしまふ。せっかく、水泳はできるようになったのに、プールには一生繋がっておきたい。でも勿体無いなあ。

その一方でボクシングジムは、チケット会員なので、時々行けば良いのでどうにか通っている。俺のトレーナーは元教え子の男の子だ。彼はイケメンで、お坊ちゃんで、スポーツマン。彼を見てるとつくづく俺もこう生まれたかったと思う。

今の子を見ていて思うのは、昔よりも確実に優しくなっているし、礼儀正しくなっていることだ。今は自殺、引きこもり、失業、神経症などが日常時になってきているため、自分だって場



合によってはそうなると思っているのだろう。

これは昔に比べれば大きな進歩だ。

今だって思う。中学校の時の体育教師の家に行って文句を言ってやろうかと。しかし、そんなことをしても俺が罰せられるだけのこと。悲しいことに。あいつは校長になったというけど、あれから40年以上も経っているから、その間にはあいつも成長はしているのかも知れない。俺が引きこもりだった頃に、ある女性の映画評論家が不登校の子に対して全く無理解な発言をしていたことを思い出す。今あんなことを言ったら大変なことになるだろう。しかし、あの当時の人たちは、世間の規範は一つしかないと頑なに信じていたのだ。今思えば愚かしい人たち。そういう育ち方しかできなかった彼らもかわいそうなんだから、それはそれで許してあげなくてはならないのかも知れない。

しかし、トラウマは終わらない。

やはり、こうやって振り返ってみると俺の人生はまだ昔のわだかまりを消化していない。人間は変わるようで変わらない。俺だってまだ完全に変わったわけではないのだった。

しかし、どうすることもできないのならば、その感情と付き合いつつ、一生を終えていくしかない。今まで60年近くも生きてきたのだから、これからの人生もできるはずだ。そう思いたいところだ。

これからは心の断捨離をどうにかしなくては！綺麗な心でこの世から旅立ちたいと思う。還暦を過ぎたら、自分のためよりも他人のために生きることを考えよう。

#### 4. 変わるイケメン

最近、若い男性の顔が変わってきたように思う。俺は、今の日本の若い男優では、真剣佑はイケメンだと思うのに、吉沢亮はイケメンだと思わない。そのことを学生たちに話すと、「今は中性的な顔が流行りなんですよ」とのこと。真剣佑も綺麗な顔だけど、彼は「戦う男」というイメージがあるか

ら、吉沢亮に比べれば伝統的な男性顔とのことである。

なるほど、戦わない男、ただ美しい男が今は流行しているのだ。そう考えれば良い傾向と言えるだろう。俺は「男は戦う性」であるという考えにずっと反発してきたのだから。中性的な顔の男性をイケメンと思わない俺は、まだ男らしさに囚われているのかも知れない。やはり感覚が古いんだろう。仕方がない。俺はもうアラ還だ。学生たちとは親子以上に歳が離れてしまっている。

もっと年代が上の俳優で、俺がイケメンだと思うのは、山田孝之と妻夫木聡である。皮肉なことに二人とも九州の出身だ。俺はこれまでこの連載にも書いてきた通り、九州での少年時代に怨念を抱いているので九州の人と聞いただけで偏見を持ってしまう。しかし、にもかかわらず、イケメンになったら、この二人を思い出す。俺は結局、ソース顔で目鼻立ちがきちっとした人をイケメンと思ってしまうらしい。

妻夫木と山田は二人とも『ウォーターボーイズ』でブレイクしている。妻夫木は映画版でデビュー。山田はテレビ版である。ウォーターボーイズは競技としてのスポーツではなく、男の子の裸を可愛く撮ったという意味でいい映画だった。

山田孝之は、最近、『はるヲうるひと』で、小さな島の売春宿で働いている主人公を演じている。山田は、『ウシジマ君』『電車男』『全裸監督』『凶悪』など、こういう役が専門になってきている。彼のようなイケメンがこういうオタク系や癖のある系の役を演じてくれるのは嬉しいことだ。

しかも、彼は胸毛がある。それも相当濃いみたいで、その証拠に彼は髭剃りあとも物凄い。

過去の日本のスターで、誰よりも胸毛で有名なのは加山雄三だろう。しかし彼は肌の色が濃い、スポーツマンだ。加山雄三は海の男でもあるので、映画の中でも相当海水パンツ姿を披露している。もちろん、胸毛もたっぷりだ。

山田孝之は色白で特別スポーツマン的なタイプではないので、胸毛のニュアンスが違ってくる。

ちなみに山田は映画で裸になる時は、大概是剃っているみたいで、よほど胸毛があった方がよいキャラの時以外に彼の胸毛は見たことがない。

やはり、加山や黒沢年男や長嶋茂雄のような胸毛のある男が女性から人気のあるスターになることはもはや難しいのかもしれない。今の若い男子はエステもしているし、他の学生たちも、「したいやつはすればいい」と言っていた。そうなってくると、これから胸毛キャラの役者はますます少なくなっていくだろう。胸毛のあるやつは剃ってこいということになるからである。

かつては日本の女性は、胸毛は嫌いだと答える女性が多くて、俺は何度も腹が立ったものだ。昔の女性たちは、自分達は容貌のことを言われると深く傷つく癖に、男には言っていると思っていた。その一方で胸毛を気にしたりする男は男らしくないとも宣っていた。男なら容姿のことなんて気にするなという考えである。今はそういう女性は減って、男のエステも増えて、かくいう俺もついに胸毛の除去に成功したので、これで一人前になったという気持ちだ。男が外見を気にことが許されるようになった。これも進歩なのである。

妻夫木は『悪人』では癖のある役をやっているが、彼の方が山田よりも屈折していない好青年というイメージが強いと思われる。彼の映画で何よりも印象に残っているのは『ジョゼと虎と魚たち』の街中で泣く場面。ナイーブで、息子にしたいというイメージの役が似合う人である。

ちなみにドラマ版の『ウォーターボーイズ』には森山未来や瑛太も出ている。森山未来はイケメンではないが、『苦役列車』『アンダードッグ』などハンタリーな男の役が意外に似合う人だ。瑛太は、『まぼろ駅前多田便利軒』『友罪』『リングサイドストーリー』などが代表作だろう。こうやって4人並べてみると妻夫木が一番明るくて優等生的である。こういう子を親は持ちたいと思うのだろう。

この頃、日活映画の古い映画が、アマプラで見られるようになってきた。吉永小百合や石原裕次郎などまさに戦後高度成長期を象徴するようなス

ターたちが主演を演じている。しかし、俺は吉永小百合が演じるヒロインには反発を感じる。クラス委員キャラと言ったらいいだろうか。裕次郎など男子の方は皆ちょっとずつ捻くれているが、それを制する女性として彼女は現れるのである。まさに清純派の代名詞。健気でひたむきな優等生。そこが、今となっては胡散臭い。

この時代の映画を見ていると、「この頃の日本は貧しかったんだねー。だけど、あんたたちは幸せだよー。こんな単純でアホでも生きれるような時代に生まれて」と叫びたくなる。愚かしい時代である。

その後の70年代となると秋吉久美子や桃井かおりなどが大胆なヌードを披露し、「シラケの時代、万歳」という雰囲気になる。この時代の映画は青春のやるせなさを描いているので、若い頃は共感したりもしたものだが、今見直すと、「セックスばかり考えているんじゃないよ。品がないんだよ。あんたたち」と言いたくなる。

80年代はただひたすら明るい時代。薬師丸ひろ子や斉藤由貴の時代だ。俺はこの世代に属するが、俺は時代の流れについて行かれなかった男なので、映画としてはそれなりに良くできていても、気分が悪くなる部分があるのだった。あの頃はネアカ時代だったので、暗いことが罪であるかのように言われたのだった。

そこでバブルが弾けて、90年代は多少陰りが見え始めた時代。そして21世紀は徘徊の時代である。ポストモダン、「私たちから私の時代へ」と言われるが、全体の規範よりも個々の人々を考える時代だ。自分を殺してまで大勢に従う必要はない。

幸い、結婚制度はだいぶ破綻してきて、一生結婚したくない人は増えている。駆け落ちや心中やリストカットも聞かなくなった。今の若い人は、仕事があまく行かなくて自殺する人はいるけれど、恋愛のためには死なない。そもそも、俺の両親の時代はまだ見合いで結婚する人が多かったわけで、恋愛至上主義の80年代が変な時代だったのだ。

こう考えてくると今の方がいい！ 男がムダ毛を処理しても構わない。恋愛至上主義でなくても構わない世の中になったからである。俺はもっと遅れて生まれてくるべきだった。

## 5. 『老後の資金がありません！』

(前田哲監督・2021)

タイトルに惹かれてこの映画を見た。

ストーリーはタイトルを見ただけで何となくわかる。天海祐希の主演だが、彼女はごく普通の主婦で夫と子供二人の4人暮らし。ヨガに通っていて、他のお婆さんと世間話をしているような生活臭のする主婦である。

その彼女が姑(草笛光子)を預かることになるのだが、このお婆さん、老年になっても至って元気、天然みたいな人で、オレオレ詐欺にひっかかり、後先のことも考えずに散財したりしてしまう。娘は結婚するため、結婚費用がかかる。それに追い打ちをかけるように夫は失業である。預金残高はみるみる減っていく。

ここまで来ると作り話であることは歴然としている。いくら何でも、ここまで短期間にこれだけの深刻なトラブルが連続して起きるといえるのはでき過ぎている。あくまで娯楽と割り切って見る映画なのだ。

現実的に考えれば、深刻な話なのだが、それを明るく笑い飛ばす映画である。何よりも「うちは二人とも失業中だから」という台詞がいいと思った。昔だったら、こういう場合に経済的責任のしかかるのは男の方だったはず。今は必ずしもそうではないのだ。共働きが普通になってしまっている。

天海扮する妻は夫の失業の連絡を受けた時に、経済状態よりも彼が自殺でもするかと心配になる。これもいい。仕事がなくなったからといって自殺することはない。昔だったら、男が仕事を無くすとなったら、それこそ命を無くすような一大事だったのだろうけど、その縛りから男を解放してあ

げなくてはならない時代となったのだ。

夫がハローワークに仕事を探しに行くと、「同じ会社しか知らない男」であるがため、新しい仕事が難しいというフレーズが出てくる。昔だったら、一つの会社に留まるのが出世の道だったはずだが、今はそうとも見てもらえないのだということがわかってくる。

そしてラストは、予想通り、お金なんかなくても幸せはあるのだというところで終わる。

草笛光子は最近になって、年齢の割に若い女優の代名詞的存在になってしまったが、この映画はハマり役である。一方、天海祐希は、綺麗だけでも男顔の女性だ。ジェンダーの反転の時代なのである。

そういえば、最近『猿楽町で会いましょう』という映画も見したが、この映画でヒロインと同じところでバイトしている男の子(大窪一衛)が、中性的なキャラ。ゲイ役なのかと思って見ていたら、そうではなく、ヒロインを襲おうとする場面が出てくる。この人、声色が極めてユニークである。

『きのう何食べた』の劇場版では、内野聖陽があまりにもゲイ役がいたにつき過ぎてきて、やや臭く感じるようになってしまった。彼にとってはこの役は当たり役だが、彼がうまく演じれば演じるほど、ゲイの人を真似して、馬鹿にしているようにも見えてくるのだった。

これからはステレオタイプを外さなくてはならない。映画はどこまでステレオタイプから外した描き方ができるのか。それが今、俺が関心を持って見ているところだ。

こう考えてくると、まだまだ関心事はたくさんある。これから俺も長生きする価値はありそうだ！

# 役場の対人援助論

( 3 9 )

岡崎 正明

(広島市)

## 朝ドラ×対人援助！？

※注意※

今回はネタバレ注意の話が多い回となっております。NHK 朝の連続テレビ小説「おかえりモネ」を今後観るつもりの方は、その点ご了承ください。

### はじめに

2021 年度前期の NHK 朝ドラ「おかえりモネ」は、朝ドラ第 104 作目として 2021 年 5 月 17 日～同年 10 月 29 日まで放送されたドラマだ。

東日本大震災の被災地である、気仙沼の離島出身の主人公、永浦百音（「ながうら ももね」と読むが、あだ名がモネ）が気象予報士となり、故郷との関わりを模索していく中で成長していく青春群像劇一。ざっと説明するとそんな感じの物語である。

個人的には脚本とか映像とかテーマとか、全体的にとても好きな作品で、正直ドハマりした。出ている役者さんもみんな好感度が上がったし、ロケ地巡りも行きたい！誰かこの感情を分かち合いたい！！キャー！！

…ただドラマの好みは人それぞれ。なのでこの場で私の趣味を押し付ける気は毛頭ない。

ではなぜ、今回このドラマを取り上げたかということ、いくつかの場面が「対人援助」というフィルターを通してみると、なかなか興味深い気付きを与えてくれた。そんな体験が結構あって。というわけで、少しだけこの場でそのことをシェアできればと思っている。



## 「誰かのため」にひそむ罠

主人公のモネは震災の時にたまたま島にいなかった。それもあって故郷や家族、友人のために「自分は何もできなかった」という無力感を抱いて生きていた。そんな中で出会った気象予報士という仕事に、「私も誰かの役に立てるかもしれない」との思いを抱き、資格をとって東京で気象関係の会社に勤め始める。

ある日モネが仕事仲間や友人と何気ない会話をしていたときのこと。モネは同僚のお天気キャスターから、

「人の役に立ちたいとかって、結局自分のためなんじゃん？」  
と言われる。

また、物語の中で重要な役割を占める青年医師・菅波からも

「あなたのおかげで助かりましたっていうあの言葉は…麻薬です」  
という言葉聞き、『誰かのため』『人の役に立つ』という価値の中に潜むものを考え始める。

公務員は憲法で「国民全体の奉仕者」とされている、まさしく「誰か（国民）のため」に働くことを義務づけられた職業である。

「市民の役に立ちたい」「この町のために何かしたい」といった志望動機は、採用試験での模範回答だ。むしろ「安定した収入が魅力」も悪くないのだけれど。

そして医療や福祉・教育など対人援助の世界でも、「誰かのために役立ちたい」「ありがとうと言ってもらえる仕事がしたい」といった動機づけは、定番中の定番といえるだろう。

そんな風に考えると、役場の対人援助職は二重の意味で世のため人のためを目指して働く、まさしく“誰かのため仕事業界”のナンバーワンということになるかもしれない（そんな業界があればだが）。

しかしこの「誰かのため」というワードは、実は結構な落とし穴をはらんだ言葉だったりもする。およそ 20 年の役場の対人援助業務の経験を通して、そんな気が強くしている。

「誰かのため」が加速し過ぎると、強い副作用が出る。

代表的なものの 1 つが「燃え尽き」だ。「あの人のために…」「あの家族のために…」と自己犠牲的な姿勢が強まると、そのことが報われないと必要以上に傷つき、無力感に襲われていく現象を引き起こす。一生懸命な援助職ほど、陥りやすい罠である。

また、期待した成果が出ないと相手に怒りや憤りを覚える「逆転移」も、ありがちな副作用の 1 つだ。「こんなにしてあげてるのに…」「どうして分かってくれないんだ…」と、対象者や関係者を非難したり、他責的な感情が芽生え始め、無意識に見返りを求める心性が働きがちになってしまう。

対人援助の仕事をした人であれば、多かれ少なかれ感じたことがあるであろう、こうした感情は、援助職が健康を保ち、対象者とのより良い関係を築く上で、大きな課題となる。

## 「役に立つ＝素晴らしい」だけど・・・

ドラマの中では菅波が「あなたのおかげ」が麻薬だと述べた理由をこんな風に語る。

「気持ちいいでしょう、単純に。すべての不安や疲れが吹き飛ばす。自分が誰かの役に立った。自分には価値がある。そう思わせてくれる」

「自分が無力かもしれないと思っている人間にとって、これ以上の快樂は無い。脳が言われた時の幸福を強烈に覚えてしまう。麻薬以外の何物でもない。そしてまた言われたいと突っ走ってしまう。その結果、周りが見えなくなる。行きつく先は、全部、自分のためだ」

菅波のこの言葉は、「誰かのため」「人の役に立つ」という価値観が抱える危うさを、辛辣なまでに言い表している。

誰かの役に立てる存在であることは素晴らしいことだ。誰もがそうありたいと思っている。

だがそれは行き過ぎると、己の承認欲求を満たしたいがための、ただの自己満足の行為につながりはしないか。自分の自信のなさや不安を抑えるための、単なるエゴになるのではないか。菅波のこの危機感は、多くの援助職が胸に留めておくべきもののように思う。

また、私はこの「人の役に立つ」こと至上主義みたいなものが加速し過ぎると、「人の役に立たない存在＝価値が低い」という方程式が成り立ってしまう、そんな危険性も抱えているのではないかと、常々思っていて。

私たちは当事者をつい、無力でダメなものに分類しがちだ。でもその考えは、結果当事者を支援がないと生きていけない、依存的な存在に貶める可能性を高めてしまう。そしてその発想は、思い通りの支援ができていない自身の仕事も、不当に低く見積もってしまうのではないか？そんな自戒と警戒がある。

「どうせ私がやっても・・・」

「あの人ではまたダメだろう・・・」

その究極の行きつく先は、「世の中の役に立たない存在は生きていてもしょうがない」という、あの相模原殺傷事件の植松被告の理論に近いもののような気がしてならない。

## 己を知る。人間を知る。

「誰かのために」

「人の役に立つ」

その価値観は間違っていない。理想であり、正しい姿だ。

しかし、人の世は理想や正しいものだけで成り立っていないし、正しさは時に暴力性を伴うものだということを、私たちは理解しておくべきだろう。

ダイエットや受験勉強の例をあげるまでもなく、ダメだと思っても、ついダメなことをしてしまうのが人間である。「分かっちゃいるけどやめられない」という歌のフレーズがあったが、あれはなかなか真理を突いている。私たちは自己防衛や、言い訳や、

1人よがりや、ワガママと無縁でいられない存在であり、そんな私たちが作る社会も、理想とはほど遠い部分を多く抱えながら回っている、未熟な世界だ。

別に開き直すわけではないが、そういう人間に対する謙虚な自覚というものは、無くしてはいけないものではないだろうか。

また、そもそも自分のために仕事をするのは悪いことなのか？そんな疑問も湧いてくる。生活費を稼ぐため。自己実現するため。家族を養うため。スキルアップするため。好きなことを職業にするため…。お釈迦様のように悟った存在ではない私たちが働くのに、そんな要素が含まれることはごく自然なことではなかろうか。

私自身の中でも今は、私がこの仕事をする⇒地域が少しでも良い方向に向かう⇒将来私の子どもが暮らす場所が住み良くなる⇒私にとってラッキー♪という、手前勝手な動機が大きかったりする。無論生活費のためでも、自分がやりたい仕事を続けるためでもある。

「結果的に誰かの役に立てればいいな…」くらいの思いはあるが、それも結局は自分が好きでしていることで、つまるところ「自分のため」に帰結すると思っている。そういうわきまえが、このやっかいな正しさが暴走することへのブレーキになる気がしている。

オマケにいうと最近、近江商人の「売り手にとっても、買い手にとっても、また世間にとってもいい結果となる商いが、よい商いである」という「三方良し」の考え方が気に入っており。

仕事の動機付けも、「自分のため 33%、当事者のため 33%、地域や社会のため 33%」くらいがベストバランスかなーと勝手に思っている。

## 不確実性と付き合う

「おかえりモネ」は気象予報士という仕事の話だけあって、自然を相手にすることの難しさや葛藤、困難も多く取り上げられていたのが印象的だった。

特に主人公が憧れる先輩気象予報士・朝岡が言った言葉は忘れられない。

ある時、モネの幼馴染の漁師が、突然の悪天候で大時化の海域から抜け出せなくなる。モネは様々な観測データや持てる知識を総動員し、なんとか友人を救おうと動く。朝岡たちの協力もあって最善の予報と対策を示すことはできたが、それでも不安が収まらず、混乱したモネは「何かほかに手は！？」「近くを通る大型貨物船に救援要請を！」などと、現実的・効果的でない対策にすがろうとする。

その時、朝岡がこう諭す。

「誰かを助けたいという気持ちは持ってもいい。でも助けることに成果を求めてはダメですよ」

自然という、完全にはコントロールできない存在を相手に仕事をする者にとって、自分の限界や仕事の不確実性を理解しておくことはとても大切なことだ。下手な万能感や、実現不可能な目標設定は、不幸を招くだけである。

上記の朝岡の言葉は、自然を相手に働くプロフェッショナルとして、実に正しい態度だと思う。

昨今の何事も「エビデンス」や「数値化・見える化」が重視され、常に結果を出すことが当然とされる世の中で、この言葉はある意味時代に逆行することになるのかもしれない。だけど私は気象予報士と同様に、対人援助職にとっても、とても大事な考え方のように感じる。

ヒトという、必ずしも理屈だけでは動かない生き物。そんな自然の産物を相手に働く私たちは、すぐに成果を求めたり、確実な結果ばかりを期待してはいけない。そんな気がしている。

もちろん「誰かの役に立ちたい」とか「助けたい」という熱い想いは持つべきだし、常に今より良い支援を探求することは必要なことだ。しかし、その努力がいつも必ず報われるとは限らない。成果を過度に求め過ぎたり、周囲が義務付けるような風潮は、援助職にとっても、当事者にとっても幸せにはつながらないのではないだろうか。

近頃の福祉、医療、教育といった分野では、確実に見える成果に焦点が当てられ、稀に不幸な出来事が起こると、関係者の責任ばかりが取り沙汰される傾向がある。だがそれは果たして正しいアプローチなのか。天気予報が外れた気象予報士を血祭りにあげても、天気は変えられない。大切なのは、その先の知恵だと思えてならない。

# 臨床のきれはし

浅田 英輔

Sheet15

## self-esteem

以前はある程度専門領域でしか見かけなかったように思うが、最近はあちこちで見かける気がしている、自己肯定感。

私も前はよく使っていた言葉だが、流行り出すと「違うんじゃないの？」といいだすくらいのアマのじゃくである。悪いものではないはずだが、一般的に使われるようになると言葉が先に立ち間違った使われ方もするようになってしまうのは気になるところである。

---

### ○自己肯定感とはなんぞや

自己肯定感とは「自分を肯定する感情」である。自分を肯定するとはどういうことだろうか？何か大成功しなければならぬのか？大金持ちにならないとだめなのか？誰よりも優れたものがなければ、自己肯定感とはならないのだろうか？「あいつよりうまくできた」

「同期の中で最初に出世した」「芸能人と結婚した」「子供が有名大学に入った」とかそういうことだろうか？そのへんは「優越感」というほうが適切なように思う。自己肯定感とはどうもそれとは違うらしい。

自分を肯定するというのは、「自分は最高だ」ではなく「誰よりもうまくやってる」でもない。「こんな自分で、まあ、いいところかな」と受け入れることではないだろうか。100点満点の自分なんているはずもなく、しょうもない面やだらしのない面もあれば、がんばれるところや「ちょっといいかも」と思えるところもあるだろう。「自分のこの部分

は好きじゃないけど、トータルではまあまあこんなもんかな」と思えることが自己肯定感なのではないだろうか。なにも「自分大好き！」でなくてよい。「人に積極的に話していく自分は結構好きかな」「でも調子にのって余計なこと言っちゃうところはよくないよな」「でもまあ、全体的にはそこそこOKな自分かなあ」くらい思えば十分自己肯定感があるといえるだろう。

ただ、ここで気をつけなきゃならないのは、「好き」をちゃんとつかむことができる必要があるということだ。臨床のきれはし Sheet6で書いたが、自分が好きなことをうまく感じられることが大事だ。「こういうのは好きだし、こうするのはきれい」というようにある程度感じる力が必要になる。むしろ、それがあまりない人は自己肯定感が低いかもしれない。自己肯定感とは客観性とも関係あるかもしれない。

---

### ○自己肯定感が低い状態

自己肯定感が低い人というのは、「こんな自分じゃだめだ」とか、好きになれない自分の割合が多い人のことといえる。100点の自分でなければ許せない人は自己肯定感が育たないだろう。さっき書いたように、100点の人なんていないのだから、いつも「だめな自分」でいなければならない。自分を否定する時間が全体的に長いと、自分に対して「ダメ



な自分」の言葉を投げかけ続けることになる。反省は大事だが、基本的に「あのときのあれはだめだったな」という時間なので、反省が長くなりすぎると「ダメな自分である時間」が長くなってしまふ。自己肯定感とは「いい感じの自分でいられる時間が長いこと」とも言えるので、反省はしすぎないことがおすすめである。失敗したことを振り返るならば、「ああすればよかったこうすればよかった」と考えるより、「次はこうしよう」「今度はこうやってみよう」と考えたほうが「OKな自分」でいる時間が長くなるのではないだろうか。

上に「好きになれない自分の割合」と書いたが、自分ってこんなところあるよなあという要素を数えてみたら、「好きじゃない自分が多かった」という要素の割合と、「日々の時間をカウントしたら、いやな自分でいる時間が多かった」という時間が占める割合があるといえる。自分の好きなところが多いほうがいいし（きらいなところがあってもよい）、よい自分でいられる時間が長いほうがよい。それはたぶん自己肯定感に直結している。自分のことがすぎ、きらいというのももちろんだが、「楽しい時間」「楽しくない時間」と分けてもいいかもしれない。仕事がぜーんぶ「楽しくない時間」だったら、自己肯定感は下がっていくかもしれない。つまらない仕事の中にも、少くらしい楽しいことも含まれているはず。たぶん。

自己肯定感が低い人は、まず間違いなく不満や文句が多く、他者を責める発言や、過去

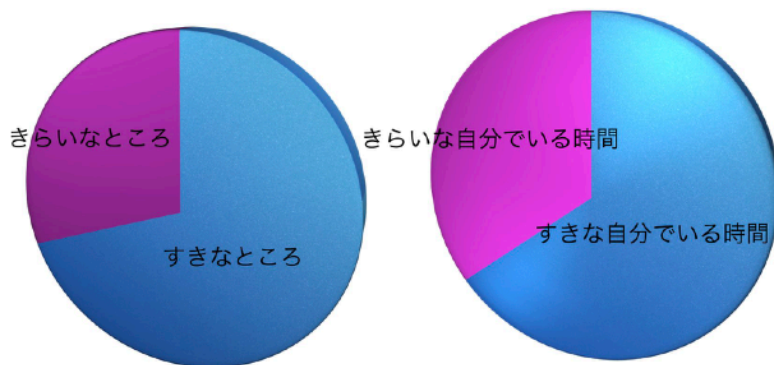
を掘り返していることが多い。他者を責めるのと同時に、自分を認めていない。

## ○自己肯定感を高めるには

では、自己肯定感を高めるにはどうしたらいいだろうか。子どもの自己肯定感を上げるのに、ひと昔前は「ほめる」とか「うまくいっていることをみつける」みたいなことを私も言っていた。それはそれで間違っていないのだが、自己肯定感を他者（いまの場合は親）の評価に依存してしまうことになる。「お母さんがいいっていうからいいことだ」となるのはよろしくない。乳児期はそうであってもいいのだが、大事なことは「自分が自分のことを認められる」ということである。言葉が少し通じるようになったら、自分で自分をほめられるとか、「自分でできた」が喜ぶという方向の声かけが必要だろう。

「できた!」というのは、結構大事なことにように思う。達成感といってもいいかもしれない。皿洗った自分えらい、洗濯した自分えらい、と言語化しておくだけでもよいのだ。それだけでも、「いい自分の時間」が増えるはずである。そう考えると、「臨床のきれはしを15回も書いた」ということは私自身の自己肯定感を高めるのに結構役立っているのだと思う。

毎日毎日、小さい「できた!」（たまには大きめの「できた!」）を積み重ねていくことが、私を作っているのだ。



# 発達検査と対人援助学

## ⑥赤ちゃん調査

大谷多加志

2021年9月30日に、全国に発出されていた緊急事態宣言が解除され、さまざまな規制が緩和されました。宣言中の行動規制は、現在行っている研究活動にも及んでいて、同志社大学赤ちゃん学研究センターと共同で実施していた研究も、その影響を受けていました。

2020年4月から、同志社大学赤ちゃん学研究センターとの共同研究として、赤ちゃんの発達についての調査を実施してきました。しかしながら、同時期にコロナ禍が訪れ、昨年度・今年度はまん延防止等重点措置や緊急事態宣言が発出される度に、調査に制限をかけたり、一時休止の措置がとられたりしていました。コロナ禍が訪れてからは、休止と再開を繰り返してきた赤ちゃん調査ですが、今回の宣言解除で、ようやくまとまった期間の調査が行えそうです。

今回はこの「赤ちゃん調査」についてご紹介しようと思います。

### 赤ちゃん学研究センター

同志社大学赤ちゃん学研究センターは、同志社大学学研都市キャンパス内に設置された、同志社大学に属する研究機関です。学研都市キャンパスは「キャンパス」とは銘打たれているものの、大学の授業が行われる

ことはないため、学生さんの姿はなく、研究専門の施設として用いられています。見晴らしのよい精華台に建てられたキャンパスからは、奈良の生駒山まで一望でき、京奈和道のICからも近い好立地です。

センターには専任の研究者の方や、事務スタッフの方が常駐しておられて、それ以外には、私のように外部から共同研究で参加している研究者の姿もあります。幸運な巡り合わせで機会を得て、2018年から研究に寄せて頂くようになり、今年で4年目になりました。



### 赤ちゃん調査

赤ちゃん学研究センターではさまざまな調査が行われていますが、ここでは私自身が関わっている調査の内容と流れについて説明しようと思います。

現在行っている調査は生後 10 か月の赤ちゃんを対象としていて、生後 1 歳半、3 歳まで継続的に調査を行う予定です。内容としては、子どもの発達状態に関する調査と保護者の育児不安に関する調査の 2 つの内容が含まれていて、赤ちゃんの発達状態の評価には、新版 K 式発達検査を用いています。保護者への調査はアンケート（質問紙）方式です。調査時間は 1 時間の枠を設定していますが、スムーズな時は 30 分程度ですべての調査が完了します。また、

保護者対象の調査と赤ちゃん対象の調査はどちらが先になっても構わないのですが、赤ちゃんの機嫌がよければ赤ちゃんの調査を優先的に済ませるようにしています。各回の調査の流れを図示すると図 1 のようになります。

調査が早めに終わった場合も、保護者の方から感想をお聞きしたり質問を受けたり、赤ちゃんとそのまま少し遊んだりして、おおむね 1 時間程度で完了となることが多いように思います。



図 1 赤ちゃん調査の流れ

### 赤ちゃんがやってきた！

センターの入口から調査室までは、赤ちゃん学研究センターのスタッフの方が引率して来てくださいます。もう相当な回数調査を行っていますが、今でも赤ちゃんと出会う時には楽しみと緊張でいっぱいになります。

まずは、どんな調子で調査室に来てくれるか、要するにご機嫌がいいかどうか気になるポイントです。調査の時間帯（午前・午後）によっても違いますが、居住地や用いた交通手段によって、赤ちゃんや保護者の方のお疲れ具合が違うように思います。ここしばらくはコロナ禍の影響もあって自家用車で来所してくださる方が多く、運転中は眠ってしまう赤ちゃんも多いことから、来所してすぐは少し寝起きで覚醒が低かっ

たり、少しご機嫌ななめな場合も少なくなかったですが、このパターンは少し時間が経ってしっかり目が覚めてくるとご機嫌よく過ごしてくれることも期待できるように思いました。特に、午後の時間帯の調査



では“赤ちゃんのお昼寝の時間にかかるのでは…”と心配になるのですが、車でひと眠りしてくれていると思いがけず調子よく過ごしてくれる、ということもありました。

### ここはどこ？あなたは誰？

10 か月調査に来られる赤ちゃんは、保育園に通っている子どもも一部はおられますが、やはり在宅で過ごしておられる方が割合としては多いです。赤ちゃん調査は、ほぼ平日の日中で実施しているので、その時間枠も影響しているかもしれません。

そんなわけで、ご家族以外の人と会う機会は少なく、ほとんどの時間を自宅やそのご近所で過ごしている赤ちゃんにとって、調査室は見慣れない場所ですし、おもちゃを手に近づいてくる調査者は何とも怪しい存在です。生後 10 か月というと人見知りも強い時期なので、調査者を前に固まってしまったり、泣き出してしまったりということもあります。10 か月の赤ちゃんはまだしゃべれませんが、話せるとしたら「ここはどこ？あなたは誰？」と言いたい気分かもしれません。

### いろいろな赤ちゃん

入室した段階で、赤ちゃんが見せてくれる姿はさまざまで、そこにひとりひとりの個性も表れているように思います。見慣れない調査者に対して、ギョッとしてお母さんの胸に顔をうずめる子、調査者を凝視して目が離せなくなる子、あまり気にせず調査室や調査者を眺めている子、調査者が差し出した検査用具（おもちゃ）に早速関心を示して触り始める子…など本当にさまざまです。

調査者は赤ちゃんの様子を見ながら順次調査の進め方を調整し、例えばすぐに検査用具に手を伸ばしてくれる赤ちゃんであれば、必要書類の記入が終わればそのまま赤ちゃんの発達評価に移行します。一方で、書類の記入が終わってもなかなか場に慣れていない感じであれば、先に保護者の質問紙調査を実施します。

赤ちゃんは「社会的参照（ソーシャル・リファレンス）」と言って、見慣れない人が現われた時に、信頼できる人（例えば養育者）がその人とどのように関わっているかを観察し、その関わり方を通して自分にとって安全な人かどうかを判断するとされています。例えば、お母さんが談笑しているのであれば、おそらく安全な人だと推測できますし、お母さんが怪訝そうにしたり警戒の色を浮かべているのであれば、おそらく警戒すべき他者であると推測できることとなります。そういう意味では、赤ちゃんを連れてきてくれた保護者の方とのやりとりも、赤ちゃんの視線を意識しながら、なるべく安心感を与えるものになるように努めています。

### 保護者の方と

保護者の方は、お母さんかお父さんのいずれかでお越しになる場合が多いですが、ご両親一緒に来て下さる場合もあります。また、ほとんどの場合、赤ちゃんの発達評価の間は保護者の方も同席して観察してください。家族以外の人と遊ぶ姿や、普段は触らないようなおもちゃ（検査用具）に対する赤ちゃんの反応の中には、保護者にとって意外な反応もあるようで、基本的に楽しく興味を持って見て頂けることが多いです。



赤ちゃんは興味を持ったものは、こちらの観察が終わった後もしきりに触って遊ぶので、調査時間の間にその物の操作が目に見えて上達することがあります。赤ちゃんの変化を目の当たりにすると、子どもの育つ力のすごさを実感しますし、保護者の方の満足度も高まるように思います。参加してくださった赤ちゃんご家族にはただただ感謝です。

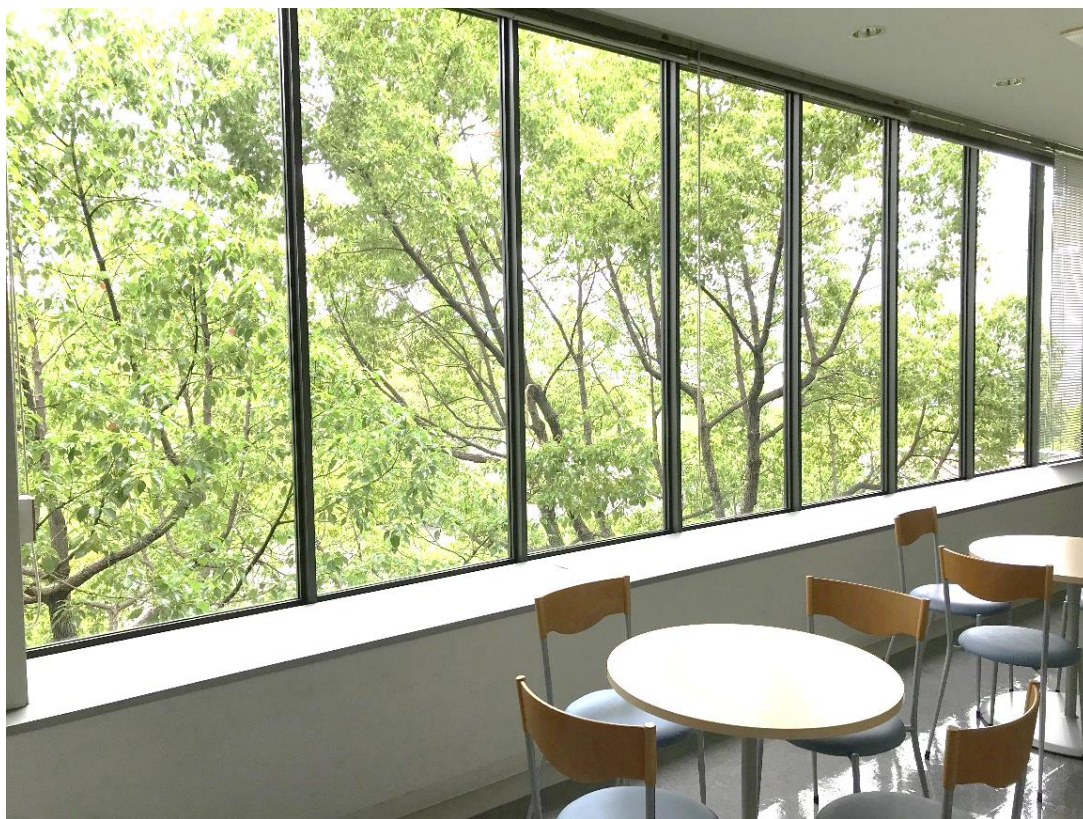
### 調査を終えて

調査を終えると、次回の調査参加のお願いをして(もちろん、先のことなので約束ではなく、ただお願いをだけです)、赤ちゃん調査は完了となります。現在はコロナ対策が必須なので、調査が完了した後は使

用した部屋の設備や検査用具をすべてアルコールで拭き取り、次の調査に備えます。

とにもかくにも、調査協力者の方との日程調整から当日のコーディネートを担って下さり、なによりコロナ禍の中でも対策を講じながら最大限調査が進められるように調整して下さいました赤ちゃん学研究センターの皆さんには感謝の気持ちしかありません。

まだ10か月の赤ちゃん調査も目標件数には到達しておらず、1歳半、3歳の調査も残している状況ですが、これからも子どもたちやご家族との出会いを楽しみながら調査を継続し、これから生まれてくる子どもたちのそだちのために何かひとつでも意義ある結果を残すことができたら願っています。





# 講演会 & ライブ な日々 ②9

古川 秀明

『SC・SSW・養護教諭による新しい学校内対人援助システム物語』

第三話・実践例

## ①統合失調症

リフレクティングチーム：SC、SSW、養護教諭

相談者：中学二年女子茜（仮名）

来談の経緯：養護教諭（保健室の先生）に勧められて来室。

主訴：めまいと頭痛、腹痛が激しい。

最近階段から転がり落ちた。

吐き気が続いている

クラスで話をする人がいない

体調が悪くても、先生とお母さんは2日に一回しか早退させてくれない。

## 家族構成

母親（38歳）母方祖母（69歳） 本人（14歳）

\*母方祖父は3年前に、父親は12年前に病死。

- この家族にはいくつかの特徴的なことがあります。
- 父親の死亡による母子家庭
- 母方祖母との同居
- 一人っ子長女
- これだけ目立つ特徴のある家族の家族療法は、割と扱いやすい。
- この時点で、すでに私の頭の中で、終結までの設計図が完成していました。
- ところが、この後のジェノグラム面接で、その設計図が吹っ飛びます。
- 茜から以下のようなことが語られました。

\*実は父親は病死ではなく、警官に射殺された。

\*理由は、父親は暴力団員で、覚せい剤中毒者。それで人質を取って郵便局に立てこもり、射殺された。

\*母親も毎日父親に虐待を受けていて、右目を失明している。

\*自分も母親から虐待を受けて、わき腹を果物ナイフで切られて、今でもその傷跡がある。

\*授業中、ずっと声が聞こえる。怖い男の人の声で「皆殺しにしないと、お前が後ろの席の奴に殺されるぞ!」と脅してくる。だから先生に頼んで、席は一番後ろの席にしてもらっている。

\*担任の先生は優しいけど、いつも先生の右肩の上に小さい悪魔が座って笑っている。(ゲゲゲの鬼太郎の目玉親父サイズとのこと)

\*おじいちゃんは大好きやったけど、おばあちゃんとお母さんがおじいちゃんの首をロープで絞めて殺しました。それを私は隣の部屋で見っていました。

\*いつか私もこの二人に殺されるかも知れません。

### 「私の考え」

- 思春期の女の子の語るファンタジーにしては内容がどぎつい。
- 主訴である、めまいと頭痛、腹痛が激しい。最近階段から転がり落ちた。吐き気が続いている。クラスで話をする人がいない。体調が悪くても、先生は2日に一回しか早退させてくれない。
- これらを考えると、クラスに馴染めていないことは明らか。
- 家族の情報は、にわかには信じがたいが、真偽を確かめる必要はある。
- 家族情報がすべて嘘であっても、家族に何らかのメッセージはありそう。
- もし家庭もしんどいのなら、クラスのしんどさも加われば、茜ちゃんは毎日相当しんどいだろう。
- まず、学校の持っている情報収集のため、コンサルテーション。
- メンバーは、私、養護教諭、担任、通級指導教室の教師の4人

### 「そこで得られた情報」

- ①友達はほとんどいない。
  - ②昼休みはひとりで通級指導教室に遊びにくることが多い。クラスに居場所がない。
  - ③家族の情報の真偽はわからないが、家族構成については間違いない。
  - ④担任、通級指導、養護教諭、全員が茜のもの凄い話に付き合わされている。特に養護教諭は連日、もの凄い話を聞き続け、疲れていた。
  - ⑤統合失調症の診断、発達検査など、医療対応は家族が「うちの子はどこも悪くない」と頑なに否定的でつなぎようがない。
- 医療に関しては、家族の理解を得られそうになく、家族の承諾もなしに勝手に医療対応などできないので、すぐには難しい。
  - この時点で、私の選択肢はオープンダイアログしかありませんでした。

その理由は、

- ①茜ちゃんの「妄想」「幻聴」「幻覚」は統合失調症の陽性症状と同じで、医師による診断が難しいのなら、オープンダイアログは、もともとは統合失調症の治療からスタートしているのだから、有効に働くのではないか。
  - ②茜ちゃんに関わる学校関係者は「担任」「通級指導教室」「養護教諭」「SC」と幅が広く、また、茜ちゃんはそれらの、大人とのコミュニケーションは割と上手く、良い関係性が取れている。
  - ③この時点で「通級指導教室の教員」と「養護教諭」は私のオープンダイアログの研修会に参加しており、リフレクティングチームを組むことが可能で、即、実践できる体制にある。
- 以上の理由から、茜ちゃんに、これからはみんなで茜ちゃんの話聞いていきたいんだけど、どう？と提案すると、もの凄く喜んでいました。
  - 結果的に中2の秋から、卒業までの1年半、合計16回のオープンダイアログによる面接をしました。
  - 毎回、毎回、もの凄い話の連続でした。
  - これらの現実離れした話を、オープンダイアログチームでバカにしたり、病人扱いしたりせずに、真摯に聞き続けました。
  - そこでチームが気付いたのは、いろんなファンタジーを語っている時の茜ちゃんは、なんだか生き生きとしているということでした。
  - それに、これらのファンタジーの世界を茜ちゃんは毎日生きているのだと思うと、凄く辛いことなんだけど、たまに出てくるBFの話とかは、そのファ

ンタジーが茜ちゃんを守っている面もあるかもしれないと思いました。

- しかし、そのファンタジーはすべて茜ちゃんの、頭の中だけの一人語り（モノログ）でした。
- それをオープンダイアログメンバーが、ポリフォニーにして、みんなで茜ちゃんを応援しました。
- そのことは茜ちゃんをすごく元気にしていきました。
- その証拠に、茜ちゃんは段々と次の面接を熱望するようになってきました。
- 効果はあるものの、私の面接は予約が多く、最低でも一か月は待たないといけない。
- フィンランドのやり方なら、24時間365日、本人が希望すれば、すぐにスタッフが駆け付けます。
- これは確かに有効だと思いますが、学校では無理です。
- しかし、月～金の学校のある間であれば、担任、通級指導教室の教員、養護教諭の誰かが、茜ちゃんの話を書く時間を作ってあげることが可能です。
- そこで、この3人が話を聞いていく体制を取りました。
- 特に養護教諭はすごくがんばらほりました。
- 毎日、授業が始まる前の1時間、茜ちゃんの話を書き続けてくれほりました。
- そのうちに、茜ちゃんの言動に変化が起こりだほしました。
- とても現実離れした話が10割だったのが、1割、1割五分と、少しずつ現実味のある話を混ぜるようになってきたのです。
- オープンダイアログを続けるうちに、茜ちゃんが「毎日眠れないし、しんどい。怖い声も聞こえるし、お医者さんに行きたい」と訴えほました。
- すぐに担任が家族に連絡ほしましたが、全く取り合ってくれほませんでした。
- そこで、お母さんにもオープンダイアログに参加してもらえないか聞いてみたところ、それは承諾してもらえほました。
- ここからチーム学校ががんばりほました！
- 本人、母親、担任、学年主任、通級教師、育成担当、養護教諭の7者によるオープンダイアログを実施されました。(SCはスケジュールが合わず不在でした)
- 何度も丁寧に粘り強くお母さんと話し合いました。
- この時大きな変化が起こりました。
- 今までは、お母さんの意見には何でも「はい、はい」と従っていた茜ちゃんが、この時ばかりは一歩も譲りほませんでした。
- 茜ちゃんの気迫と、チーム学校の熱意で、なんとかお母さんも病院に行くことを承諾。
- このようにオープンダイアログは私（SC）がいなくても、適宜学校で実施

できます。

- もし私の出席を待っていたら、下手したら3ヶ月後になります。
- その後、お母さんに、地域の思春期外来に連れて行ってもらい、受診。
- 今の段階では統合失調症ではなく、妄想による幻聴との診断。ただし、経過によっては統合失調症に移行する可能性もあるので、要注意。
- 軽い睡眠薬だけ処方してもらい、学校での面接は是非続けるようにとの指示を受けました。
- その後のオープンダイアログには、母親も参加してくれるようになり、それと連動して茜ちゃんも日に日に元気になって行きました。
- 卒業を控えた頃、茜の妄想、幻聴はほとんどなくなり、地域の公立高校に進学しました。

#### 「卒業前の最終面接での茜ちゃんの発言」

- 卒業したら、もう先生たちと喋れなくなるのが辛い。
- ずっと先生方と喋っていたい。
- 毎朝保健室で話聞いて欲しい。けど無理やんな。
- けど、なんとなく頑張れるような気がする。

#### 「その後」

- 卒業後、一度学校に訪ねて来て、今の学校で友達もできて、凄く楽しい！と報告してくれたそうです。
- その後、思春期外来に通院することもなく、元気に通っているそうです。

#### 「考察」

- もしオープンダイアログという技法を知らなかったら、統合失調症になっていた可能性が高かったと思います。
- 学校側が、オープンダイアログという、妄想、幻覚、幻聴の対応策を持っていたから、茜ちゃんの対応に落ち着きを失くし、途方に暮れるということがありませんでした。
- オープンダイアログこそ、チーム学校という考え方の切り札になり得ると思います。

今回の実践例はアディクション（依存症）です。

最後までお読みくださり、ありがとうございました。



# 家族と家族幻想 8

坂口 伊都



家族の中に里子を迎え入れた時、  
家族の形が崩れて、新たに組み直し  
ていくように感じた。小さな子ども  
の存在が大きく影響を与えた。

里子にとっても私たちにとっても  
大きな変化で感情が揺れていた。そ  
の中でも大きな感情の揺れは、それ  
ぞれに伝わっていき、余計に落ち着  
かなくなっていたようだ。

今年は、夏のような暑い日がいつまでも続いて  
いるかと思えば、急に季節が進み、暑かったり寒  
かったりで、どの程度着こんだらいいのかわから  
なくなります。朝晩の気温差が大きい毎日ですが、  
皆さま、お元気にお過ごしでしょうか。

10月に入り、緊急事態宣言も開け、我が家に  
いた子とお出かけすることができました。御朱印帳  
を集めているので、神社仏閣巡りをしています。  
子どもの希望で、比叡山延暦寺に行きました。延  
暦寺には、御朱印がもらえる所が何十とあること  
がわかり、どこでもらうか相談です。子どもは冗  
談で「全部？」と言って笑います。とりあえず2つ  
に絞りましたが、決めた御朱印と違う御朱印所に  
並んでいたと気づいて、急遽3つもらうことにな  
りました。子どもは、ルンルンという感じで嬉し  
そうにしています。

これまでこの子は、今度はいつ会えるか聞いて  
いましたが、会うリズムが掴めたのか、必ず会い  
に来るとわかったのか、心配して聞いてくる様子  
はなかったです。子どもの口数が多いわけでもな  
いですし、相変わらずの照れ屋ですが、「ワクチン

打ったの？」と尋ねれば、次に打つ日や1回目に腕が痛くなったことを聞かせてくれました。3人で過ごす時間が、穏やかに流れていきます。一緒に住んでいた頃は、子どもが自身の主張を何とか通さなければと必死になって、手当たり次第にぶつかってくる感じがしましたが、今は流れに身を任せながら、したいこと、したくないことをまっすぐに出しています。肩の力を抜いて、素直に言葉にすることを覚えたのでしょうか。子どもの感情と行動が伴っていると、受け手側もわかりやすくなります。子どもがしたいことを意地になって実現しようとするので、嘘が混じっての駆け引きになり、何をこの子の気持ちと考えて応えたらいいか、どうしたらこの子を守れるのかわからなくなって、疲れてしまいましたが、今はその駆け引きなしで話ができ、いい距離感が保たれているのだと感じます。いろいろな経験を経て、嬉しいことも辛いこともありながら、子ども自身を取り巻く大人や友達、そして自分を信用してもいいことを知ったようです。別れ際に、子どもが育てたマーガレットをプレゼントしてくれました。

子どもが大きくなると、家族よりも友達と過ごすことを優先させ、家族と過ごすことを嫌がりますが、こうして子どもと一緒に出掛けられることを有難く思います。この子と一緒にいろいろな場所に行きたくなりますし、楽しみです。もっともっと会いに行きたくなりますが、程良い距離感を維持していくことが長続きのするコツなのでしょう。今のペースを大事にしようと思います。比叡山延暦寺の本堂が修繕工事をしていて、完成予定の頃には、この子も成人に達しています。補修工事を見ながら、本堂が完成したら、また一緒に見に来たいねと話しました。本当に一緒に行けるかどうかはわかりませんが、皆の感情が素直に揃う心地よさがありました。

里子を迎え入れた時、上手く回らない感じはどこから来るのだろうと考えていました。我が子でもコミュニケーションが上手く取れなかったり、

何を考えているのかわからなくなったりというのはありますが、何とか子どもを信じようと幼かった頃の子どもの姿を思い出したりして、自分の気持ちを宥めていましたが、里子の場合は、出会ってから日が浅く、この子にもこういうところがあるという感覚を持ちづらかったです。そこに子ども自身の感情の波や揺れ、その空気が家族全体に伝わり、振り回されていたように感じます。里子から発せられる感情の波や家族一人ひとりの戸惑いの感情、上手く回らないイライラ、そういう感情が家の中が覆われていました。それぞれの落ち着かない感情がぶつかりあい、アップアップしていたように思います。激しい感情が出てくると、その場を支配する力を持ちます。もっと一人ひとりの感情に注目していたらと改めて感じているところです。



感情は、どれぐらい親や大人に拾いあげてもらってきたのだろう。泣いている時、笑っている時、気持ちが落ち着かない時、何を言われていただろう。

感情は、自然と湧き上がってくるから、感情に押しつぶされそうにならないようにしている時もある。その時は、何か理由をつけて、その言葉で感情を紛らわそうとする。そのバランスが上手くいかないと、同じことを繰り返してして途方に暮れてしまうようだ。

人が出会うとその場の空気感を共有します。例えば、穏やかな雰囲気職場に厳しい表情の上司が入って来ただけで空気がピリッと引き締まったり、試合の勝利を諦めかけた時に誰かの一言で活気が戻ってきた等、日常で様々な場面があります。また、同じ人でも雰囲気が違うと感ずることが誰にでもあります。今日は機嫌が悪いのかな、元気がないな、いつもよりテンションが高くて何かいい事でもあったのかな等です。強く出る感情は感染しやすく、伝わるだけでなく、その感情に同調

していきます。

本能的に考えると、ネガティブな感情の方が感染しやすいそうです。ジャングルで天敵に襲われる時、集団の中の誰かがそれに気づき、それが素早く伝われば、迅速に対応できるからだそうです。

生き残るためのスキルとして残っているのでしょう。

自分の感情をどう扱ったらいいかわからずに暴発させてしまう状態の家族がいたら、それが伝わっていき、家族全体が迷走を始めても不思議ではありません。家族の中でもいろいろな場面で感情がぶつかりあいます。生まれたての赤ん坊は、まず泣くことで不快を訴えてきますが、なかなか泣かせ止ますことができないと、小さな泣き声がとても大きく感じます。大人が子どもの気持ちを「痛くて悲しくなったねえ」や「仲良くできて嬉しかったね」等、代弁してもらうことで、子どもは自分の感情を知ると言われていますが、親が子どもの泣き声を避ければ、赤ん坊は泣いて訴えていくことを諦めていきます。赤ん坊の最初に向けられる大人への感情は、不快です。何とかして欲しい、助けて欲しいが最初の人との関わりです。でも、その不快をぶつけられて大人側が辛くなってしまうのは、感情が伝わるからなのかもしれません。育児が上手くいかないという中に子どもが泣き止まない、癩癩がひどい状態だとよく聞きます。子どもは、生き延びる術として生まれ持ったコミュニケーションを駆使しても、大人側が上手く扱えないとどちらも辛くなっていきます。

湧き上がってくる感情を自分の中で処理していく練習は、子どもの頃から始まります。子どもが悲しい時は、大人も悲しい顔をして慰め、ニコニコと笑って喜んでいれば大人も明るい表情を返します。そういうやりとりをする内に感情を分け合い、自分の中の折り合いをつけていくことを学びます。逆に子どもが悲しい時に、大人が「そんな事はしたくない、泣かないの」や嬉しい時に「それぐらいで喜んで恥ずかしい」等、子どもの感情

と相反する対応をされ続けると、子どもがそう思うことはいけないことと感じたり、自分の感情と上手く折り合いをつけることができなくなったり、混乱すると言われていました。子どもの癩癩もここと繋がりがある程度あるようです。自分の感情を落ち着かせる術を知らずに大人になって、苦しむ人を多く見てきました。

誰にでも折り合いが上手くいかない感情や感情が暴走してしまう場面があります。例えば、わけがわからない不安に突然襲われて、頭では大丈夫とわかっている不安が消えなかったり、イライラして我慢しきれずに、最後には怒りが爆発したというような経験はないでしょうか。自分の感情が上手く扱えなかった後は、気分も落ち込み、どっと疲労感に襲われます。感情と折り合いをつけられないことが増えれば、それだけ疲弊していくことになります。

家族円満を望みながら、何故か上手くいかない。上手くいかないどころか、喧嘩をしてその際、誰かが包丁を手にするほどの激しさになることもあるようです。家族間で喧嘩をして包丁が出てくることは稀ですが、私が仕事で出会う家族から包丁を持ち出したという話を耳にします。夫婦喧嘩で妻が、親子喧嘩で子どもが、きょうだい喧嘩で下の方がというように弱い立場にある方の感情が爆発した時、あるいは親が子に向ける話も聞いたことがあります。この場合は、子どもの方の感情が爆発して、その状況に対応できずに親の方も追いつめられていました。そして、家族間の中に包丁が向けられた事実について、全くもって大したことはない、軽く語られる印象をどの方からも持ち、話し方から包丁を持ち出すほどのパニック状態、包丁を向けられる恐怖というものが伝わってきません。その部分について、深刻になることを避けているように見えました。感情が動かないように蓋をしているかのようです。いつものコミュニケーションでは、嫌なことを言われても感情を閉じてやり過ごし、抑えこみ続けているように見

ます。そして、誰かを頼ることを怖がっています。

人が集まれば、摩擦が起きます。険悪な雰囲気になることは誰にでも起こり得ますが、何とか感情を落ち着けようと試みます。そのやり方が上手いなあと感じる人は、自分の中に溜め込むのではなく感情を外に流しているように見えます。いい意味で、他者に対しても己に対しても固執せず、何とかなると、悲観していないと感じます。自分一人で何とかしようとせず、お願いすれば手を貸してくれる人がいると信じているように見えます。

その差は、何処から起きてくるのでしょうか。誰に出会い、人や社会をどのようなものと捉えられるのかで変わっているように見えます。子どもなら、自分の感情を受け取ってくれる大人に出会えるかどうか大きいようです。例え、親に気持ちを落ち着かせてもらえなくても、周りにいる大人の誰かに感情を受け止めてもらい、落ち着かせてもらえる経験を持てると他者も感情も怖がらずに済みます。自分の感情を受け止めてもらえないと自分の感情を持て余し、他の人の感情にまで気が回りません。自分の感情を見て見ぬふりをします。

そうして過ごしてきた人に他者の思いを伝えてもピンとこなくなります。感情には触れず、理屈づけに必死になっています。例えば、小学生低学年の子どもが門限を破って、私は心配して怒っているのに反発して「他の友達もこの時間まで遊んでたもん」と言い、なかなか謝らない。「誰と遊んでいたの？」と聞いても言わない。反発ばかりして、腹が立った。理由を言ってくればそこまで怒らなくて済むけど、もう外出禁止にしたと言います。何で誰



でいたの？」と聞いても言わない。反発ばかりして、腹が立った。理由を言ってくればそこまで怒らなくて済むけど、もう外出禁止にしたと言います。何で誰



と遊んでいたか答えなかった時の子どもの感情かを聞いてみると、その母から子どもの感情を予想する言葉は出てこず、子どもの気持ちがわからないと話します。子どもの気持ちがわからないのは、親として辛いことですよと伝えながら、一緒に子どもの感情を考えていくと、ゆっくりと感情に目を向けていきますが、それでも母は、小学生になれば自分の考えを話せるはずと感情から遠ざかりたがります。子どもが大人と同じように考えられるだろうかを話し合うと、子どももどうしたらいいかわからなかったのかもと語られていました。理屈を付けていっても、その理屈が続かず、自分ができないから同じことが繰り返されると終着します。感情を見ることができれば、子どものことがもっとわかりやすく感じるのでしょうか。泣いた時や気分が高揚し過ぎた時に気持ちを落ち着かせてもらえると、他の人の感情も見続けることができるようです。

日常生活の中で、私たちは感情を隠して生活しています。例えば、泣きたい気分でも何でもないかのような顔をして電車に乗ったり、周りの人に気づかれないように過ごそうとすることは多々あります。感情についての話をするのは、親しかったり、信頼できる人に限られます。感情を訴えるのは、自分の弱さや醜さ、未熟というような部分



を見せるようで、気恥ずかしいものです。大人になると感情を抑え、理性を保つことを求められます。だからと言って、感情を見て見ないふりをし続けることは不可能です。

よく、「今は、見守るしかない」と言いますが、そこには2通りあるように見えます。一つは、見守るという言葉に隠れて何もしないでいること、もう一つは、相手の感情に目を配りながら、適度に声をかけていく。声をかける内容は、その人への気づかいとこちら側の気持ちでしょうか。例えば返事をしてもらえなくても、こちら側があなたのことを気にかけている、そして支えたいと思っていることを伝え続けていくことです。いつでもあなたを受け入れる気持ちがあることを伝えて続けてもらわないと、助けても言えなくなります。感情を見せてもいいというメッセージをもらえることが大事だと感じています。

大人になると、感情を隠そうとすることが増え、平気そうな顔をして過ごそうとする。それでも感情は、自分の中の大切なものとして人の中にあり続けるもの。だから、大切にしていきたい。



## 2020年コロナ禍で迎えたシンポジウム

村本邦子（立命館大学）

8月のむつでのプロジェクトはオンラインとなった。むつ市長はコロナ対策に強いリーダーシップを発揮して話題になっていたが、4千人大規模接種を目指し市職員全員が運営スタッフとして携わる方針となり、9月末までイベント中止、県外の出入りにも自粛要求がなされていた。残念だがやむを得ない。緊急事態宣言は9月30日まで延長されたが、10月の多賀城でのプロジェクト、むつでのフィールドワークを実施することができた。11月の宮古でのプロジェクトは、協働機関が高齢者福祉を含む事業展開をしているため、対面でのイベント開催はかなわず、オンラインとなったが、フィールドワークは実現した。12月の福島も現地開催を予定して準備中である。

限定された条件下ではあったが、とにもかくにも最終年、院生たちを現地に連れていくことができ良かった。オンラインでのプロジェクトの利点もあり、今後活かしていけるものではあるが、やはり、その土地に身を置き、季節のなかの自然を感じ、土地のものを食し、人々と出会うことにはかなうものはないと思う。

それにしても、ここまで長引くことになろうとは。11月末現在、感染者数はそれほど増えていないが、気温が低い時期に全国に感染者が増加する北海道で徐々に増加していることが指摘され、第六派への警戒が呼びかけられている。



## 2021年1月 コロナ禍の始まり

2020年1月、武漢で原因不明の肺炎が確認され、WHOが新型コロナウイルスとした。武漢は封鎖され、外務省は中国にチャーター便を送り、日本人を帰国させた。第一便の帰国は1月29日だった。1月28日に武漢への渡航歴のない運転手の初感染者が発表されてから、急激に報道が増えていった。

とくに、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の話題で持ちきりになった。1月20日に横浜港を出発し、1月25日に香港で下船した乗客の感染が2月1日にわかり、2月3日に横浜に帰港したクルーズ船からの下船が認められず、5日から2週間の検閲が行われた。最終的に700人以上の感染者を出すことになった。

1月終わり頃にはマスク不足が発生した。私は、1月31日から2月3日、実家に帰り、インフルエンザになった両親の看病と介護をしたが、地方都市に住む妹がマスクを送ってくれた。2月5日・6日は修士論文の口頭試問だったので、万が一にもインフルエンザの感染を起こしてはいけないとマスクをつけ、人と距離を取っていたが、周囲にはコロナを恐れている人に見えたようだ。

2月13日、国内で初めての感染者死亡が報じられ、「市中感染」が怖られるようになり、2月16日、初の専門家会議が開かれた。多くの人が集まるイベントの開催について、自粛を含めてどう対応すべきかの議論も浮上し、21日には東京都が主催する大規模で飲食を伴う屋内イベントを3週間、原則中止か延期すると発表した。

## 2021年2月 シンポジウム

### シンポジウム開催

こんなふうに、少しずつイベントが中止され始めるなか、2月23日(日)に予定していた私たちのシンポジウムもどうするべきか検討したが、結局、感染対策をしたうえで開催しようということになった。

「被災と復興の証人とこれから」と題するシンポジウムで、例年どおり、団士郎漫画展と漫画トーク、院生による活動報告、それに、アーティスト瀬尾夏美さんの講演と、院生たちによるパネルディスカッションで構成した。下記、瀬尾さんのお話を聞いて、私がまとめたものを紹介するが、私の無理解や間違いもあるかもしれない。それでも、瀬尾さん自身が「誤読を許し合う」と言っていたので、誤読を恐れず記録しておく。

2019年度東日本・家族応援プロジェクトシンポジウム

### 「被災と復興の証人とこれから」

入場無料(申し込み不要)どなたでも参加できます

2011年に起こった東日本大震災を契機、十年の歳月が過ぎた。東日本・東海地震プロジェクトは、9年間の活動を通じ、被災地となる2020年を迎え、東プロジェクトをどのように展開するかを検討し、あるべき姿を探りました。数年経過と合わせて、被災地の復興現場へ再び行き、被災地とつながるべき姿を模索し、被災地とつながるべき姿を探りました。

**2020年2月23日(日)**  
10:30~17:30(終了予定)

**立命館大学 大阪いばらきキャンパス**  
第1棟1F(学生会館1F) H.A.C.U.N.A.  
第2棟1F(学生会館2F) AN110教室

**第1部 川上創見画トーク**  
「救済する・回復する目」  
10:30~11:30(参加費無料)  
※お申し込みは不要です

**第2部 各地プロジェクト活動報告**  
「東日本・家族応援プロジェクト2019」  
から被災地の現状  
11:00~13:00(終了予定) ※お申し込み不要  
立命館大学東日本・家族応援プロジェクト事務局  
2F, 101号室(受付) ※お申し込み不要  
川上創見画(絵画) ※お申し込み不要  
立命館大学東日本・家族応援プロジェクト事務局  
2F, 101号室(受付) ※お申し込み不要

**第3部 瀬尾夏美氏 講演**  
「被災10年、二重の風景」  
13:15~16:15

**第4部 パネルディスカッション**  
16:30~17:30  
1F, 101号室(受付) ※お申し込み不要  
立命館大学東日本・家族応援プロジェクト事務局  
2F, 101号室(受付) ※お申し込み不要

**第3部講演**  
「震災9年、二重の風景」  
震災9年を迎え、被災地の状況はどうか、被災地とつながるべき姿を探りました。被災地とつながるべき姿を探りました。被災地とつながるべき姿を探りました。被災地とつながるべき姿を探りました。

立命館大学  
東日本・家族応援プロジェクト事務局  
〒597-8585 大阪府東大阪市大東2-1-10  
TEL: 072-835-1234  
www.ritsumeikan.ac.jp

QRコード

## 弔いの所作

瀬尾夏美さんは、2月に『あわいゆくころ 一陸前高田、震災後を生きる』（晶文社、2019年）を出版されており、おもにこれに基づいて話をしてくれた。

瀬尾さんは、1988年、東京都の生まれ。2011年3月には、東京藝術大学の4年生で、大学院に上がる前の春休みだった。地続きの場所で大変なことが起きて大変な目に遭っている人がいる。「あなたはどうするの？ボランティア行くの？」など、立場を問われることがあったが、美大生の一人として何をしたらいいのかわからない。それで、まずは見に行こうと、3月30日から、小森はるかさんとレンタカーで東北へ行った。

4月最初に石巻にある知人の実家に寄って出会った食卓。家の天井まで津波がきて、家は残ったが、家の前は瓦礫だらけ。「暖かいご飯食べていきなさい」と食卓に呼ばれた。近所の人たちがみんな被災し、3つの家族が一緒に暮らし、共同で食卓を作っていた。天井まで津波がきて、階段の上にしたから助かったけれど、たくさん車が流されてきて、その中にたくさんのお体があった。

「どうしよう」「弔いをしよう」とみんなで瓦礫を片付け、遺体を寝かせて、一緒の方向から流れてきた干物を遺体の周りで並べて焼いた。蛸をあぶってみんなで食べるという弔いの儀式だった。「でも、その蛸、砂だらけでとても食べられたもんじゃなかったんだよ」とみんなでワッと笑った。衝撃を受けた。市井の人が、未曾有の災害と言われる被災の真ん中で、たった3週間後に弔いの所作を生み出し、語っている。

地元の人から、「君たち車があるならもっと現場を見た方がいいよ。もっと北に行き

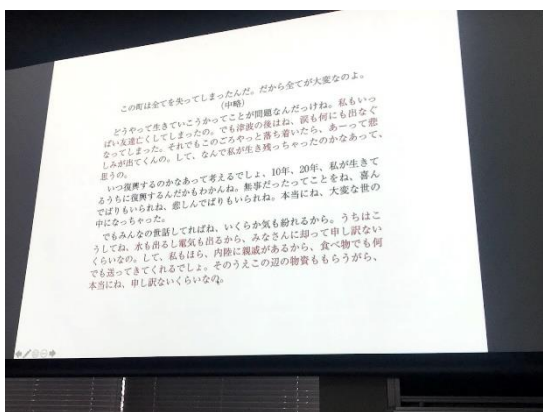
なさい」と言われ、レンタカーで北上していった。ボランティアをすと言っても、スコップを持ったところで、あまり役に立つこともなく、居場所がなかった。町の人たちが見かねて、話しかけてくれた。お裾分けに近い感じで、「せっかく来たんだからひとつ話を聞かせよう」と。テレビで見て、近づけば怖いと思っていたが、そこに行けば、そこで生きている人たちがいた。

陸前高田のおばあさんが、たくさん話をしてくれた。ここがいかにも美しい風景だったか。たくさんの人々が亡くなった。私たちはすべてを失ってしまった。「私もいっぱい友達なくしてしまったの。でも津波のあとには涙も出なくなっちゃうの。うちはこうしてね、水も出るし電気も出るから、みなさんに申し訳ないくらいなの・・・」。とにかくたくさんのお話を話す。どうしてこんなにたくさん話すのかと思った時、彼女の後にいるもっと語れない状況にある人のことを語るために語っているのだと気づいた。亡くなった人、もっと大変で語れない人たちの存在を可視化していくものとして語りがある。一人の語りは複数の存在を含み込んでいるのだと思った。

弔いの所作を探しては記述していった。当事者性は薄かった。東京にいと、関わっていいのか、余計なことをしていいのか、そんな権利があるのかなどという議論があり、どうしていいかわからなかった。それでも、陸前高田のおばあちゃんたちが、自分より大変な人のことを語ることに、当事者性のグラデーションを感じた。自分で引き受けることをあきらめてしまったら、グラデーションのつながりを断つことになる。おばあちゃんだって、語るしかないと思いながら



語っているのなら、自分だって語ることをした方がいいんじゃないか。それで、最初は報告会で語り始めた。体験した現地と、もっと遠い場所との間を行き来してつないでいく。旅人の立場で、アーティストとして往復を作る。



## 波のうえ土のした

語りの背景を想像できる体作りをしないと想像できないし、語ってもらえない。自分が聞けてないのに誰かに渡すことはできない。被災後の変化に自分の体を浸そうと、美しい風景が気に入った陸前高田に3年間暮らした。町を歩いていると、被災した場所に花が植えられたり、花が手向けられたりしている。自分のように以前を知らない人間にはただの草原だが、生きている人が花を手向けるという行為によって、ハッとさせられる。それは、今は不在の人、形なきものを表す行為なのだ。花を手向けることで不在の存在を可視化し、旅人につなぐ。そして、「ここにはこういう人がいてね」と話してくれる。弔いの所作とは表現の原初的な形であり、アートと密接に関わる。

山ぎわの集落にできた花畑に通うようになって、集落の人に話を聞いてきた。「何よりも亡くなった方たちを放っておくことはできない」「生き残った私が何をしなければいけないのか」「またみんなで集みたいの」。その「みんな」には亡くなった人も、遠くに行った人も、これから生まれる人たちもみんな含まれている。最初は切り花を手向けていたが、枯れてしまう。ここに花を植えたらいいいんだ。全部花で埋めよう。土地で眠っている人たちにも触れることができるし、旅人もきれいですねと一緒にいることができる。当事者性という区切りや分断を越えた弔いの場がコミュニティの中心としてあった。旅人も救われる場所としてあった。すごい発明だと思った。

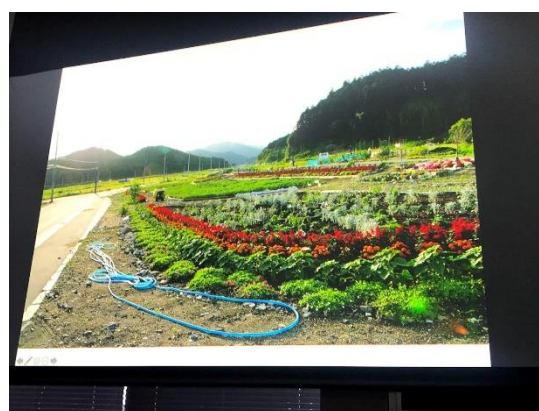
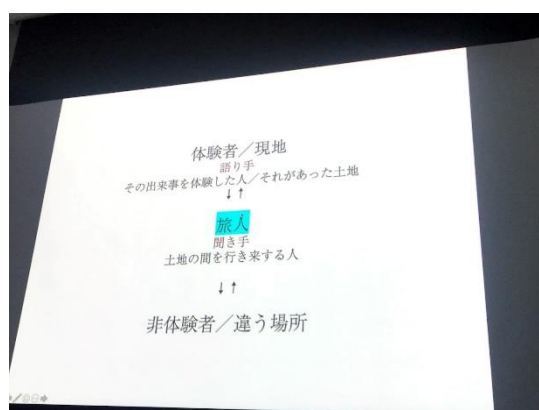
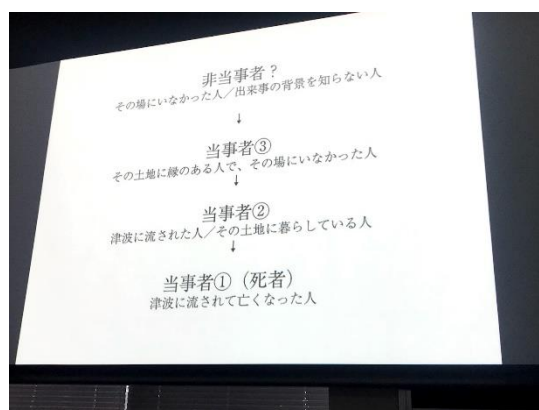
草原のように見えた陸前高田の風景に、花が植えられ、世話し、風景が回復していく。死者と語り合うことで風景を回復して

いく。一緒に眺めることで分断を越えていく。

2011年から2014年にあったそこに、もう一度喪失の時間が訪れた。巨大な土木事業が始まり、現場は回復の道筋をはがしていった。2014年10月9日、花壇はすっかり平らに埋められてしまった。復興ってここで生きてきた私たちをここに埋めてしまうことなのかな。町の人たちは、花畑から育てた花をどんどん抜いて、ボランティアたちに配り、分有していった。

復興事業なのでポジティブなイメージを持ちたいとみんな思っていたし、誰かの希望に水をさすようなことはできない。語りづらい状況が生まれ、土地が奪われていくことに何も言えない。その語れないこと、もやもやを記録する作品をつくりたいと、『波のした土のうえ』ができた。陸前高田の人々の言葉と風景の記録から物語を起こすように構成した。

2015年から3年半かけて、被災地と被災地をつなぐというので、神戸、尼崎、新潟、広島など全国十カ所で開催した。東日本大震災をその場に返してだけでなく、地元の人と話す場づくりをした。展示会は横のつながりを作るが、歴史的な縦のつながりも作ることができる。たとえば広島で陸前高田の写真を見ると、生まれてくるものがある。話を聞いて記録する、作品を作る、展示会をして、その場で話せることを引き出していく。その対話をまた記録する。同時代的に日本中で起きている語れないことを意識に出して記録する。外に開くことができる。共通の物語を作っていくって他の人に手渡す。





## 二重のまち/交代地を編む

陸前高田は美しい場所だった。湾に向かって開いていく美しい街が、復興工事でどんどん土色になっていった。自分にとっては風景を失っていくことだった。山が崩され、新しい地面、新しい住宅、新しい町を作っていく。「復興工事は二度目の被災」と言う人もいたくらいしんどいことだった。人災でもあると言える。2014年、何キロもあるベルトコンベアーができ、山を削り、土を運び、山を作る。山を動かすことができる。壊れたものを治すためなら何でもしてもいい感じがあった。どこまでやっていいのかの話し合いはなく、鹿や狸も山を追われて住むところがなくなった。自分が苦しくて、2015年、『二重の町』の物語を書いた。日常会話の中で「二重の町」という言葉ができた。かつての営みとともにあることを肯定することになる。

2017年の春頃から、陸前高田では嵩上げた土の上で新しい暮らしが始まった。新しい地面を歩くことはさみしいけれど、町の人たちは、「空が近くなる。亡くなった人に近づいた」と捉えて、ここで暮らしていくことを肯定していく。仮住まいではなくなり、穏やかな表情に変わっていった。復興工事の時の悔しさはなくなったわけではないが、ここで暮らしていく、明かりが灯ることを肯定していくという時間が進んでいく。

そうすると、かつての話が出てこなくなる。被災を語らなくなっていき、2017年、2018年、関西に行くと、「震災の時、私何もできなかったんです」と言う人と会うようになった。遠い場所にいる人の方が、前に進めず、後ろめたさを抱えている。同時代的に両者が出会って、継承が表れるのではな

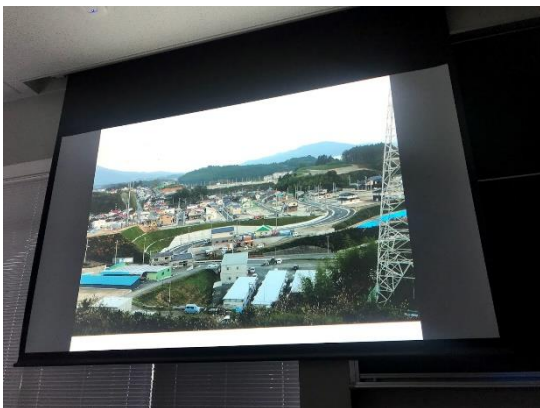
いか。それで『二重の町/交代地を編む』が生まれた。9年間続ける中で、継承、誰かにつなげていくところまできている。どうしても当事者が語ることが強くなるが、でも、いつまで被災者でいればいいのかという言葉もあったりする。それを追いつけることが選べるように、引き受けて語っていく人が増えていくこと、小さな交換のなかでつなげていくことが大事ではないか。

戦争体験も、70年以上たっても当事者の語りが強い。それは大事だが、それだけだと聞いた人が誤読できなくなってしまふ。聴き手も語り手も、誤読、小さな諦め合いを許し合えるようなことが大事なのではないか。今まさにそれをしていく。すべては引き受けられないかもしれないけれど、少し引き受けていく。わかりきらなくても、一部でも引き受けていく。そんな小さな営みが大切なのではないか。

被災することで大きな傷を抱えて生きる。あまりに大きな負荷をひとりで背負ってはいは苦しい。その人を放置していることは、周囲にも苦しい。語れない人も寂しいし、語ってもらえない人も寂しい。そこをシェアしあうことは、両者にとって大事なことから聞きたかった。分けてもう。代われないけど共に生きる回路を互いに作っていくことをしたいし、そういう時間がみんなにあった方がいいと思う。一緒にしよげかえって、一緒にしんみりする。「阪神の人は被災の先輩。17年たっても復興は終わってないと聞いて恐怖だった。でも、新しい街ができて、それが救いになった。亡くなった人のことをずっと抱えながら生きていていいんだ」と、高田の人にとっては、抱えながら日常を生きる先輩たちの姿が受け入れられた。



この後、院生3名を加えたパネルディスカッションが行われたが、残念ながらメモを残していなかった。終了後、瀬尾さんと先生方と一緒に食事をした時に聞いた話は衝撃的だったが、ここには記録しない。若いアーティストとしての瀬尾さんは頼もしく思った。



## 2021年3月 コロナ禍のその後

2月23日にシンポジウムを無事終了し、私は24日からオーストラリアに行くことになっていた。先発隊が一足先に出ていたため、私はそのまま渡航した。空港では、カンタスに乗る際、2週間以内に中国に行っていないか、ダイヤモンド・プリンセス号に乗っていないかの確認とパスポートの入念なチェックはあったが、それ以外はスムーズだった。オーストラリアでも、コロナについて新聞やテレビで報じられ、ホテルでも、最新情報や注意事項を書いた紙を配布していたが、街中でマスク姿の人は皆無だった。タクシー運転手が言うには、オーストラリアは早い時期に中国からの飛行機を止めたので、中国人観光客の姿がすっかりなくなり、経済的には大打撃だそうだ。

オーストラリアにいる方が直接的な影響は薄いと感じたが、ネットを通じて断片的に入ってくるメールやSNSは深刻で、あれよあれよという間に状況が変化していった。2月25日、政府は専門家会議の見解に基づき、対策基本方針を取りまとめた。全国一律のイベント自粛要請はしないが、患者集団が確認された地域では自粛の検討要請もあり得るとされた。詳細な理由はわからなかったが、なぜか一日で政策は大きく転換したようだ。26日、安倍首相が全国的なスポーツ、文化イベントを今後2週間は中止、延期、または規模を縮小することを要請し、27日には全国すべての小中高校などを3月2日から春休みまでの間、臨時休校するよう要請したという。一緒に行っていたメンバーたちの中で、子どものいる人たちが臨時休校中の子どもの段取りのため、日本と

電話で慌ただしくしていた。合わせて、講演や楽しみにしていた催しも中止となり、少人数だから決行するつもりでいた院生たちとの合宿も取りやめるようにメールがきた。

帰国したのは3月1日だった。3月上旬は、スペインやフランスなど欧州の広範囲、アメリカでも感染拡大が見られるようになり、WHOは11日にパンデミックと認定した。日本政府の緊急事態宣言をめぐる動きも本格化し、民主党政権が2012年に成立させた新型インフルエンザ等対策特別措置法が改正された。7月開幕が予定されていた東京五輪の開催も危ぶまれ、24日夜、1年の延期が決まった。春の選抜高校野球の中止も決定された。国内の感染者数は3月末に急増し、4月7日、東京、大阪、福岡など7都府県を対象に5月6日まで「緊急事態宣言」が出された。16日には緊急事態宣言の対象が全国に拡大され、ゴールデンウィークの旅行や帰省の自粛が求められた。

大学も卒業式、入学式とも中止され、授業もなくなった。ZOOM会議システムが導入され、教授会や学生との面談もオンラインとなった。最終年度となるはずだったプロジェクトはいったいどうなるのだろう。



つづく



## 精神科医の思うこと②③

### 「遠くの街に住む」ということ

松村 奈奈子

コロナも少し落ち着いて、ふらっと八ヶ岳の見える高原に旦那とドライブ旅行に。11月は紅葉も終わりかけで、入ったカフェではスタッドレスタイヤの話題で地元の方が盛り上がるなど、冬がもうそこまで来てる感じです。美味しいソフトクリームで有名な清里の清泉寮のテラスから富士山や南アルプスを見ていると、授業をさぼってソフトクリームを食べに来た学生時代の事を思い出しました。実は大阪育ちの私、山梨で6年間の医学生時代を過ごしました。甲府盆地の下宿の窓からも、富士山が見えました。大阪から遠い山梨での下宿生活、「文化が違うなあ」と驚く事も多かったですが、楽しかったです。

しかし、このコロナ禍、診察に来た関東から来た学生が「やっぱり関西は合わないです」と大学を辞めてしまう事が続いたので、今回のテーマは「遠くの街に住む」ということ。

「遠くの街に住む」には、初めの数か月はパワーがいるなあって思います。

山梨の大学では大阪出身者の学生は私ともう1人だけで、8割が東京を中心とした関東地方出身でした。入学直後は1人であるのが不安で、とりあえずクラブに入り先輩と話したり、週末は同級生と遊んだり、半年ほどはネットワークづくりに必死でした。とにかく「気の合う友達」を見つけなきゃっと思いました。全く知らない街での生活は、頼れる人を探す事がスタート。次第にバイトを紹介してもらったり、バイト先でまた人とつながったりと、山梨での生活も居心地のいいものになっていきました。

こんな山梨での生活は好きでしたが、就職先を決める時には「関西で仕事したい」と思い、京都で就職しました。「お出汁」は関西風が好きだし、大阪の幼馴染と時々遊びたいしなど細々とした理由以上に、関東の人は嫌いますが、関西人のちょっぴり「ずけずけ言う」ともとれる「人との距離」の近さが好きでした。京都に就職して出勤初日

のお昼休みに、同期の仲間と雑談を始めると、すぐ冗談が飛び交って笑いが起こった時に「ああ、この会話の流れが落ち着くわー」と感じた嬉しさは忘れられません。

そこで「関西が合わない」と診察室にきた大学生。

私も結局は「やっぱ、関西が合うわー」と山梨から関西に帰ってきてしまったので、気持ちはわかります。コロナの前なら「せっかくだし4年間、異文化交流してみたら」「関東人同士でつるんだら」なーんてアドバイスもするところですが、なんせコロナ禍、「うーん」となっちゃいます。コロナで、zoom 授業とクラブ活動自粛、対面授業もあつたりなかったりで、新しい街に心地よく生活するための基盤ができないのは、ほんと大変。コロナでバイトも思ったように見つからないし、ネットワークづくりが難しいのは十分理解できます。

ただ、コロナ前から「関西人嫌いです」「合わないんですよー」って診察室でいう学生は結構いました。でもそう言いながら、結局それなりにネットワークを作って、みんな辞めることなく卒業して、地元就職していきました。しかし、このコロナ禍は、「いったん地元で考えてきます」と長期休学したり「再受験します」と辞めてしまう学生が増えたように思います。「関西が合わない」という言葉の通りというより、合うも合わないも、ネットワークづくりもできず、なにも体験できない状態が続いていて、「関西にいられない」「遠くの街には住んでいられない」という感じなのかなって思います。

マスクでもよく報道されているように、コロナ禍で仕事や進学で「遠くの街に住むこと」になった人々の孤独は、解決の糸口が見つからず、コロナでより際立ってしまっているなど実感しています。

一方で、「遠くの街に住むこと」の選択にはいろんな理由があると思います。

実は、私の弟も関東の大学に進学しました。その後、弟に「なんで関東の大学にしたん？」と聞くと「家におったらあかん気がしたんや」「遠くにいかなあかんと思ったんや」と答えた時「なるほど、あんたもそう思ってたんや」と驚いた事をよく覚えています。仕事で忙しい父との関係もあり、母親は子供にやや過干渉でした。受験前に2人で話したことはなかったのですが、「家をでて自由になりたーい」という思いが2人の進学先を関東に決める要因になっていたのです。いやー、ほんと親と離れてよかったです。残された母親は「犬」を飼い始め、父親も仕事が落ち着いて夫婦2人で過ごす時間が増えたようでした。振り返ると、「物理的に距離をとる」事で家族がいい感じに変化できたと思います。

全国には多くの大学があり、よほどのマニアックな学部の希望でなければ、それぞれの地域に選択できる大学は存在します。就職もある程度は地域を選択できる時代です。患者さんの生活歴を聞きながら、「遠くの街に住むこと」を選んだ人には、必ずその理



由を聞く事にしています。そこには親子関係の問題を含め、治療のヒントになる話が出てくる事が多いからです。もちろん「都会で生活してみたかったから」という理由が、1番多いです。しかし、初回の診察で「実は小さい頃、父親に身体を触られていたことがあって、ずっと離れたいと思って関西の大学にきたんです」と涙を流して話す女子大生や、「父親の暴力が嫌で、家を出ました。国立大学なら、下宿代を出してやるっていわれたので」と話した男子学生など、そのような「離れた街に住む」理由が、頑張ってきた子どもの話を聞くきっかけになる事は多いです。

もちろん、進学で「遠くの街に住む」事ができるのは、家族の経済力や本人のパワーが必要で、すべての子どもができる事ではありません。児童相談所で診る子どもたちは、経済的に厳しかったり、父母から離れるエネルギーも削ぎ取られた子供たちがほとんどです。ただ、「遠くの街に住むこと」ができた子供たちが、ちょっとしんどくなって診察室に来たときは、話を聞きながら応援をしたいと思っています。

大人の患者さんでも、仕事や結婚などで故郷と離れたところに住む事はよくある事です。しかし、「遠くに離れて住む」だけでなく故郷との交流が途絶えていたりすると、そこには過去の家族関係が反映した距離があるんだなあと思います。交流の途絶えた親子関係の時には「やっぱ、ちょっとしんどい御両親だったんですか？」と尋ねてみるようにしています。「そうなんです。いい思い出がなくて・・・」「両親とも怒鳴ってばかりの人で、ほめてもらった事がなくて・・・」と話し始める内容からは、治療の糸口になる対人関係の問題が見えてくる事が多いです。「物理的に遠くに住む」事に気になる理由がある事が多いですが、「心理的に遠くに離れる」のも、様々な理由があるなと思います。

しんどい時、もし動けるなら、少しでも自分が楽になれるように行動すると、心は安定します。「少し離れてみる」のは健康的な動きでもあるんだな、と思います。

久しぶりに、山梨の美しい山々、星いっぱいの夜空を眺めていると、30年前にワクワクして下宿生活を始めた時の事を鮮明に思い出しました。私は「遠くの街で住むこと」を体験できて、多くの事を学んだなあと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

## 馬渡の眼 7

# 「お年玉くじ付き年賀はがき」

馬渡 徳子

まもなく、2021 年が、暮れようとしている。

この原稿を記載する時期は、丁度、年賀はがきや、お年賀欠礼はがきを準備する時期にあたる。

かくいう私は、毎年、患者会役員さんで、郵政事業に勤務されている方から、購入してきた。

今年は、昨年の三分の一の数の注文となり、「とうとう SNS 活用に変更ですか？」と訊かれた。

「いえいえ、私は SNS は苦手です。還暦を機に、今年『年賀状を卒業宣言』したの。」と、お応えした。

「そうでしたか。それは、寂しいなあ。20 年以上のお付き合い。馬渡さんが転勤・定年されても、ずっと歴代の患者会役員と担当職員さんからご注文頂いてきました。ノルマが厳しかった時期もありましたから、本当にありがたかったです。」と言われ、過去の皆さんの顔が浮かび、懐かしくなっ

た。

「そうですね。長い間、本当にありがとうございます。来年の元旦は、もしかしたら自分の名前の年賀状がなくて、寂しい思いをするかもですね。けれど、連れ合いと義母はこれからも継続しますので、どうかお達者で、これからも末永く、お付き合い下さいます様に。」と、お応えした。

その後、しばらくの間、「お年玉くじ付き年賀はがきにまつわる思い出話」に、花が咲いた。

2000 年位までは、四肢機能に障がいのある患者会役員さんに代わり、担当職員がパソコンで作成していたが、担当職員でもある作業療法士の提案で、「患者会役員さんによる絵手紙」に変更し、それが大好評だったこと。

また、それが、患者会の枠組みを超えて新たなサークル活動につながったこと。素敵な講師の先生につながり、自治体主催

の文化祭にてのサークル展にも参画した。

この時期辺りには、患者さんの治療法に、世界的なパラダイムシフトがあり、早期に発見し、専門医による治療が叶うと、関節破壊・変形を防げるようになり、患者さん自身が、それまで諦めてこられた日常生活動作や趣味などにも取り組めるようになっていった。このエピソードは、正に、その象徴ともいえる。

会員さんに、一等賞が当たり、その商品が CD ポータブルプレーヤーで、お孫さんにととても喜ばれて嬉しかったこと。毎年三月に早春会の催しがあり、その折に報告を受けた参加者が、あやかりたいと、次々と触ったり、握手を求めておられたっけ。その光景は、本当に微笑ましいものだった。

そうそう、近年の一等賞は、年賀はがき購買減少への対抗策として、金券・目的クーポン券に代わり、選べるようになったらしく、全くもって、縁がなかった。涙。

二等賞のふるさと小包は、結構な確率で当たりが出て、子ども食堂の前身となる地域開放型えがお食堂に、寄付頂いた事で、カレーライスしかメニューがないので、非常に助かった。

三等賞の切手シートは、役員さんの中に、歴代のシートをファイリングして持参された方がおられ、「なんでも鑑定団に出したら、どのくらいの査定が出るかね。」と、勝手に皆でワクワクし、妄想ごっこをしたこともあった。

私は、この患者会の方々に、ソーシャルワーカーとして育てて頂いた。来年三月には、博士前期課程の論文中間発表。六月末には、論文提出→最終審査を迎える。四年間は、本当にあっという間だ。

**そうだ！ 今年からは、毎年、自分に宛てた年賀はがきを一枚書こう！！**

「 やあ、あけましておめでとう。

大丈夫。

秋には、無事に患者会の皆さんに論文をお渡しできているよ。

謙虚に。真摯に。おもしろがって。 」

皆様にも、どうぞ、ごきげんよう。

世界中の人々に、良いお年を。

## 「写生」

自分の人生を振り返ると正直「光陰矢の如し」。子供の頃に記憶した地名や歌詞はフルに言えるのに最近覚えた人の名前がすぐ出て来ずあせる…気持ちでは40歳あたりのつもりが、やっぱり(1949年生まれ)歳相応ということなのでしょう…。

父親は日本画家でした、ところで日本画と洋画の区別ってわか



※出品画モチーフの吉野杉を前に思いをつぶやく父

りますか？

戦前・戦後間もない時代まで、庶民が住む長屋や家にはふつうに襖絵(ふすまゑ)や床の間に掛ける掛軸(かけじく)、屏風(びょうぶ)に縁起物の七福神や伝承を題材にした日本画の注文がかなりあって、画家が描いた原画をそのまま表具して使いました。

お正月前に多い注文は、新春の波に洗われる夫婦岩(めおといわ)とお日様の絵(初日の出)、題は「波に日の出」。父は画商から大量に注文され黙々と描いていました。

絵を描くのが好きだった農家の次男坊(家督を継がない)の父親は、日本画なら食べていけるかもと、19歳で大阪の日本画



家に弟子入りしました。

まあ…しかし甘くはなく、戦後のどん底の日々、人びとは食べ



※幼い息子に心の負担をかけ過ぎたことを反省する父

ることが最優先。戦後生まれの子ども達(ベビーブーマー)が小学校に入る頃になり、ようやく化粧品の蓋に金色の塗料で模様を描いてくれとか、学童用のカバンや筆箱に野球ヒーローや女性バレリーナーのイラストを描いてくれといった依頼が。父親はアルバイトを雇って同じ図柄を何百個も描き続ける職人仕事をこなしていました。

これらの注文されるイラストは絵にはちがいないけれど単純で退屈な絵、本人はもっと創造的な絵を描きたいけれど買っても



※大作を前によく出たのが(情熱)という言葉

らえるあてがない。画家が自分のオリジナルな創作で収入を得るのは簡単なことではないのです。

今回は「好き」を仕事にしたい父親の苦闘を息子の記憶を元に綴ったお話です。



(1) 写生



(2) 写生





# 東成区の昭和



(3) 写生



# 東成区の昭和



(4) 写生

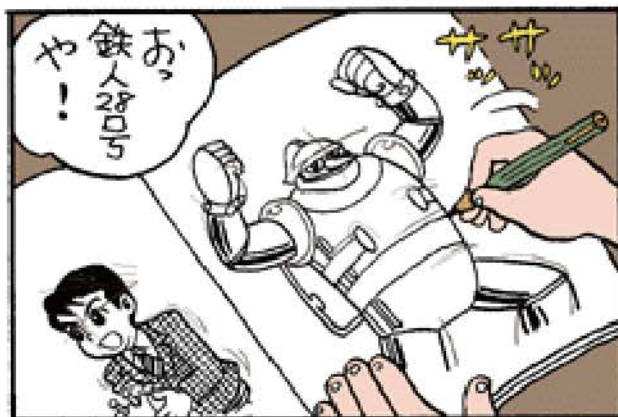
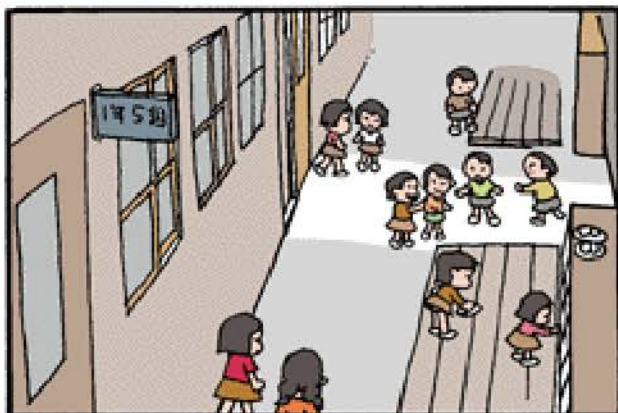




# 東成区の昭和



(5) 写生



# 東成区の昭和



(6) 写生





# 東成区の昭和



(7) 写生



# 東成区の昭和



(8) 写生





# 東成区の昭和



(9) 写生



# 東成区の昭和

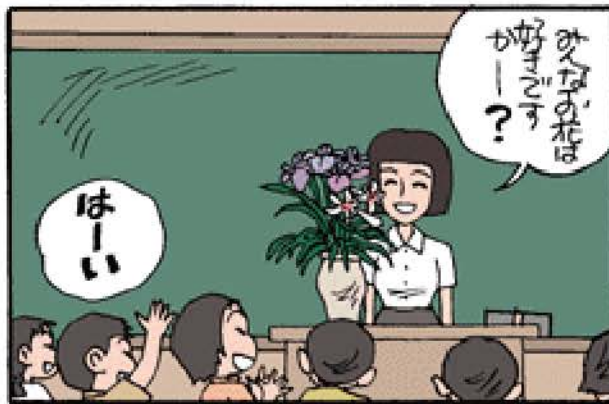


(10) 写生





(11) 写生



(12) 写生





# 東成区の昭利



(13) 写生



# 東成区の昭利



(14) 写生



# 心理コーディネーターになるために Vol.5

山下桂永子

## ☆ハローダイヤルの音

「プルルルル！」といつも電話のコール音より少し甲高い音になる。何十回線もあるボタンのなかで点滅しているボタンの下は「8600」と書かれている。8600、つまり「ハロー」である。

一呼吸おいて電話を取り、「はい。〇〇市教育センターハローダイヤルでございます」と、ゆっくりと落ち着いた口調を心掛けて電話口に話しかける。「こどものことで相談したくて。。。と遠慮がちな声が聞こえてくる。「ご相談ですね。お子様のご年齢と性別を教えてくださいいただけますか？」「小学校5年生で男の子です」「小学5年生の男の子のお子様ですね、では電話相談室に切り替えますのでこのまま少々お待ちいただけますでしょうか」とできるだけ優しく伝えるようにした後、電話を一旦保留にする。

電話相談室に切り替えると言っても、電話相談室に別の相談員がいるわけではない。私がメモとペンを持って数メートル離れた小部屋に行くのである。電話相談室に入る前に時計を見て、次の面談までの時間を確認する。30分を切っている場合は、手の空いている他の相談員がいれば代わってもらうこともあるが、それができない場合は限られた時間内で話を聴きつつ、再度こちらからかけなおさせてもらうか、来所面談の提案を行うときもある。



## ☆電話相談 100本ノック

2013年の4月から、某市の教育センターで週4日働くことになって、自分専用の机と電話を使わせていただくことになり、最初の数年は外部からかかってくる電話を来る日も来る日もワンコールで取りまくっていた(Vol.4 参照)のだが、その多くは担当指導主事につなぐもので、教育相談とは直接は関係のない内容であった。



しかし、ハローダイヤルだけは電話の音が変わっているため、この音が鳴ればそれは電話相談、あるいは教育相談の申し込みである。ハローダイヤルの音が鳴ると事務室内に一瞬緊張が走る。他の音(回線)の場合は事務員さんや指導主事など誰が電話を取ってもいい



のであるが、ハローダイヤルだけは、相談員が取ることになっている。電話が自分の机にある相談員は私ともう一人、週4日勤務で就学前の言語相談担当の先生のみである。

就学前の言語相談の場合は、園の先生や他機関からの紹介が多く、電話相談というよりは、対面での相談ニーズが高いこともあってなのか、ハローダイヤルの番号よりは、教育センターの代表電話に教育相談申し込みがかかってくることが多い。そのためハローダイヤルは心理、発達の担当である私が取るようになっていた。

### ☆電話相談は忙しい

きっと電話相談で私が発する言葉のほとんどは「うんうん」「うーん」「ああ～なるほど」ぐらいだろうと思うが、メモを必死に取りながら頭の中は対面の相談よりもずいぶん忙しい。聞こえてくる情報だけから、相手の状況や気持ちを想像し、あらゆることを想定しながら言葉を選び、より情報が得られる質問を慎重に伝えていく。相手の気持ちに寄り添いつつ、ある程度の方向性を提案したり、情報提供を行う必要もある。電話相談を受けていて気付いたことは、電話をかけてくる人の中で「悩みを聴いてほしい」という人と同じくらい「知識や情報を求めている」人がいるということである。

場合によっては、学校のスクールカウンセラーを紹介したり、他機関へ紹介することもあるが、そもそも学校や他機関でうまくいかなかったから電話をかけてきている方も多く、なかなか一度の電話相談で話が終わったり解決するものではないので、基本的には来所していただいたの継続相談をすすめていくことが多い。

そして、一本電話相談がかかると、その対応や記録をまとめ、面談につなぐ場合はその日程調整を行い、初回面談のセッティングをするなど、さまざまな業務が発生するため、その日の予定が一気にひっくり返る。しかも当たり前のことであるが、電話相談がいつ来るのかは予測不能である。年間の電話相談件数や初回面談数がどちらもおよそ100件なので、少なくとも電話相談関連だけで年間100時間は費やすことになる。それを継続面談やその記録、書類のとりまとめの合間にしなければならない。

それまで電話相談は、教育相談の中でも、面談の合間に単発でできる範囲とするもの

だと思っていた。今思えばとんでもなく失礼な話であるが、やってみてわかったことは「電話相談、めっちゃめっちゃ忙しいやん。」ということである。

### ☆電話相談は難しい

電話の内容はともあれ、電話相談は、顔の見えない相手とコミュニケーションを取るのとても気を遣うし、面談以上に疲労感や徒労感が残りやすい。おそらく電話をする方もそうなのだろう。不安や警戒しながら電話をしてこられるせいか、電話ではものすごく怒っているような口調であったのに、会って話してみるととてもおだやかな印象を持つ方がいたりするのもそのせいかもしれない。



また、ハローダイヤルにかかってくる電話の中には、明らかにいたずら電話のようなものもあるし、突然怒鳴りつけられるようなこともある。そんな電話を受けたときは、自分とは関係ないと思いつつもショックを受けるし、悲しくなったり腹が立ったりもするわけであるが、それでも冷静に対応しなければならぬ。電話というものは、顔が見えないことで、ある種、人の攻撃性を増幅させるところがあるのだろうと思う。

一方、本当に悩んでいるとき、困っているとき、そのタイミングで電話をかけられる、というのは電話相談のよさでもある。電話を取った瞬間に、電話口の向こうからパニックで泣き叫ぶ子どもの声が聞こえてくることもあったし、泣いてしまって言葉も出せないお母さんの嗚咽を数十分聞き続けたこともある。そんなときはこちらも動揺しまくるわけであるが、とにかく、優しく、穏やかに、ゆっくりと声をかけ続けていくしかない。

ここでも、それまでは定期面談の合間にやっていた電話相談が、実はとても緊急支援的であり、専門性が求められ、かつ瞬時の対応力が試されるものであることに気付かされた。「電話相談、片手間にやったらあかんやつや」となったわけである。

### ☆電話相談を業務として位置付ける

始めのころは、ハローだろうが苦情だろうがもう電話が鳴れば取るしかなかったし、必死に話を聴くしかなく、場当たりのであったと思う。それでも勇気を振り絞って電話をかけてきてくれる方が、これ以上たらいまわしにされたり、誰にも言えずに悩むことのないように、かけてみて良かったと思ってもらえるように、必死に話を聴くしかなかった。

しかし丁寧にやろうとすればするほど電話相談を含む教育相談全般は忙しく、難しいので業務量がこの数年で倍増した結果、それまでは週に1~2日の非常勤相談員がほとんどであったのが、現在では、ありがたいことに週4日勤務の心理士の方が他にも2名入り、電話相談を分担できるようになった。それでも潤沢に時間があるわけではなく、それぞれがなんとか時間をやりくりしながらの電話相談対応になっている。





## ねこから目線。株式会社になる

2018年の8月に個人事業として開業した、ねこから目線。一ノラ猫と保護猫専門のお手伝い屋さん—が気づけば4年目に突入していました。開業当初はバイトをしながら兼業としてねこから目線。をこなしていましたが、依頼がどんどん増えていき半年目くらいからは専業になりました。それでも身一つでは対応しきれないほどの依頼をいただくようになり、2年目から梅さんに加入してもらい、常勤スタッフ2名の体制でさらに2年間24時間年中無休営業で走り続けてきました。

猫さんの捕獲頭数は3,000匹を超え、猫の殺処分数は年々減り続けているものの、依頼は増え続け新規の依頼を受けられるのは1週間後というもどかしい状況が続いていました。これが別の業種であれば、1週間後に予約が取れるなら許容範囲なのかもしれません。でも、ねこから目線。で対応するのは命ある猫さんです。緊急のレスキューや脱走してしまった猫さんの相談に「では1週間後に伺いますね」なんて悠長なことは言ってもらえません。無理して隙間の時間に依頼を詰めて、疲労がたまって凡ミスが増えてかえってお客様に迷惑をかけてしまうようなことも起きてしまいました。この状況を打破するためにどうしたものか悩みに悩んで、体制をガッツと組み直すこととし、その一環として株式会社化するという事にしました。今回のマガジンではいつかは廃業することを目標にしているはずのねこから目線。がなぜ株式会社化することになったのか、あれこれ考えたことを共有したいと思います。「ねこから目線。」って何やってるの?という方は過去のマガジン36号、38号、42号を読んでみてください。

## なぜ廃業が目標だったのか

そもそもなぜ廃業が目標だったのか、と聞かれればそれは「目的を見失わない為」だと言えます。開業1周年を振り返って書いたマガジン(38号)では、

“「ねこから目線。」の将来の目標は、需要がなくなって安心して廃業することです。ノラ猫の総数と殺処分数がこのまま減っていき、動物愛護に関心のあるボランティアさんが増えていく現状が続いていけば、そう遠くない将来に廃業できると思っています。でも、需要があるうちは、体力の続く限り、頑張っていきたいと思います！”と結びの文章を書いています。その意図は、目的と手段をはき違えて、猫の殺処分を無くす為に頑張ること（目的）よりも、会社を大きくすること（手段）に意識が奪われてしまわない為の自制策だったと言えます。だからこそ、いずれ無くなる会社を大きくしても仕方ないし、畳みやすい身軽な状態をキープしていきたいと思います。

でも仕事を必死にこなしていく中で、たかが人間2人が必死に動く程度で対応できる回転数ではとても世間の TNR 需要に追いつけないという現実を突きつけられました。広報や営業を全くしていないのにこの状況です。問題を解決することが目的ならば、いまの需要に最速で対応していくことができる力をつける必要があると思直しました。

## TNR で殺処分ゼロを机上の空論にしない為に

なぜそんなにスピード感にこだわるのか、少し説明をしたいと思います。有効な予防策が有効に機能するためには、ある程度以上の実施率を確保しなければいけません。理屈上だけでいえば、保護猫活動のみでも猫の殺処分ゼロを達成できるはずですが、ただし、現実問題、年間3万頭近い殺処分がある日本において、保護里親譲渡は、膨大なお金と人手と場所が必要なため有効性を発揮するほど実施することが不可能です。その為、保護のみで殺処分ゼロを達成することは、机上の空論にすぎないと言えます。だからこそ、今の日本では TNR を頑張っていかなければならないですが、TNR も同様に現実的に実施可能な体制を確保しないことには、机上の空論になってしまいます。

例えば、120匹のノラ猫さんがいる公園があり、120匹分のTNRの予算があるとします。その場合、失敗に至る計画は「ひと月10匹ずつ、1年かけて全頭にTNRをしよう」です。成功する計画は「最初の1ヵ月で120匹全頭にTNRをしよう」です。猫は出産を繰り返し増えていきます。そのため、同じ頭数の現場に対して「TNR」という同じ解決策を導入したとしても、前者のように有効な実施スピードが計算されていないと「TNRをやってみただけダメだった」という結果になってしまいます。猫の問題は一気にやるスピード感が非常に重要です。



## 「業者を使って自分でやる」という選択肢の創出

ボランティア活動がほとんどであったノラ猫に対する TNR などの活動を完全有料で請け負う「ねこから目線。」は社会の中でどのような役割を担っているのか考えてみました。昨今では行政やボランティア団体さんの啓発活動の成果により、TNR をしたいと思う人が急増しています。と同時に「TNR したいんですけど、猫が捕まえられません」という相談が役所、病院、愛護団体に殺到しています。これに対する行政の対応としては、「魚を与えるのではなく、魚の取り方を教えよ」の理屈で捕獲器の貸し出しがメインです。ただ、自分でやるのはハードルが高かったり、初回だけでもサポートが必要だったりする為、見かねたボランティアさんが西へ東へ自腹で走り回り疲弊しきっている現状があります。TNR をしたいと思った一般の人の視点で考えると、自力で魚を取れるようになるか、ボランティアさんに頼み込んで恵んでもらうか、の2択だったと言えます。同じ1匹の TNR でも誰かにやってもらった1回よりも自分でやったと思える1回は未来への影響力が違うという考え方にはとても賛同します。だからこそ、自力か頼み込むか、の2択の間に「業者を使って自分でやる」という選択肢があってもいいんじゃないかと思いました。そしてその選択肢を作っているのがねこから目線。だと思います。この社会的役割は非常に大きいと感じています。ただし、今のねこから目線。に社会的役割を果たしているといえるほどのスピード感と対応力があるのか？と考えた時に答えは“否”でした。

自力で魚を取るか、恵んでもらうか。



魚屋さんあればよくない？



## 猫が繋いでくれた縁

とりあえず、色々と整備するためにも、もう一人は現場スタッフが欲しいなと思い求人を試みました。でも固定給の保証も無い、社会保障も無い、労働基準法とか言われても困る、そんな状態では大きな声で求人することもできません。迷いなく一緒に走ってくれる梅さんは相当特殊で貴重な人なんだと実感しました。ねこから目線。が社会の中で機能するためには、理想を掲げて突っ走るだけでなく、安心して仲間になってもらえる会社の体制をつくることも必要なんだと思いました。でも、それは私にとってすごく苦手な未知の領域です。誰か信頼して相談できる人、というよりも相談レベルではなく経営と一緒にやってもらえる人が必要だと思いました。

でも誰に相談するかというのはとても大切な問題です。以前にこちらから相談したわけでもないのに、ねこから目線。の経理を見て「お手伝いの時間給を倍にした方がいいよ。それで依頼が半減したって収入は変わらない。でも自由時間は倍に増える。」とドヤ顔で

アドバイスをしてくれた人が居ました。確かに使えるお金も時間も増やしたいけれど、求めているのはそういう感じじゃない。効率よくお金を稼ぐことが目的ではなくて、効率よく TNR の回転率を高めることが重要な目的なんだということを建前じゃなく本心として理解してもらえる人じゃないといけません。

どうしたものかと悶々としている頃に大学院時代からお世話になっている中村先生（マガジン：臨床社会学の方法）から「わたしが理事長をつとめる「きょうと NPO センター」の理事に就任していただきたいのですが。個性的な生き方をしている人に理事をお願いしています。」とメールが来ました。猫の分野の悩みを解決するアイデアは、猫とは違う分野に落ちていることが多いと思っているので、すぐに引き受けることにしました。そうして参加することになった京都 NPO センターの理事会で、アソブロック(株)という HP を一読するだけでは何をやっているのかさっぱり分からない会社を運営している団遊さん（本名）と出会うことになりました。団さんのことは以前から一方的に知っていました。なぜなら、大学院時代の恩師である団士郎先生の息子さんで、授業の中の小話にしょっちゅう登場していたからです。実際に会ってみるとやっぱり面白い人で、アソブロック以外にも片手では数えきれないほどの会社を運営したり支援したりしているゴリゴリの経営者でありながら、決めたり動いたりする基準がどうやらお金になるかではなく、関わる人たちが成長できるかどうかというモノサシで動いている変わった人。どうやら“人を育てることが趣味のような人”だと思いました。ならば自分も育ててもらいたい（図々しい）！そう思ってメールすると、あっさりと OK の返事をくれました。

思い返せば、ねこから目線。ができたのは団先生の「それをちゃんと続けていきたいのなら、自分がきちんと生活できる料金設定を考えて提示せなあかん。」という言葉がきっかけでした。お父さんが産んだねこから目線。を息子さんに育ててもらうのは自然な流れな気がしました。

## 変化の日々

団遊さんという強力な仲間を得てからは、色んなことがどんどん進んでいきました。まずは法人化にあたって、どの形を取るかが重要でした。色んな法人のあり方について説明してもらい、目的からすると NPO 法人でもいいと思うと言われましたが、私としては“ボランティア活動のように見える形は取りたくない”という思いが強かったので株式会社を選択することになりました。そして団さんの声掛けで新しく 2 人が兼業という形でねこから目線。の仲間になってくれました。経理全般のバックオフィスを担ってくれる畑さん。業務内容の再編を担ってくれる浅岡さん。浅岡さんとのミーティングでは、今やっている業務について質問を受け、それに答えていくと、迷子搜索のお手伝いや里親募集のお手伝いなどの私と梅さんの頭の中にしかなかった手順が可視化されて出てきます。それを元に改善の余地がある部分や外せないポイントなどを整理してまたまとめていきます。ああ、こう



やって感覚と経験でやっていたことが業務内容として編集されていくんだなと体感することができてめちゃくちゃ面白いです。他に変わったことと言えば、給料体制です。これまでは毎月の売上から自分と梅さんそれぞれにかかった先月の経費を分けて、余った金額とザクッと折半する形でした。忙しかった月は二人とも手取りが増えますし、閑散期は下がる、というわかりやすい形でした。それが月々固定給になってその月にかかった経費を畑さんに申請します。また、保険も個人で入っていた国民健康保険から社会保険に変わるそうです。そしてそして、現場スタッフも1名加わってくれることになりそうです・・・！！

## ■ 今後の方針は・・・FC化？暖簾分け？

ねこから目線。を今後どうしていくかと考えた時に、大阪に大所帯の会社ができるところであまり意味が無いと思います。それよりも全国各地に小さなねこから目線。がたくさん出来た方が猫にとってメリットが大きいと思いました。なので、フランチャイズ化なのか、暖簾分け制度なのか、方向性は定まっていませんが、ねこから目線。のノウハウを全国各地に散りばめられたら良いなあと思っています。

まだまだ準備をし始めた段階ですが、その今の気持ちや状態をマガジンに書いておくと後々自分が読み返した時に面白いので、今回の号で書いてみました（笑）。これを書くにあたって、三年前（36号）のマガジンを読み返してみたところ、その頃は「猫から目線。」と書いていることに気が付きました。開業前に作ったロゴの「ねこから目線。」の“猫”はひらがなのので、いつのまにか開業マガジンを書く頃には猫が漢字表記になり、また知らないうちにひらがな表記に元にもどって「ねこから目線。」に落ち着いたという変遷を知ることができました（笑）。色々といい加減すぎますね。

殺処分ゼロという目標は、分かりやすく伝わりやすいスローガンだから多用していますが、達成のゴールテープを切れば終わるかのような甘いものではありません。殺処分という深刻な問題があって、それに多くの人に関心を持っているうちはいいですが、達成のゴールテープが切れた後、どれだけの人が関心を持ちつづけてくれるでしょうか。将来、猫の殺処分ゼロが達成された後、その状態を継続させるための基盤になるにはどうしたらいいのか。それが今の一番の関心です。

## ■ おわり



小池英梨子

活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

仕事：猫専門のお手伝い屋さん「ねこから目線。」として開業。

# 先人の知恵から

## 34

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

コロナの問題も今は一息ついている感じではあるが、この先どうなるかはまだ不明である。いつかは終わるのだろう。

そんな中、このシリーズは変わらず続いているというか続けている。もういい加減辞めたらという思いもあるが、どうしても物事を中途半端で投げ出せない性格なので続けさせてもらおうと思う。

今回は「す」のところから以下の8つ。

- 頭寒足熱まかんそくねつ
- 好きこそもの上手なれ
- 過ぎたるは猶及ばざるが如しなほ
- 隙間風は冷たいすきまかぜ
- 進を知りて退くを知らずすすむ しりぞ
- 雀百まで踊り忘れず
- すべての道はローマに通ず
- 住めば都

### <頭寒足熱>

頭部を冷やし、足部を温かくするのが健康な状態であるということ。また、頭を冷やして足を温めるとよく眠れ、健康に良いということ。

最近の若者は、結構通常体温が低く、手足が冷たい人が多いように思う。栄養状態が悪いのか、運動不足なのか、体質ということなのかかわからないが、手足は温かくしておくのが良い。赤ちゃんや幼児では眠くなると手が温くなる。それが眠いというサインでもある。寝るためには手足が温かいのが大事なのだ。そして、健康な日々を送るには、良い睡眠が大事。

また、ぐるぐると脳が回りすぎてオーバーヒートしそうな状態の子どもや大人に、この諺を伝えたりする。頭を少し休める意味で、冷やすことが大事であると。冷えピ

夕のようなものを充てると気持ちよく頭が冷えて、落ち着くこともあるのだ。

英語では・・・

A cool mouth and warm feet live long.  
(口を冷やし、足を温めるのが長生きの秘訣)

### <好きこそものの上りなれ>

好きなことは熱心に努力するので、上達も早いということ「好きこそものの上り」「好きこそ上手」ともいう。

得意なことや好きなことは、結構長い時間やっても疲れを感じないし飽きない。その結果として上達する。

以前ある青年が、絵を描けるようになりたいと言った。そこでちょっと絵を描かせてみたら、まったく形が取れない。そこで、まずは絵を見て真似て描く「模写」から始めた。その青年は、毎日小さな紙に何枚も何十枚も何百枚も絵を描き、そして、数年が経った。その青年の絵は、漫画というかイラストで、猫を題材にしたものだが、なかなか面白いものを描くようになった。

絵が好きだから、飽きないという。毎日毎日続けていたからここまで形もとれるようになった。努力の成果というのは凄い。

他にも好きで続けたダンス、スポーツ、音楽、パソコン、それぞれ子どもたちは頑張って成果を出している。子どもでなくても、大人でも、好きなものは頑張れるのだ。そして頑張れば結果がついてくる。人間ってすごい！！

英語では・・・

Who likes not his business, his business likes not him. (自分の商売を愛さないものは、商売からも愛されない)

### <過ぎたるは猶及ばざるが如し>

物事には程度というものがあつて、度が過ぎることは足りないことと同じで、良くないということ。 出典 論語

まじめで頑張りすぎの母親が増えた。完ペきを求め、へとへとになりながら子育てをしている母親にいつもこのことわざを伝える。やり過ぎても子どものためにも自分のためにもならない。

例えば離乳食。朝から晩まで台所に立って、離乳食を一生懸命作っている母親がいた。離乳食はできても子どもと関わる時間は削られる。それでは本末転倒である。しかも、母親は疲れ切つて、食事を与えるだけで手いっぱい。イライラも出てくる。母親のためにもならないのだ。

子どもの安全を守ることは親の義務ではある。しかし、転ぶとケガをするからと、外で歩かせないとか、階段を歩かせないとか・・・。よちよち歩きから、子どもは倒れたり転んだりしながら自分の体の使い方を覚えていく。手を貸し過ぎたら、学べないことも多い。過保護過干渉も同様。なんでも「過」がついては良い結果にならない。子どもには子どもの自立心があるし、自分でできることもある。できることをやらせなければ、何もせず待っている子を作ることになる。失敗したつて良いし、失敗がまた子どもの成長につながるのだ。失敗させないための「過」は子どもを駄目にする。

子育て支援の講演会などでは必ず最後にこのことわざを伝えている。

### ＜隙間風は冷たい＞

親しい男女や友人などの間に心の隔たりができる、それまで親密だっただけ一層冷たく感じられるという例え。また、義理の間柄など、なんとなくしっくりしない関係の例え。戸の隙間から吹きこむ風は、戸外で当たる風より冷たく感じられるという意から。

人間関係は、今子どもたちの間でも一番の問題になっている。自殺の原因の中でも上位に入っている。親子、兄弟、友人、いろいろな人間関係があるが、近い関係での心の隔たりというのは、関係が近いだけに辛いものである。

全くの他人であれば、どうでも良いのだが、なまじ仲が良ければ、ちょっとした態度、しぐさ、言葉で、距離を感じてしまい、思い悩んでしまう。とにかく、今の子どもたちは「嫌われたくない」のである。人に気を使い、自分を押し殺して生きている子のなんと多いことか。そういう子は、仲の良い子、周りの子について、とても過敏である。相手は別にそんなつもりではなかったと後でわかることがあるのだが、ちょっとしたすれ違いに、「私何かしたんだろう？絶対に嫌われた。」と落ち込んで立ち直れなくなる。それがまた不登校の原因になったりする。

誰にでも勘違いや、ちょっとしたすれ違いはあるものだ。たとえ親兄弟であっても、他の個体である以上、完ぺきに理解し合え

るということはない。分かり合うためには、すれ違いや勘違いのたびに修正し合うことが必要である。それもせずに関係性を維持しようとするから、常に不安で、アンテナを張り巡らし、疲れ果ててしまう。何があってもお互い様なのだから、もう少し気持ちを楽に、隙間風が吹いたら、その人と一緒にどう防ぐかを考え、隙間風が吹くのを楽しむくらいの関係性でいられたら、人間関係を苦に自殺するなどということはないと思う。

### ＜進を知りて退くを知らず＞

機転が利かず、臨機応変に対応できないことの例え。前に進むことだけ知っていて、時には退くことも必要であることを知らないという意から。出典にはこのあとに「存するを知りて亡ぶるを知らず、得るを知りて喪うを知らず（生きることだけを知って死ぬことを知らない。手に入れることだけは知って喪うことを知らない）」とある。

出典 易経

相談業務をしていると、こういうことや人に度々出会う。失敗していても同じことを続けている人。変化を恐れて、現状維持を良しとしていれば、当然物事は良い方向に向かわない。相談を受ける側においても同様の事が言える。変化しない相談者に対して、「こうしたら」「ああしたら」とアドバイスをしても相手がそれに乗ってこないとすれば、アドバイスを続けるのではなく、ちょっと待って間をおいてみたらよい時がある。月1回やっていた面談を、3か月ほど空けてみたら、何かしら新しい変化が起



きているなどということがままある。

人間関係や、様々な問題でも、前に進むことばかりに気を取られると上手くいかないことはある。ちょっと一歩下がって、もう一回考えてみようとか、ちょっと待って別の角度から見てみようとか、そういう視点は相談業務ではとても大事である。ただし、待てるかどうか、その判断には、経験値が必要かもしれない。

このことわざの続きの部分も面白い。物事や人はずっとそのまま存在するわけではなく、いつかは終わったり亡くなったりするし、今の時代欲しいものが割合い手に入りやすく、どう手に入れるかについてはよく考えているが、せっかく得たものを失くしてしまうことについてはあまり考えていないなあと思う。プラスの面とマイナスの面、両方に目を配ることも必要なのかもしれないし、そうすることで気持ちの準備ができ、あたふたせずに済む。若いうちは考えないことだろうが、年を取ってくると、こんなことも普通に考えるようになるのだなと最近しみじみ思う。

### ＜雀百まで踊り忘れず＞

幼い時から身にしみ込んだ習慣や若い時に覚えた道楽は、年をとっても直らないという例え。雀は踊るように跳ねる習性を死ぬまで持ち続けることから。

出典 京都いろはがるた

先日大学の授業を終えたときに、学生さんたちが、「幼稚園」のイントネーションについて盛り上がっていた。「幼」にアクセントが行くと主張している子と「稚」にアク

セントが行くと主張している子の話である。これは小さい時から家で聞いている言葉に由来する。物の名前に限らず、風習などは育った家での影響が強く残る。

結婚などで、違う習慣がぶつかり合うと揉めるのは、どちらの習慣をこれから通していくかという戦いである。昔であれば、嫁いだ以上、里のやり方ではなく、嫁ぎ先の風習に慣れ親しむというのが暗黙の了解であったが、最近は両方の風習を残したり、あるいは食事であれば作る人の力が強いなど、対等にぶつかり合うようになった。

長年慣れ親しんだことを変えるのは中々大変である。変えようとしても、ちょっとした隙にもととの風習が出てしまう。昔よく「お里が知れる」という悪口があったがそういうことになるのも仕方がない話であろう。

エピソード記憶というのがあるが、長期記憶で、自分が昔覚えたものはしばらく使っていなくても忘れないのである。例えば自転車の乗り方などは、長年乗っていなくても、すぐ乗れる。早くに覚えておいた方が良いものは、しっかり覚えさせることも大事なかもしれない。ただし、悪いことも、覚えたら忘れないのが問題である。

英語では・・・

What is learned in the cradle is carried to the tomb. (ゆりかごの中で覚えたことは、墓場まで持っていく)

### ＜すべての道はローマに通ず＞

目的を達成するための手段・方法はなんとおりもあるということ。また、一つの真

理はあらゆることに適用されるという例え。ローマ帝国の全盛時代、世界各地からの道が首都ローマに通じていたことから。

出典 ラ・フォンテーヌ「寓話」

このことわざを使うのは、子どもや相談者が未来を考えるとときや目標を見失いそうになった時である。

人は道に迷えばいろいろな方法で目的地に着こうとする。そして進んでいけば、工事中で通れず回り道をしなければならないこともあるし、一度バックして別の道を探さねばならないこともある。人生だってそれと同じである。

飛行機に乗るときにどこ行きかわからずに乗ったりはしない。目的地を決めて乗る。人生もある程度目標を決めて進んでいけばよい。早いとか近道とか、まっすぐとか、そこにこだわっていたら、結局上手くいかない。たまには目標設定を縮小したり、拡大したり、多少の変更もあるが、目標が決まれば道筋も見えてくるものだ。そしてコツコツと、歩いていけばたどり着ける。そんな意味合いでこのことわざを伝えている。

英語では・・・

All roads lead to Rome. (すべての道はローマに通ず)

### <住めば都>

どんな不便な所でも、長く住み慣れると都と同じように住み心地が良く、離れにくいものだということ。

転勤が多い家がある。子どもたちはその

たびに学校を変わっている。大きい学校や小さい学校。都会の学校や田舎の学校。子どもたちも両親も、新しい環境に慣れるまで時間がかかる。しかし、慣れてくれば、どんな所でも困らなくなり、いざ転勤となると、「えーっ？」となる。

ポツンと一軒家をもみても、こんなところにもと思うが、住んでいる人は何も困っていない。どこかのジャングルの中でも、安全に暮らせる環境と食べ物や飲み物を確保できれば、何とかなるのだが、人は近代化の中で、電気、ガス、水道などのある生活に慣れてしまって、寒さにも暑さにも弱くなってしまった。食べ物も、好きなものを食べられるようになったから、嫌いなものを食べなくなった。えり好みをしていたら当然どこにでも住めるということにはならないだろう。

近代化は人を弱くしている。色々な所に行き、いろいろな生活を体験することで、人は適応力を身に着ける。適応力さえ身に着ければ、どこでも住めるのである。そして住んでいけばそこは自分にとって一番の場所になる。住めば都、好い言葉だと思う。

英語では・・・

They that be in hell think there is no other heaven. (地獄に住む者はそこ以外の天国はないと思っている)

To every bird his own nest is best. (どの鳥にとっても自分の巣が一番良い)

## 出典説明

### 論語・・・二十編

儒教の経典。「大学」「中庸」「孟子」とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものと言われる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知るうえで極めて重要な資料である。

### 易経・・・

周代の占いの書。儒教の五経の一つ。経文とその解説書の「十翼」<sup>じゅうよく</sup>を合わせて十二編より成る。陰と陽を組み合わせて八卦、これを重ねた六十四卦によって、自然と人間の変化の法則を説いた書で、中国の哲学思想のもとになった。作者として、周の文王、周公<sup>ぶんおう しゅうこう</sup>、孔子があげられるが確かではない。

### いろはがるた・・・

「いろはがるた」は江戸時代後期に始まったといわれ、いろは四十七字に「京」の字を加えた四十八字を頭にして諺の内容を絵解きした絵札の、計九十六枚を一組として遊戯にしたもの。主に子どもが正月に遊ぶ。

各地で内容が異なっていることがある。今回出した「す」のカルタは京都のもので、江戸では「糍<sup>すい</sup>は身を食う」、大阪や名古屋では「墨に染まれば黒くなる」となっている。

### ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ 1621～1695年

十七世紀フランスの詩人。イソップ童話を基にした寓話詩で知られる。「火中の栗を拾う」も「猿と猫」という彼の寓話から。イソップ童話にも同様の話があるとされているが、確認されているのはフォンテーヌの話が最古。

# うたとかたりの対人援助学

## 第20回 庄司アイさんと「民話の力」

鵜野 祐介

今年（2021年）10月24日、宮城県山元町の民話の語り部、庄司アイさんが亡くなられた。10月上旬に予定していた宮城県多賀城市での「東日本・家族応援プロジェクト」の一環として、「やまもと民話の会」の皆さんにお話を伺いたいと思い、7～8月に電話とハガキで何度かやりとりをしたばかりだった。

2回目の電話の中で、会の皆さんにお声がけくださったものの、コロナをはじめ様々な事情により集まっていただけそうにないこと、アイさん自身も高齢のためこの6月に運転免許証を返納し外出することが少なくなったことなどを理由に、丁寧なお断りの言葉をいただいた。電話の声に、いつものような張りが無いのが少し気にはなっていたが、こんなに早くお別れの時が来るとは思ってもみなかった。

今回は、庄司アイさんの「3・11」から今日までの足跡を、残された言葉を紹介しながら辿ることを通して、「民話の力」について考えてみたい。



（庄司アイさん：京都新聞 2021年3月4日夕刊）

### 1. 「3・11」まで

庄司アイさんは1934（昭和9）年、福島県相馬市に生まれ、話し好きの母親から民話を聞いて育ち、19歳で辰男さんと結婚、宮城県亶理郡山元町に嫁ぎ、同町の保育所に定年まで勤める。1995年に退職後、自宅に家庭文庫「たんぽぽの家」を開く。1998年に結成された「やまもと民話の会」の中心メンバーとして活躍。「みやぎ民話の会」にも参加。地元の語り手の民話集を編集・出版。2007年、「やまもと民話の会（山元町）」「丸森ざっと昔の会（丸森町）」「新地語ってみっ会（新地町）」で「トライアングルの会」を発足させ、合同研修会を年1回、持ち回りで行う。

2011年3月11日、自宅で津波に遭い、家ごと漂流。自宅と多くの友人・知人を失う（第七回みやぎ民話の学校実行委員会編『2011. 3.11 大地震 大津波を語り継ぐために』みやぎ民話の会、2012、（以下『語り継ぐために』）pp.67-68 他を参照）。

### 2. 「3・11」の体験

アイさんは夫と、当時中学2年生の孫娘と3人、自宅で被災した。津波が来た時の様子を、5か月後の8月下旬に開かれた「第7回みやぎ民話の学校」では次のように語っている。

…うちの孫娘、ずうっと庭出て、家の定口（家の門口）<sup>しょうぐち</sup>長いもんだから、そこで荒家の方たち送ったときに、だっこしていたその犬が、キャンキャンって、ゆったんだそうです。そして、「ばあちゃん、津波いー。はやく、はや



く、二階に上がれ。はやく、はやく、はやく」って言って、駆け込む、一生懸命もう。

…わだし、<へっ>と思って、後ろ振り返ったのね、玄関のところにいる。そしたら、一キロぐらい南の方に、常磐自動車学校っていう自動車学校があって、その西のところに、もくもくもくっていうのが、瞬間見いたんです、黒いものが。んでもう、急いで夫を促してね。「はやく、はやく、はやく」って私が言うんでねえ、孫が騒ぐからね。「なにい」って、うちのじいちゃん、夫がね、「なにい」って言って、それも、そんなに急いだふうもなく、二階に上がった。二階に上がって、振り返ったんだそうです。「ああ、あ…もう、二階まで、水来た」ってなったんですね。それで、わだしら、その二階に入って。

孫娘は、すぐにこう、窓から隣の方向を見たらしいのね。で、隣に横山さんという家あるんだけど、その家族四人と犬が、いま車に乗って出かけた。それに波がかぶった。それで、まあ、うちの孫娘は、「あああ、ばあちゃん」って言ってね、「もう、横山さん家は、だめだあ」って。もう、ほおんとに、仲良くしていた、その犬まで仲良くしていたのにね。それでずいぶん、うちの孫は、心痛めました。いまでも、まだ、その状況から抜け出せないでいます……(同上 pp.72-73)。

### 3. 『語りつぐ 巨大津波』の発行

被災から50日くらい経ったある日、やまもと民話の会のメンバーがアイさんの避難先に集まって今後の活動を相談し、証言集の作成を決断。「テープレコーダーも何にもないけれども、私らは新聞に挟まってくる広告の裏紙と鉛筆一本を持って、そっちこっちの友だちやら昔の隣やらの話を記録し、8月、冊子『小さな町を呑みこんだ 巨大津波』第一集を発行。12月に第二集、2012年4月に第三集を発行し、2013年3月にはそれらを合冊・編集した『語りつぐ 小さな町を呑みこんだ巨大津波』(小学館)を刊行した。

私たちの仲間の大事な一人が津波の犠牲になりました。髪かきむしって、泣き叫びたいおもいでおりました。

五月になって、避難生活の私の小さい部屋に集いました。その時、二人の方が退会となりました。十数年、小さな力をあわせてやってきたのに、続行があやぶまれました。やっと、持ち話しもいくつかあって、これからと思った矢先のことでした。残った六人、顔を寄せて、今回の震災体験を語りあった時、私たち自身にも悲壮なパノラマを見るごとく、ドラマがありました。「語りつごう」をあいことばに民話をやってきたこと、……この震災を語りつがなければ、の使命と責任を感じました。

テープレコーダーもない パソコンもない 向かう机もない今だからこそ、真実を伝えられるのでは……(『巨大津波』 pp.20-21)。

「語りつぐ」なんて、声をあげて、私達の会員の皆で、耳をそばだてて、行動しましたが自責の思いで苦しくなることもしばしばです。まだ、まだ、思い出したくない、語りたくない、語れない人が大勢おりました。「がんばれ」「心を一つに」なんて、私自身も、まだまだ、まぶしいんです。

振り向いて、海を見ました。洋々とやさしい、おだやかな、海です。私を抱擁してくれています。海は見たくないという日も続きましたが、今は向き合うことができます。海と約束します。寄り添って寄り添うて生きていくことを(同上 p.119-120)。

### 4. 「民話の学校」での語り

2011年8月21-22日、宮城県南三陸町ホテル観洋で開催された、みやぎ民話の会主催「第7回みやぎ民話の学校」で自らの被災体験を語った。その全てが翻字されて前述の記録集『語り継ぐために』に収められている。この記録集を通覧して気づくのは、「(会場笑い)」と記されている箇所が何度も出てくることである。例えば以下の通り。

……わだしと夫は、それぞれにテレビ押しえて。ていうのは、テレビ、買ったばかりだったんです、三台もね(会場笑い)。で、わだしは、テレビさわんなくても、犬の

方が大事と思ったんだけど、夫の方がね、「ちゃんとかんでろよお」っていうんです。……あの地震や津波よりも、テレビが大事だったんだと思うのねえ(会場笑い) (『語り継ぐために』 pp.70-71)。

……でも、思い当たるのは、孟宗竹の竹藪が見えたのね。わだし、いつも、そご通勤に通ってたのね、そこの山の裾ね。そうすつと、筍の節になるとね、<あーああ、こおごの山の筍、おいしいべなあ>って思ってね。んでも、よその家の筍だからねえ、どうにもなんないんだけど(会場笑い)。

<こおごの筍、うまそうだなあ>なんて思いながら、走ってたんだけどね。その山があって、<あ、やっぱりこごは、戸花山だ>っていうこと、わかったのね。……グウウッと引き波だったんでしょね。すごいスピードで、東の方に流れたんです。ぐらぐらですからねえ、もう家は。でも…かなりの距離を流されて、そのまま、家の形があるのね。<もしかして、「ノアの方舟」?>って、わだしは思ったんですね(会場笑い)……(同上 pp.74-75)。

そこで起きている出来事の深刻さとは裏腹に、5か月後に少し距離を置いて振り返った時に沸き起こった「笑い」の感情をそのまま、相馬の土地言葉でカラッと語っている。シリアスな内容の合間に「笑い」を交え、張り詰めた会場の空気を和ませることで、聴き手たちをより一層深く物語世界へと引き込んでいく。これは、「むかーし昔、あるところに」で始まる昔語りの代表的な技法(レトリック)であり、アイさんが卓越した語り手であったことの証左だが、相馬言葉で語られることによって、なお一層の味わいが醸し出されていることを補足しておきたい。

## 5. DVD『3. 11を語り継ぐ』

2012年2月、前年8月に「みやぎ民話の学校」で被災体験を語った6人の語り手が同じ内容の話をスタジオで語り、2012年5月にDVD『3. 11

を語り継ぐ』としてKHB 東日本放送から発売された。

アイさんの語りは、vol.2「孫のひとことで2階へ」と題して収録されているが、半年前に「民話の学校」で200人余りの聴き手を前にして語られた、文字化されて『語り継ぐために』に収められたものと内容がほとんど同じであることに驚かされる。まるで民話を語るかのように、時系列に沿って主人公の目線に合わせて出来事が展開する。「キャンキャン」「もくもくもく」「グウウッ」といったオノマトペまで同じである。

一方で、決定的な違いも見えて取れる。スタジオでの語りであり、目の前に相槌を打ってくれる聴き手がないこともその理由だろうが、おそらくはその後の半年の歳月によるものだろう。「みやぎ民話の学校」での語りであった「(会場笑い)」の部分、みんなで一緒にこの悲しみを笑い飛ばして進んでいこうという高揚感がここにはない。

DVDの制作に協力した「みやぎ民話の会」顧問の小野和子さんは、DVDのライナーノーツに次のように記しているが、その言葉は、アイさんのその後の10年の歩みを予見していたかのようでもある。

…一人の語り手がいわれました。「去年の8月の自分と、いまの自分は違っている」と。ごく当然ともいえるこの言葉が含む意味には深いものがあります。つまり、昨年8月時点では、まだ夢中で興奮状態ですらあったものが、時が流れるにつれ、喪失感と寂寥感の果てしなさに、われを失うことがあるのだということです。このことばを裏付けるように、語りがある変化をもたらしていました。その変化のなかに、被災された語り手のみなさんの、これからはじまる本当の苦労を垣間見る思いがします。

## 6. 「やまもと民話の会」20周年記念の会

2014年8月、山元町の西隣に位置する丸森町で開かれた「第8回みやぎ民話の学校」に参加した私は、そこではじめてアイさんにお目にかかった。バスツアーで、アイさんたちが中心となって建立した戸花

慈母観音や、津波で二階天井までつかりながらも教師たちの的確な判断で屋上の屋根裏倉庫に子どもたちを避難させて無事だった旧中浜小学校跡などを訪れた際、マイクを握りしめて熱心に説明して下さるアイさんの鋭い眼差しが目に焼き付いている。

2017年3月21日、東京学芸大学の石井正己さんが「復興を支える民話の力」をテーマに講演とシンポジウムを行った。そして2018年3月24-25日には、やまもと民話の会発足20周年を記念する「大震災をのりこえ、民話を語りつく」会が、石井さん、小野和子さん、野村敬子さんを発起人として開かれた。私もこの会に参加し、アイさんの語りも聴かせていただいた。この会の翻字記録集から引用する。

去年の4月1日から山元町は、仮設住宅は切り上げて、それぞれ自宅を建設されたり、公営住宅に入ったりと復興が大きく進みました。私も被災者として、また家がすっかり流された者として、一番の目的が自分の家へ入ることだったんです。私も山の方を買って開墾して、そこに小さな家を建ててこじんまりと今暮らしておる所です。本当に山元町の方たちも、このお家うちに入れたという大きな壁を乗り越えてとても安心して、「ああ、よかった」と思っています。

ところが、被災地のね、共通の悩みでしょうか。孤独に耐えられないなあと思っている方、それから家族が分離したり家族をなくしたりした方、それから、なかなか隣近所のコミュニケーションの取れない方の心の叫びが、私の胸に突き刺さっています。おそらく、被災地どこも同じでないかなあと思うんです。私たちは、心の復興についてはまだまだ勉強が足りませんが、今まで民話をやってきて、そっちの学校やこっちの老人会なんかに行き、昔話やわらべ歌で遊んだりしました。

それがね、思ったより反響があるんですね。わあというまに「花いちもんめ」をやったり、そうかと思うと、そういう昔話があるのかとしくしく泣いて涙をこぼしたり、私たちの語る民話っていうのは、大事なものでないかなあって、このごろ特に思っておるんですけれども、

実際には、語る人が少なくなったし、語りの場も少なくなって、しぼみがちなんですね。でもね、心の復興の問題がおそらく東北、この浜通りではいっぱいあると思うんです。そんなときにね、民話を通してみなさんに元気をおあげできればいいんじゃないかなあと思うんです。民話には力があるんですから。

……六十代のころ、私は民話に力があるなんて思わなかったんですよ。それで、小野先生やみやぎ民話の会の皆さんのご指導を受けて、「民話の力」を私なりに受けとれたころ、この大震災に遭ったんです。私はこの震災を体験して、「民話の力」を知りました。「民話は、命を生み出すものであり、民話は、命をはぐくむものだ」ということを。私は、今日ここでみなさんと確認したいと思います(石井正己・やまもと民話の会編『復興と民話 ことばでつなぐ心』三弥井書店2019, pp.79-80)。

## 7. 「震災10年 思いを刻む」

今年(2021年)3月4日、京都新聞夕刊にアイさんが紹介された。「震災10年 思いを刻む ③民話語り部@宮城・山元」という記事は、以下のように締め括られている。

震災の約2年後、町内陸部に転居した。大切に育てていたトクサやツワブキの根をかつての庭から掘り起こし、新居に植え直した。「夫は『雑草だ』って言うんだけどね」と冗談めかしつつ、その目は「震災の記憶もこの草同様に受け継ぐ」と語っているようだった。

今年8月2日付のアイさんからの最期となったハガキには次のように記されていた。「…東北に寄りそっていただいていることに感謝申し上げます。…本当にたくさんのご厚情ありがとうございます」。

アイさんから受け継いだ「民話の力」というバトンをしっかり次の世代に届けていくこと、それが私たちの使命であり責任であると改めて感じている。

アイさん、本当にお疲れ様でした。どうかゆっくりお休みください。合掌。



<2021年8月8日>

46号の原稿を提出した。相変わらず新型コロナウイルスで困ったもんだ。これでは婚活もどうしていいかさらにわからない。(この文章では5を6に変えただけだろうが。)

<8月20日>

もう数日前の話だが、某既婚の看護師長の Y さんに、39歳位の女性はいないものだろうかとの別の用事について話してしまったが、翌日にも近くに来ら

れた機会があり、婚難救助隊の存在を某師長にお伝えした。YouTube の登録者が一瞬64名になったのに63名に戻った。なかなか増えないが63名にはありがたいことである。

<9月12日>

実は登録者が62名に減ってしまい10日ほど続いたが63名に昨日戻った。某マッチングアプリでかなり久しぶりに返信してくれた人がきた。せっかくなので反応が続いていただきたいものだ。

<11月6日>

10月を飛ばしていたことに驚いた。日記どころか、月記にもならなくなってしまったか。

重ねて、かなり、内容が短い展開が続いていると思うが、それだけ婚活は難しい人には難しいということで、つまり、日々に変化が起こせないのである。変化こそが実は文字となるのではないだろうか。デビューの頃は離婚問題の当事者だったり、かなり変化ある心境の動揺があったのだが。

やはり、パートナーとの関係性というのは動揺を伴う重要事であり、それが文字量となるのだろう。

もう少し提出を伸ばそうかと思っていたのだが、YouTube「婚難救助隊」は私の運営だが、登録者数が70人となったので、きりが良いのもう提出させていたかどうかと思ってしまう、思ってしまうと



思い通りにしたい性分のために提出していただく。だが、2カ月で7名増えていたのかと思うと、理解してくださる方々もいるんだなとうれしい。登録者数70人は増減するのが残念だが、それぞれのYouTube番組の視聴者数は減ることはない。一つだけダントツで3300視聴を超えたYouTubeがある。これはけっこうすごい達成だと思っているのだが、どうしてそうなっているのかがわからないのだ。わかれば、もう有名人に既になっているわな。婚活の苦労もないかもな。

某マッチングアプリで何百人応募しても誰も来ないというのに、唯一のたまにメールが来る某異性であるが、メル友？として55日を超えることができたが、相変わらず差しさわりのないことを送信し続けている。半面、思い切ったアプローチがメールでさえ出来ないのだ。

昨日だったか、私は競馬は応募したことがないが、ニュースで、スモモモモモモモという競走馬が優勝して、アナウンサーが4回連呼したのが見事だったというのを知って、それを某異性にメールしたのだった。差しさわりない内容でしよう？

あまり熱心にやりすぎると電車男のような連載になってしまうのでそれはいけないと思うが、現在私は54歳だが、実子が諦められず、某異性は14歳差である。しかし、社会とか時代のせいにしてはいけないのかも知れないが、社会や時代のせいもあると思う。もっと結婚

が重要視されている時代だったら、結婚できているのではないのか。自由とか多様性とかで結婚しない選択の異性が増えたら一方では結婚できない人が増えるのだから。社会の自由や多様性が、一部の人達には苦労を伴わせてしまうというパラドックス。これがマスメディアやなにやらで発信されていないことだ。だいたいマスメディアの人達は結婚に苦労する人達じゃないのだろう。てか。

〔PBLの風と土 第19回〕

## 適度な親密さで公正・誠実な関係構築を

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

### 【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきており、コロナ禍を経た連載4年目にはフィールドに赴くことが抑えられた影響を過去の受講生の語りを手がかりに検討しました。

### 1. 1年の順延でのオンラインIARSLCE

前回、連載第18回では、1年の順延でデンマークのオールボー大学で開催されたPBL WEEKについて紹介したところであるが、去る11月15日から17日にかけてIARSLCE（International Association for Research on Service-Learning and Community Engagement）と呼ばれている国際サービスラーニング・地域貢献学会が開催された。当初はミネソタ大学をホストに開催される予定だったものの、こちらもまた昨年中止とされた。そうした中、コロナ禍の長期化を受け、通常の年次大会とは異なり、「Virtual Gathering」と称した完全オンライン開催となった。国際学会ゆえに多様な環境の人々が参加することに配慮をしたのか、PBL WEEKと異なって前回に画面のキャプチャで紹介したGather Townのようなメタバース系のサービスは使われることはなく、多くのユーザーが慣れてきていると思われるZoomが全面的に用いられた。

今回の全面オンラインでの国際で初めて体験したのが、会期の3週間前をメ切として10分以上15分未満の動画のアップロードが必要で、発表者も参加者も事前にその動画を閲覧した上でセッションには参加する、という形態であった。具体的には、5月13日に発表希望者は6月18日まで（後に6月25日に順延）に論題と50語での概要に加え1,000語以内での発表要旨と共に応募するように案内があり、8月24日に採否の通知が送られ、9月16日の前述のビデオ作

成の形式が案内され、10月29日までに応募の際に用いたオンラインサービスでの各発表のページにファイルをアップロードしておくように、と指示がなされた。ちなみに日本ではPeatixが頻繁に活用される傾向があるように思われるイベント管理のサービスだが、Fourwavesというサービスが用いられた。

ちなみに筆者は今回の大会で2つの発表に筆頭者として応募し、幸いにも両方が採択に至った。1つは立命館大学での取り組みを紹介する「How Service-Learners Deepen Their Relationships & Design Their Lives: Introducing the Metaphor of Earth, Wind, and Waves in Disaster Revitalization Programs」（サービ

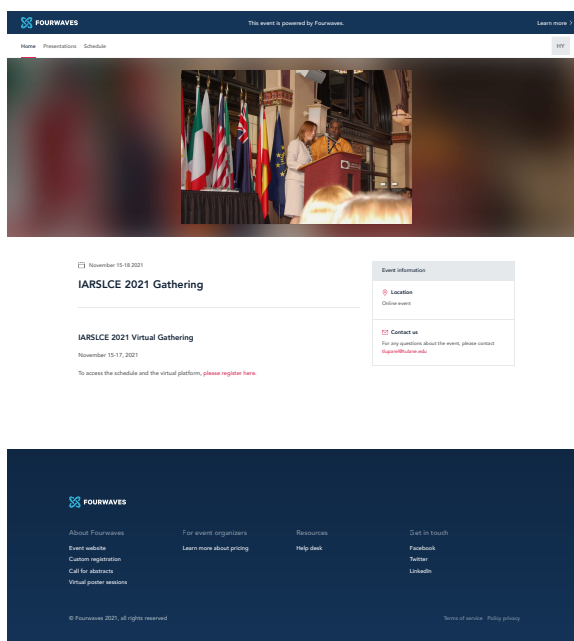


図1：FourwavesでのIARSLCEのイベントページ

ス・ラーニング科目の受講生はいかにして現場で人間関係を深め人生設計するか：災害復興をテーマとしたプログラムにおける「地」「風」「波」のメタファーの導入)で、副題にも掲げたとおり、本連載の第17回にて記した、サービス・ラーニングを通じた地域公共人材の養成の可能性について取りあげたものである。もう一つは日本サービス・ラーニング・ネットワークの研究部会と国際連携部会の合同でのアウトリーチ活動として「Creating a Future of Service-Learning in Japan: Reviewing Political Context and New Mission of Engaged Campus」(日本におけるサービス・ラーニングの未来を拓く：関連政策の整理と地域貢献への新たな使命を通じて)と題して発表した。それぞれ、ペアとなった発表者(前者では健康科学の学部プログラムでの事例紹介、後者では全学でのオナーズプログラムでの事例紹介)と参加者に恵まれ、例えば前者では教養教育におけるサービス・ラーニング手法を用いたキャリア教育としての展開可能性を、後者では欧米とは異なったアジアや日本の歴史・風土を反映したプログラムの開発・運営・評価のための理論構築の意義が、それぞれ確認できた。

なお、オンラインでの国際学会では1クリックで空間を越えてネットワーキングができるものの、物理的な距離が離れているゆえに時間を越えることは難しく、システムトラブルなどに見舞われることなく通信のタイムラグも気にならないレベルではあったものの、やはり主たる参加者層である米国とのあいだで半日ほどの時差がある、というのが悩ましかった。前掲のFourwavesではプログラムの開始時間が自動的に利用者の所在地にあわせて表示されるという行き届いた機能が実装されていたのはありがたかったが、全体セッションは日本時間で早朝(現地時間で午後から夕方)に設定されていた。それでも、日本のみならずアジアやヨーロッパからの参加者にも一定の配慮がなされたプログラム構成になったように思われる。それでも複数のプログラムに参加する中で、前回、つまり本連載第18号で予告したとおり、パートナーシップについて検討するにあたっての思索を巡らせる機会を得ることができた。

## 2. 研究課題の世界的な兆候から

実は2020年にミネソタ大学でIARSLCEの年次大会が開催されていたら、そのホストは2019年7月に立命館大学に招聘したAndrew Furco(アンドリュー・フルコ)先生が担うこととされていた。加えて、IARSLCEの20回目の記念大会ということで、2010年の第10回記念大会での議論を踏まえ、10年間でどのように会員の関心が変化しているか(あるいは変化していないか)を調査し、その結果を発表する、という計画になっていた。そのため、2019年7月28日にはIARSLCEの国際イニシアティブ委員会(International Initiatives Committee)によるフォーラム「Setting a Global Research Agenda for Service-Learning and Community Engagement」(サービス・ラーニングと地域貢献に関する国際的な研究課題の設定)を立命館大学大阪いばらきキャンパスにて開催させていただいた。

そして2021年11月17日(日本時間では18日の朝5時から)の全体セッション「Setting a Global Research Agenda: Preliminary Findings」(国際な研究課題の設定：予備調査結果)では、日本を含めた26ヶ国・370人の参加者を得たワークショップ形式での議論を経て、どのような傾向があるかについてフルコ先生を中心に報告がなされた。当初は各国共通で8つのテーマで議論を行い、それらのテーマに対して具体的な研究課題を掘り下げる、という方法が採られていた。しかし、コロナ禍によりオンラインでのディスカッションも用いられることになった上、そもそもCOVID-19というパンデミックを踏まえて終息後のサービス・ラーニン



図2：日本でのフォーラムの様子を紹介するフルコ先生

グのあり方も検討する必要があるとして、2つのテーマが途中で追加されたと示された。日本でのワークショップの様子も写真で紹介いただいたが、その際に用いたスライドは筆者が翻訳していたため、そこに新たに追加された2つも新たに訳を添えて、以下に10のテーマを示しておく。

「課題の構成 (Structure of the Agenda)」

- (1)波及効果の研究 (Impact Studies)
- (2)応用・展開プロセスの研究 (Implementation/Process Studies)
- (3)制度化の研究 (Institutionalization Studies)
- (4)概念的構想や理論構築 (Conceptual Framings and Theory Development)
- (5)方法論的考察 (Methodological Considerations)
- (6)実施手段と評価方法 (Instrument and Measures)
- (7)反復の実証実験 (Replication)
- (8)文化的・地域のおよび異文化間・地域間研究の課題と考察 (Cultural/Regional & Cross-Cultural/Regional Research Issues and Considerations)
- (9)新型コロナ/ポストコロナ時代のサービス・ラーニング (Service-learning in the COVID/Post-COVID Era)
- (10)公平性と社会的発展 (Equity and Societal Advancement)

興味深いことに、この10のテーマにはパートナーシップという言葉直接的に含んだものはない。逆に言えば、研究課題の検討にあたってパートナーシップが個別具体的なテーマとして掲げられないということは、サービス・ラーニングでは良好なパートナーシップの構築が不可

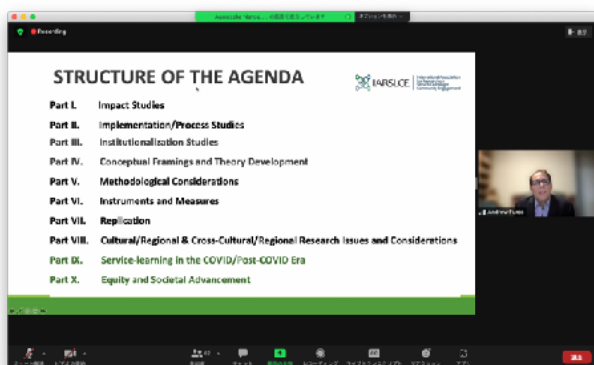


図2：全体セッションで示された10のテーマの構造 (追加された9番目と10番目は表示色が異なっている)

欠であることの証左でもある。実際、テーマ1の「波及効果」をテーマとした研究課題に関する対話の際に用いたスライドの説明文には、次のように記されていた。利害関係者という日本語表現では、リスクマネジメントといった要素に関心が向けられそうだが、11月17日の全体セッションではSDGsの目標達成のためにサービス・ラーニングを導入し、そのプログラムによる長期的な波及効果に期待してもよい、といった整理も示された。

波及効果の研究では、学生、教員、スタッフ、機関、そして地域社会を含む学びのコミュニティにおいて、参加者に対するサービス・ラーニングと社会貢献や市民参画についての影響評価に焦点を当てます。短期的・長期的な成果を横断する、広い範囲にわたる研究です。

この研究課題では、すべての参加者と利害関係者にわたる、サービス・ラーニングと地域貢献・市民参画の波及効果を探る問いを特定しなければなりません。一つひとつの問いは厳密に区別して取り扱われると共に、一定数の参加者への波及効果に着目することになります。

(訳は筆者による) 1

そうして目的にあわせて多彩に展開できるサービス・ラーニング手法だからこそ、プログラムごとにどのようなパートナーシップの形態が適するかについて、設計する側には精緻な検討が求められる。そこで想起すべきなのは、本連載第9回・第13回で紹介したSOFARモデルに

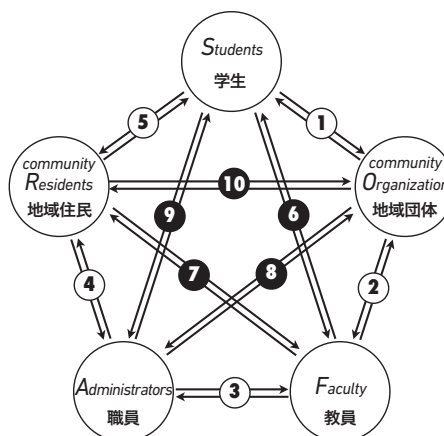


図2：SOFARモデル (Bringle et al., 2009, p.5をもとに筆者作成)



おける10の関係軸となろう。その際、学生 (Students) ・ 受入団体 (Organization) ・ 教員 (Faculty) ・ 学校職員／役員 (Administrators) ・ 地域住民 (Residents) のそれぞれが全て等しい関係性を持つのではなく、時には積極的な関係構築を行わず、さらには加重配分も異なって必然である。実は筆者が今回発表したもののうち、本連載第18回で紹介した「風」と「土」と「波」の比喻を用いながら、プログラムとしては単年度であってもプログラムそのものは約10年にわたって継続することで学生・教員・住民とのパートナーシップがより重要となることを、図3のとおり、5つの要素に対する大文字と小文字の組み合わせで「SoFaR」という具合に表現した。<sup>2</sup>

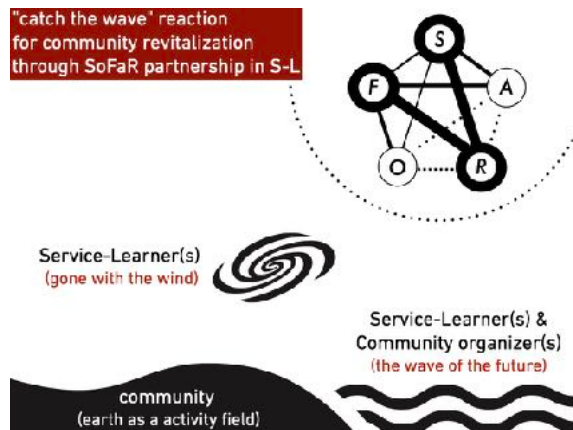


図3：SOFARモデルからSoFoRでの関係性を明示 (IARSLCE2021 Concurrent Session 7aでの筆者らの発表)

### 3. SOFARの前提となる相互作用の深度

ここで問題となるのは、SOFARモデルにおいては全てのステークホルダー、つまりは学生・受入団体・教員・学校職員／役員・地域住民が等しい関係性を持たないとしても、5つの構成要素の項目間でどのような質的関係の生成・維持・発展（あるいは消滅）を図るか、という点である。例えば日常的なコミュニケーションの頻度、またそのための手段、さらには用いる言語の水準などが挙げられるだろう。もちろん、Jacoby (1996=2006) がサービス・ラーニングでは互惠 (reciprocity) が鍵概念の1つとして挙げていることをもとにすれば、各項のあいだで一方通行の関係に止まることは避けねばならない。何より、よい関係というのはつくることよりもつくり続けることの方が困難である

ことは、友人や家族の関係を引き合いに出すまでもなく、体感的に理解できているのではなかろうか。

このような関心のもとで、SOFARモデルを提示した論文を冒頭から精緻に読み進めると、「relationship」と「partnership」を対置して区別しつつ、相互に関連づけて述べていることに気づく。具体的には、パートナーシップとは人間関係の部分集合としてあらわれる (Partnerships are presented as being a subset of relationships between persons) とある (Bringle et al.,2009, p.1)。この記述からも、SOFARモデルの5つの項目について、項目間の二者関係がどのような状態にあるかに常に関心を向け続けることが、サービス・ラーニングにおけるパートナーシップをよりよいものへと導く手がかりとなることがわかる。つまり、よりよいパートナーシップを形成するためには、学びのコミュニティにおける部分集合の状況が適切に分析される必要がある。

Bringle et al.(2009)では、「二者関係の質の分析手法 (The quality of these dyadic relationships is analyzed)」は「相互作用において親密性・公平性・誠実性があるか? (the interactions possess closeness, equity, and integrity)」(p.1)によって迫ることができるかとまとめている。中でも親密性が高いときに相互作用のあるパートナーシップが構築されることを複数の文献をもとに述べている。そしてその親密性とは、(a)相互作用の頻度 (frequency of interaction)、(b)相互作用の基礎となる活動の多様性 (diversity of activities that are the basis of the interactions)、(c)相手の行動、意思決定、計画、目標に対する影響力の強さ (strength of influence on the other person's behavior, decisions, plans, and goals) の3つの要素からなるという (p.4)。つまり、相互作用の頻度が高く、そもそも多様な活動を通じて相互作用の機会が生じており、相互作用を通じて各々の取り組みによい影響がもたされているか、それらを意識していくことを促している、と捉えられる。

そうしてBringle et al.(2009)では、「関係が親密であればあるほど、誠実さと公平さが増し、

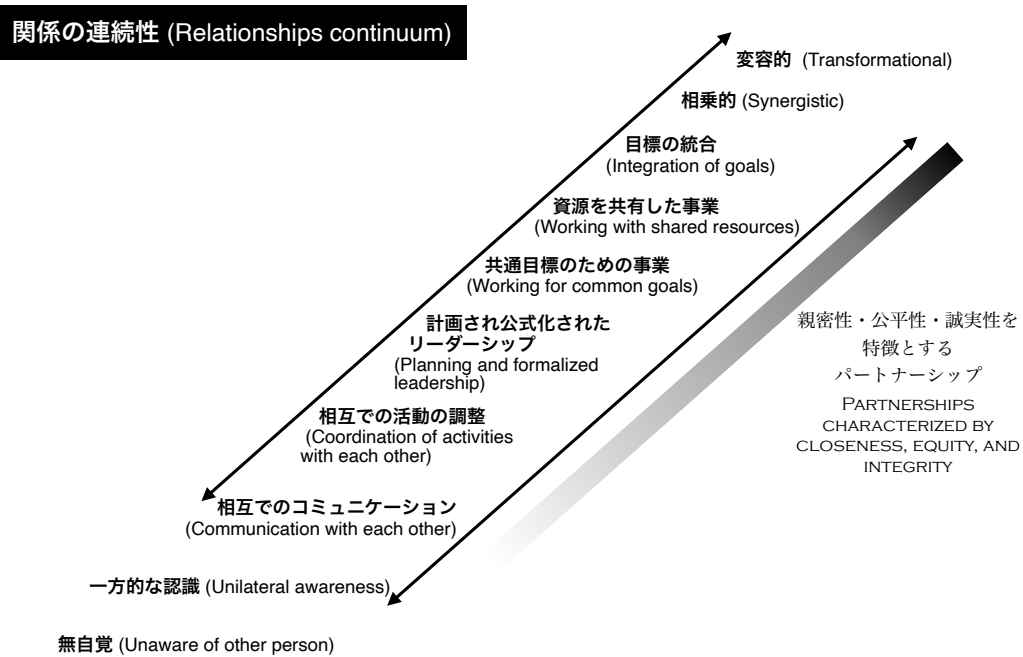


図4：関係性の多様な形態 (Different Types of Relationships)  
(Bringle et al., 2009, p.4：訳は筆者による)

変容をもたらすパートナーシップは常に3つの特性を高いレベルで備えている」(the closer the relationship, the greater the integrity and equity, with transformational partnerships always having high degrees of all three characteristics)として、図4を示している<sup>3</sup>。ここでは相互作用を通じた変容的な関係性を最も高次のパートナーシップとして位置づけているのが特徴である。同時に、相互作用のレベルを10段階に区別しているものの、具体的にどのような状況にあるときにどの相互作用の形態として位置づけられるのか、といった基準や指標などは示されていない。よって、10の段階のどこにあるのかはステークホルダーどうしが親密な関係構築を図り続け、ことさらに評価とは言わずに相互評価を行う必要があり、それにより変容的な関係性を理想としつつ当面はどのような状態を目指しプログラムを通じてどのような日常を過ごしていくのかの共通認識が導かれ、プログラムが充実すると捉えられるだろう。

#### 4. 社会の変容をもたらすという大義

今回はサービス・ラーニングにおけるパートナーシップのあり方について、前回の結語で取りあげた「クリエイティブ」な学びのコミュニティの創造という観点から、改めてSOFARモデルとそれに関連する議論を整理することとし

た。そしてサービス・ラーニングでは、S・O・F・A・Rで示される5項、すなわち学生・受入団体・教員・学校職員／役員・地域住民が、自分以外の他者とあいだで親密な関係を構築し、その親密性に加えて公平かつ誠実な取り組みへの相互作用を重ねていくことが求められることを確認した。その上で、最も高次の相互作用は「変容的」な関係であることも確認した。

ただし、この「変容的 (transformational)」という観点こそ、サービス・ラーニングがPBLと性格を異にする前提になっているのではなかろうか。というのも、サービス・ラーニングにおいて変容的な関係を構築することは、ただ相互作用によって切磋琢磨するだけでなく、模範的で成熟した市民としての態度を携えることによってよりよい社会を創造へと変容をもたらす担い手として自覚と責任を果たしていくことが求められるためである。一方で、PBLであれば、プログラムの設計・展開・評価のプロセスにおいて社会ビジョンの共有は必要なものの、明確な役割分担のもとで成果をもたらす、達成すべき目標に到達する必要がある。さらに細かく言えば、Problem-Basedな学習であれば、社会現象や事例の背景にある構造的な問題について学術的かつ実践的に検討し知識と能力と態度を磨く必要があり、Project-Basedな学習であれば限られた時間の中で確実な成果をもたら

し（多くの場合は成果物を作成し、ステイクホルダーと共有した上で）その到達点を評価する必要があるが、サービス・ラーニングほどは理想的な社会像を構想する必要はないだろう。

事実、Bringle et al.(2009)では「SOFARの二項の相互作用からもたらされる成果の質に関する側面は、それが搾取的であるか、交流的であるか、変容的であるかの度合い（E-T-T）にあらわれる（dyadic interactions in SOFAR is the degree to which they are exploitive, or are transactional, or are transformational (E-T-T)）」（p.7）という記述がある。ここから、変容的の対極にあるのが搾取的、その中間が交流的な関係として位置づけられていることがわかる。と同時に、プログラムを通じて生み出される相互作用の結果をよりよいものにしていけば、自ずとプログラムに関わる人々のみならず社会の変容をももたらすと捉えられ

る。なぜなら、搾取的な関係とはステイクホルダー内での閉鎖的な環境においてこそ成立し、転じて変容的な関係とはプログラムの担い手と対象とのあいだで開放的かつ活力ある環境を成立させようと位置づけられるためである。

そこで今回は学びのコミュニティにおける変容的な関係とは何かについて整理することしよう。その際、変容的な関係構築がプログラムの評価とどのような関係にあるかも迫ることとなる。また、相互作用によるステイクホルダーの行動や態度への変容という観点では、当初は健康指導で用いられたものの個人における活動の習慣化に迫る理論として広範囲で援用されつつある行動変容ステージモデル（TTM: Transtheoretical model）なども検討したい。それにより、サービス・ラーニングとPBLとの共通点・相違点を鮮明にできるかもしれない。

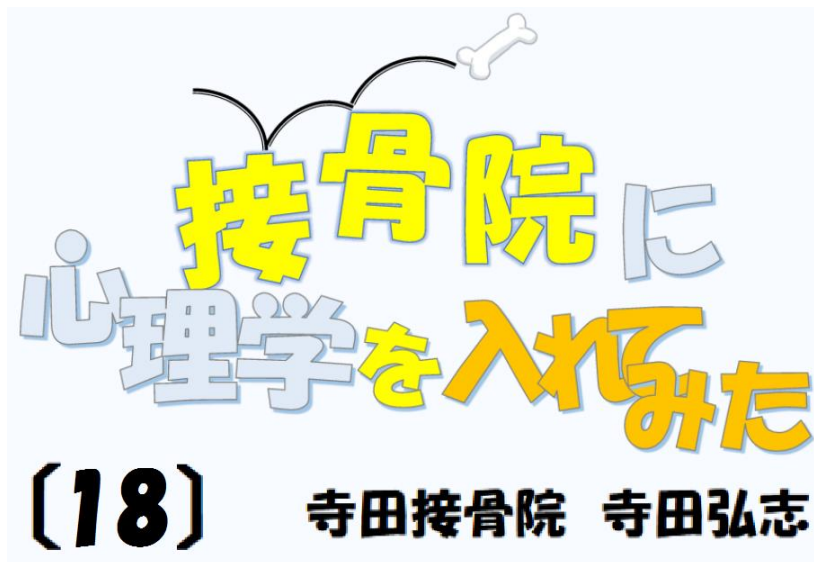
(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

#### 【引用文献】

- Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.
- 市川享子・秋元みどり. 2018. サービス・ラーニングと社会変容のための評価枠組みの構築. 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 30, 43-55.
- Jacoby, B. 1996. Service-Learning in Today's Higher Education. In Jacoby, B. et al. (Eds.), Service-Learning in Higher Education: Concepts and Practices. Jossey-Bass. (pp.3-25). (山田一隆訳. (2007) . こんにちはの高等教育におけるサービスラーニング. 『龍谷大学経済学論集』, 47(1, 2), 43-61).

#### 【注】

- <sup>1</sup> 原文は次のとおり。[Impact studies focus on assessing the impacts of service-learning and community engagement on participants, including students, faculty, staff, institutions and the community. They cross a broad range of short-term and long-term outcomes.] 「The research agenda should identify questions that explore the impact of service-learning and community engagement across all participants and stakeholders. The questions should be nuanced, and the impacts on specific participant populations should be considered.]
- <sup>2</sup> なお、発表資料（前掲のとおり、今回は事前アップロードにより提示したビデオでのスライド素材）では、図2において示したSOFARモデルと比較したとき、S・O・F・O・Rの配置順が異なっている。これは図2ではSOFARの順で並べた方が感覚的に5つの各項目を認識しやすい、という観点からの図解のためである。一方、スライド素材ではBringleら(2009)がSOFARモデルについての説明により忠実に沿った配置順で示したことによる。具体的には、サービス・ラーニングのプログラムで活動する地域社会において学生らの受入団体となる「組織のスタッフが、コミュニティ内の住民の意見や立場を必ずしも共有していなかったり、適切に表現できていなかったりする可能性」があること、また大学側の関係者を学生・教員・職員／役員に分けることにより「キャンパス内の関係と、大学による市民活動に焦点を当てて構築するソーシャルネットワークの両方を分析できる」としている（Bringle et al., 2009, p.6）。ちなみに、教職員のうち職員についてstaffではなくadministratorとしたのは、頭文字を取ってSOFARモデルと呼びたいという意向から選択されたとも考えられるものの、プログラムの適切な運営や改善のために「経営資源の配分や方針の策定など」において一定の執行権がある役職者の参画が重要であるという考えから、また地域住民については「場合によっては、利用者・消費者または何らかの当事者（in some instances, clients, consumers, or special interest populations）」などの居住者以外にも含まれると記している（Bringle et al., 2009, p.5）。
- <sup>3</sup> 今回紹介した図4およびSOFARモデルは、市川・秋元（2018）において別の表記で訳出されていることを承知している。それらと別の語で訳出したのは、筆者が2015年11月17日に米国・ボストンでのIARSLCE年次大会にてSOFARモデルに触れ、2016年のIARSLCE年次大会での発表など、併行してその特徴に関心を向け、国内でも筆者の観点から日本語を充てて紹介・援用してきたためである。よって、既出の訳語を否定するものではないことをここに記しておく。



## ヤモリに学ぶ こりの解消法

J R 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

先日、対人援助学マガジン編集部の大谷多加志さんがこちらに訪ねてくださいました。

私の施術を受けて、それをマガジン執筆者訪問記にまとめてくださるとおっしゃるのです。

なんと光栄な！！

うれしい限りです。

上のタイトルロゴも大谷さんがボランティアで作ってくださったものです。

なんていい人なんだろう！！

訪問記は、おそらくこの号？に掲載されますので、そちらもぜひご一読ください。

大谷さんからは、取材ということもあって、たくさんの質問を受けました。

心理テストを専門とされているだけあって、「するどいな」と思える質問や、私に新しい気づきを起こさせてくれる質問もありました。



たとえば、私は施術のとき、患者さんの体を動かして、痛いほうと痛くないほうを患者さんに教えてもらいます。そして、痛くないほうへ、痛くないほうへと体を矯正していきます。

大谷さん 「痛いほうで体を触られると力が入って緊張し、痛くないほうで触られると力が抜けてリラックスできます。これは何か心理的なねらいがあるのですか？」

私 「痛くて力が入ったあと、痛くないことで力を抜いてもらえると、固くなった筋肉がほぐれやすくなります。・・・あっ、これって心理療法で使う漸進的筋弛緩法と同じですね」

昔、心理療法の仕事をしていたとき、心の緊張が強いクライアントさんには、漸進的筋弛緩法を導入に使わせていただくことがしばしばありました。

心理的緊張が強い人に、いきなり「気持ちをリラックスさせてください」とお願いしても、なかなかできません。

「気持ちがとても落ち着いている」と暗示をかけても無効であるばかりか、抵抗を招くことさえあります。

このようなクライアントさんには、まず、体のどこかの筋肉に力を入れていただいて、次に力を抜いていただきます。これを何回か繰り返して、筋肉の弛緩した状態を味わっていただきます。

力が抜けた感覚に注意を向けていただきながら、「その感覚がだんだん強くなっていく」、「その感覚がだんだん広がっていく」といった暗示をかけさせていただきます。

体をリラックスさせることができれば、心の緊張もおのずととけてくることが多いのです。

そうすると、心理療法全体の流れもスムーズになります。

いっぽう、体の施術をするときに筋肉が縮みやすい人は、筋肉に力が入って緊張している傾向があります。

筋肉に力の入りやすい人に、「力を抜いてください」といっても、難しいことがあります。

まず、縮んだ筋肉をさらに縮めて触ると痛いので力が入ります。次に伸ばしながら触ると痛くないので力が抜けます。このようにすれば、いちいち指示しなくても、力を抜いてもらった状態で施術できるので、筋肉を伸ばしやすくなります。

そうすれば、効率的な施術ができるので、限られた時間でも、より多くの部位に施術することができます。

昔やっていた心理療法の漸進的筋弛緩法の経験が、いまの接骨院での施術に活かしているようです。

前号で「心理のトピックは、おそらく、これからもあまり出てこないと思います」と書いたのに、いきなり、心理のトピックが復活してしまいました。

大谷さんという優れたインタビュアーに引き出していただいたおかげです。

大谷さんありがとうございました。

さて、本題に入ります。

今回は、ヤモリに学ぶこりの解消法を説明します。

筋肉が縮みすぎて固まった状態をこりだとします。

前の号で、こんな説明をしました。

「ヤモリが壁を登ったり、天井をはったりできるのは、ヤモリが足の裏に密集して生えている繊維を、物体にファンデルワールス吸着させることができるからです。

人間の筋肉の中にも、細い繊維がブラシ状になっているところがあり、その繊維同士が吸着して簡単には伸びなくなり、縮んで固まっている状態が、筋肉のこりです」

詳しくは、46号の記事をお読みください。

ヤモリのすごいところは、天井に足の裏の繊維を吸着させてぶら下がるだけでなく、吸着させた足を、自由にはがすことができる（可逆接合性）ということです。

人間は筋肉がこってしまうと、それを自由にゆるめる、つまり、吸着した繊維同士を離すことむずかしいですが、ヤモリは簡単にそれをやってのけています。

もし、足をくっつけることしかできなくて、はがせなければ、ヤモリは餌を得ることも、他の捕食者から逃れることもできず、とうの昔に絶滅していたでしょう。

残酷な写真ですが、天井に貼りついたまま死んでいるヤモリの写真を見たことがあります。

つまり、ヤモリは、天井に足をくっつけてしまえば、脱力してもぶらさがっていられます。

反対に、足を天井からはがすには、自分ではがそうとしてはがさなければならないのです。

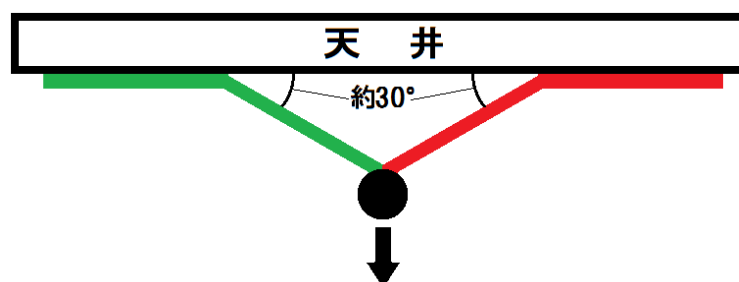
まず、どのように貼り付いているかを考えてみましょう。

日東電工さんが開発されたヤモリテープは、壁面に対して30度くらいで引っ張ると、最も吸着力が高まるそうです。一方、それ以下の角度にしても、それ以上の角度にしても吸着力は弱まります。90度くらいで引っ張ると、簡単にはがれてしまいます。

つまり、壁面に貼り付けるのならとれにくいのでしょうけれど、天井に貼り付けた場合は、重力で90度の方向に引っ張られるので、はがれやすいと予想されます。

もし、天井にヤモリテープを貼って物をぶらさげるなら、2枚以上のヤモリテープを放射状に貼って、それらの中心に物をぶらさげるとよいでしょう。

2枚のテープ（図では緑のテープと赤のテープ）で考えると、2枚のテープが互いに引き合うことで物が静止し、物をぶらさげる力が大きくなります。



おそらくヤモリの足の裏の繊維も、ヤモリテープと同じように、30度くらいがもっとも吸着する力が強く、90度くらいになるとはがれやすくなると推測できます。

ではヤモリはどうやって天井に足をくっつけているのでしょうか？

もし、ヤモリの足のゆびが、人間の足のゆびのように平行な配列だったら、天井にぶらさがるのはむずかしいでしょう。

でも、ヤモリの足は、ゆびが放射状に広がっています。ヤモリは足のゆびを放射状に広げて、それぞれのゆびの繊維を互いに引っ張り合いさせて、吸着力の高い角度で繊維をくっつけて天井にぶらさがるのでしょう。



それでは、ヤモリはどのようにして、足をはがしているのでしょうか？

ヤモリが歩く様子を撮影した動画が、インターネット上で探せば見つかると思います。

たとえば、次のページの中ほどの動画をご覧ください。

<https://aquatotto.com/blog-diary/detail.php?p=10879>



ヤモリは足をはがすときは、足をいきなり持ち上げるのではなく、まず、ゆびの付け根を押し付けながらゆび先をそらせ、ゆび先が浮いてから、足を浮かせます。

繊維をはがすには、まず繊維の端っこを浮かせることがポイントです。

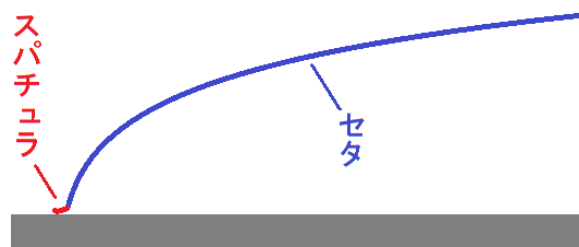
テープや吸盤などでも、それは同じです。

真ん中を浮かせることはむずかしいですが、端っこなら比較的浮かせやすいものです。

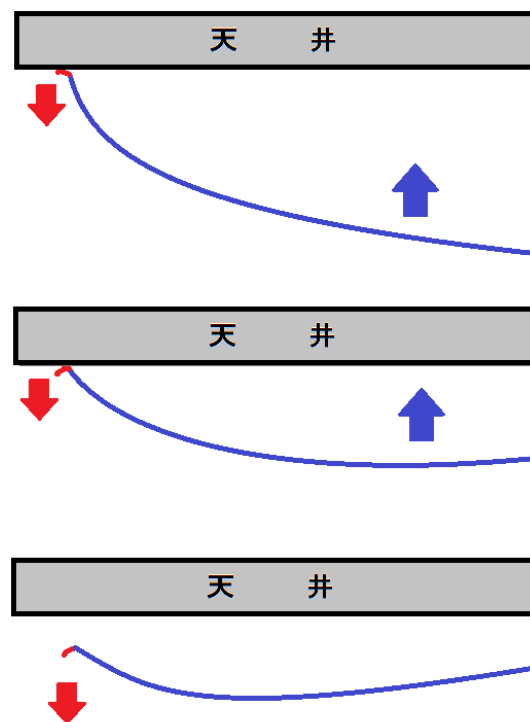
端っこさえ浮かせば、端っこから内側へ、次々と吸着ははずれていきます。

ヤモリは、まず足の裏の繊維のゆび先側を浮かし、次第にゆびの付け根側を浮かしていくのです。

とくに、ヤモリの足の裏の繊維は、セタと呼ばれる剛毛の先に、スパチュラというヘラがついた構造になってます。

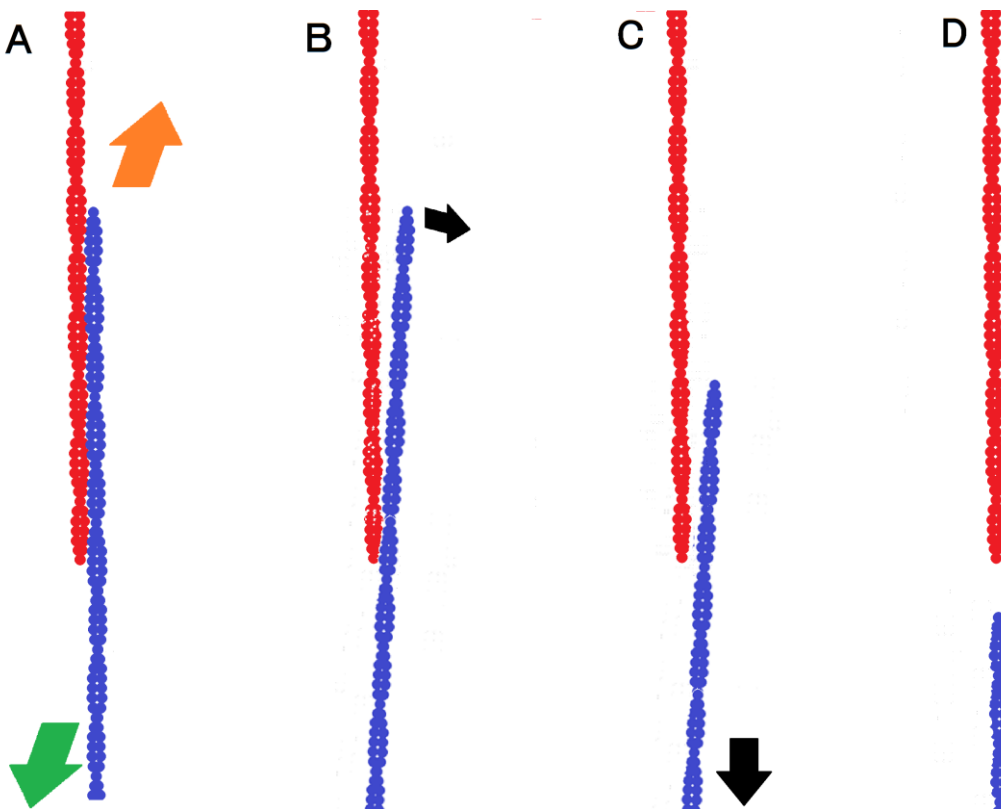


このような構造になっているので、スパチュラの根元を支点として、スパチュラの先端を作用点として、テコの原理をはたらかせ、ヤモリは繊維の先端を容易に浮かせることができます。（右の図は、天井に吸着している繊維が離れるところ。）



では、人の筋肉の中の、細い繊維同士が吸着している場合に、それをはがすにはどうすればいいのでしょうか？  
つまり、筋肉が縮みすぎている場合のこりを解消するには、どうすればいいのでしょうか？

答えは、繰り返しになりますが、「繊維をはがすには、まず繊維の端っこを浮かせることがポイント」です。  
繊維の端っこを浮かせるには、繊維を（実際には筋肉を）  
曲げ伸ばししたり、ねじったりすることが有効です。



上の図のAは、筋肉の中の筋原繊維の中で、2本の細い繊維が吸着しているところです。わかりやすくするため、赤と青の繊維に色分けしています。青い繊維が、オレンジ色の矢印の方向に移動しすぎて吸着しています。  
この場合、正反対の方向である緑色の矢印の方へ戻すと、青い繊維の先端を赤い繊維から離すことができます。B  
それをきっかけに、2本の繊維の吸着が解消され、青い繊維を元の位置に移動できるようになります。C  
Dが、2本の繊維が正常な位置関係にもどった状態です。

しつこいこりの場合、繊維の端っこを浮かせることは簡単ではありません。ですから、中途半端でなく、可動範囲いっぱいくらいまで筋肉（あるいは筋肉が着いている部位）を動かしたほうが、繊維の端っこは浮きやすくなります。

ただし、無理に曲げ伸ばししたり、ねじったりしてはいけません。健康な人なら無事かもしれませんが、けがをしている人や高齢の人、めまいがする人などは体に負担がかかるリスクがあり、慎重に動かさなければなりません。

痛みが少なくなったり筋肉が柔らかくなったりする状態が見つかれば、その状態で軽くもんだり、さすったりすれば、非常に効率的にこりを解消することができます。

ただ単にマッサージするよりも、筋肉を曲げ伸ばししたり、ねじったりして、吸着した繊維の端を浮かしながらマッサージすると、効率的にこりが解消できる。

## マガジン執筆者訪問記 (3) 寺田接骨院

10月初旬、例年になく長引く残暑の中、数年ぶりに阪急電車の茨木市駅、西口ロータリーに降り立った。駅前にはマンションの新築工事を思しき幕のかかった建物が見えた。ロータリーからひとすじ入ると、車一台通るのがやっとという路地と昔ながらの長屋、新しい分譲マンションが織り交じった街並みが現われた。昔懐かしい風情に目をやりつつ、スマホのナビ機能を頼りにしながら、細い路地を右に左にと曲がりつつ、目的地を目指した。路地を抜け、桜通りに出て、JR 茨木駅と阪急茨木市駅のちょうど中間点あたりである茨木市役所が見えてくると、いよいよ目的地が間近となる。

今回の執筆者訪問記の訪問先は、「接骨院に心理学を入れてみた」の著者である寺田弘志さんの営む接骨院「寺田接骨院」でした。訪ねてみたいと思った動機はいくつかあります。まずは、私自身が心理職であるため「接骨院×心理学」というあまり聞いたことのない組み合わせに関心があったこと。寺田さんの連載を読むと、確かに寺田さんの「聞く力」が発揮されながら施術が進んでいく様子が記されているのですが、それにも加えてやはり圧倒的な「体を見る力」が伝わってきました。以前、子どもの発達支援の仕事に関わっていた時、「感覚統合」というアプローチについて学習したのですが、そこでも子どもの「感覚」や「運動」に着目した見立てや介入の面白さに心を奪われました。なんとなく「体」を見る力が弱いという自覚がある分、身体を見るスペシャリストに関心を覚えてしまうのかもしれない。ともなく、“この施術を体験してみたい”という気持ちは、連載を開始された頃から芽生えていました。



寺田接骨院 寺田弘志

『接骨院に心理学を入れてみた』のタイトルロゴは大谷が作成を担当。YouTube 企画のタイトルをイメージした



とは言え、居住地から離れた接骨院に足を運ぶ機会はなかなか得にくくもありました。そんな中、ちょうどよい巡り合わせがありました。今年の4月に私自身の勤務先が変わり、勤務先から寺田接骨院までが電車1本でつながったのです。ちょうど、春先から執筆者訪問記をスタートさせていたこともあって、訪問に向けて状況が整ってきました。

さらに、最終的な後押しになったのが、授業や研修のオンライン化です。週に数回は画面越しに会議や授業を行い、そこで自分自身の姿も画面に映っているのを目にすることになるのですが、そこで改めて自分の体の歪みに気づきました。明らかに右肩と左肩の高さが違います。左肩が上がり、右肩が下がっています。またそのバランスを修正しようとしてか、頭はやや左に傾いた状態になっていました。何とか肩の高さを合わせようとする、今度は頭がより傾いてしまい、頭を無理矢理修正すると、首や脇に変な力が入って、会議や授業には全然集中できません。「寺田さんのところで全身の歪みを診てもらおう」「一番長い1時間の施術をお願いすれば、色々とお話も聞けるに違いない」と考え、接骨院のWebページから最長の1時間の施術の予約を申し込みました。この“1時間の施術で訪問記のインタビューもできるはず”という読みは、のちに大きく外れることになるのですが…。

### 背骨をチェック

寺田接骨院は住宅地の中に、街並みに溶け込むようにしてありました。ちょうど中高生の下校時刻とも重なり、駅に向かって談笑して歩く学生さんたちを横目に見ながら、接骨院へと入りました。入ってすぐの受付に寺田さんの姿を見つけ、マガジンの写真で見た通りの穏やかで柔らかい雰囲気に安心感が広がりました。挨拶をして、早速施術に移ります。体の歪みについて相談すると、まずは背骨に指を当て、背骨の状態をチェック。蛇行するように歪んでいるということで、腰からまず背骨が左に寄り、背中の中で右に戻り、最後に首を左に倒して全体のバランスをとっている、とのことでした。つまり、体幹が蛇行するように歪んでいます。歪みで身長が縮んでいるかも…とのことで、身長を測定すると「164 cm」でした。前に測定したときも164 cmだったので、この1年で身長が縮んだりしていないようです。少し安心して施術に戻ります。

後先になりましたが、ここで執筆者の寺田さんをご紹介します。



## ◆執筆者紹介◆

寺田弘志（てらだひろし）さん

出版社勤務を経て、援助職の道に。

心理学を学び、セラピストとしての勤務経験も持つ。その後、柔道整復師資格を取得し、1996年に大阪府茨木市に寺田接骨院を開院。

「寺田式整体」と呼ばれる、丁寧で痛くない施術が特徴。

柔道整復と心理の両面の専門性に基づいた「接骨院に心理学を入れてみた」を29号から連載している。



## ◆初回施術◆

### 腰や背中が痛む

施術台に横になると、寺田さんが腰や背中、腕などに触れながら「これは痛いですか？」「これはどうですか？」とチェックしていきます。全然痛くないと思い、「大丈夫です」と答えていましたが、後からこの最初の感覚も「痛み」であったことに気づきました。なんかマッサージとかでグリグリやられて“痛気持ちいい”みたいなやつは、痛みに入らないと思ってしまっていたんですね…。

その後、寺田さんは私の腕を挙げたり下ろしたり、体幹を左に倒したり右に倒したり、と細かく姿勢を変えながら「これは痛いですか？」とチェックを続けていきます。そうすると、少し腕の位置を変えたり、体幹の向きを変えるだけで、痛み方が大きく変わることに気づきました。というか、姿勢によってはめちゃくちゃ痛くて「イタイイタイ…！痛いです！」と思わず声を上げていました。ところがまた少し向きを変えると今度はほとんど無痛になります。私の体感は全然違うのですが、寺田さんは押す強さを変えていないということで、とても不思議な感覚でした。特に、腕の内旋か外旋か、掌を内向きにするか外向きにするか、など押さえているところ（腰や背中）からかなり離れた部位の向きを変えるだけでも痛みの感じ方が全然違って、「体」の不思議というか、面白さを感じました。そして一番痛みのない姿勢を見つけると、その姿勢のままターゲットにしている筋肉に対して「伸ばす」または「縮める」働きかけをしていきます。といっても、グイグイ押ししたり、引っ張ったり…というのではなくて、指先でふにふにとつままれているような感覚（伸ばす）か、少しだけ圧をかけて摩られている（縮める）ような感覚でした。「こんな痛くなくていいの？」と思いましたが、そういえばなんで痛くないと効いていないように思うのでしょうか？「痛い＝効いている」、「辛い＝効いている」、みたいな思い込みができていたのかもしれませんが、とにかくそんな感じで施術をしていると、体のあちこちに血がめぐっていく感覚が生じま

した。しかも、腰に触れているのに足先が温かくなるといった調子で、触れられている部位とは離れた場所に変化が生じることもあり、これも不思議な体験でした。

この施術中、寺田さんは「これはどうですか?」「こっちは?」という質問を何十回、何百回と繰り返していますし、私も「あ、痛いです」「あ、そっちの方がいいです」とその都度答えているので、のんびり雑談をするような暇はありません。

施術を受けながら話を聞くという考えは早々に捨て去ることになりました。

### 豊富な解剖学的知識

それならば、自分が受けた施術の内容をできる限り把握しておこうと、「今伸ばしてるのは、どこの筋肉なんですか?」とお聞きして教えてもらいましたが、何せ施術の最中です。聞きなれない筋肉の名称を何とか記憶にとどめようとは思うものの、「あ、そっちイタイです」とか言っているうちに、頭から零れ落ちていきました。よく考えれば筋肉の名前なんて「上腕二頭筋」とか「大胸筋」くらいしか知らない状態なので、これで施術内容を理解しようなんて考えが甘すぎでした。

それにしても、どんな質問に対しても明快な答えが即座に返ってくることに感嘆しました。また、一つ一つの部位の名称や働きがわかっているというレベルではなく、「ここを伸ばすと、さっきのところが縮むので、そこに痛みが出たりするんですね…」とそれぞれの筋肉が互いにどのような影響を及ぼしあっているかを理解し、その知識をベースとして状態に合わせてアプローチを瞬時に選択・変更していく姿はまさにプロフェッショナルそのものでした。寺田さんの施術が豊富な解剖学的知識と、たくさんの人の身体を診てきた数多くの実践経験に裏打ちされたものであることを強く実感しました。

### 初回施術終了

そんな調子で施術を続けていくと、あっという間に1時間が経過し、施術終了となりました。施術室の室内にはマガジンの連載でも見かけた感染予防設備が置いてあったりもして、色々とお聞きしたいところですが、次の予約の方もお見えになっていたのので、断念して次回に備えることにしました。

最後にもう一度背骨をチェックしてもらおうと、歪みはずいぶん改善されたそうです。ただ、自分では実感がなく、よくわかりません。そこで、再度身長を測ってもらったところ…165 cmになっていて、1 cm伸びていました! 目に見えて結果が見えることの説得力! 心なしか体が軽くなったように感じながら大満足で帰路につきました。

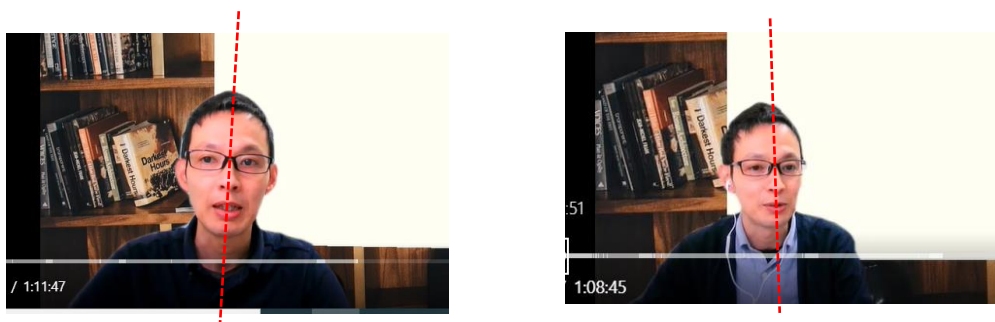
●「殺菌灯を取り付けたエアコン」



マガジン 42号「接骨院に心理学を入れてみた」より

## ◆施術2回目◆

初回施術の成果は、すぐに実感することになりました。次の写真は、いずれもオンライン授業の録画の一場面なのですが、左が施術前、右が施術後です。頭の線に合わせて赤でガイドラインを引きましたが、施術前は明らかに左に頭が傾いています（この画像はミラーリング処理されていない画像です）。



ただ、何度か撮影していると肩の左右差は依然として少し気になりました。私は普段肩掛けカバンを左肩にかけることが多く、ノート PC なども入れているためかなりの重量があり、それが体の歪みにつながっていると思っていました。そのため以前は左肩をグッと上げている感じで歪みが見られたのですが、施術後は何となく体全体が右肩下がりになる感じで傾いているように思いました（写真右）。

少しバタバタしていたためすぐに再訪することができなかったのですが、11月初旬に予約を入れ、2度目の施術に訪れました。

## 質問の順番

2回目になるとこちらも慣れが生じて、寺田さんの声かけに応じて「痛いです」「そっちがいいです」と返事をしながら順調に施術が進んでいきます。少しだけ質問する余裕ができたので、合間を見て前回から気になっていたことを聞いてみました。ひとつが寺田さんからの質問の仕方です。

腕や足など動かし、痛みについて質問しながら施術が進んでいくのですが、「こっち（内旋）はどうですか？」「こっち（外旋）は？」と順に質問されるとほぼ9割がたが、最初の向きが痛くて、後の向きにすると無痛（または痛みが緩やか）であることに気づきました。「これって、こっち（内旋）の方が痛いだろうって、予測してたりするんですか？」とお聞きすると、おおよその予測はしていて、痛いと思われる方を先にしているとのことでした（たまに、適当に答えている感じの患者さんには逆の質問をはさんだりもされるそうです笑）。理由としては、「こちらの方が一手順少なくできるから」とのことでした。つまり、「痛くない→痛い→痛くない姿勢に戻してほぐす」という手順をとると3手順ですが、「痛い→痛くないので、そのままほぐす」という手順をとると2手順だということです。わずか一手順のことではあるのですが、患者さんの負担を減らし、施術時間を有効に活用する気配りの



細やかさを感じました。また、このような質問が一度の施術の中で相当回数繰り返されることを考えると、実はかなり重要なポイントであるようにも思いました。

また、もう一つ施術を受けながら考えていたことがありました。「こっちはどうですか」と体に触れられた時に痛みがくると思わず体が強張ります。しかし、その後無痛になると緊張が緩み、自然と筋肉から緊張が抜けていく感覚がありました。そんな効果も意図した手順なのかと思ってお尋ねしてみたところ、これは「それはあまり考えたことがなかった。面白いです」とのことでした。持ち上げてくださったのかもしれませんが、参考になる感想が言えたのだったらよかった！とひとりで勝手に満足しました。

### 気になる人物画

連載を見ていて気になっていたのが、時々差し込まれるイラストです。

施術に関連するような、筋肉や骨の図解もあるのですが、中島らもを彷彿とさせるような、ドラマに登場する俳優さんの人物画などもあります。時折タッチが違う感じのイラストが差し込まれていることもあって、これらのイラストを誰が描いておられるのか、気になっていました。お尋ねしたところ、これは寺田さんが描かれたものであるとのこと。

除菌機器の設置や防音工事（マガジン 45 号参照）、イラストまでこなすって、寺田さんって何者…？とあまりのユーティリティープレイヤーっぷりに驚くばかりでした。



マガジン 42 号「接骨院に心理学を入れてみた」より  
ドラマ「トップナイフ」の外科医黒岩役の椎名桔平

### マウスを保持して、足を組む

そんな話と並行し、次は腕の位置を動かしながら施術が進んでいきます。腕を上げるか下げるかでいえば「腕を上げる」、上腕部を内旋するか外旋するかでいえば「外旋する」、腕や手首の関節も同じく「外旋」、指も反り返る方向に伸ばすと、なんとも心地よく、背中の張りがスッと緩んでいきました。なんでこの姿勢がこんなに心地いいのかなあとぼんやり考えて、ふと気づきました（寺田さんはとっくに気づいておられた風でした）。この時の姿勢をそれぞれ逆転すると、つまり、腕を下げ、上腕部を内旋させ、腕や手首も内旋させ…とやっていくと、ちょうどパソコンのマウスを保持する時の姿勢になるのです。

同じようなことが、背中の施術でもありました。背中の 1 点がやけに痛むのですが、右足の位置を高くすると少し痛みが緩みます。上げた足を右に開くと痛く、左に閉じると痛みが引きます。その調子で、痛まない姿勢に調整していくと…今度は座って足を組んでいる時の姿勢になりました。足を組んで、マウスを握る。確かにオンライン授業が始まってから、と

もかくパソコンと向き合う時間ばかりだったのですが、まさかこんなに露骨に姿勢に現れるとは…とちょっとゾッとしました。この日の施術も 1 時間で予約していたのですが、あつという間に終了時刻となり、2 度目の施術も完了となりました。

## ギカイケツ

ここまで読んで、関心を持ってくださった方はぜひ寺田さんの連載も読んで頂けたらと思います。身体面のケアに限らず、対人援助全般の理解につながる視点がたくさん見つかると思います。その中でも個人的にとっても面白いと思ったのが、この「偽解決」(ギカイケツ)や「遠隔治療」です。

『心理的問題でもそうだが、問題を解決しようとする努力が、悪循環を生みだしていることがある』(マガジン 29 号, p260)

『このような努力を私は、心理療法の用語を転用して偽解決(ギカイケツ)と呼んでいます』(マガジン 35 号, p248)

『東洋医学(鍼灸など)では、遠隔治療といって、わざと患部と離れたところに治療することがあります』(マガジン 32 号, p292)

体の歪みが生じている時、歪みを取り除くことが必ずしも解決につながるとは限らず、それがまた新たな歪みや痛みを生んでしまうことがあります。歪みを現状への「対応」であると考え、“より歪ませる”ようにすることで、結果的に体を歪ませる必要がない状態へと誘導していくアプローチなどは、援助場面で行き詰った時に、メタの視点として持っておきたい考え方であると思いました。

2 度に渡る訪問(施術)を受け入れて下さり、ありがとうございました！

私自身、これまでも時々接骨院での施術を受けた経験があるのですが、寺田さんの施術は従来の施術とはまったく異なる感覚で、改めて体の不思議・面白さに気づく機会を頂きました。なんともならない体の痛みやこりをお持ちの方は、一度体験してみられては…と思います。これまでにない施術体験ができることは間違いありません。



(文：大谷多加志)

# 現代社会を『関係性』という観点から考える

## ⑱ 「地域社会」で生きるということ

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』について書かせていただきました。その後、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となってしまう社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて前回の連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えるというタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

今回は、ある意味原点に戻るのですが、「**地域社会**」で生きるということを考えてみたいと思います。

### 1 私の経験から

これは私がまだ 30 代前半の頃の経験です。当時はまだ独身で、関西の実家で（クマ膜下出血により要介護状態）の実母と 2 人で暮らしながら、介護と仕事を続けていました。様々な御縁で母のことを大変よくみてくださる専門医との出会いもあって、母の容態も安定し、同級生やその親世代など長年おつきあいのあった方々の見守りを受けながら地域社会の中で

生活をしていました。今思えば 15 年以上に及ぶ介護生活の中で一番落ち着いていた時期でもありました。私自身も仕事と実母の介護の両立のペースを掴むことができ、依存症者家族支援のボランティアを再開し、大学卒業時に受験資格だけを取得していた福祉系国家資格を受験・取得し、福祉と司法との連携を目指して職能団体の活動などにも参加していた時期でした。

出身中学校の校長先生から連絡があったのはこうした時期でした。少年非行等の専門分野で働いているのであれば、母校を良くするための民間ボランティアとして自身の知見を活かして参加してみないかという御誘いでした。

このお電話を受けて私が気付いたのは、自分が担当している保護区（地域）のことに関しては、そこにある社会資源から子どもたちのたまり場に至るまで細かく把握しているというのに、自分の母校、さらにその校区や地域のことについては殆ど状況を知らないということでした。例えば子どものいる方であれば、子どもを地域の保育園や学校に通わせることにより、PTA への参加などを通して地域の中で「つながり」ができるかもしれませんし、その過程で地域課題に気付き解決に向けて取り組むことができたのかもしれません。

ただ、「独身」「介護などの事情を抱えて繁忙である」という条件のもとで生活を営んでいる人は、どうしてもこの「地域社会」の課題解決システムとでもいべきネットワークに参加するチャンスを逃してしまいがちです。もちろん同級生やその親世代とのインフォーマルなネットワーク、母の介護を通じて築き上げられたケアのネットワークが日々の生活を支えてくださっていたわけですが、そこには「学校」という要素は抜け落ちてしまいました。社会的養護の活動などには既にボランティア的な関わりを持っていながら、自分の住む「地域社会」に目が向いていなかったのです。

保護観察処遇においては、特に中学生対象者の処遇においては在籍中学校との連携に配慮しています。ある保護司の方からは「学校は地域の宝ですよ」という言葉を聞いていました。それにも関わらず、実際には私自身の実生活との間で乖離があったことを思い知らされた出来事でした。

## 2 地域社会のことを本当に知っている人は専門家とは限らない。

私は校長先生にこうした事情を正直に申し上げ、学校を支えるという意味での地域社会のことをよく知り、課題解決にむけての提言ができるのは、専門家とは限らず、地域社会に根を下ろしている方々ではないかと申し上げました。この時には私の脳裏には、地域課題に気付いて何らかの実践をなさっていたり、取組を開始しようとしている方々のお顔が浮かんでいました。例えば私の実家近くのコンビニの店長さん御夫婦は、お店を切り盛りしながら地域に様々な目配りをしておられました。車椅子を押して母と買い物に行くと親切に声をかけてくださり、母も店舗での買い物を楽しみにしていました。店舗が空いている時にはお話しをする機会もあり、その際

・普通なら学校がある時間帯に買い物に来る子がいるんですよ。1日に使える食費も多くないようで、おにぎりやパンだけを買っていくんです。保護者がお金だけ置いていくのだと思うのですが、学校に行っているのかどうか、生活はどうしているのか心配です。校区の子だと思うので学校に相談しようと考えていますが、出過ぎたことでしょうか。

といったことをお話しくくださることもありました。また、長年学校近くで文房具店を営みながら、やってくる子どもたちに目配りをしてくださっている方もいらっしゃいました。私は幾人か心当たりがあることを校長先生に伝えた上で、個々の方の了解を得た上で、その連絡先を校長先生にお伝えすることになりました。

## 3 「地域社会」に「居る」から「参加する」へ

上記2の出来事は、地域社会との関わりの在り方について、仕事ではなく自分の生活の在り方という側面から考える大きなきっかけとなりました。住民票をそこに置いて様々な住民サービスを受けるだけでは、少し言葉がきついかもしれないかもしれませんが、ただ地域社会に「居る」だけということになります。

私は微力であっても、自分を育み今は介護を要する母を支えてくださっている「地域社会」に何らかの形で「参加する」方法がないか考えるようになりました。

私は保護観察官になった時とほぼ同時期に薬物やアルコール依存症当事者やその家族の支援を中心としたボランティア活動等に従事していましたが、それは近畿地方を中心とした広域的なものであり、地域密着型住民ボランティアというよりは、自分の職業的なスキルや知識をボランティア活動に役立てる、いわばプロボノ型のボランティア活動でした。

自分の住む「地域社会」に参加する手立てはないかと考えた結果、私は中学校校区の社会福



社協議会の活動に参加させていただくことになりました。

#### 4 社会福祉協議会での活動を通じて感じたこと

当該社会福祉協議会では肩書を外して「一地域住民」として参加するつもりでした。しかし会長が保護司さんであり、当時保護司の方々と密接に関わる部署で仕事をしていた私はすぐに身分がわかってしまいました。しかし参加動機をお伝えし、あくまで一住民として参加させていただくことになりました。青少年部会に所属し、PTAとして参加されている親世代の方々から子育て世代の現実的な困りごとを生の声としてお聞きすることは、保護観察官としての処遇場面とはまた違った「今の親世代のリアル」を感じることができる貴重な機会でした。また、当該社会福祉協議会では、様々な福祉的な相談を受ける窓口を設置しようとする機運が高まっており、それに向けての準備も進められていました。

「福祉まつり」などの行事では、社会福祉協議会のスタッフは運営スタッフの一員として動くこととなります。こうした行事運営は業務でも関わる機会が多くありましたが、参加する年代層の幅が広いことが特徴です。ともすればスムーズに行事を運用することに気持ちが傾きがちですが、地域の方々安全に参加し楽しめること、地域の一体感を高めるといった目的があることを意識することが必要だと感じました。

こうした活動をするうち、近くの社会福祉法人の「苦情解決第三者委員」を、他の福祉委員の男性とペアでお引き受けすることになりました。当該男性は地域で長年様々な役割を引き受けてこられた方でしたが、私は社会福祉士等の資格保持者としての依頼でした。社会福祉の事業者の苦情解決の仕組みとして「苦情解決第三者委員」が設置されたのは平成12年からで（当時の厚生省の通知により「苦情解決に社会性や客観性を確保し、利用

者の立場や特性に配慮した適切な対応を推進していくために第三者委員を設置する」こととなったもの）、「職員には直接言いつらい」「事業者の問題だけで終わらせたくない」という申出者の気持ちや立場に配慮し、事業者の視点だけではなく、第三者の客観的な意見を取り入れていくことが役割となります。実際には定期的（月1回程度）施設を訪問し、施設内をさりげなく見て回っては施設内の利用者の方の様子を伺ったり、事業者側の苦情受付担当者から報告を受けることが基本的な流れでした。私が在任中に申出者との話し合いへの立ち会いといった場面を経験することはありませんでしたが、事業者側から

- ・ 感染性疾患で隔離しないといけない疾病にかかってしまった利用者への処遇について、家族にどのように説明したらよいか。
- ・ 施設長が急死され急遽そのご子息が後を継がれることになったが、これまで福祉の現場以外で働いてきたので、スタッフとの意思疎通の在り方に悩んでいる。
- ・ 転倒事故が発生したが、ヒヤリハット事例の取扱い方について教えて欲しい。

といった相談があることがあり、男性の第三者委員と連携して対応しました。私の社会福祉士としての専門性を活かすことだけではなく、男性の第三者委員の豊富な地域活動の経験から結論付けられた地域性や住民の感情なども総合して対応することの重要性を実感しました。

入所施設であれ通所・利用施設であれ福祉施設は建設時等に地域住民との間で反対運動も起こりやすいものですが（ニンビズム）、第三者委員が地域の一員として出入りすることで、「風通し」がよくなることにもつながると感じてました。

## 5 「地域社会」で生きるということ 「居る」から「参加する」へ

地域社会での住民参加活動というところから思い起こされるのが自治会(町会)などの組織ですが、こちらは担い手の不足や高齢化が指摘されています。若い世代の加入が望まれています。若くは「自分はまだ30代で若輩者だから、自治会(町会)の役員などはハードルが高い」という声を若者団体の会合で耳にしたことがあります。実際に、高齢の方々が自治会(町会)の役割を担っておられるところも少ないと思われまいます。

私自身もある時期に自治会(町会)での役割を担ったことがあります。そこでは自治会役員は輪番制で、順番は世帯ごとに回ってくる仕組みでした。驚いたのは相当な人数で構成される役員会のうち、女性は私1人であったことです。当時私は単身赴任中で参加できるのは世帯主である私しかいなかったわけですが、世帯の中で「自治会(町会)役員」を出す、という際には、「夫」「父親」の役割を担う人が家庭内で選ばれる傾向がまだあるのだと素朴に驚きました。無論女性が複数参加されている期もありましたが、それでも数名で少数派でした。

この時私は自治会(町会)の会計を担うことになったのですが、自治会(町会)の共有設備の耐用年数経過や諸費用が嵩んでいることもあり、自治会費の値上げという難題を取り扱うことになりました。ここ数年の収入・支出を年単位で詳細に分析し、諸費用を節約しても限界があり、一方で共用設備が損壊した際には影響を受ける世帯が少なくないということ、根拠に基づいて役員会で報告しました。役員会での協議の結果、自治会費の値上げについて全世帯に意見を求めることになりました。もちろん根拠資料を提示した上です。しかしその結果、

- ・自治会が拠出している電灯の一部又は全部

消灯することで電気代を節約する。

- ・エレベーターを3階以下は停止することにより電気代を節約する。
- ・自治会(町会)として地域の助け合い事業などに拠出しているが、共益費を上げるような状態で寄附などしている場合ではない。

などの意見が出たことについて、正直驚きを禁じ得ませんでした。

最初の意見については、特にお子さんをお持ちの御家庭等からの安全上の不安の声があがるのが容易に予想されました。2番目のエレベーターの停止についても、インターネットや生協での注文を利用される家庭が増えている状況で、それらの搬送に影響を及ぼしますし、何よりも階段を利用できる方ばかりではありません(ベビーカー利用者など)。官庁や企業で節電のために廊下の電気を一部消灯したり、階段の利用が奨励されることは今や常識的ではありますが、それでも様々な職員・社員がいることを前提として安全面に配慮されていると思われまいますし、特に階段の利用は強制ではありません。そうした考え方を生活の場にそのまま持ち込むことはいかなるものかという意見を会計として出しました(もちろん、電気代は照明だけではなく、水道のくみ上げポンプなど見えない部分での支出が大きいことなどの根拠も添えています)。この時に、こうした会議体には様々な立場の方が参加することの必要性を感じましたし、ジェンダーバランスについても一定の配慮が必要だと感じました。

3番目の地域の助け合い事業への拠出は世帯数に応じて自治会(町会)で担っているものですが、そうした助け合い事業によって、子どもや高齢者等を対象とした活動が運営されていることについて、関心が向けられないことは残念に感じました。拠出したお金がこうした活動に活用されていることは回覧などで周知されていましたが、我が事と感じないと「無

駄なお金」と思われてしまうのでしょうか。

また、子どものいない世帯、子育て中の世帯（更に子どもの年代）、子育てを終えた世帯では、地域社会に対する見方や求めるものも異なってくるのは、ある意味当然でしょう。ですから、多様な世代が地域社会の活動に「参加する」ことは、結果的には多くの世代が生活しやすい地域社会づくりの必要性について「気付く」ための場であるとも思われます。

ただ、私自身が様々なボランティアや地域社会の活動に参加してきて思うのは、

高い活動意欲はもちろん必要ですが、「私がなんとかしてやろう！」という意気込みが強すぎると、何かと前のめりになってしまい、集団内で軋轢を起してしまいやすいということです。「今回御縁をいただきましたので、私も活動に混ぜてください」というスタンスで参加し、特に最初の段階では当該集団の動きをよく観察し、その集団の特性や動きを見極めていくことが大切だと感じています。

ここでもやはり「関係性」への配慮が必要となってくると思われます。例えば、意見を述べる時も、「これはダメだ」というと、これまで運営してきた方への非難として捉えられる場合があります。しかし「この点をこのようにすればいかがでしょうか」という現実的な代替案を提示する方法であれば、議論も発展的になると考えられます。「批判するだけなら誰でもできる」ということは、我々は匿名性の高い場での様々な出来事（Twitter等で特定の方を追い詰め自殺に追い込んでしまうなど）から学んでいるはずですが、現実世界の生活の場の課題を取り扱う際には、「批判するだけ」では議論は前に進みません。むしろ、その集団における関係性を悪化させるだけでしょう。

「地域社会」に参加するということについても、関係性への一定の配慮が必要であると私は考えます。

## ～コミュニティが育つ、子どもがいる暮らし～

【Not a サクセスストーリー、But a リアルストーリー】

朴 希沙

世の中には様々な子育て本があるらしい。子育て本だけでなく Youtube、漫画、教材…今号から始める「コミュニティが育つ、子どもがいる暮らし」の連載では、根無し草のように親や家族からの援助が得られない私たち夫婦が、どのように周囲から助けを得られたり得られなかったりしながら子育てに取り組んでいるのか、そのリアルなお話を届けたいと思う。そして結果的に、子どもだけでなくむしろ私たち大人、そしてその所属するコミュニティが成長していく可能性に注目したい。

第 1 回目の今回は、まず私たち家族の背景について簡単に紹介したいと思う。そしてもとい家族に頼らずに子育てをしようとしている今の試みについて紹介し始めたい。

今回の登場人物：キサ（メインライター&司会の朴希沙）、やわらどん（キサのパートナー&子どもの父）

**キサ：**こんばんは、今日はよろしくお願ひします。

**やわらどん：**こんばんは、今ちようど寝かしつけが終わりました。

**キサ：**今回のこの原稿もギリギリで作ってますね！私たち、毎日子育て、仕事にすごく追われています。日々の暮らしはどうですか？

**やわらどん：**とにかく忙しくて、子ども生まれてから時間に関する感覚が変わりました。

**キサ：**私もです。前より時間が貴重になった気がします。ということで、早速今日のテーマに入りましょうか。今日はまず私たち家族の背景について紹介したいんです。やわらどん、私たちの家族について簡単に紹介できますか？



**やわらどん**：まず臨床心理士をやっているキサがいて…プログラマーとして働いているやわらどんがいて…えーっと…ちょうど1歳2ヶ月になるちびどんがいます。あとキサのお腹の中にはちびどん2号が控えています。

**キサ**：次の2月末に生まれる予定なんですよ、私はちょっと不安な気持ちもあります。ひとりでも大変なのでふたりになるとどうなるのかなあ〜と。やわらどんはどうですか？

**やわらどん**：不安な気持ちもあるけれど、一人目の経験があるので意外となんとかなるんじゃないかと思っています。

**キサ**：今日も昼間に二人目が生まれたらどう生活を組み立てていこうか、話し合いましたよね。つまり、誰に手伝いに来てもらえるか、とか…

**やわらどん**：ちびどんの時は最初の1ヶ月半、子育て経験のある友人に住み込みで手伝ってもらいましたよね。

**キサ**：本当にあれはありがたかった!!私は初めての子育てでよく分からなかったんですが、とにかくその友人に「子育ては人手がいるから」って言われて、それで元の家族に頼れない私たちは何人かの人にも会いに行きましたよね、「手伝ってくれない？」って頼みに…

**やわらどん**：そうですね、学生時代の友人を始めとした長い付き合いの友人で手伝ってくれそうな人を二人で話し合いましたね。リストを作って、ひとりひとり声をかけていきました。

**キサ**：懐かしい。今後もやっていきたい活動ですね！

**やわらどん**：うん、そうですね。

**キサ**：その住み込んでくれた方が、「とにかくコミュニティ、人を巻き込んで子育てするんだ!!」と言ってくれて…その方にもいつかこの連載に登場して、その真髓を語って欲しいですよ。私たちめっちゃくちゃ影響受けてますよね。

**やわらどん**：そうですね。

**キサ**：私たちの紹介は簡単にこれぐらいで…おいおい分かってくる部分もあるかと思いま

すし…それからもう一つ今日の大切なテーマ、「もといた家族に頼らずに子育てをしようとしている試み」についてですね！

**やわらどん：** うんうん

**キサ：** もといた家族に頼れたら私もそれが一番いいんです…やわらどんは？

**やわらどん：** そもそも自分の家族は遠方にいるので難しいけど…

**キサ：** そうだよな、物理的に離れている。私の家族は近所にいるけれど…子どもが生まれる前に色々あって、私たちの間でも色んなことを話し合っ、そこには今は頼らずになんとかやっていこうって決めただよな。

**やわらどん：** そうそう。たまに血縁に頼れたら楽だろうなあと迷いが生じる時もあるけどね。

**キサ：** 私もすごくある!!いつも揺れてるよ〜でもそのたびに自分の家族について改めて考える機会になっている気がするな。うちの場合、ちょっと油断するととんでもないことになりそうというか（笑）（そのあたりはまたいつか?!）。「最初が大切だ」ってちょっと踏ん張ったよね。子育てって、改めて自分の育ちについて振り返ったり整理をしたり、遅いかもしれないけど改めて大人になろうとする機会でもある気がする。優先順位をつけたり、自分以外のものを大切にするとはいか？ということをしごく考えさせられるから…

**やわらどん：** 幸いなことに、色んな人に手伝ってもらいながらとりあえず 1 歳を乗り切りました。

**キサ：** ノット・ア・サクセスストーリーって書いたけど、私は振り返ると自分たちなりに頑張ったし、しんどくても冷静に考えたらいい選択を重ねてこれた気がするよ！

**やわらどん：** そうだね、それに少し運がよかった気もします。

**キサ：** どういう風に？

**やわらどん：** 頼れる友人を少なからず見つけることが出来たし、保育園にも入ることが出来た。

**キサ**：うんうん、そうだね。なかなかそうはいかないよね。

**やわらどん**：友人だけじゃなくて、知り合いづてでアルバイトみたいな形で手伝いに来てくれる人もいるよね。

**キサ**：そうだよね、それも助かっている。とっても素敵な人だよね。またこの連載にもいつ登場して欲しいですね。

**やわらどん**：うんうん

**キサ**：今日は触りということでこのあたりにして、次回以降、今日簡単に触れたところについてもっと詳しく話していこうか。

**やわらどん**：そうしよう！こんなんでいいのかな？

**キサ**：これもリアルな現場だね。この対談をするか迷うくらい時間がなかったという（笑）

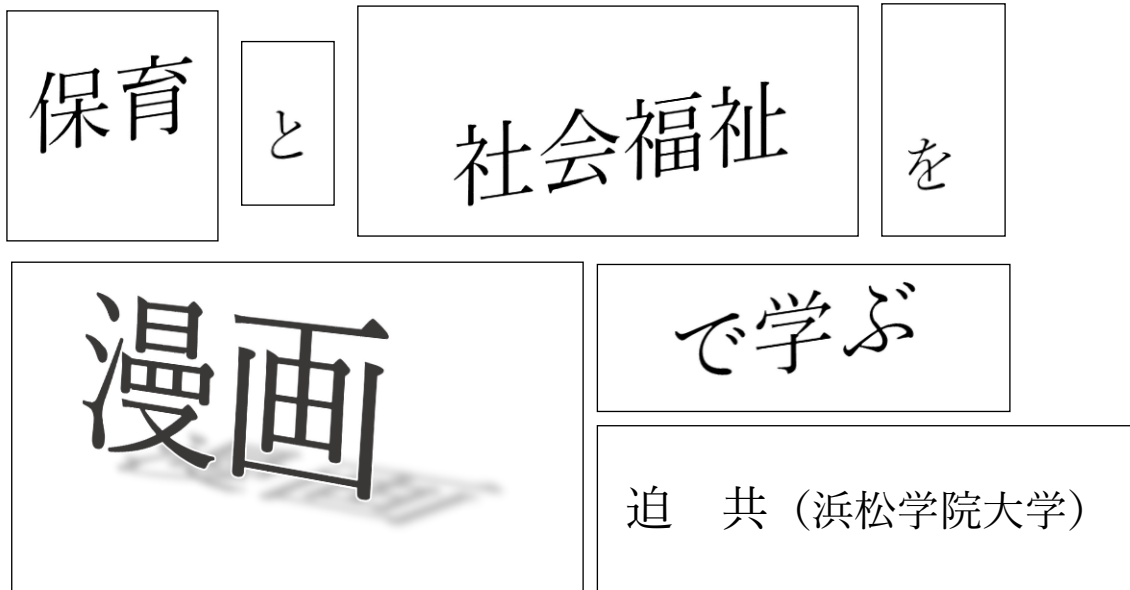
やわらどんの今日の感想は？

**やわらどん**：本当に日々が矢のように過ぎていくので、改めて振り返るっていうのはいいことだね。

**キサ**：色んな人のリアルストーリーを読みたい。

つれづれなるままに～

こんな感じでダラダラと続いていきますが、どうぞ私たちのサクセスストーリー…ではなくリアルストーリーにお付き合いいただけたら嬉しいです。



## ⑮ 生理ちゃん

「生理」、つまり女性の月経。かつては話題に挙げることにするタブー意識が強く、男性のいる場ではおろか、女性どうしても語り合うことが難しいテーマだったといえます。10代前半から40、50代までという長い期間にわたって起こる現象ですが、人によって身体に生じる影響は千差万別。大学での発表や仕事での商談が生理の期間にあたってしまい、しっかり準備をしたのに、よい結果につながらなかったという女性の話を聞くこともあります。一か月の半分は調子が悪く、PMS（月経前症候群）で寝込んでしまうほどつらいという人も。PMS対策でピルを服用する人もいます。

美容サロンを運営する株式会社ミュゼプラチナムと特定非営利活動法人日本子宮内膜症啓発会議が2019～20年に実施した「生理に関する調査」によると、「月経随伴症状による労働損失は13億8,700万円」であり、これは適切な対応をすることによって「5億3,100万円まで削減が可能」だということです。

ただ一方で、「生理の影響がまったくくない」という人がいるのも事実です。生理が軽い女性や、身体的に生理の経験がない男性からは、「自分のことは自分でケアすべき」「怠けている」といった冷たい言葉が向けられることもしばしばです。

小山健さんの『生理ちゃん』（KADOKAWA ①～④ 2018-2021）は、生理を擬人化したキャラクター「生理ちゃん」と女性たち、男性たちの物語をオムニバスで描いた作品です。

ピンポン。チャイムが鳴って「誰かしら？」と玄関を開けた主婦の前にいたのは、ピンクのハートマークを立体化したような「生理ちゃん」。

「もう一カ月たったの？」と戸惑う女性に、生理ちゃんは「どーですか最近は」「ダンナさんとはケンカしてないですか？」と世間話をはじめます。



「もう結婚して7年だから…」と応じる女性に、生理ちゃんは「じゃあそろそろいつものを…」とお腹に強烈なパンチを放ちます。暴力から身を守っていると、今度は巨大な注射器を刺されて血液を抜かれます。

「はーしんどい」とうなだれる女性に、生理ちゃんは表情を変えずに「ごめんね」と呟きます。(第一巻「主婦と生理ちゃん」より)

ライターの九条さんは面白い記事が書けずに煮詰まっています。彼女のもとにも「来ちゃった」と、生理ちゃんがやってきます。「締め切り前なんだからカンベンしてよ」と叫ぶ九条さんに構わず、お腹をぎゅうっとつねる生理ちゃん。さらにクロロホルムを嗅がせられ、九条さんは眠気に襲われます。男性の編集者が生理ちゃんと一緒に、ナプキンを買いに薬局へ行ってくれます。

「女性は生理があるから大変だよ」という編集さんに、生理ちゃんは「大変なのを、生理を理由にできないのが大変なんですよ」と返します。(第一巻「ライターと生理ちゃん」より)

生理を擬人化すると、こんなに不思議な世界になるのかと驚かされます。べてるの家から始まった「当事者研究」では、困難な課題を外在化させるために擬人化を行うのですが、「生理ちゃん」の作品世界も似た発想で構成されているように思われます。

「当事者研究」では、たとえば統合失調症患者のもとに「幻聴さん」がやってきます。「お前は犯罪者だ」などの事実ではないメッセージが、声のように感じられます。「来るな」「消えろ」と幻聴と戦うのではなく、「幻聴さん」として人格を与え、「幻聴さん」が勝手にやってきては勝手に帰っていく様子を眺めてみたり、どうして来るんだろう、何を求めているんだろう…と考えて「幻聴さん」とのつきあい方を探ってみたりすることが当事者研究です。それによって、結果として症状との付き合い方が変化し、症状の安定化が起こるという取り組みです。

ネガティブ思考のパターンを「マイナスのお客さん」、対人恐怖の兆候を「緊張さん」と呼ぶなど、色々な課題をキャラクター化させて捉えると、自分の抱える問題と自分自身との間に距離が生まれます。それ自体は解決に繋がらないと指摘されるかもしれませんが、距離を取ることで、対応がしやすくなるのです。問題と戦わないことで、QOLを上げるという手法です。

ライターの九条さんのもとにきた「生理ちゃん」は、編集さんに「毎月迷惑がられてるのに来なきゃいけないの、ツラくないの？」と問いかけられて、答えます。「…ツライですけど、いつか、全部ひっくるめて良かったと思ってもらえるんじゃないかと」(同上)

九条さんの編集者は既婚者なのに、九条さんに手をつけていたのです。しかもコンドームを使わなかったのです。編集者が帰った後、生理ちゃんは九条さんに言います。「こちらら、しがない生理なので道德語る気はないですけど、ちゃんとつけない男はダメ!」「今日来れなかったら、どうしようかと思いましたよ!」(同上)

「生理」に人格があるとしたら、いつも嫌がられて悲しいかもしれません。でもいつもは「しんどい」「嫌だ」と感じさせられる生理でも、来ないとすると心配になることもあります。そして来てくれたら「よかった」と安心できるのです。

「生理が、私のことを気遣っているかもしれない」「嫌がってばかりでごめんね」と考えられるとするならば、それは女性の身体のマカニズムについて、いつにもまして感謝できるきっかけになるかもしれません。

いわゆる「女性のライフイベント」には保育や社会福祉に関わることがたくさんあります。生活困窮家庭で育つ若年女性は、生理用品を買うにも困る状況があります。妊娠や出産のタイミングで職を離れたり、育児のサポートや保育、教育。離婚した場合のひとり親問題。心身に障害を負うこともあります。やがて親の介護など…。こうした問題に「女性のライフイベント」というレッテル貼りをして、女性が対応するべきものと決めつけてはいないでしょうか。

障害をもつ女性やその周りにいる人にとって、生理のケアはとてもデリケートで、難しい問題です。旧優生保護法の時代(1948-1996)には障害者を対象に、合計でおよそ1万6500件もの断種手術が行われました。生理のケアや妊娠の可能性をなくすことが良い事だと考えられてきたのです。

また、ケアワークそのものが女性の領分だと考えられがちです。保育や社会福祉の現場で働く人たちには女性の職員がたくさんいます。保育や社会福祉の現場の管理者は、生理をはじめとした職員の心身の健康に関する課題を意識できているのでしょうか。むしろ心身の不調を訴えるケアワーカーに対して、「自分のことは自分でケアするべき」「怠けている」と叱咤激励する(実際にはハラスメントに近いものである危険性がありますが)という管理職が目につく、ということないでしょうか。

ある小学校にやってきた4人の女性。年齢も職業もバラバラです。この人たちは性教育の講師です。5年生の男女混合クラスで生理について伝えることに。

講師の一人が、男性の先生にクイズを出します。「奥さんに生理ちゃん来てます。なにを買って帰ったら喜ばれるでしょう?」「ハーゲンダッツとか…?」と答える先生に、4人は「貼るカイロ」「お惣菜」「鉄分ドリンク」「ホットはちみつレモン」と様々な例を出します。でも正解は、「いろんなタイプがいるから奥さんに聞け(なにもしないでほしい人も

いるから気をつけてね)」。

小学生が「生理ちゃんで困ったことはなんですか？」と質問します。「本当につらい時も生理休暇とれないことかな」「元彼に、俺の前では生理になるなって言われた」「同級生に見られたら変な噂されるから、変装して婦人科にピルをもらいに行ってる」…

4人の講師は「恥ずかしい気持ちは当然あるものだし、生理ちゃんをオープンにしようってことじゃないの」「もっと普通にあるものとしてわかってほしいんだ」「知らないことには思いやることもできない」と口々に伝えます。(第二巻「小学生と生理ちゃん」より)

何でもオープンにすればいい、ということはありません。しかし性や生理について、秘め事やいやらしい事のようなイメージを持って大きくなった人たちが、無理解と偏見を改められずにいるとするなら、それは問題です。デリケートなことだからこそ、女性だけでなく男性も知っておき、辛そうにしている人がいれば生理かどうかに関わらずケアしてあげられる、そんな社会を作ることが理想ではないでしょうか。

「生理ちゃん」には、日本で初めて使い捨て生理用ナプキンを開発した坂井泰子さんの実話をもとにした回(第一巻「おばあちゃんと生理ちゃん」)や、かつてケガレと考えられていた生理期間中の女性がこもった「月経小屋」が描かれる回(第一巻「町娘と生理ちゃん」)などがあります。ジェンダーについて学ぶ視点も得られる作品です。

紹介作品：小山健(2018～2021)『生理ちゃん①～④』KADOKAWA

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考サイト：PR TIMES 企業初、月経随伴症状による労働損失額を調査 年間約14億円にもなることが判明！ ミュゼプラチナム×JECIE『女性活躍・健康経営プロジェクト』

株式会社ミュゼプラチナム 2021年10月6日 15時00分

<https://prt-times.jp/main/html/rd/p/000000349.000008905.html#:~:text=%E7%B5%8C%E6%B8%88%E7%94%A3%E6%A5%AD%E7%9C%81%E3%81%8C2019,%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%EF%BC%88%E2%80%BB4%EF%BC%89%E3%80%82> (最終確認 2021. 11. 13)

NHK 福祉情報サイトハートネット 【後編】旧優生保護法を陰で支えた社会通念 2018年07月20日 <https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/79/> (最終確認 2021. 11. 13)

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 16～

## <ハヤリコトバ>

杉江 太朗

### ～外国のコトバ～

ハンバートハンバートさんという男女2人組ユニットの「国語」という曲の歌詞を以下に引用する。

「みんながフツーに使っている、そのコトバの意味がわからない」「ねえ、イデオロギーって?」「ねえ、アイデンティティって?」「辞書をひいてみてもわからない」

「みんながフツーに使っている、そのコトバの意味がわからない」「ねえ、オーガナイズって?」「ねえ、コラボレーションって?」「うちの広辞苑には出ていない」と続き、

「外国のコトバをカタカナに」「わからないくせに使うなよ」「テメーの都合で使うなよ」

などの歌詞で締めくくられていく。

最近に発売されCDに同封されているDVDでは、上記の外国のコトバに、「ロックダウン」「オーバーシュート」「ソーシャルディスタンス」「ワーケーション」というコトバも追加されている。そこでも、「テメーの都合で使うなよ」「わからないことを曖昧に」「騙すときだけに使うなよ」と続くのだが、それを聞いて、やけにしっ

くりきたのは、私だけではないはずである。この1年で、上記の言葉以外に、クラスター、テレワーク、ブースター接種、ブレイクスルー感染など、なんとまあカタカナコトバが増えたことか。

別に、どこかの知事の過去の会見で、やたらと横文字を並べたり、造語を用いたりして、胡散臭く聞こえたと言いたいわけではない。

子ども家庭相談の界限でも、そうした言葉が乱発されており、流行り言葉として広がってしまう、そうすると全てがその言葉でまとめられてしまうということが少なくない。個別の物語が、相対化させられてしまう。今回はそのような、コトバを巡るあれこれについて考えたいと思う。

### ～この業界の流行り言葉～

「16歳の兄と一緒に遊んでいた小学生がジャングルジムから落ちて」というニュースが流れた。すぐに、「ヤングケアラー」という外国のコトバが使用され、「全国にはヤングケアラーが～人いる」「親が働かざるを得ず、介護や養育がヤングケアラーの負担となっている」などとコメ



ントされる。しまいには、ヤングケアラーの専門家と名乗るとこかの教授まで登場する始末である。正直、この界限では、兄姉が弟妹の面倒を見ているという家族は昔からあった。当然、その負担が過剰であったり、登校に影響が出たりした場合は、介入の対象となる場合もあったが、家族の人員上、そうしないと回らない場合もあるのである。ヤングケアラーという言葉自体が広がったのも最近のことである。その専門家と名乗ること自体、胡散臭くしか聞こえない。

かつては、「おしん」というドラマがあったし、火垂るの墓の兄も妹の面倒を見ざるを得なかった。その視点で言えば、鬼滅の刃の主人公もヤングケアラーである。その主人公を「ヤングケアラー」という言葉で説明してしまうと、その物語はそこで終わってしまう。面白味もなにもない。やはり、「ヤングケアラー」というコトバだけでは、家族の置かれた個別の状況(＝物語)を表すことは出来ず、その家族の意志や思いを想像することが出来なくなってしまう。

それ以外にも、この界限における、個別の物語を相対化させる可能性を秘めたコトバとして、「虐待」「発達障害」「愛着障害」「トラウマ」なども挙げられるかもしれない。

#### ～物語を相対化させることの影響～

とは言っても、「虐待」という言葉を使

うことがいつでも悪いわけではない。統計上の言葉として使うことで、児童相談所の多忙さを表すことが出来るし、実際その数の増加に伴って、人員配置への影響もあるようである。行政機関に対して、児童相談所が虐待として取り扱っているかどうか、その後の扱いに影響を与えることもあるようである。

しかし、「虐待」というコトバで、全ての内容を表せるかと言えばそうではない。援助職同士でも、この子どもは虐待を受けてきたから・・・などと自然と使われてしまうが、子どもの置かれた状況を「虐待」というコトバだけで表現してしまうことは陳腐である。虐待を受けてきたから何なのか、そもそも虐待とは何なのか、だからどうだと言うのか、冷静に考えてみると、何もわかっていないことに気付くはずである。

「愛着障害」や「発達障害」というような医療で使われる「診断コトバ」も、その子どもを診断するという目的では、使い勝手が良いのかもしれない。しかし、診断はあくまでも「どの領域に当てはまるのか？」という「分類」とも言え、やはりその言葉だけで子どもの状態像を全て表すことには無理がある。

どのコトバにも共通することが、使い方を間違えてしまうと、個別の話が、そうでなくなってしまう可能性(相対化させられてしまう可能性)があるということである。相対化させることに慣れてしま

うと、想像するきっかけを無くしてしまい、それ以上に理解しようとする能動性を失わせてしまう。

#### ～テメーの都合で使わない～

ハヤリコトバをやけに用いたがる方は、その個々の状況を知ることを放棄しているのだろうか、それとも個々の状況に興味がないだろうか・・・そんな風にしてしまう。

以前、他の機関とやり取りをしているときに、「このケースはジギャクですか？」と聞かれたことがある。自虐？なぜ自分を自分で責める必要があるのかと思っていたらどうやら、「児童虐待」を略して「児虐」と言っているのだと遅れて気付いた。

とはいっても、まず「児童虐待」だからどうだと言うのかという疑問が思い浮かんだが、それ以上に、そもそも自分たちの都合で略したコトバ（それもその言葉は相手にとって共通語ではない）を他機関に対して使っているという想像力の働かなさに、なんとなくがっかりした。言葉を選ぶときには、自分の都合ではなく、その言葉が相手にどう伝わるかという相手の都合を考えなければいけない。しかし、ハヤリコトバをやたらと使う人が、専門家と呼ばれる人たちに多いのも事実である。私は、その都度、「テメーの都合で使わないよ」と思いながら聞いている。

と言いながら、私がそうした言葉を使わないのかと言われると、そうではない。

例えば、「虐待」という言葉は、被援助者に対しては使わないが、前述の通り、行政機関に対して効果的なこともあるのは事実であり、また、被援助者に告知する場面（対立する覚悟のとき）には、「あなたの行為は虐待です！」と言うことで、自身の行為を振り返り、その行為が適切ではなかったと直面化してもらいやすいこともあるかもしれない。

しかし、そんなことは稀で、「テメーの都合で使わないよ」と思われることの方が多く、「虐待と判断されてしまうこと」＝「悪」と思われる傾向が強いため、たったその2文字に全てを否定されたと感じさせてしまう可能性を秘めていると思うとおく方が良い。

そのため、私は、「虐待」という言葉は用いず、「子どものことで心配なこと」「子どもの成長にとって適切ではない関わり」などと言い直して使用する。また、一般的に虐待（例えば、子どもを叩いてしまう等）と呼ばれる行為をした家族に接する際も、その用いた行為（＝叩くということ）については別の方法に置き換えてもらうように働きかけるが、その行為に至った経緯や感情などは丁寧に聞くようにしている。罪を憎んで、人を憎まずとでも言うのであろうか。全てのプロセスを「虐待」という言葉で相対化して相手にぶつけてしまうことの弊害は大きい。

「この子は虐待を受けて育ってきまし

た」と言われたとして、その情報で一体何が伝わるのだろう。私がそのように言われたとしたら、「どんな虐待を受けてきたのですか？具体的に教えてください。」などと質問を返すと思う。

「〇〇はヤングケアラーですから・・・」と言われたら、「どういったご家族の関係なのか詳しく教えてください」などと質問する。

言葉については、自分の都合で使わないことが一番である。また、ハヤリコトバには、慣れてしまわないことである。そのような言葉のキャッチボールが出来ると、その言葉の奥にある情報を引き出すことに繋がり、個人としての理解が深まると考える。



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

未来へ



松岡園子

「ゆりちゃん、おはよ」

美保ちゃんの声で目が覚めた。

「もうすぐ先生、くるでえ」

ゆりは一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなった。枕にしていた手の甲の下にある机から、かすかなぬくもりを感じる。

「美保お、ちゃんと勉強しろよー」

笑い声とともに2年生が何人か教室の横を通り過ぎた。美保ちゃんの「うーん」という声が教室に響く。美保ちゃんはゆりよりも1つ年上の同級生だ。1つしか変わらないのに、すごくお姉さんに見える。茶色い髪も、大きな輪っかのピアスも、ピンク色の目元もゆりとは縁遠いものだ。美保ちゃんは1年生とあまり話さないから、この高校に入学してから8カ月余り経っているのに、ゆりともこれまでに挨拶を交わすぐらいなものだった。きっと、ゆりのことも子供っぽく見えているんだろうと思っていた。でも、昨日の体育の教室移動で一緒になった美保ちゃんに、ゆりが仕事の話をする、お好み焼き屋さんで住み込みをしながら働いていると教えてくれた。中学を卒業してから入学した看護学校をやめて、今の生活を選んだことも。

「お金を貯めて、自分のやりたいこと見つけて、それに向かっていくねん」

そう話す美保ちゃんの目の奥で、光が広がったように見えた。

「私のお母さんは、病気やねん」

ゆりの口から母・夏子の話が出た。友達に話しても暗くなるだけだし、きっとわからないだろうと思って話さないことがほとんどなのに。気がつくと、これまでのことを話し続けた。母・夏子が独り言を言って、まともに話もできなくなったのは、つい3年ほど前、祖母が亡くなって2人暮らしになった頃のことだ。それまでしていた塾の仕事も、家のこと

もできなくなってしまった。親戚の人達はそんな夏子と中学1年生のゆりが2人で暮らすことはできないと考え、自分たちの家に引き取った。しかしその後、ゆりは児童養護施設へ入所することが決まっておき、夏子と離れて暮らすことになった。どうしても納得のいかなかったゆりは施設を数回抜け出し、後の話し合いの末、無理やり夏子と神戸の家に戻ってきた。そうして夏子と一緒に暮らすことができるようになったが、家事も話もできない夏子との暮らしは大変なことも多かった。なんとか中学3年間を乗り切ることができたのは、近所の人や友達の家族が手助けしてくれたおかげだ。卒業後の進路は、働きながら定時制高校へ行く道を選んだ。夏子は仕事をしていないし、早く働いた方が自由になれると考えたから。

「私も施設にいたよ」

「え……嫌じゃなかった？」

「わからへん、ずっとそこで育ったから。私は未来にどうしたいかしか考えてなかったし、これからもそう」

美保ちゃんの家族は事情があって四国に住んでいるそうだ。困ったことがあったら、誰に相談するんだろう。1人で何でも決めてきたのだろうか。

「美保ちゃん、仕事でしんどい時とか落ち込むことってある？」

「あるよ。誰でもあるんちゃう？」

「私な、仕事でうまくいかへん時とか、気分が下がって、家でもまだ落ち込んでしまう時があるねん」

ゆりは昼間の調理の仕事中にお客さんの注文を聞き間違えて、作り直しになってしまったことを、ずっとお腹のあたりに抱えていた。学校に来て、それが離れなかった。お客さんの三角になった目が、まぶたの裏に浮かぶ。おでこの辺りが熱くなる。

「誰でもあるよ。でも、“あたしってあかんねんやあ”って自分を責めることないと思うわ。ダメやダメやって思っても、もう終わったことやし、そんなん考えとったら余計ダメになるって。自分を信じて、次のこと、未来のことを考えていかな」

そうして自分の悩みも、自分で片付けてしまいそうな美保ちゃんは、ぐんとお姉さんに見えた。美保ちゃんの口から出てくる言葉は海のようなだった。ゆりはそこに漂って浮いているだけで、包まれているような気分になった。ただの思いつきや、その場しのぎで発している言葉ではない。それまで肩を並べて階段を下りていた美保ちゃんが2、3段、先に駆け下りた。

「ゆり、がんばれーっ」

美保ちゃんの足が止まって振り返る。踊り場で話をしていた先生達の視線を感じる。

「って、心の中で叫んでみたら？」

美保ちゃんは、はははっと笑って、また階段を下り始めた。ゆりも1段ずつ下りていく。

「私な、ずっと人が嫌いやった。でも、この学校に来て、好きになった。ここに来たら、みんなおるし」

それはよくわかる。ここはただの学校じゃない。家のような、巣のような、お母さんのよ



うな、お父さんのような。

「口だけじゃないなって思えるねん」

それもわかる。ゆりは黙ってうなずいた。先生と生徒、クラスメイト同士、先輩と後輩。美保ちゃんとこんな話のできたのも、この学校に来たから。

「大丈夫やって」

大丈夫だと思えた。

「ゆりちゃん、最近、勉強がんばってるやん」

「え……うん」

見ていないようで、人のことをよく見ているのも、美保ちゃんらしいと思った。

「私な、専科コースの大人の人達が勉強してるのと一緒の試験を、受けてみたいねん。先生は難しいぞーって言うから、迷ってるねんけど」

ゆり自身、まだ決心もついていないことを、美保ちゃんに話していることが不思議だった。

美保ちゃん目が子供のように笑った。

「それやっ！ ほら、できたやん、未来のこと！ それに向かって行ったら、悩んでる暇もないって」

難しいみたいだから、諦めた方が良くかと思っていたのに。

窓の外を見ると、月がはっきりと見えた。満月ではなく、少し欠けているように見えた。明るくて、周りのものの存在を全て吸い込んでしまうような月。ゆりの胸のあたりから、その月まで線路が伸びていき、列車の車輪が軋みながら動き出す音が聞こえた気がした。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

## 第 15 回 「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

### —— 何度も大手術に耐えた「ハマヒルガオ」家族の絆（2） ——

一宮茂子

#### これまでのあらすじ

前回の対人援助マガジン第 46 号で報告しましたように、レシピエントである長男は中学生時代に肝臓の難病を患い、その後、食道静脈瘤が破裂し、吐血して重篤な出血性ショック状態となったため止血術を受けました。このような病状の治療や精密検査の段階で病名は「原発性硬化性胆管炎」であることがわかりました。肝臓の難病を発症してから病名が判明するまで、約 8 年を要したことになります。さらにこの難病の治療は「移植しかない」という説明も受けていました。その過程で病歴は複雑になり長年にわたる治療を要したため複数の病院や診療所にかかっています。この移植治療は愛子さん家族が居住する地元の関東地域の病院の医師は否定的であり、親族も否定的でした。さらに愛子さん夫婦の関係性は揺らいで希薄になっていました。しかし、愛子さん夫婦と長男の 3 人は移植の基幹病院である Y 病院でセカンドオピニオンを受けて移植を決断しました。そして医学的条件として「ドナーは体格のよい夫のほうが適している」という医師の説明により夫がドナーとなって生体肝移植術を受けました。本稿ではその後のレシピエントの病状と家族の関係性を見ていきます。

#### 1. 事例紹介

前回の対人援助マガジン第 46 号の内容から数年経過した家族状況ですので年齢が上がっています。母親である愛子さん（仮名：50 歳代、A 型）は、長男（20 歳代、A 型）と妹である長女（10 歳代後半、A 型）の 3 人家族です。前回の移植手術でドナーになった父親（50 歳代）は移植後、愛人と同居して家庭を顧みなくなっていました。かといって離婚にはいたっていません。別居した当初は夫から金銭的支援がありましたが、それも長続きせず家計支持者は愛子さんひとりになりました。家のローンも未完済であり生活するには経済的に苦しい状態が続いていました。愛さんは、離婚は紙切れ 1 枚でできると認識したうえで、夫には「何らかの生活の補償」を願っていましたが、そのような希望は叶わなかったのです。そのため愛さんは結婚前に勤めていた小さな会社に経理の事務職として再就職しました。そして少ない給料の中から住宅ローンや生活費を支払っていました。長男の病名は特定疾患であったため患者負担の医療費はゼロであったことは幸いだと思いません。

## 2 生体肝移植治療の 8 つの特徴

生体肝移植治療の特徴は、これまでに何度も紹介しましたが、重要な内容ですので本稿にも提示します。それは、(1)代替療法がない、(2)移植をしなければ患者は死亡する、(3)生体ドナーが必須、(4)生きた人間の身体の一部が医療資源となる [安藤 2002]、(5)他者には依頼しにくい、(6)ドナーの負担や犠牲は金銭や時間で分配できない、(7)ドナーは誰かひとりが全面的に担うしかない、(8)時間的制約がある、ということです [一宮 2016]。

そのためドナーは近親家族が引き受けざるをえないことが多いといえます。ドナーは 1 回性ですが、レシピエントは拒絶反応や合併症などによって肝機能不全となると、再移植すれば生きながらえることができます。この事例では複数回の肝移植を受けています。

## 3. インフォームド・コンセント

前回の対人援助マガジン第 46 号で報告しましたように、移植医療関係者の立ち位置から見たインフォームド・コンセントは大変重要な意味を持っています。しかしドナーやレシピエントにとっては、移植医療関係者が思っているほど重要でないことが先行研究で明らかです [一宮 2016]。

前回は愛子さん夫婦と長男が初めて受けたインフォームド・コンセントについて紹介しました。その結果、愛さんは移植治療をポジティブにうけとめましたが、夫の反応は言語化されず不明でした。冒頭のこれまでのあらすじで述べましたように、最終的に医学的条件で夫がドナーになるほうが適しているという医師の説明によって夫はドナーになりました。しかし、夫の胸中は語られていないため不明です。

## 4. 生体肝移植 (1 回目)

1 回目の生体肝移植は夫がドナーとなり、関東地域の T 大学病院でおこなわれました。当時はまだ珍しかった手術です。このときの執刀医は関西地域の K 大学病院の移植外科の医師が出張しておこなわれました。

### 4.1 ドナーの順調な術後経過と退院

生体肝移植術はドナーとレシピエントの 2 人が同時に手術室に入ります。移植後のレシピエントは ICU に収容されますが、ドナーは一般病棟の個室に収容されるのが通常です。しかしこの事例ではドナーも ICU に収容されています。それはドナーである夫の術後の容体が悪かったのではなく、その病院では移植術がほとんどなされていないため用心してそのような対応になったと思われます。このときの愛さんは ICU まで夫を見舞にいきます。そして次のような興味深い語りをえました。

愛子さん：「周りの人は (私たちは) 夫婦だから、別居していようと誰もおかしいとは思わない (だろう)。だからイヤだったけど、夫の手をとって『ありがとう』

と感謝の気持ちを伝えた…。」

愛子さん夫婦の関係性はとことん冷え込んでいたにもかかわらず、ドナーになった夫に感謝の気持ちをあらわすため夫の手を取るという行為とともに言葉もかけています。移植後にドナーを労うこのような行為はとても大切なことです。夫の本音の語りは得られていませんが、ドナーになるということは心理的にも身体的にも自らを犠牲にして、メスを入れて肝臓の一部を提供するという崇高な行為です。その代償としてレシピエントや家族はドナーに感謝や労いの言葉かけをするのが通常です。夫婦だからそんなこといちいち言わなくてもわかっている、と思うだけでは相手に通じません。かならず言語化して当事者に直接伝えて欲しいと思います。

夫の術後経過は順調だったため予定通り 2 週間で退院となりました。ドナー手術は大きな手術であり、逆 T 字型の大きな傷跡が腹部にのこります。当時の夫は健康体で体力があり、血液型一致移植であったことからレシピエントに拒絶反応も見られず、またドナーの術後合併症もなく、順調に経過しました。このことがなによりも愛子さん家族にとって安心できる結果となりました。

#### 4.2 冷え切った夫婦関係

愛子さんはこの手術によって夫が「元の鞘に戻る」ことを期待していたのですが、あっさりと裏切られました。当時の心情を愛子さんは次のように語っています。ドナー術後の夫は、「退院したら向こう（愛人）のほうへ帰る」と、愛子さんに断言したのです。それに対する愛子さんの受けとめ方は「あ、そうかと思って、そんならそれでいいや…という感じでした」と、このような結果となることを予め覚悟していたかのように、冷めた口調で淡々と語っています。そして愛子さん自身は夫と別居していても自分が悪いわけではないことから世間に恥じることなく「前向きに堂々と生きよう」と決意したのです。

私は夫のドナー決断の意思が、医師から医学的条件で強要されたわけではないが、そうかと言って自発的とも思えず、仕方なしに引き受けたように思えました。夫はその代償として、対人援助マガジン第 46 号で述べたように、愛人からの電話で愛子さん家族が振り回されたゴタゴタや、病気の息子がいる家に帰らない罪悪感を帳消しにして、これからは愛人とともに別居して暮らしたいと考えたのではないかと、思えました。

#### 4.3 残された家族の絆

このような家族環境のなかで精神的に落ち込んでいた長女は、コツコツと高校受験の勉強をしていました。その結果、みごとに県立高校に入学することができたのです。この明るいニュースは精神的に辛い時期の愛子さんの励みにもなっています。愛子さんが語る長女は「やさしい娘」であり「そこそこの県立高校に入学できた」頭のいい娘です。夫婦関係が破綻していく家族状況のなかで、愛子さんにとっては自慢の娘として困難を乗り越える力を与えていたと思われまます。

その後も楽ではない生活が続きますが、愛子さんは職場や周囲の人たちに支えられていることを感じながら、残された 3 人の家族はお互いに寄り添って団結することで苦難を乗り越えようとしていたのです。

#### 4.4 レシピエントの一進一退の病状

肝移植とはレシピエントの肝臓を全て取り除いてからドナーの肝臓を移植する手術です。そしてドナーの肝臓の血管や胆管をレシピエントの血管や胆管（または腸管）に縫い合わせて移植した肝臓に血液や胆汁が流れるようにする手術です。

長男は移植術後の入院中は拒絶反応も見られず順調に経過しました。しかし移植術後 1 年経過したころ、胆管狭窄といって手術で縫い合わせた胆管部分が狭くなり胆汁の流れが悪くなりました。そこで胆汁の流れをよくするために肝内胆管空腸吻合術を受けました。その後も胆管狭窄となり、その都度、胆管が狭くなった部分を広げる処置として胆管拡張術を繰り返さなければならぬ状態になりました。こうした治療は長男の心理的、身体的負担が大きいので体力を消耗させますが、自然治癒は見込めないため、その都度対処する必要があります。

#### 4.5 医療的フォローとして定期的な外来通院

退院後のレシピエントは生涯にわたって定期的な外来通院が必要です。そして血液検査や免疫抑制剤の微調整をおこないます。通院間隔は病状によって異なりますが、最初は少なくとも 2 週間から 1 ヶ月に 1 回、病状が安定してくると 2 ヶ月から 3 ヶ月に 1 回、半年に 1 回と間隔があきます。こうすることで異常の早期発見につなげるのです。とくに遠方から移植の基幹病院に通院する場合は、交通費、宿泊費などは相当の負担になります。そのため病状が落ち着けば、地元病院で医療的フォローを受け、異常があれば地元病院から移植コーディネーターを仲介役として移植の基幹病院である Y 大学病院の医師と連絡を取りながら治療します。このように地元病院と移植の基幹病院と連携しながら移植後の治療に当たることは、患者・家族だけでなく地元病院の医師にとっても心強いはずで、この代表例は対人援助マガジン 43 号で「地元病院と移植施設のみごとな連携体制」として紹介しています。

#### 4.6 原発性硬化性胆管炎の再発

1 回目の移植から 6 年半が経過したころ、長男は肝生検によって原発性硬化性胆管炎が再発したことがわかりました。この難病の治療は再移植が必要ですが、この時点のレシピエントである長男は、肝機能が悪化して肝不全状態となり血漿交換療法を受けました。またこの難病には炎症性腸疾患の合併症が多いとされていますが、長男もまた十二指腸潰瘍を患っていたのです。この病気は腸内で出血するため便に血液が混じる状態になり、これを「下血」といいますが、長男は腹痛とともに下血や吐血を繰り返していたのです。このような状況下で、再移植がおこなわれることになりました。

これまで述べてきたように、長男は原発性硬化性胆管炎の難病を患ってから、食道静脈



瘤の破裂、出血性ショック状態、生体肝移植術、術後の胆管狭窄、その後に難病が再発、肝不全状態となって血漿交換、さらに十二指腸潰瘍で下血や吐血がありました。これまでの長男は次々と大病をわずらい満身創痍の状態、再移植となったのです。そして、このような状態の期間は 7 年から 8 年に及んでいました。

## 5. 生体肝移植 (2 回目)

2 回目の生体肝移植は移植の基幹病院である関西地域の K 大学病院でおこなわれました。この事例のように病歴が複雑で 2 回目の移植となると、当時の関東地域の T 大学病院では移植術の経験が少なく対応が難しかったようです。

2 回目の生体肝移植のトナーは母親の愛子さんが引き受けています。愛子さんは 1 回目の移植時から自分がドナーになってもよいと思っていたそうです。しかし地元病院の医師が体格のよい父親のほうがドナーに適していると強く勧めたことで父親自身がドナーになる決心をしました。結果論ですが、それでよかったと思います。なぜならば原発性硬化性胆管炎は自己免疫疾患という全身の病気であるため再発することがあり、そのたびに移植をしないと生きながらえない難しい病気であるためです。

2 回目移植術の 3 週間前にレシピエントである長男は入院しました。移植術を受けるにあたって体調を整える必要があったのです。ドナーである愛子さんは外来でドナー検査を受け、移植術の前日に入院となりました。

## 6. インフォームド・コンセント

愛子さんは入院した当日に移植外科の医師からインフォームド・コンセントを受けています。その時はレシピエントである長男と長女の 3 人が同席しました。移植治療は高度で難解で複雑なうえに説明内容も多量です。素人の患者さんが移植治療の説明内容を本当に理解できたかどうかを医療者が確認するのはとても難しいといえます。しかし患者・家族の立場からすると、説明内容が理解できようができませんが、患者の命を助けるためにはインフォームド・コンセントをうけて同意書に署名しないことには移植手術をしてもらえないのだから、理解できたこととして同意書に署名している場合もあります。移植医療関係者にとってインフォームド・コンセントは重要な位置づけですが、患者・家族にとってはさほど重要ではないことが先行研究で明らかになっています [一宮 2016]。

愛子さんの場合はインフォームド・コンセントの内容は「良く覚えていないけれども納得して受けました。ただし、何が起こるかわからないということで」同意書に署名していたのです。

## 7 2 回目の移植手術がドタキャン

愛子さんは手術予定日の前日は「自分がドナーになって息子が元気になったらという気持ちで精神的にハイな状態」になっていたと語っています。その日の夜に、突然、明日の

手術が中止になったと医師より知らされて驚いています。そして息子は大丈夫なのかという心配と、いつ手術をしてもらえるのかと不安になったのです。当時の移植外科医師の説明を愛子さんは次のように語っています。

愛子さん：「(私の) 肝臓の血管走行が人とは異なっている…万が一のことを考えるとうまくいかないかもしれない。そのために万全を尽くしてもう 1 度、お母さんの体を診たうえで…検討する…むやみにそのまま進むよりも…きちんとしたほうがいい…それに息子の体力はまだ大丈夫だと。だから、そうするしかないなと思って…」

愛子さんのように予定手術がドタキャンになる事例は他にもあります。医療者は何事も臨機応変の対応が必要であり、その理由を患者さんが理解できるように丁寧な説明が求められています。愛子さんはインフォームド・コンセントの場面で「何が起こるかわからないということ」を予め聞いていました。移植手術を移植外科の医師にゆだねたからには、患者・家族は見守る以外に方法はありません。そのため愛子さんは「そうするしかない」と受けとめていたのです。

## 8. 生体肝移植（2 回目）のその後

2 回目の生体肝移植は関西地域の移植の基幹病院である K 大学病院でおこなわれました。そしてドナーとして母親である愛子さんと、レシピエントである長男の 2 人が同時に手術を受けました。残された家族は大学生の長女ひとりです。とても心細かったと思われます。術後に母親の姉である伯母が数日間いっしょに付き添ってくれたことは長女にとって心強かったと思います。そして長女は術後のレシピエントである長男とドナーである母親の身の回りの世話をしたのです。愛子さんは当時のことをふり返って再移植は「家族 3 人で乗り切った」と語っています。

### 8.1 ドナーの術後経過

ドナーの術後経過は順調でした。2 週間後に腹腔内に挿入している管（これをドレーンといいます）を抜去したとき、ドレーンが途中で切れて残りは腹腔内に残る状態になりました。そのため 3 人の医師達は X 線室で腹部に麻酔液を入れながら切開して、透視下で切り離されたドレーンを 1 時間半にわたって探りましたが成功せず、愛子さんは検査台にしがみつき「猛烈に痛くて叫んでいた」のです。そのとき 1 人の医師は愛子さんの腹部あたりを優しくフワッと支えていたのですが「なんでもっとキュッと力を入れて固定してくれないの…（そしたら）痛みがましかもしれないのに…最初から全身麻酔でできなかったのかと頭にきました」と医師にたいする不信感を語っています。

医師達は局所麻酔で腹腔内に残ったドレーンを取り出せると思ったようでしたが、そんなに簡単ではなかったのです。結局、全身麻酔という大がかりな処置になりました。この

ようなドレーンの離切の原因は納品業者に調べてもらったが不明でした。そして入院期間は 1 週間延長となりました。愛子さんは医師に不信感を抱きながら合計 3 週間で退院となりました。そしてこのような事態は「納得いかないけれども医療ミスとして追求する心のゆとりはなかった。息子が心配で…」と語っています。

## 8.2 レシピエントの術後経過

2 回目の肝移植術を受けたレシピエントはこれまで経験したことがないようなしんどい思いをしたことを語っています。

長男：「2 回目の移植は結構こたえたんですよ。ベッドに固定されているわけではないんですけども、いろいろな管が体にいっぱいくっついていて、何をしても体が痛い、傷が痛い、熱があって、体の置き場がないようなだるさ…錯乱状態になりそうで、気が狂いそうで、点滴の管とかを手で抜いてやろうかと思っていて、必死に我慢していたんだけど、イライラがどこから出てくるのか自分ではよく分からないし、そういう衝動に駆られて、自分で何をするか分からない感じ…だけど耐えるしかなかった。自分はその時、（自分自身が）おかしいと思った。」

次頁に術後すぐのレシピエントにモニターやドレーン、チューブなどが装着された状態を提示しましたので参照してください。

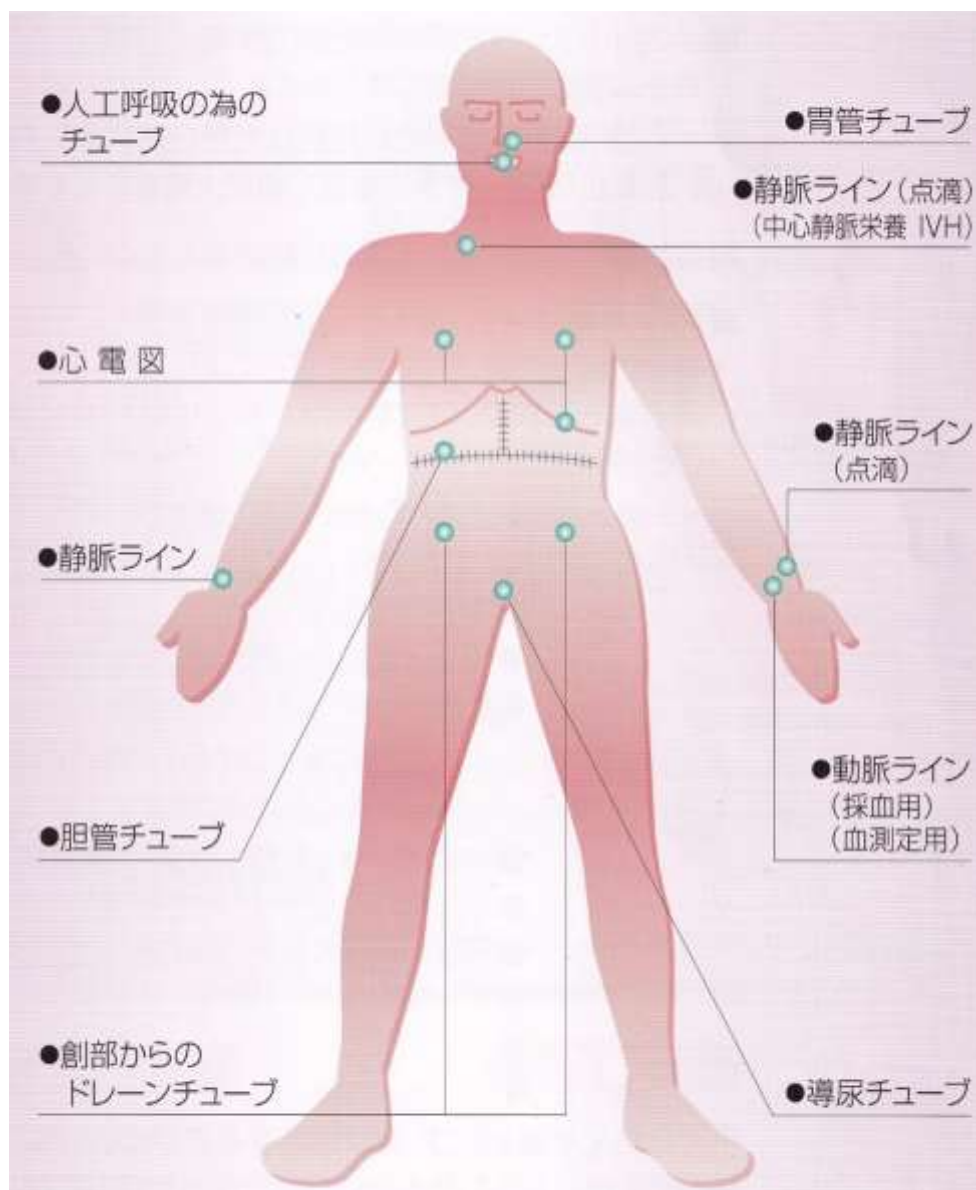
移植後に多くのレシピエントが訴える「あんなしんどい思いを 2 度としたくない」というフレーズがあります。移植医療の臨床経験がある私は、どのような状態のことなのか明確にはわからなかったのですが、この事例のレシピエントの語りによって、やっと理解できました。1 回のみならず 2 回も移植を受けた長男はドナーやその家族に移植治療にたいするネガティブな語りはほとんどありませんでした。たとえレシピエントが本音を言いたくても、ドナーになって自分を助けてくれた家族に遠慮して言えなかったことがわかりました。これまでの長男はどのような苦痛にもずっと我慢して治療をうけていたのです。

レシピエントである長男は、寝返りも打てない体の痛みや傷の痛み、熱がでて、しんどくて、イライラしながら、このような状態が、術後の ICU で数日間、さらに一般病棟の個室でも数日間続いたのです。この期間の長男はずっと我慢していたのですが、時間の経過とともに管やチューブやラインが抜去されるたびに、誰が見ても回復状態がわかるようになったのです。

そしてレシピエントが歩いてドナーのベッドまで行ったのです。このようなレシピエントの状態を見た愛子さんは「何しろ点滴や管の数が、T 大学で受けたとき（より少なくても）全然違う」とビックリしています。

2 回目移植後のレシピエントの術後はとくに大きなトラブルはなく順調に経過しました。

### レシピエントの術後の状態



移植術後のレシピエントには、この図のようにたくさんの管が体とつながっています。どれも全身状態を把握するのに重要な命綱です。

田中紘一監修, 2004, 『いのちの贈りもの 肝臓移植ガイドブック』より引用

愛子さんは術後 3 週間で退院し、その後はウィークリーマンションを借りて、そこから Y 大学病院の長男の部屋に毎日通っていました。そして長男の身の回りの世話をしながら、その後の長男の経過を見ていたのです。1 回目の移植術をうけたときと 2 回目の移植術をうけたときと比べて、レシピエントの「管の数がものすごく少ない」ことで愛子さんは医療が進歩していることを感じていました。数ヶ月後に長男は退院して、その後の医療的フ

フォローは地元である関東地域の T 大学病院で医療的フォローをうけていました。

## 9. 胃・十二指腸潰瘍の発病と緊急手術

2 回目肝移植から 2 年 3 ヶ月経過したころ、長男は夜間に腹部痛があり、七転八倒する激痛が続く状態となりました。以前から腹部の痛みはありましたが、このような激痛はありませんでした。そのため地元病院の T 大学病院へ連絡して愛子さんが長男の状態を伝えると、電話で対応した医師は「動けるんだっいたらいいじゃないですか」と場違いで不適切な発言をしたのです。長男は何度か外来通院したにもかかわらず、その原因は不明とされ、その痛みは神経的なものではなかろうかと説明を受けました。その後も同症状が続くため救急外来を受診して点滴を受け、念のために血液検査を受けました。その結果、全身状態の悪化と脱水症状であることが判明し緊急入院となりました。

その後、愛子さんの勤務先に病院から電話があり、「今から緊急手術をします」とのこと。驚いて愛子さんが駆けつけると長男は、腹痛と吐血でショック状態となり、その原因は胃と十二指腸潰瘍からの出血だったことが判明しました。この消化器の潰瘍が長男に激痛をもたらした原因だったのです。愛子さんはこのとき「だからあのときものすごく痛いと言ったじゃないですか」と医師に猛烈に抗議したと語っています。このころの長男は「激痛で苦しんでいるのに肝心の医師には理解されず、大変だったと思う」と愛子さんは語っています。

結局、胃の（入口である）噴門部の切除と十二指腸の出血部位をクリッピングすることで止血したのです。愛子さんは「もっと早期に対応していたら、胃切除はしなくてすんだのではないか、それが残念」と医師達に不信感を語っていました。さらに肝機能は良かったため、治療薬を沢山使用できましたが、愛子さんは多量の治療薬によって再度移植した肝臓が悪化しないか心配していたのです。

## 10. 痔瘻の手術

それから 5 ヶ月を経過したころ、長男は痔瘻の手術を受けています。免疫抑制剤を内服することで移植した肝臓の拒絶反応を押さえているのですが、反面、自分自身の免疫力が落ちるため感染しやすい状態になります。長男は肛門が化膿して炎症を起こしていたため膿を出す手術を受けました。レシピエントにとってこのような病気は早期治療が大切です。

## 11. 同病のレシピエントの死

愛子さんは入院中に知り合った知人から、肝移植をうけた患者・家族、これから肝移植を考えている患者・家族の会があることを知りました。2 回目の肝移植をうけるとき、どの病院でうけるといいのか、この会に相談してアドバイスを受けていました。それは「地元の T 大学病院はやめた方がいい。もともと K 大学病院から紹介されて T 大学病院にきたのだから、K 大学病院を勧める」との返事でした。それまでの愛子さんは「どこにも相談



する人がいない」と語っていたのですが、この会に相談することができるようになったのです。なによりも移植とは関係のない独立した会でしたので安心して相談できたそうです。

あるとき愛子さんは、長男と同じ年代で同じ病名で、1回目は母親からの肝移植、2回目は海外で脳死肝移植をうけた青年と知り合いになりました。その青年は T 大学の理工学部（？）から教育学部へ編入（？）して、臨床心理学士のような資格を取り、移植のコーディネーターとか家族の心理的なサポートや講演をしていました。愛子さんも長男も、その青年をロールモデルとして彼は頑張っていると、すごく心強かったそうです。

しかし、長男が胃腸の激痛で苦しんでいたころ、青年も同じような症状で苦しんでいたのですが、残念ながら34歳で永眠しました。その青年の送る会に参加した愛子さんは、彼の母親が記述した日記のような冊子を読んで、愛子さんは非常に辛くてショックをうけたのです。そして、この病気は難しいと思い知ったのです。

## 結びにかえて

2回目移植後の長男は、その後、原発性硬化性胆管炎の再発の徴候が見られるようになり、家族全員がショックを受けました。この難病は長男と愛子さん家族にどれほどの苦悩や苦痛をもたらしたら治まるのでしょうか。詳細は次回に紹介いたします。

## 文 献

安藤泰至，2002，「臓器提供とはいかなる行為か？——その本当のコスト」『生命倫理』12(1): 161-167.

一宮茂子，2016，『移植と家族——生体肝移植ドナーのその後』岩波書店.

田中紘一監修，江川裕人・高田泰次ほか，2004，『いのちの贈りもの 肝臓移植のためのガイドブック』，京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部.

## オンライン文献

一宮茂子，2021.9，「生体肝移植ドナーをめぐる物語——「ヒシと寄り添い苦難に耐える『ハマヒルガオ』 家族(1)」『対人援助学マガジン46号』

(<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/37.pdf>, 2021.11.23確認).

一宮茂子，2020.12，「生体肝移植ドナーをめぐる物語——地元病院と移植施設のみごとな連携体制」『対人援助学マガジン43号』

(<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/42.pdf>, 2021.11.23確認)

## 資料

表 レシピエントの病歴

年齢	病歴	病状・治療
中学時代 高校時代	自己免疫性肝炎	薬物療法 移植治療を勧められたが 漢方療法を選択
20歳	原発性硬化性胆管炎	食道静脈瘤破裂し吐血 再度移植治療を勧められる
21歳	生体肝移植術（1回目）	ドナーは父親
22歳	胆管狭窄	肝内胆管空腸吻合術 その後、胆管拡張術を繰り返す
27歳	原発性硬化性胆管炎の再発	
28歳	十二指腸潰瘍	下血、肝機能低下
28歳	生体肝移植術（2回目）	ドナーは母親
30歳	胃の噴門部切除術 十二指腸クリッピング術	腹痛、吐血、ショック状態
31歳	痔瘻の手術	
32歳	原発性硬化性胆管炎再発の疑い	脳死移植登録のため検査入院
35歳	左大腿骨頸部骨折 腰椎圧迫骨折	骨密度が低く手術は不可能 車椅子と両松葉杖で移動
36歳	4ヶ月間で脳死移植の連絡5回 大量のタール便 血液検査値の悪化 不安発作	脳死移植を受けるか否か、心が揺らぐ 入院治療 薬物療法 入院治療 血液製剤と抗生物質の点滴 第三者に話を聴いてもらおうと落ち着く
37歳	脳死肝移植術（3回目）	ドナーは60歳代男性
41歳		永眠

# こころ日記「ぼちぼち」 その②

## 「職場体験学習」

中学校では、今も教育カリキュラムに位置づけられていますが、「職場体験」という学習があります。どの学校もだいたい2学年で実施しますが、私自身も何回もその学習に取り組みました。

実施時期は学校によって異なりますが、一週間、地域にある様々な職場で仕事の体験をさせてもらう学習です。

「職場体験学習」の始まりは、阪神・淡路大震災の教訓からと聞いています。災害の中で、中学生の存在は大きく、色々な場面で人道支援ができる力があると言われていました。学校での消防署の避難訓練時では、消防士から「君たちは、災害時では地域の大切な力となれる」と何度も話の中に出てきました。地域で生活するのですから、職場体験などで日ごろから繋がっておくことは、何かの時にも大切なことなのですね。

## 仕事場探し

職場体験をさせてもらう仕事場をさがすのは、教員の仕事です。それって教員の仕事？とっていましたが…。とても負担の大きい業務です。

多い時は100件近い仕事場を見つけなければなりません。

2年生担当になると、4月当初から放課後や授業の合間に、地域の職場訪問をします。毎年のことだからと快く引き受けてくれる事業所がほとんどですが、たまに断られることもあります。その理由は色々ですが、近年多いのは、人手不足で中学生の面倒を見られない。

小売店などは、お客さんも少なく、仕事がないなどです。時々去年の生徒の態度が悪くなかったというのもあります。

事業所の職種は、大きく分けて、製造業、教育、福祉施設、大手飲食チェーン、ホームセンター、小売店、総合病院、など。

税理士事務所をお願いしたこともありますが、守秘義務的なことが心配でした。

まず生徒たちにアンケートを取り、できるだけ希望通りに割り振っていきます。

生徒の日頃の人間関係など、この割り振りが一番の悩みで時間がかかる仕事でした。それぞれの事業所からの要望や、どんな仕事をさせてもらえるのか？人数は何人可能か？などを確認します。

生徒たちの一番の人気は、スーパーや大手飲食チェーン店。美容院、幼稚園、保育園も人気です。希望が少ないのは、福祉関係です。介護施設や障がい者施設など。



## 事業所の苦勞

職場体験の受け手である様々な事業所では、中学生ができる仕事の内容など考えなくてはなりません。危険な仕事はさせられません。大変だろうなと思います。

あらかじめ事業所の担当者が、活動計画を立ててくれていることは、とても有難かったです。事業所にとって、思春期の難しい年頃の中学生を受け入れることは、覚悟

がいります。私たちとしては、感謝しかありませんでした。

仕事の内容は、スーパーであれば、品出しや陳列。ホテルならば、鍋磨き、障子貼り、ベッドメイキングといった仕事でしょうか。

活動の条件として、飲食店の中には、事前に検便を要求されることがあります。衛生面では厳しさが求められます。検便提出のハードルが高いため、生徒が躊躇する場面もありました。他には、髪の毛をくくる、爪は切っておく、言葉遣いに気をつけるなどなど…。なかには、性別を問われることも。女の子がいいとか（なぜに？）

厳しい条件もありますが、「働かせてもらうのだから」と、生徒たちを説得します。

とは言え、長い目でみれば、将来の顧客になるかもしれない子どもたちです。また、仕事の選択肢が広がるきっかけとなることもあるでしょう。地域のものづくりの継承へと繋がることも。

大抵の事業所では、中学生の面倒をよくみてくれました。それなりに成長して戻ってきた子ども達を見るとよくわかります。

## 体験からの繋がり

長い間通っている美容室があります。もうかれこれ30年以上になります。親から子へと通い、今や私たち親子にとってはなくてはならない美容室です。オーナーとは、独立する若き時代からの付き合い。30年変わらないこじんまりとした清潔感のある店の雰囲気が入っています。そんなに広くない店内は、いつも常連客で賑わい、知らない人同士の会話も弾んでいます。

当時担任をしていた男子のデカオくん。第一希望ではなかった美容院に行くことになりました。もう20年程前になるでしょ

うか。

なかなか事業所が見つからず困っていた私を助けるために、オーナーは「初めてやから、心配やけど…」と言いながら、彼の体験を受け入れてくれました。

美容院の仕事は、挨拶をする、タオル干し、床の髪の毛を掃く、カーラーを洗うなどです。野球少年のゴツゴツした体のデカオくん。狭い美容室では、とても目立ちました。オーナーは、根っから明るく優しい人柄。よく働く彼に、昼食にはハンバーグ、てんぷらなどのご馳走をしてくれていたようです。

初めは気乗りしなかったデカオくん。オーナーはじめ従業員のフォローで、無事に一週間の体験を終えることができました。

随分後になってオーナーから聞かされたことですが、彼は体験の最後の日に、

「大きくなって働くようになったら、自分のお金で髪を切りに来ます」と言って帰っていったそうです。



先日美容室で、「この前デカオくん、来たよ」と聞きました。彼は約束通り、就職をしてからずっと、髪を切りに来ているそうです。たまに私のことを「先生、元気ですか？」と言って尋ねるようですが。

出会うことはないのですが、しっかりと社会人になっていることが嬉しくもあり、この繋がりが続くといいなと思っています。

つづく

## フリースクールでの SW 実践を考える①

高名 祐美

38年間のMSW生活を2021年3月末に終えた私は、現在フリースクールで働いている。高齢者のサービスを母体とするNPO法人で、学童も受け入れている。医療機関からフィールドを地域に移して、ソーシャルワーク実践を継続していきたいと選んだ職場だ。ここで出逢った子供たちとのかかわりを通して、フリースクールでのSW実践を考えていきたいと思う。

### I ももちゃんのカ

ももちゃんは中学2年生。小柄でおとなしい、読書が好きな女の子だ。吹奏楽部に所属して、パーカッションを担当している。定期演奏会で演奏することを目標に、部活動を頑張っていた。志望校もほぼ決めていて、しっかり勉強にも取り組む頑張り屋さんだ。そんな学校生活を送っていたももちゃんが、5月の連休明けから朝起きられない、起きても「おなかが痛い」と訴え、欠席するようになった。身長が低いこと、部活で先輩に挨拶をしなかったと言われて、友達から無視されるようになったことがきっかけらしい。

登校できた日は図書室で自己学習し、部活動には参加していた。吹奏楽部では8月には定期演奏会が予定されていた。定期演奏会には出演したいと練習を続けていたが、仲良しだった部員から無視される日々が続いた。頑張っって自分から挨拶をしても、言葉を返してくれない。そして、ももちゃんの心が折れた。部活動に参加できなくなり、夜眠れなくなった。母親と寝室を共にするようになったが、学校に登校できる日が少なくなっていった。

そんなももちゃんと、私は9月に出会った。最初にお母さんと面接をし、その翌日ももちゃんがフリースクールにやってきた。中学生の女の子を前に、私はとても緊張した。クライアントが中学生。心が傷ついている女の子。想像力を最大限に働かせる。ももちゃんは、今どんな状況にあるのだろうか。まずはアセスメントからと思うが、どういう言葉をかけたらいいいのか。なぜか質問がうまくでてこない。これまでのソーシャルワーカー経験がふっとんでしまったかのようなももちゃんとの初回面接だった。(お母さんとの面接は、問題なくできたのだが)

ももちゃんにとって、フリースクールがどうあれば居心地のよい場になるのか。そればかり考えていた。自分が何をしたらいいのかは、なかなか答えがみつからない。あえて学校の



ことにはふれず、まずはやりたいことを尋ねてみた。

SW：ここで何をやりたいかな？

もも：勉強。それと読書かな。

SW：勉強はどんなふうにやりたい？

もも：自分で教科書ワークとかやっていく。

SW：そうか。自分でやるんだね。(教えてほしいと望まれても、私には教えられないけど・・・)

もも：(だまってるなずく)

SW：一日長いけど、時間割をつくって、過ごしてみようか。ここではとなりのディサービスで体操や脳トレをやっているし、一緒に体操をするのはどう？

もも：(首を横にかしげて)・・・・・・・・

SW：体操はあまりしたくない？やめておく？

もも：うん。

児童福祉に関しては、知識は乏しく経験もないままに飛び込んだ職場。そこで出会った初めてのクライアントがももちゃんだった。面接が一方通行のようなやりとりにしかならない。

何をして時間を過ごしたらいいのか、ももちゃんの世界をどうしたら理解できるのか、そんなことばかり考えていた。

ももちゃんのお母さんとの初回面接は、ジェノグラムと一緒に書きながらすすめた。ももちゃんの家族システムを理解したいと考えたからだ。今の職場にきて、初めてのジェノグラム面接だった。ももちゃんがこれまでどんなふうに家族の中で生活してきたか、少しずつみてきた。4人姉弟の長女。3人の弟(小学5年生・小学2年生・保育園年中)のお姉ちゃん。お父さんは自営でお惣菜のお店で働いていた。お母さんの実家の隣が店で、おじいちゃん・おばあちゃんが孫たちをみてくれていた。お母さんは、保育園で栄養士として勤務しながら店を手伝ったりしていた。すぐ下の弟(小学5年生)も不登校だった。

フリースクールに通い始めて1か月がたったころ。朝、ももちゃんから提案があった。「素敵な演奏を聞かせてくれる人と出会ったから、その演奏をディサービスのおじいちゃん・おばあちゃんたちとここで働いている人にも聴いてもらいたい」と。自分からやりたいことを積極的に言葉にして伝えてくれたのは初めてだった。詳しく内容を聴くと、どうも自分からそのアーティストにお願いしたと。昨日の夜、お母さんに促されて、今朝電話をかけ演奏を依頼したという。その積極的な態度に私は驚かされた。管理者の了解も得られ、急きよその日のお昼に演奏会が開催されることになった。

SW：どんな演奏なの？

もも：ハンドパンっていう楽器で、すごくきれいな優しい音。

SW：演奏してくれる人はどんな人？

もも：毎年稲刈りの時期にこの地域で演奏してくれる愛知県の人。夫婦で来てくれる。昨日の夜も演奏会があって聴いてきた。

SW：そうなんだ。どんな楽器なの？ハンドパンって。

もも：なんかタイヤみたいな楽器、手でたたいたりなでたりしてきれいな音を出す。聴くとすごく優しい気持ちになれる。

SW：優しい気持ちになれるの。いいね。私は聴いたことがないから、楽しみね。

もも：(うなずく)

昼食を食べ終わったころ、演奏してくれるご夫婦がやってきた。今か今かと待っていたももちゃんは、二人の乗った車が到着するや否や外へ飛び出していった。そして、最初に旦那さん、次に奥さんの方に駆け寄ってハグされて照れくさそうにしていた。

演奏はももちゃんが言う通り、心が癒される素敵な優しい音楽だった。なにより演奏しているご夫婦のお人柄が温かく、このご夫婦の人となりにももちゃんは魅かれたのだなと思った。と同時に、こんな素敵な音楽を教えてくれたももちゃんの心の中を、もっともっと知りたいと思った。

演奏会が終わったあと、ももちゃんに今日の出来事を書いて残しておこうと提案し、作文を書いてもらった。以下、その作文の一部を紹介したい。

「ナオティティティア なおさんとみきさん」

加山 萌々

初めて会ったのは、9月に「ひかり保育園」で演奏してもらったときです。初めて会ったのに、すごく優しく接してくれて嬉しかったです。その次の日、天日陰ひめ神社で稲刈りのイベントがあって、その時から二人と話すようになりました。

この演奏を聴くとすごく温かい気持ちになれます。二人とも優しい人なのでそれが演奏にも出ていると思いました。(中略)

頭の中で音が響いて伝わってくるのが私は好きです。今までケンカしていた人たちがこの曲を聴いたらケンカが止まるんじゃないかと思うほど優しい歌だと思います。(中略)

私が今日「ひなたぼっこ」(フリースクール)に二人を呼んだのは、私も聴きたかったのもあるけれど、もっといろんな人に聴いてもらいたいと思ったからです。お願いして、二人ともやっぱりいい人たちだと思いました。昨日言えなかったので、今日の朝連絡しました。すごく急だったのに「全然いいよ～」って答えてくれました。いつもだったらお母さんに頼んでもらうけど、今回初めて自分の口で頼むことができました。

普通だったらお金が必要だけど、私には無理なのでお父さんをお願いしてお弁当を用意してもらったり、急に朝、「ひなたぼっこ」に場所をお願いしたり、いろんな人が協力してくれたからできた

ことだし、みんなも喜んでくれてとてもよかったです。あのままあきらめていたら絶対後悔したので、「電話してみる？」と声をかけてくれたお母さんにも感謝します。(中略)

演奏の後は、みんなから「ありがとう」って言われて、来てくれた二人からも「ありがとう」って言われて感謝したいのは私の方なのに。二人ともすごくいい人たちだなと改めて思いました。

私が自分の口で頼むことができたのは、なおさんとみきさんの人柄がいいからだったのかなと思います。もっといろんな人にきれいな音楽をきいてもらいたいです。

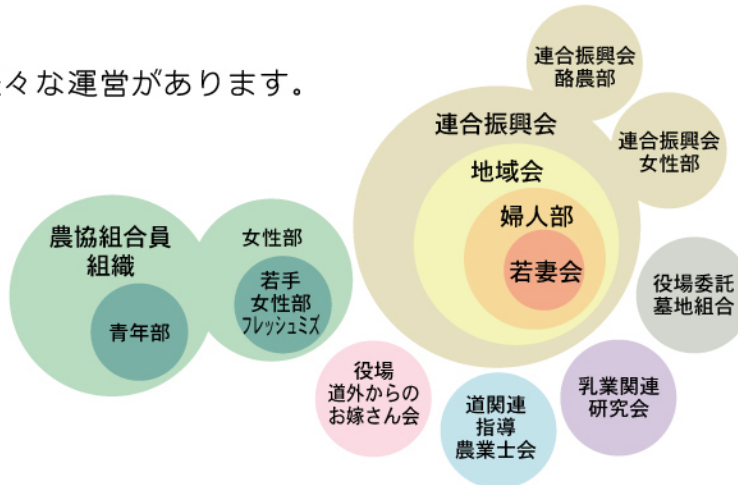
(文中に登場する固有名詞は仮名)

この作文を読んで、胸が熱くなった。ももちゃんの力がいたるところに表現されていた。この力をエンパワメントしていくことが私の役割なのだと感じた。ももちゃんとのかかわりは始まったばかり。私のフリースクールでの SW 実践もまだまだこれからだ。ももちゃんのストレングスを引き出し、これからの人生を歩んでいく道筋を一緒に作っていきたいと思う。



原 田 希

田舎には実に様々な運営があります。



私がかかわっているものだけでこれほど！ 大阪時代は、住まい周辺の小さい自治会しか関わりがなかったので、これほど大きな自治会（ページユの部分）が活発に活動しているのには驚きました。住むと同時に所属することになります。それぞれ予算がつき、持ち回りで役員を担当、行事をやって決算書を作り総会まで運営します。墓地組合は役場から委託されて管理や環境整備もやっています。暮らしのことは人任せでなく、自分達でやる意識が強く根付いています。地域会の活動としては、環境整備（草刈り、ゴミ拾い、冬支度、花壇作り）や安全祈願祭、神社祭、そして、地域の方が亡くなった時に葬儀の取り仕切りもやります。ご不幸があった家の方は、雑務は何もしなくていいようになっています。ひとり暮らしの方が亡くなくても、ほったらかされはしません。家の片付けにも班の者が伺います。葬儀の日程や役割を決める会議がすぐにひらかれて、葬儀委員長（挨拶）副葬儀委員長（司会）総務（全体のしきり）会計（御香典の預かりと記帳）まかない（食事）会場（駐車場案内、会場支度）留守番（出払った家を預かる）葬送（火葬場まで行くお世話係）が決まります。葬儀委員長には一番親しい者が選ばれる傾向があります。葬儀の挨拶で故人の経歴を語るのですが、故人の人柄、年長者から聞いた開拓時代の話、地域でどのように活躍してくれたか、家族のエピソード、亡くなるまでどんな風に過ごしたか、得意料理、趣味や楽しみは何だったか、幅広く聞き取り原稿にします。いろんな思い出話を聞くうちに、おのずと感謝の気持ちと、故人が支えてくれた地域をこれからも私達が支えます、という気持ちが沸き上がってきます。お名前しか知らない御老人の場合もありますが、寒さ厳しく物資もお金もない時を生き抜いた話にこみあげるものがあり、どの葬儀でも泣かされます。酪農仕事もやりながらの手伝いで、少し疲れはしても、みんなで見送るあたたかい葬儀だった、ああ良かった。という気分に満ちます。

なんやかんやと地域活動に呼び出される、役が何重にも当るわずらわしさは確かにありますが、自分たちで暮らしを補いあって、ルールを守って、いい距離感で見守り合う。遠くの身内より、近くの他人力の心強さを実感します。昔は頼むところ、お金もなかったから、ご近所の手を借りてやっていたのでしょうか。でも今は、地域の人に頼まなくても全部やってくれる葬儀屋がある。にもかかわらず、すべてはお願いせず運営は地域会で。助け合いの精神が廃れず残っている事に奇跡を感じます。頼む方が、忙しいのに悪いな、迷惑かけるなあ、気を遣うなあ、と言い出したら保てないバランス。お互いさま、いつかはみんなお世話になる、の意味を地域で理解している奇跡。だからわが地域には孤独死はない。火葬に入る直前のお別れの時に、摩周湖の伏流水を飲ませてあげる儀式もわが地域だけの特別な心遣いです。

昔は新しい人たちが地域に入るのを嫌ったこともあったようです。今はお嫁さんは全国から来るし、田舎生活に憧れて移住する方、廃校を利用してお店や工房を開く方、地域おこし協力隊の方もいます。新しい風が吹き込まれた結果、地域が楽しくなったと皆さん感じているようです。その他、ベトナム人実習生もいれば、東京や千葉から農業を学びにきた若者たちもいます。過疎、人手不足に悩む地域の救世主を歓迎して仲間となる。いま取り組むべきはそこだと思っています。一番最初に受け入れる窓口としては若妻会。昔は若奥さんが、親や仕事の悩み、子育ての話をしながらお茶を飲む会でしたが、今は名前も変わって、有志は誰でも参加していい会になりました。仲間づくりはもとより、地域に根付いてもらう最初の場所。みんなからいろんな話を聞いて、笑って、ここを好きになってもらえれば、と思っています。はじめは気後れしたり、静かに暮らしたいから田舎へ来たのに、わずらわしいと思うこともあるでしょう。若妻会の雑談になんか意味があるのかな、と私も思っていました。でも、自分の一大事、休めない酪農仕事をかかえながらの病気、事故、身内に不幸があった時にかけて、なんかやれることあるか？ と言ってくれるのは地域なのです。それを一度でも経験したら、全部の意味がわかります。自然が厳しい分も寄り添って生きていく場所なのです。

最後に、地域に根付いた度チェックを紹介します。  
ある日、救急車がサイレンを鳴らして走り抜けて行きました。大阪から来たばかりの私はなんとも思いませんでした。知らない誰かに何かあったんだろう、くらいのことです。ですが、牧場の父は原付きバイクで追いかけていきました。彼にとっては知ってる誰かのピンチだったのです。地域に根付いていくとサイレンが自分事のように気になりだします。何も知らずに、ただの野次馬 なんて言ってすみませんでした、父さん！



筆者 原田 希 ハラダ ノゾミ  
1973年 大阪府吹田市生まれ  
2006年 酪農家との結婚を機に北海道へ移住 自身も酪農家に  
2017年 北海道農業士に認定  
北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や  
女性の農業者向けの勉強会のお世話係を担当





## みちくさ言語療法—ことばの発達と障害の臨床より—

### (5)重症児者とコミュニケーション (その1)

工藤芳幸

#### 重症児者との出会い

私は大学を卒業後、滋賀県にある重症心身障害児者施設第二びわこ学園で児童指導員として社会人生活をスタートした。滋賀県は琵琶湖があることぐらいしか知らなかったが、たまたまその施設に採用されたことがきっかけで初めての土地での生活を始めた。びわこ学園は日本で2番目に古い重症心身障害児者施設である。「児・者」は児童福祉法に規定された児童の施設であると同時に、18歳以上の重い障害がある利用者が入所しているからである。また、重症心身障害児者施設は福祉施設であると同時に医療施設でもあり、医療行為を必要とする利用者が入所や通所というかたちでそこに暮らしていた。

重症心身障害とは行政用語であり、運動機能障害と知的障害を合わせ持ち、いずれも重い障害がある場合をさす。呼吸機能や摂食嚥下機能などにも重篤な障害があり、胃ろうや気管切開などの処置が必要な方も少なくはない。施設入所よりも在宅生活を送っている方が多く、近年は訪問看護や訪問リハビリテーションで医療的ケアが必要な重症児者に関わる事例もよく見聞きするようになった(私が就職した頃、訪問は稀であった)。びわこ学園は歴史が古いだけ

に、重症児者と言っても常に医療行為が必要な方ばかりではなく、重い身体障害や行動障害によってかつては家庭生活が困難だった方も多く入所していた。

重症心身障害児者施設での支援について、私とその全貌を語るには力不足である。それでも重症児者とと呼ばれる人たちとの関わりがSTとしてのコミュニケーション支援の大事な基礎部分であり、私自信の援助観や障害観が形成されていった場所だった。改めてここでの体験から、ことばやコミュニケーションの支援について考えてみたいと思う。

#### ここは暮らしの場である

法人採用でいくつかの施設の中から入所施設に配属された。身体障害は重いものの、自力での移動も可能な方が数多く暮らす病棟に配属になった。ここで割と最初の方に(確か病棟課長から)言われたことが、ここが生活の場あるということであった。利用者さんたちの暮らしの場であり、職員はそこにお邪魔しているようなものなのだ、という。大学時代に障害がある子どもの学童保育(今でいえば放課後等デイサービス)で指導員のアルバイトをしていたのだが、そこは家の外にある放課後の居場

所であった。家とも学校とも異なる第3の場所であり、活動の場であった。そのまま障害児者福祉の仕事を選択し、入所施設にやってきたのだが、ここは全く発想が違うことを知った。いくつかの居室に分かれ、そこで食事や寝起きも日中活動も行われている。児童指導員としての仕事は、利用者さんたちの生活全般の支援であり、そこでの主体は利用者である。ここで働くようになって、「利用者主体」ということばや「自己決定・自己選択」ということばを幾度となく見聞きするようになり、私自身もその意味を考え始めることとなった。暮らしの場であるからには、全てがプログラムではない。余白がある。確かにここには余白と呼べる時間や空間があった。同時に余暇支援という言葉もここで学んだ。余白を過ごすことそのものに何らかの支援が必要なのだ。「暮らしづくり」を支援するとは何なのだろうか、といろいろ考えてはみたものの、まずは介助者としての技術を習得する必要があった。

### Hさんに鍛えられる

病棟内で配属になったのはことばでのコミュニケーションができる利用者さんたちのグループであった。ことばでのやりとりができることで、施設全体の利用者の声の代弁者でもあり、月に1度の利用者会議でも中心的な存在の方たちだった。全員が私よりも年長であり、利用者さんたちからすれば私は、“若いにいちゃん”である。主にはグループの主任に仕事を教わったが、食事介助の仕方、車いすへの移乗などを利用者さんたちから直に言葉で教えてもらった。

Hさんは重い四肢麻痺と筋緊張の亢進と弛緩が不随意に起こる脳性麻痺の女性だった。Hさんは日中、特別な椅子にうつぶせになってテレビを見ている姿や、ボランティアの人とおしゃべりをしている姿が思い出される。通常の形の車いすに座ることはできず、フラット型の車いすにやはりうつ伏せになって乗って介助移動していた。何かの拍子に筋緊張が亢進し、弓なりにのけぞってしまうため、食事の介助は特殊な方法をとっていた。床にマットを敷いて身体を横向きに寝かせ、介助者の足で腰のあたりをロックして身体で壁を作り、身体をしっかりと安定させて介助をするのだ。まずはこれを習得することが、新人の私に課された課題だったが、もちろん簡単ではない。機械ではなく人がやることなので、それまでの関係性や熟練度によって精神的な緊張も異なる。最初は安心感なんて全く無かったろう。それでも根気よくHさんが私の食事介助を受けてくれた。長くそこで生活しているHさんにとっては、Hさんの身体介助の技術を全員に学んでもらうことが必要だったのだ。Hさんにはいろいろなことを教わったし、一緒にいろいろな活動もして、最もたくさん話した利用者さんだった。

### 自己選択・自己決定

ある時、びわこ学園の記録映画が製作されたことがあった。全国各地で上映会が催されたので、Hさんの姿をスクリーンで見た方もあるかも知れない。自己決定や自己選択を歌う施設だったが、Hさんは映画監督のインタビューに次のように答えていた。

「ゆえない、ゆったら職員に怒られる」

たくさんやりたいこと（ダイヤモンド）があるHさんは、たびたび職員に要望を投げかけていた。しかし、どうしても施設の事情、介助者の事情によって叶わないことも多く、言葉でのコミュニケーションができるものの、Hさんだけにかかりきりになれない病棟の状況もあって、十分に耳を傾けないこともあったのだ。Hさんの「ゆったら怒られる」は私自身も何度も聞いたことがある言葉である。Hさんには個別のボランティアがついていて、映画の中でも旅行計画を立てているシーンがあったように思う。当時可能な限りの自己決定・自己選択の機会だったのかも知れないが、施設の中の選択肢自体がどうしても限られている、ということを経験するようになっていく。職員としてその選択肢を拡大していくことが求められたし、そうしていくべきだと思っていた。しかし、施設である限りはそこに自ずから限界があるのではないか、という思いも同時にあった。お金、余暇の使い方、ちょっとした外出、電話（当時は公衆電話）、お酒にタバコ等・・・多種多様な経験に開かれている状態とは言い難い。暮らしの場の選択肢も限られているのだ。そのような中では、どうしても職員の思いの忖度が入りこんでくる。医療機関としての規制もある。

「本人さんはどう思てはんのやろ」

びわこ学園の医師であり園長だった岡崎英彦氏の言葉として、職員間でたびたび使われてきた言葉だ。ことばでのコミュニケーションが難しく、覚醒状態も低い利用者さんたちは、職員に対して明確な要望や意

図を伝える手立てに乏しい。否、たとえことばを使ったコミュニケーションが可能であったとしても、自身の思いを十全に表明できているとは限らないし、そうではないのだろう。すでに故人であった岡崎園長がどんな思いでこの「本人さんはどう思てはんのやろ」を使ったのか、直接聞く術はなかったのだが、時代を経て半ばスローガンのように使われていたのは覚えていて、何となく私はそれを何もわからずに口にすることが憚られ、在職中に一度も口にすることはなかった。ただ、本人の思いにどうしたら近づけるのか？ということは日々試行錯誤をしていたが力不足を感じるばかりであった。それは能力の問題というより、障害というものの向き合い方の問題、利用者さんたちとの関係の在り方の問題だったのかも知れない。

一障がいの重さという“壁”にどう立ち向かうか、その“壁”に立ち向かうのは子ども自身である。そう岡崎は言う。そして子どもにそれを要求する以上、子どものいのちに向き合い、共にする構えが職員に在る。そこが理解の基礎だと岡崎は言うのである。（びわこ学園だより第128号 遠藤六朗氏による）

こうした構えは“若いにいちゃん”の自分にはなかったのだろう。それでもどうにかして利用者さんたちを理解できるような術を求め、コミュニケーションの支援にも関心を深めていたのである。

## ST とコミュニケーション支援

この施設に勤務していたSTが佐藤八郎さんであった。皆も私も「八郎さん」と呼

んでいた。八郎さんの話は当時の20代の私にはなかなか難しく（今でも十分に理解できるのか自信はないが）、当時、シンボル（絵記号）を使ったコミュニケーションの支援やマカトンサインを用いたやりとり、トーキングエイドなど、AAC（拡大代替コミュニケーション）に取り組んでいた私にとっては師匠のようなものであった。どれもこれもそんなに簡単ではなく、本人の力を十分に使ってもらえるような手助けはなっていなかったように思える。その頃は教わったまま、見様見真似で応用力もなく使っていたと振り返ってみて思う。それだけの知識や技術の幅が自分にはなかった。

時々病棟にやってくる八郎さんにいろいろ質問しては教わった。昼休みに長い話を聞いたり、職員研修をお願いしたりと、在職期間に接点が多い専門職だった。私が最初に出会った（一緒に働いた）STが八郎さんであり、STという仕事のイメージの原型は八郎さんなのである。

「本人さんはどう思てはんのやろ」も自己決定・自己選択も、他者との関わりすべてにおいて、コミュニケーションの窓口を開いていくことが（どの職種であれ）根源的なのではないだろうか？と働きながら感じていた。しかし、恐らく、児童指導員として働き出した頃の私の試みの多くは「空回り」だったように思える。きっと私は自分がどのような支援技術を得ていけるか？ということが関心事として大きな位置を占めていたように思う。それはそれで間違いではないかも知れないが、以下に八郎さんが書いているようなことを恐らく感じてはいなかったのだろう。

重症児をはじめとして、障害児のコミュニケーション支援を続けてきて近頃、支援する側の価値観や考え方が鋭く問われるのを感じている。なぜなら彼らの多くは、私の関わりに文句を言わないからである。

それは、単に言葉の表出ができないからという理由だけではなく、彼らはたとえそれが的外れであったとしても受け入れる力があるからだということが少しわかってきた。

彼らのコミュニケーション支援をする立場の私もまた、実は彼らから支援されていたのである（佐藤，2006）。

#### 〈引用文献〉

佐藤八郎（2006）重症児とコミュニケーション—コミュニケーションのしかた:杉本建郎他『障害医学への招待 特別支援教育・自立支援法時代の基礎知識』クリエイツかもがわ.pp194-199.

（次号に続く）

## かけだ詩⑦

そだちと臨床研究会

かわばた  
川畑  
隆  
たかし

### 定義

知能とは知能テストで測られたものですって

これ冗談じゃないんですね 人によつては

いちばん正確な知能の定義じゃないかと言つてるくらい

性格とは性格テストで測られたものなんて言い回しは

ほとんど聞いたことがあります ということは

性格とはこれだと言えるってことかな ホントかな？

人間の言動とは

自己像(イメージ)を脚本にした役割演技(ロールプレイ)

これ私が言ったんです…と思ひ込んでいるんですが

自分のことをふりかえったときに 言い得てると思ひませんか？

それじゃあ 人間の感情とは

血圧計に表示された数値が高かったとき

深呼吸して測り直そうとする状況でまな板に載るようなもの

…なんて自己中心的なものはほはほしい

### 決心

中学生のK子は母と二人で暮らしてきた

その母に恋人ができて一緒に暮らすようになった

K子は恋人に馴染めなかった

K子の外泊は増え 学校生活でも荒れた

不良行為で警察に捕まったりもして

K子への心配は深まった

派手な行動とは裏腹に 見せる顔は暗く重たかった

児童福祉施設に入所して自分を立て直す選択肢があった

K子と母が並んで座っている

母「あの人が嫌なんか 一緒に仲よう暮らされへんか」

K子「…」

母「ようしてくれてるのになあ 子どもやなあ」

K子「…」

母「そうか このままやったら

施設に入るのも仕方ないんちゃうの」

K子「…」

母「…」

K子「私、施設に行くわ」

母は私ではなく恋人のほうをとるのだ

K子は恐かったけれどそう聴いたと思つた

恋人への優しい顔と私への険しい顔

それが辛かったけれど



優しい顔をしている母も護りたかった

母の子どもとして

### 署名

：お父さんとU子さんとで自由に話し合つて

家族で何かしているところの絵を描いてください

U子「エーッ 描けるわけない」

父は腕組みをして黙ったまま

U子は父をチラチラ見ながら下を向いて手遊びしている

父「何を描こうか…」

U子「何もないもん」

父「何もないといつても…」

またずつと無言

父「海水浴に行ったなあ」

U子「貝を焼いて食べたとき？」

それをきつかけにどうにか父の手が動き始めた

父「あんたも描かないと…」

U子がニコツと笑い 父の絵の内容にそつて描き始めた

不良グループのリーダーのU子

父は神経症気味で身体も壊していた

U子のことにはノータッチで

母が一人でいろんなことを切り盛りしていた  
母の欠席で父子だけになった面接室

U子「できた！」

父「なかなか描けなくてすみません」

置いたクレヨンでU子がもう一度手にした

そして 画用紙の隅に書いたのだ

父の姓名と自分のそれとを並べて：

とてもぎこちない父とU子の描画場面

父は絵が描けず困惑し

その父をU子はとても気遣つた

学校ではボスのU子が脇役になつて

父を支え共同作品を完成させた

父のもとで描くU子は心がわずかに踊るようで

何だか少し誇らしかった

父の子どもとして

### ある大学生への挑戦

あなたは喋らないつて聴いてますけど

そうなんですか

そうですか

うなずいてくれたからわかりやすいです  
もしかして  
私が喋らなくてもいいよって言うのと  
喋ってくれてもいいけどというか  
そりゃ喋ってくれたら嬉しいけどなんて  
私が思っていると聴こえてしまいますか  
そうですか  
それじゃあ  
喋ったらダメ  
喋りたくなくても口を押えて：  
っていうことにしましょうか  
そうですか  
よし それじゃあ  
それを私と会うときのルールにしましょう  
で どうするかというと：  
あなたはきつとこう思ってるんじゃないかと  
私が一生懸命考えて想像することを  
私が勝手に喋ることにしましょうか  
それで  
けっこう当たってたらうなずく  
当たってなかったら首を横に振る  
どっちでもなかったり よくわからなかったら  
首をかしげるなんてどうでしょう  
首を動かすのがしんどかったら  
○×△のカードを用意してもいいですけどね  
そうですか  
じゃあ 首を振って教えてください  
もしかして  
喋ったらダメだっていうのはラクだけど

ちよと奇妙だななんて気がしますかね  
そうですか  
いま首を少しかしげてくれましたよね  
オッケー  
喋らないってこと  
いまのあなたに とても  
大事なことになるんじゃないかと思っただけだから：  
ごめんなさいね  
まだあなたのことぜんぜん知らないのに：  
そうですか  
ちよつとピンとこないかな  
そうですか

### 穴太寺 (あなおじ)

大学から徒歩圏内の穴太寺  
古くてとても魅力的な寺  
秋風が少し冷たく感じるゼミの時間  
学生たちを連れて散歩にかけた  
本堂に入るにはお金が要る  
五百円は強要できないし行動は自由にした  
私は後ろを振り向かずに入場したが  
結局 後ろに続くものはいなかった

寺の売りのひとつは横たわった大仏さん  
自分の身体の具合の悪いところと  
大仏さんの同じところを撫でると  
よくなるという言い習わし

その頃すこし胃の調子が悪かったので  
大仏さんのお腹をさすって外に出た  
学生たちはやっと出てきたかという感じで  
退屈感を漂わせている

独り相撲のあとのぼつの悪さも加勢して  
大仏さんの話を学生たちに披露する

「禿げとるんは治らんやろうけど、  
大仏さんの頭を撫でてきたよ！」

「気持ちにはわからんではないけどな

この期に及んでまだ仏だのみかいな」

「先生 はやくもご利益あつたんちやう？  
三本ほど増えとるがな」

期待したのはそんなリアクションだった  
でも私から語りかけられた目の前の学生  
返答に困りながら眉間に皺をよせ憐れむように  
「先生 そんなに自分を卑下したらダメです」

これがギャグならその方向での理解と対応もあった  
でも そんなものではなかった  
周りの学生たちからの手助けもなく

私は「卑下」に言葉を封じられてしまった

冗談で返してくれる見込みのあったその学生  
結局は私の不徳の致すところ  
学生の眉間の皺は苦悩の象徴として今も浮かぶ  
私にとって穴太寺はそんな寺だ（どんな寺やねん！）

穴太寺：京都府亀岡市にある天台宗の寺院。

#### 四度（よたび）たじろぐ

あのなあ

お外から帰ってきて手を洗う

それから

オシッコいって手を洗う

やったら

二回手を洗わなあかんやろ

でもな

お外から帰ってきて

すぐにオシッコいったらな

手洗うの一回ですむやろ

そういうことや

飲食物の記憶の底 (六十五歳以上限定版)

エノケン(榎本健一)の歌だったっけ「♪【渡辺のジュースの素】ですもう一杯♪」。【ソーダの素】も何色かあった。先代の林家三平の「お餅も入ってベタベタと甘くてどうもすいません」は【おしるこの素】だったかな。【カルピス】は昔から今のままで、似たような【森永コーラス】や【ミルトン】もあった。【フルーツカルピス】は高級品でそんなにいっぱい飲んだ覚えはない。【ヤクルト】はもちろんなあつたし、【フルーツ牛乳】をはじめ飲んだときには世の中にこんなうまいもんが：と子どもながらに思った。一升瓶に入った飲むヨーグルトやオレンジジュースの濃縮液も出回っていて、お得だと言って買ってもらった。【マーブルチョコレート】や【パラソルチョコレート】、それにチューブに入った吸って食べる柔らかいチョコもあった。【ココアシガレット】という名の砂糖でできたタバコ、火を点けたら燃えずに焦げた。このあいだ駄菓子屋で見つけた。【エースコイン】は古銭をデザインしたビスケットで、歯の間に詰まった。【ABCビスケット】には青のりが振りかけてあって、【金魚あられ】も甘くておいしかった。いちごジャムやマーガリンが単純に挟まれたフラットな三角のパンも懐かしい。冷たいものでは【アイス饅頭】や【パイン】【爆弾キヤンデイ】：。夏になると魚屋さんが魚と一緒にアイスキャンデーを自転車で売りに来ていた。買ってもらって舐めたら魚の鱗が付いていた。小さい頃は鹿児島にいたので【サツマイモ】のふかしたやつはしょっちゅう。【サトウキビ】はとつても甘い繊維を噛んでカスを吐き捨てた。冷たい【トマト】や丸ごと

一本の【モロキュウ】も今から思えばご馳走。鹿児島限定だが【兵六餅】【ボンタンあめ】【かるかん】も貰い物や父のパチンコの景品でよく家にあつたが、子どもの口にはあまり合わなかった。【アク卷】や【ソマンコ(そばがき)】もたまにあつて、こういうのは好きだった。ご飯のおかずで浮かんでくるのは【アジ】の焼いたので、ホカホカに醬油をかけてよく食べた。他には【タラ】の干物。この干物と【木綿豆腐】の固い冷や奴は交代で、夏休みの昼ご飯に毎日と言つていいほど続いた。母がさばいた生の【サバ】の刺身にはたまに小骨があつたこともあつてちよつと敬遠。【ハラガワ(カツオの干物)】は強烈な匂いでクセがあり酔をかけて食べる。苦手だった。【カツオ節】はパック入りはまだなくて削つてよく食べた。その他にどんなおかずを食べていたかあまり思い出せない。丸美屋の【のりたま】は昔からあつたし【すき焼きふりかけ】もあつたが、ふりかけはあんまり好きじゃなかった。【卵かけご飯】はよく食べたが、今みたいに卵じやぶじやぶじやなくて卵の色が着く程度でご飯が多かつた。【即席ラーメン】は「マルダイ」の棒ラーメンばかりだつたが、新発売の「サンポー」(?)の袋入りラーメンは抜群にうまかつた。鹿児島での外食の思い出は多くない。山形屋裏の「味の一丁目」の【ラーメン】は大好物。大将が亡くなつてから味が変わったのを覚えてる。夏の暑い日の「扇屋」の【きんつば】と冷たい麦茶。たまらなかつた。【シロクマ】というかき氷は幼時の私には量が多すぎた。

コカコーラをはじめ飲んだのは少し長じて小3の頃だつた。瓶入りのシユワシユワに、「これがアメリカの味か!」と思つたのを覚えている。

⑦了 二〇二一年三月十五日

# 応援、母ちゃん！

## オンライン企画が産休育休を豊かにする

### ～育休イノベーションズとの出会い～

7

たまむら ふみ

玉村 文



#### 産休育休をどう過ごそうか。

ただいま産休育休中で子育てをして 2021 年度を過ごしています。こうした休みは 2

年前に第一子を出産したときも取得して いましたので、今回で 2 回目です。さて、2 回目の

産休育休はどのように過ごしているのかが 今回のテーマです。



遡ること2年前の産休育休は、妊娠前に資格取得のために講習を受けていたこともあって、受験を経験しました。初めての子育てで思ったように試験勉強は進みませんでしたが、夫や実母の協力もあってなんとか受験し合格することができました。

取り組んでみてわかったことがあります。試験勉強は、正解と不正解がはっきりしていて、受験はゴールが明確です。子育てとは対極にあるものだと感じました。記憶していれば、すぐに正解が出せる。それは心地よさすら感じるものでした。わたしにとっては、子育ての息抜きになっていました。その経験からは、わたしは子育てと両立できるものがある方が、心のバランスがとれることを実感しました。ただし、赤ちゃんの授乳がある期間は細切れ睡眠になるため、睡眠不足から頭がぼーっとして暗記にはハンデになることも実感していました。

もちろん、子ども連れで親同士が集まって交流できる、子ども支援センター（地域によって名称は異なります）には足を運んでいました。そこでは育児情報をシェアするだけでなく、同じような状況の方と話すだけでリフレッシュにもなります。わたしにとっては、自助グループへの参加のようなものでした。育休復帰後も交流が継続するママ友との出会いもありました。当事者同士の交流も、外すことはできない時間の使い方です。

以上のような一人目のときの経験から、今回の育休期間も子育てと両立をする「なにか」を探し始めました。産休前から、ネット等で「育休の過ごし方」と検索しては参考にできるものを探していました。検索してみると、①趣味、②家事や子育て、③

資格取得などキャリアアップ、④仕事復帰準備に分類できる取り組みが紹介されていました。いくつか参考にして、パン作りなどこれまで時間がなくて出来なかったことに挑戦しました。一方で、趣味にもなりキャリアにもつながるような包括的であり、短期的なゴールがありながらも長期的に身につく何かがあるといいなと、その出会いを探していました。

## オンライン企画が

### 産休育休を豊かにする。

ところで、この間のコロナ禍でオンラインを使った事業や企画が発展しています。講演会など受講者が受け身で視聴するものだけでなく、人と交流したり相談することも可能となりました。わたし自身も、産休前に職場でオンライン相談の仕組みを整え、相談者の方と何度かやりとりをさせてもらいました。対面とは異なりコミュニケーションが難しくなる面もありましたが、自宅からでも遠方でも気軽に相談することが可能となるなど利点も感じていました。

子育て支援の領域でも、助産師さんにオンラインで相談ができたり、ママ友と交流できるような企画が実施されています。そうした対人援助の仕事のなかにオンラインを活用した取り組みが一定の割合を占めてきたように思います。

オンラインは、子どもが小さいため家から出にくい状況にあったわたしにとっては、家から出ずに社会と接点を作ることができ

る非常に大きなツールです。わたしにとっては、「子どもが小さいから諦めよう」とこれまでならそう思うであろう講演会などへの参加が可能となったことが革命的でした。天候にも左右されず、物理的な距離も飛び越え、子育て中のわたしを含め多くの家から出にくい状況にある方々の社会との接点を作ってくれていると思います。

そのため、育休中は月に1回程度はオンライン企画に参加するようにしています。そのうちの一つで、「子育てとキャリア」がテーマの企画に参加した際に、講師のキャリアコンサルタントの方が、育休は自分をリニューアルするチャンスということをお伝えくださいました。その講師に紹介されたのが、おもちゃ会社ピープルが主催されている「育休イノベーションズ」というプロジェクトです。育休中の親同士が集まって、当事者目線で商品開発をするというのがこのプロジェクトの根幹です。育児をしている真っ最中の当事者だからこそその視点で、ものづくりによって解決を図るという試みに惹かれました。また、わたしはこれまで育休を「休み」として有効に活用すると考えていましたが、そうではなくて「育児中」ということを有効に活用する方法と出会えたと思いました。

## 育休イノベーションズとの出会い

育休イノベーションズとは、乳幼児向けの商品を企画開発するメーカーの株式会社ピープルが実施している事業で、育休中の親が集まって当事者目線で子育ての困った

ことを解決する商品を企画開発するプロジェクトです。2020年に始まったプロジェクトで、4月～9月、10月～3月という半年ごとのプロジェクトです。2020年に0期が起動し、2021年度4月～9月までが第1期のチームが活動していました。わたしは2021年の10月から第2期50名程度のメンバーの一員として活動をスタートしました。

このプロジェクトを立ち上げたのは社員のMさんで、ご自身も4児の母親です。4回の育休を取得し、育児中の「困ったことに解決策がないことはチャンスだ」と育児の経験から商品を企画開発されてきました。当事者視点で商品を企画開発され、その結果、「いたずら1歳やりたい放題シリーズ」や「お米のおもちゃ」など、今では広く知られることになった商品がピープルから誕生しています。こうした商品開発に、素人だけど渦中の当事者が参加することになります。企業プロモーションにもつながっているとMさんは言います。

わたしにとっては、ある課題に対してものづくりを通して解決を図るアプローチが新鮮でした。相談援助の仕事ベースでは、個人・関係性・環境の変容によって「困った」を解決・軽減させることに力を注いできました。しかし今回は、ものづくりで解決・軽減できる経験が積める。とはいえ、人間の営みのなかで活用するのですから、商品で負担が軽減するだけでなく、個人の感情や関係性も変わってくるのではないかなとワクワクしています。また企画開発する際に培われるだろう発想力は、相談援助の仕事にも良い影響を与えるのではないかと期待しています。

参加し始めてまだ1ヶ月ですが、4人~5人のチームでお互いの関心やアイデアを話し合っています。週に1回木曜日の午後全員がオンライン上に集まって全体会をし、進め方や今日の課題、宿題の確認、商品開発にかかわる考え方のレクチャーなどを受けます。後半はチームに別れてアイデアを話し合う。週に1回2時間のオンラインでの集まりのほか、チームLINEを使って、アイデアを話し合ったりします。LINEのノート機能、Googleのアンケート機能やスプレッドシートでの共有、ZOOMでの共有など、こんなに活用する方法があったのかと驚くほど、多機能で便利です。これまでの自分のアナログ度合いに落ち込むほどです。同じチームの企業で営業職をしているメンバーなどは、ITの活用スキルが高く、教えてもらうことばかりです。毎週、オンラインスキルの上達も含めて学びがたくさんあり充実しています。

余談ですが、第2期に参加している総勢50名ほどのメンバーは全員女性です。男性の参加者はいません。男性の育休取得者は年々増えてきて、2020年で12.7%と発表がありました。その12.7%の男性も、取得期間は5日未満が3割ほど、2週間未満が大半で比較的短期の育休です。育休イノベーションズは半年間のプロジェクト。半年間の参加ができる男性の育休取得者はいつごろ生まれるのでしょうか。日本の育休制度は他国と比較すると保障が手厚いと言われて

います。しかしながら、男性の取得率は低い状況です。わたしの夫も育休は一度も取得したことがありません。また改めて男性の育休をテーマに考えたいと思います。

## 育児中という

### 自分の当事者性をサービスに活かす

一人目のときの産休育休中は、「休み」をどのように活用するかという考え方でしたが、今回はそうではなくて「育児中」ということを有効に活用する機会になっています。

対人援助領域で働く人達も、「当事者」と自認する人たちもいます。当事者の視点を持つ人が良いサービスを提供できるかはわからないけれど、当事者だからこそその視点や意見は重要だと思っています。ワン・イシューを解決するために設立されたNPOの代表が、ご自身も同じような課題を背負い、ストーリーを語ることがあります。当事者がもつ「どうしてもこの課題を解決したい」という強い思いはパワーとなり、そのストーリーは他者への共感を呼びます。わたしも、そんな当事者性をサービスに活かす、に体験的に挑戦する半年間になりそうです。



## 篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ  
京都教育大美術科卒  
京都精華大学名誉教授  
(公社)日本漫画家協会参与  
FECO JAPAN 会長

## 不安定な磁場 その後

この作品は2016年の参議院選挙後に描いたものだ。現政権のダメさや問題点をいくら騒ぎ立てていても最終的には多くの国民は保守を選ぶのだ。という想いをバランスの悪い国会議事堂の姿にイメージして描いたのだった。あれから5年が経った。今年の衆院選の結果を見るとそのカタチはあまり変わっていないように見える。相変わらず政治に興味を持たない若者たちと頼りない野党のイメージも変わらない。近年、地球の磁場が変化してきて千年後には反転するということが言われているが、日本の政治を動かす力が反転するとしてもそれはまだまだ先のように思える。





## 外の世界と…

『書を捨てよ町に出よう』は  
1970年代の故・寺山修司氏  
の著作のフレーズだが、若い頃  
僕もこの言葉からエネルギーを  
もらったものだ。  
この2年間はコロナのせいで誰  
もが自宅生活が中心となり、町  
に出られない生活を強いられる  
日々が続いた。

私も加齢とともに小さな文字を  
追う事が苦痛になってきて『書』  
からは縁遠い生活になりもっぱ  
らパソコンやスマホの画面と向  
き合う事が多くなった。  
そこで出会うのは知らず知らず  
のうちに個々の嗜好に沿ってチ  
ヨイスされた玉石入り混じった  
膨大な情報である。  
ややもすると自分の目の前に見  
えるものだけがすべてであるよ

うな錯覚の中に陥ってしまう危  
険性をはらんでいる。  
コロナは人の身体を蝕みながら  
人の心も多くの人間関係も破壊  
していった。  
寺山氏が『存命ならきつと』ス  
マホを捨てよ町に出よう』と言  
うのではないかと思うのだが、  
一概にそれがベストと言いつれ  
ない危うさも感じる。



ビシッ！！

A-3



F-20号





## 迷彩

迷彩服は本来、周りの環境に適合させて自分の存在を隠すための戦闘服だ。

日本ではグリーン系の濁色を組み合わせたものが多く見られるが、あれは森の中仕様で、当然のことだが雪山や砂漠地帯では別の色合いとなる。

そう考えると東京の街中での迷彩服姿はやたら目立つわけで、この場合は自分をアピールしたい人が着ているのだと言える。

それは、実は一見平和に見えるごく普通の風景の中に、想像もつかないような狂気が目立たない姿をして潜んでいる事を教えている。

A-3

## ポタポタ

台所の水道の蛇口のパッキンが劣化して、ほんの少しだが水漏れをするようになり、夜中には静かな中で聞こえてくるポタポタ音が耳について耐えきれず新しい蛇口を買って来て交換した事がある。

一定の間隔を開けて落ち続ける水滴の音は古家の雨漏りも同じく決して心地良いものではないが、点滴のポタポタはちよつと違う。

幸いなことに私自身は今まで入院の経験も点滴の経験もないのだが、点滴のその一滴一滴が命を守るエネルギーを体内に送り込んでいるのだということを考えるだけで、病床にいる者の心を落ち着けてくれるようだ。それは眺めている者の目の中でも、ポタポタと落ちる音を感じさせ、眠れない時の羊の数を数えるのに似ているようにも見える。

F-50号



## 雨漏り





F-30号

## 招き大仏

大仏と招き猫のツーショットである。

干支の十二支から外されてしまった猫との相性はあまり良く無いのかもしれない。

人が幸運や金運を追い求める意識はまさに限らない人間の欲望その物であり、あらゆる煩惱からの解脱を目指す仏教の教えとは相反するようにも思うのだが、二つを並べてみると面白い情景になった

勿論、識者の目からすれば、単に手招きするだけの猫とは異なつて、仏像の手の形やその表現（印相）には様々な意味あいがあり、悪魔を追い払つたり迷いを立ち切つたりなど多様な表現がある。

それでもお寺さんは、忙繁時は猫の手を借りたい時もあるだろうし、参拝者を沢山招く猫も置きたいのでは…と、漫画家の頭には浮ぶのである。



## キャリアと文化の心理学(6)

### へき地小規模校で学ぶ意義について考える

:「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに

土元哲平

筆者（以下、私）は2021年10月から11月にかけて、鹿児島県の硫黄島に3週間ほど滞在し、キャリア教育に関する研究（フィールドワーク）を行った<sup>1</sup>。本稿では、私が硫黄島の調査校（A 学園とする）においてフィールドワークを実施するまでの過程と、A 学園でのフィールドワークの一端を紹介する。その上で、へき地小規模校で学ぶ意義について、「オートエスノグラフィックな発達」の概念を手がかりに考えてみたい。

#### はじめに

私が初めて三島村硫黄島を訪れたのは、5年前の2016年であった。その当時、鹿児島大学大学院教育学研究科で学んでいた私は、自分の出身である鹿児島県で理科教師になることを目指していた。鹿児島は離島が多い地域であり、島の生活について理解を深めたいと考え、離島（硫黄島）での実習を含む講義「島嶼学概論Ⅰ（三島村硫黄島講義）」を受講した。この講義は、2泊3日の日程で、硫黄島の見学やジャンベ体験などを通して、ジオパークや硫黄島の文化・歴史について学ぶという趣旨の講義であった。スケジュールの関係で、当時はA 学園に伺うことはできなかったが、島の自然（特に、硫黄島の海や硫黄岳）に圧倒されたことを記憶している（図1,2）。



図1 硫黄岳



図2 硫黄島のオレンジ色の海

それから5年後、再び硫黄島を訪れることができた。その理由は、博士学位取得後の研究課題として、「へき地（離島・山間部）におけるキャリア教育」の研究を始めたからであった。この研究の着想に至ったのは、私自身が、「自分の経験を活かし、どのようにキャリア教育を発展させることができるのか」を考える中で、自らが幼少期に経験してきた、離島や山間部における教育とキャリア教育とを結びつけられないかと考えたからである。へき地における生活は、交通の便が悪い、資源が少ない、何もない…など、

<sup>1</sup> フィールドワークは、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会からの承認（衣笠-人-2021-7）を得た上で、研究参加者（教師、児童、保護者）へのインフォームドコンセントを得て実施した。

ネガティブな印象で語られることがある。しかし、一方で、そうした地域には、都市部にはない良さがあると考えていた。自分の中で、「なにかあるのだけれど、ことばにできない」もどかしさを感じていた。そして、この気づきを言語化できれば、キャリア教育を進展させることができるのではないかという期待も抱いていた。

### 子どもの「オートエスノグラフィックな発達」と小規模性

A 学園は、前期課程（小学校）と後期課程（中学校）からなる全校生徒 22 名の小規模校であった。A 学園は小規模であるために、他の学年と接したり共に学んだりすることが多いという特徴があった。例えば、小学 1 年生から中学 3 年生まで、すべての学年が 1 つの校舎（図 3）で学んでおり、朝活動の時間に全学年の児童生徒と一緒に校庭を走ったり、給食時間、昼休み、授業時間などを他学年の児童・生徒と過ごすことが当たり前の状況であった。さらに、A 学園では、海外から移住した親を持つ子どもや、山村留学の制度によって都市部から移住した子どもといった多様な背景を持つ子どもが学んでいた。紙面の都合上詳しい言及は避けるが、こうした環境において、先生方は、子ども一人ひとりの文脈や、興味、考え方といった発達に応じて、助言・指導をしているという印象を受けた。



図 3 A 学園の校庭と校舎

さて、フィールドワークを終えた今、へき地小規模校で学ぶことの意義について考えてみたい。以下では、A 学園が有している「小規模性」（例えば、1 クラスが 10 名以内）という特徴に限定して考察したい。A 学園におけるフィールドワークを通して感じたのは、そこが子どもの「オートエスノグラフィックな発達」を促す場になっているのではないかと、という点である。「オートエスノグラフィックな発達」という語は、第 4 回連載（土元, 2021）において用いた語であるが、これは自分自身や他者の文化を理解し、そうした文化に自分がどう関わるのかについて理解することを指す。オートエスノグラフィックな発達は、特にキャリア教育にとって重要な「自己・他者理解」や「人間関係形成能力」に関わっている。

小学生の時期には、心理的な問題への対処法が分からなかったり、自分や他人のことがうまく理解できなかったりすることが多々あると思われる。このような時期において、自己や他者との関係性を調整したり、他者を丁寧に理解したりすることが必要になってくる。その時、クラス内に多くの同級生がいれば（大規模校など）、仲が悪くなった相手と距離を取ったり、他の友人グループに移動したりというように、問題に直接向き合うことを避けることができる。このように、他者との距離を取ることも一つの解決策

ではあるが、それは問題を放置し、人間関係についての内省を放棄しているだけの場合もあるだろう。一方で、A 学園のような小規模校においては、そもそも同学年の子どもが少なかったり、学校全体の子ども数も多くなかったりするため、他者との関係が切り離せない中で人間関係を形成していく必要性が見出された。このことは、自己・他者理解に向き合う必然性を生み、オートエスノグラフィックな発達にとって重要な契機となると考えられる。この点に、キャリア教育という視点から見た、へき地小規模校で学ぶことの意義の一つが見いだされる。

---

## おわりに

以上、本稿では A 学園におけるフィールドワークの一端を紹介し、「オートエスノグラフィックな発達」の概念を手がかりに、小規模校の一つの可能性を提示した。学校の規模に関わらず、子ども達一人ひとりに自己や他者と向き合う契機を創り出すことは、キャリア教育にとって重要である。このようなオートエスノグラフィックな発達が学校生活において具体的にはどのように見られるのか、どのようにそれを促進できるのか、といった点については、今後の課題としたい。

---

## 引用文献

土元哲平. (2021). 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達(キャリアと文化の心理学(4)). 対人援助学マガジン. 対人援助学会. 45. pp.318-322. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf>

---

## 謝辞

A 学園の先生方、子ども達に感謝いたします。本稿で扱ったフィールドワーク調査は、立命館大学 研究推進プログラム（科研費獲得推進型）の助成を受け実施したものです。

---

## バックナンバー

- 土元哲平. (2021). 職業指導からキャリア教育へ(キャリアと文化の心理学(5)). 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf>
- 土元哲平. (2021). 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達(キャリアと文化の心理学(4)). 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf>
- 土元哲平. (2021). オートエスノグラフィックの特徴と主流の方法論(キャリアと文化の心理学(3)). 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf>
- 土元哲平. (2020). 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィック(キャリアと文化の心理学(2)). 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf>
- 土元哲平・サトウタツヤ. (2020). 教育・発達心理学とキャリア教育の接合(キャリアと文化の心理学(1)). 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf>



---

---

## 「幾度となく会い、語りあうことの意味」

### (第5回)

退院支援研究会 本間 毅

---

---

#### 【はじめに】

前回に引き続いて、退院支援には「物語（ナラティブ）を尊重する姿勢」が求められるというお話です。物語を尊重する姿勢とは、「その人の体験を否定しない姿勢」と言い換えてもよいでしょう。

この頃、さまざまな分野で「共感」や「相手の立場に立つこと」が大切である<sup>1)</sup>と言われるようになりました。このことは、「物語（ナラティブ）を尊重する姿勢」に重なる部分が多いと私は感じています。収束の目処が立たないコロナ禍の中、東京 2020 大会は予定通り開催されました。強行する理由や結果が予想できないことを、国を挙げて闇雲に押し進める危うさに肝を冷やした人は多かったと思います。また、社会の基盤は経済だけではなく、物語や共感といった人間同士のコミュニケーションが必要欠くべからざるものであると実感している人も少なくないでしょう。前回紹介したマラソン選手の円谷幸吉氏が見守ってくれたお陰か、危惧していた新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は起こらず安心しましたが、最近の感染者数の減少は東京 2020 大会を開催したお陰とは到底思えません。大会の前後に、病床数の不足による「医療逼迫」から「崩壊」が間近に迫り、常に満床状態を保ちながら入退院の稼働ペースを維持しないと、民間はおろか官公立の医療機関でさえ経営が成り立たず、人員確保が困難な環境で急場しのぎに病床数を増やすことには無理がある現状について多くの識者が警鐘を鳴らしました。看護師の人数だけをとっても、普段は患者さん 13～15 人に対し常勤看護師 1 名が配置されている回復期関連病棟を、患者さん 7 人に対し 1 名の看護師が配置される急性期病棟に移行するのも大変なのに、人工呼吸器や人工心肺装置 ECMO を稼働できる集中治療室に移行するのは至難の業です。また誰が言い始めたのか分かりませんが、「野戦病院」とは入院する患者さんにも治療にあたるスタッフにも失礼な呼び名だと思います。病床の機能分化と規模縮小を目指す「地域医療構想」を根本的に見直し、少なくともコロナ禍が終息するまで留保する動きは今も見られておらず、厚労省内部で「コロナ対策」と「地域医療構想」ならびに「診療報酬改訂」の担当者が足並みを揃えようとしているようには思えない 2 年間でした。

話しは変わりますが、2021 年 5 月に日本でも公開された映画『ファーザー』<sup>2)</sup> は、名優

アンソニー・ホプキンスが演じる、家族への愛と誇りを失わない認知症の男性アンソニーの視点で描かれた作品です。アカデミー賞に複数の部門でノミネートされたのは、俳優達の名演技と錯綜する舞台（現実と記憶の中の自宅や娘さんの家、脇役達の性格設定と台詞、毎日ローストされるチキン etc.）は勿論のこと、目まぐるしく変わる周囲との関わりと、「尻切れトンボ」に見えるラストシーンのリアリティに負うところが大だと私は感じました。これまで私は、入退院全体をひとつの物語と仮定すると、疾病の急性期は「物語」の発端（プロローグ）やミステリー小説で見出しの裏に書き出される登場人物のリスト、回復期以降の退院支援が本編（メイン・ストーリー）で、退院後の自宅や介護施設での生活が結末（エピローグ）に相当すると考えていました。しかしこの映画を見てから、むしろ燕や蝶の飛翔のように、あっという間に思わぬ大団円へ向うエピローグこそが重要なのではと考えるようになりました。エピローグには、「物語」の始まりから本編、終わりまでの全てが含まれるような気がするからです。

## 【寿限無】

落語に、生まれた子供の無事な成長を願った親が、近所の和尚さんに教えてもらった縁起の良さそうな言葉を全部繋げて名前を付けたら、名前が長過ぎて子供の喧嘩を仲裁しているうちにタンコブが引っ込んでしまったという噺、『寿限無』があります。クライアントの「物語」を尊重し、（共感し相手の立場に立って）新たな物語を紡ぎ出すのが連携や協働の本来あるべき姿ですが、医療の現場は理想とほど遠い面が見られます。

例えばリハビリテーションに関するインフォームド・コンセントでは、「日常生活動作は ADL Activity of daily living と言いますが、その評価法のひとつである FIM Functional independence measure 機能的自立度評価法<sup>3)</sup>には、運動機能 13 項目と社会的認知およびコミュニケーション能力からなる認知機能 5 項目（認知機能は**動作**なのかなどとツッコマナイように）があります。各項目を全介助 1 点～完全自立 7 点で採点した患者さんの得点（満点  $18 \times 7 = 126$  点）と、それがリハビリテーションの前後でどれくらい変化したかがこの用紙に記載されています」というような説明がなされます。各項目をせめて 18 座標上の得点を結ぶレーダー・チャートにすれば、おぼろげながら患者さんの全体像とリハビリテーション前後の変化を把握できます。しかし、多くの病院で採用されている「リハビリテーション実施計画書」は、シームレスな医療・介護を目指して厚労省が推奨する介護報酬の「同書式<sup>4)</sup>を参考にしたフォーマットが用いられ、蟻が這ったような小さな字で「移乗」と「移動」などの煩瑣な言葉が連なります。定められた期限内にこの用紙を用いて説明を行い、クライアントに署名・押印をもらうことで、初めてリハビリテーションに関する説明がなされたと見做されるわけです。確かにレセコン（診療・介護報酬明細書作成用のコンピュータ・システム）で報酬算定をする手続きは容易になりますが、金融商品の約款や、通販

の「お客様情報の取り扱いの説明と同意」と同じく、顧客に内容を理解してもらい、予測可能な結果を分かりやすく提示する責任が希薄だと考えるのは私だけではないでしょう。そして今日も、日本中のカンファレンスやインフォームド・コンセントで「寿限無、寿限無、五劫のすりきれ…」が繰り返されています。

近年、「医師の働き方改革」と「チーム医療醸成」のため、医師から「特定研修を終了した看護師」へのタスク・シフト（気管内チューブや人工呼吸器の調整、抗不安薬の臨時処方など）や、看護師から他の職種（薬剤師、検査技師など）へのタスク・シフトが進んでいます。しかし、我々世代の医師は、医療の他分野の方達と席を並べて学ぶ機会に恵まれなかったにも関わらず、医療全般にわたり「知らないことやできないことがあってはならない」とされ、建前上は全ての医療行為は「医師の指示の下に行なう」と言われてきました。リハビリテーション医の中には、リハビリテーション科を標榜する医師はオールラウンダーで、自分たちは他科の医師より多くの人を救うことができ、分けても「女性医師は優しくてお話し好き」なのでリハビリテーション医にうってつけである、と公言する人がいます。この発言は、他科の医療従事者への敬意が感じられないのは言うまでもなく、いろいろな意味で現代的なセンスから乖離した多くの問題を孕んでいます。仮に専門医の一团が暗闇で象に出くわしたら、眼科医は「なんて愛くるしい眼なのでしょう」、耳鼻科医は「デカイ耳鼻科医を連れてこい」、整形外科医は「この骨は太くて丈夫で理想的」、泌尿器科医は「何とご立派な」と感嘆するのが関の山で、これらの評価を見せられて喜んで署名・押印する象はいないと思います。自分が知ることができるのは、クライアントの定量化できる一部分に過ぎないという自戒が無い医師ほど恐ろしい存在はありません。

幸いにも私は、リハビリテーションを含む退院支援の成就させるためには、支援者がクライアントに教えを請い、共に円陣を組み関係性の基盤を造るべきだと気付きました。その時には当然タンコブは引っ込んでいましたが。

## 【その人の「存在全体」を尊重する姿勢】

ヴァイスゼッカーの「生きる対象を扱う際には、相互主体的に生命と関わり合う必要がある」<sup>5)</sup>という言葉や、「患者・家族・治療者・支援者という立場はいくらでも変わりうるので、互いの人格や価値観を含むその人の『存在全体』を尊重した方がよい」と私は理解しています。「存在全体」には、「生活世界」や「物語」も含まれます。1980年代なかばから認知症高齢者の受け入れが特別養護老人ホーム等で始まり、1989年の社会福祉士と介護福祉士の国家資格化、ならびに2000年の介護保険制度発足とその後の介護支援専門員たちの活躍で、「福祉」の視点は社会に広く浸透しはじめています。さらに近年は認知症高齢者だけでなく、心身に障害がある人やさまざまな理由で生活に困難を抱えている人を、社会全体で支えようという機運が少しずつ高まってきました。医療界はその流れに乗り遅れた

ようで、EBM（科学的根拠に基づく医療）が日本を席卷し始めた頃と時期を同じくして、医療の質の下支えになる「構造」や「過程」より、「結果 ≡ 経済的な成果」が優先されるようになりました。日数や人員の制限（～日以内に～を呼んで）を守りながら、退院調整や退院支援を取りまとめる、まともな相談員や退院調整看護師達が慢性的な疲弊状態に陥るのは必然です。その疲弊した支援者達が次世代を指導する先のことを想像して下さい。「疲弊」も複合的な「知覚」のひとつと考えるならば、ヴァイスゼッカーが想定した「知覚」によって稼働する「+αの円環構造（ゲシュタルトクライス）」は、軸を傾けても回転を続ける「地球ゴマ」のように、様々な領域に影を落とす可能性があります。「疲弊の連鎖」も困りますが、疲弊により「質が低下した支援」が「本来の支援」と誤解されて、他の分野の人達に影響を及ぼすことだけは避けたいものです。「そうは言ってもオマンマを食っていかなきゃ」と簡単に議論を放棄せず、支援に関わる協働の「ほどよい到達点」<sup>6)</sup> について、知性と感性の緊張を保ちつつ皆で検討すべきです。

## 【ほどよい医療】

「ほどよい到達点」と言えば、科学哲学者の村上陽一郎氏は著書『死ねない時代の哲学』の中で、「人が適切なタイミングで死ねなくなった理由」として、「終末期に行なわれる高度な医療は延命に有効で、医療機関には高額な診療報酬が保証され、可能と考えられる医療措置を施さなかった時の責任を回避できる」<sup>7)</sup>（著者要約）と3つの要件をあげています。村上氏の言葉を現場に身を置く私なりに翻訳しますと、「医療において死は敗北であり、終末期といえども死を先に延ばすことが肝心で、蘇生や延命処置に対する高額な報酬にはタイミングの適否は問われず、ガイドラインやエビデンス・ブックを片手に迫り来る司法や弁護士への備えも忘れてはならない」という身も蓋もない話しになります。私自身も、「これだけ医療が進歩した時代なのに、健康に誰よりも気をつけて百歳近くまで長生きした母が死ぬわけ無いじゃないですか」とご家族から詰め寄られたことがあります。生命の終焉に関わることは、患者さんやご家族には「理解できない」のでは無く、「俄には受け入れ難い」のは分かります。でも、何事にも「ほどよさ」というものがあるはずで、終末期の迎え方についても、万人が腑に落ちるようになるためには、専門用語や略語を連ねた『寿限無』を繰り返すより、相手の立場に立って（医師はよく「患者さんの身になって」と言ったり言われたりしますが、村上陽一郎氏は、「医師の身になって」含蓄が深い表現をされました）互いの物語に耳を傾け、それでも自分を見失わずに「他者の靴を履くが如く共感する」<sup>8)</sup> ことを、まず医療の現場にいる我々が実践すべきです。

## 【多職種連携のキーワードは「その訳」】

医療者は、患者さんの入院前の生活から垣間見える医療（例；飲酒・喫煙・運動などの習慣や服薬管理など）や介護（生活環境・福祉制度の活用状況や家族の支援体制など）の問題点に着目し、標準治療計画クリティカルパスを参照しながら対策に着手します。これはいわゆる「退院調整」で、地域の医療・介護資源を有効活用する上でも重要なプロセスです。病床の有効活用は、地域の救急医療の存続を第一に唱えていた時代より、コロナ禍になり医療崩壊を来さないための重要な課題になりました。退院調整の結果である「在院日数」や「在宅復帰率」の変化は統計的に検証が可能ですが、自治医科大学のMSW小島好子氏は、救命センターに搬送されてくる患者さんを対象にロジスティック回帰分析を駆使し、「不慮の事故、独居、精神疾患、家庭内暴力や虐待、自殺企図は援助のニーズが高い社会的な高リスク（SHR Social high risk）である」<sup>9)</sup>と結論づけました。このSHRはクライアントが自発的に語りにくいどころか、ベテランのMSWでもはぐらかされ隠蔽されることが多い話題です。小島氏がどのようにしてクライアントに研究の目的を伝え、同意を得た上で情報収集をされたのか私は非常に興味を憶えました。そして小島さんの眼差しはいつも澄んでいるのだろうなとも。先入観や希望的観測で濁った心では、何も見えず学ぶことができません。小島氏の澄みきった瞳には、一条の光のように真理へと通じる径がつながっていたのでしょ

う。退院を目前に控えたクライアントの情報を見直していると、「入院前から病状が重く、手厚い介護を要する患者さんのサービスを、何故この程度に留めておいたのか」気にかかることがあります。確認してみると「介護保険の自己負担分を抑えるため」、「家族の都合と患者さんの思いが一致せず」、「そもそも契約の内容を見直してくれる家族がいなかった」など、様々な「その訳」が明らかになります。多くの入院は有無を言わずどころか、重症者になればご自分が入院にいることさえ気付かないことがあり、治療途上の患者さんや混乱が続くご家族は、退院したその日からの生活を具体的に想像する余裕が無いことも珍しくありません。「その訳」を、思い込みに気をつけながら多方面から検討することは、クライアントに安心して退院を迎えてもらうための大切な備えです。多職種連携や協働における現場の悩みと実態を可視化する、松下博宣氏らの「MACE（ミッション・アコモデーション・コラボレーション・エンパワーメント）サイクル」<sup>10)</sup>の理論は、目的追求型のPDCAサイクルのような「やらされ感や疲弊」を避け、「対話と相互承認」を重視しようとする新たな目的探索型の考えです。私には松下氏が掲げた「実のないカンファレンス」というキーワードがとても気になりました。

## 【回復期の集中的なリハビリテーションの意味】



「脳血管障害」や、高齢者に多い「脊椎や骨盤・大腿骨近位部骨折」の患者さんを主な対象疾患とし、急性期を脱した時点で転入する「回復期リハビリテーション病棟」では、毎日3時間のリハビリテーションを365日休みなく行なうことが推奨されています。そして実施したリハビリテーションの診療報酬は、1日3時間まで出来高払いで包括分の入院基本料に上乗せして算定ができます。「この病棟で行なわれているのは個別性・専門性が高いリハビリテーションなので、医療機関側にも努力に見合った報酬を支払います」という「Pay for performance」の考え方が、そこには適応されています。高齢の患者さん達に、「休みなく毎日3時間のリハビリテーション」と聞いて驚いた方も多いと思いますが、日本福祉大学の近藤克則氏は、「回復期リハビリテーションに関する多方面の科学的な根拠により、リハビリテーションの強度や量を増やすことで神経・筋レベルからADL、在宅復帰率、うつ状態などの心理社会的側面まで回復効果が拡大し、1日3時間でも不十分なくらいである」<sup>11)</sup>と述べています。ここで私が強調したいのは、この集中的なリハビリテーションには強度や量以外に、ある種の「場がもたらすメリット」があるという点です。リハビリテーションには患者さんにとって心身共に大変な努力が求められますが、周囲の患者さん達も仲間意識を持って熱心にリハビリテーションに励み、回復を少しでも実感できたときにはスタッフが手を取り喜びを分かちあう。そのような環境に身を置けば、苦しきだけでなくやる気も出てくるでしょう。そして、たとえ何らかの障害が残っても、生活復帰への具体的な手段について、一緒に悩み具体的な解決策を提示してくれる相談員や介護福祉士、さらに同じ疾患の仲間がいれば、クライアントの疎外感は少なからず解消されるでしょう。発症後の抑うつ状態や心理的な易疲労性に配慮しながら、病気や怪我で始まった新たな物語を皆で紡ぎ出す作業には、数字では計り知れない効果があると、根っから悲観論者の私でさえ楽観的に考えます。

## 【退院支援の始め方、終え方】

医療従事者は、患者さんの疾病がその人にとっては、ある種のトラウマやスティグマ<sup>12)</sup>になりうることを忘れてはならないと思います。疾病により仕事や学業の中断を余儀なくされれば、それまで築いてきた「アイデンティティ（自己同一性）」はゆらぎ、健康なときは「在って当たり前」と認識していた家族の絆や社会での役割などを喪失しないか不安は募ります。物語を尊重する退院支援の根幹をなすのが、そういう不安に陥っている方達に対し、何をどれだけ手伝ったらよいか知ろうとする態度に他なりません。「退院調整」と「退院支援」の違いは、レヴィ=ストロース流に言えば、最近の歴史（この度の疾病）と古代からの歴史（これまでの人生）における、「情報の詳細さ」と「説明的可知性」<sup>13)</sup>（説得力）のいずれに力点を置くかに関わっていると思います。著者短信で私が述べた、「健康管理に無頓着な還暦を超えた男性が、高齢者の名誉に関わるストレスが重なるうちに、血圧

が上がり高脂血症になっていた」という物語がよい例です。血圧や血清脂質のデータの詳細な記述より、その人の生活の過ごし方や性格傾向のほうが「何故、疾病が発生したか」ということを知る有効な手掛かりになる場合があります。

援助や支援は人口に膾炙し、クライアント不在のまま手続きが先行するようになると本質を見失われかねない、「助け合い（一方的に可哀想だと思うのではなく、いつかいろいろな形で自分にもお返しがある；互酬性）」が形になったようなものです。その成果を知る必要があれば、クライアントから無理の無い形（目隠しシールが貼れる往復葉書で幾つかの質問に答えてもらい備考欄を追加する）で、退院後の生活とざっくばらんな感想を教えてもらうのが「ほどよい情報収集」だと思います。そして周辺からもれ聞こえる「風の便り」にも耳を傾け、医療・介護上の事実の記載だけでなく、支援者の感傷は無理に捨て去らず、適切な言葉が見つければ書き記す。さらに十分に説明した上で、クライアントの同意を得て事例検討を行なえば、支援は本当の意味でエピローグを迎えることができます。物語を尊重する退院支援はそれ自体が物語であり、その物語の終え方は融通無碍で良いのだと、アンソニーがあなたのクライアントなら認めてくれるはずです、多分。

（後編終了）

## 【参考文献とデータ】

1. ブレイディみかこ（2020）：誰かの靴を履いてみること『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』．新潮社, pp71-85
2. 『ファーザー』（2020）：主演アンソニー・ホプキンス 監督フローリアン・ゼロール 配給ショウゲート 英・仏
3. 芳賀信彦 公益社団法人日本リハビリテーション医学会監修（2021）：「リハビリテーション診断における評価法」．『リハビリテーション医学・医療コアテキスト』．医学書院, pp51-57
4. 厚生労働省（2021）：「リハビリテーション実施計画書」．令和3年度介護報酬改定について．（mhlw.go.jp）
5. ヴィクトール・フォン・ヴァイスゼッカー著 木村敏・濱中淑彦訳（2017）：『ゲシュタルトクライス』．みすず書房, p3, pp221-223
6. 本間毅（2021）：『患者と医療者の退院支援実践ノート』．遠見書房, pp92-94
7. 村上陽一郎（2020）：医療資源・経済と安楽死『死ねない時代の哲学』．

文春新書, pp174-177

8. ブレイディみかこ (2021): 『他者の靴を履く アナーキック・エンパシーの勧め』. 文芸春秋, p242-245
9. 小島好子ら (2014): 救命救急センターにおける医療ソーシャルワーカーが介入する患者の特性と退院支援. 『日本臨救医誌 (JJSEM)』, vol 17, pp395-402
10. 松下博宣 (2021): 現場の悩みから出発する多職種連携のニュートレンド. 『地域連携 入退院と在宅支援』. vol14 No4, 日総研出版, pp2-8
11. 近藤克則 (2004): 訓練量とリハビリテーション効果. 『日本リハビリテーション医学会誌』. 日本リハビリテーション医学会, pp849-853
12. 杉本正毅 (2008): 医学的な観点と臨床心理学的観点の両立をめざして. 『Q&A でわかる肥満と糖尿病』 vol17, no3, pp449-451
13. 田島節夫 (2011): 歴史と構造. 『読解レヴィ=ストロース 出口顯編著』. 青弓社, pp83-100

# この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動をふりかえって～

河野暁子

Eさん、お元気でしょうか。パレスチナでは、そろそろオリーブの収穫が終わる頃ですね。今年のオリーブはどんなで良かったでしょう。パレスチナのオリーブは質が良く、搾りたてのオリーブ油は格別ですよ。奥さんやお子さんたちは、お元気でしょうか。あの頃小さかったお子さんも、ずいぶん大きくなっていることでしょう。

10数年前、私は国境なき医師団の心理士として、パレスチナで、イスラエル－パレスチナ紛争による暴力被害者とお会いしていました。国境なき医師団の事務所には、心理ケアを提供するための相談室がありましたが、パレスチナの住民にとって、私たちの事務所を訪ねるのはとても大変なことでした。イスラエル軍による検問所があちこちにあり、パレスチナ人の移動を困難にさせていました。さいわい、国際的な支援団体の車は検問所を通過しやすかったため、私たちが住民の家を訪ねるようにしていました。パレスチナの小さな村々は点在していて、おひとりを訪ねるのに、けっこうな時間がかかることもあります。Eさんの村も中心市街地から離れていました。移動の車窓から見えるオリーブ畑やロバの姿は、紛争とはかけ離れたのどかなものでした。そんな風景が続く中、パレスチナの土地を分断するように、イスラエル政府による壁やフェンスが建設されているのを見て、じわじわと土地が奪われていく怖さを感じました。



オリーブ畑



林の中のロバ



土地を分断するフェンス

Eさん、私はあなたに、ご家族からの紹介で会うことになりました。数ヶ月前、イスラエルで労働許可証がないまま働いていたことで逮捕されたあなたは、勾留が解けて自宅に戻った後、いつも苛立ち、怒りっぽく、眠れなくなっているとのことでした。初めてあなたと会う時、果たして私と会ってくれるだろうか、私は少し緊張していたのを思い出します。Eさん、あなたも私が初めて訪問した時、警戒していたのではないのでしょうか。

まず私は、暴力被害に遭うとさまざまな心理的症状が出やすいこと、国境なき医師団では心理ケアを提供していること、場合によってはチームの医師やソーシャルワーカーと連携していることなどを伝えました。私の話をひと通り聞いた後、あなたは「心理ケアを受けたい」と、語り始めましたね。「10年近く前、道を歩いていたら、いきなりイスラエル兵に撃たれ、重傷を負った」と、私に傷跡を見せました。重い障害が残り、今でもイスラエルの病院で治療が必要とのことでした。その事件から数年が経ち、分断壁の近くを歩いていたところ、再びイスラエル兵に撃たれてしまいました。本当にひどい事件ですね。

あなたは、「事件のことは忘れたことはないが、それよりも、逮捕されたことでイスラエルへ入れなくなり、治療が受けられない。仕事もなくなり、保険にも入っていないからパレスチナの病院にも行けない。裁判で有罪になれば、刑務所に入れられてしまう。あれこれ考えてしまい、まったく眠れなくなりました。家族にもイライラして当たってしまう」と、語りました。

Eさんには約2カ月の間に4回ほど会いましたね。あまりに心配事で頭がいっぱいになっていたあなたに、私は「『これをやると気持ちが落ち着く』というものはないのでしょうか？」と、尋ねました。あなたは、「そういえば…」と、昔からの友人と話すのが楽しいとか、生後数ヶ月の子どもをあやすのが楽しいと思い出し、お子さんを抱いて見せてくれました。とても愛らしいお子さんでしたね。それから、国境なき医師団のパレスチナ人医師とソーシャルワーカーが連携し、あなたはパレスチナで医療が受けられるようになりました。

いつの間にかあなたは、昼間は友人と会い、夜はぐっすり眠るようになりましたね。夜泣きをする子どもに起こされても、それは全然苦にならず、家族と過ごす時間が楽しいとのことでした。「なんでよくなったのかわからない。状況は変わっていないのに」と不思議がっていました。そして、「また兄弟がイスラエルに逮捕された。でもそんなに気にしていない。新たな事件が起きても、そこで立ち止まっただけでいい感じ」と、力強さも見せていました。いつも家族の誰かがイスラエル当局に逮捕され、刑務所を出たり入ったりで全員が揃うことはなく、「これが私の人生だ」と微笑んでいました。最後にお会いした時は、庭にたくさんのイスを並べ、親戚の結婚式の準備で忙しくしていました。私のことも招待してくれましたね。

Eさん、あなたのことを思い出すと、人はどのような状況に置かれても、人生の歩みを止めることはないのだと感じます。パレスチナでは、生まれた時から紛争状態で、そこで人生を終えていった



方々も大勢おられることでしょう。あなたは暴力にさらされながらも、友人と遊んだり、結婚を祝ったり、子どもをあやしたりして、人生を喜ぶことも忘れていませんでした。そのような行為を自ら選択することは、あなた自身をさらにエンパワーしたように感じますし、暴力に対するひとつの抵抗のようにも感じます。

イスラエル－パレスチナ紛争は、いつになったら終わるのでしょうか。どうすれば終わることができるのでしょうか。平和な世界を築くために、私にできることはなんなのでしょうか。いつか、あなたと語り合える日が来ることを、切に願っています。

\*個人が特定されないよう、Eさんについては省略、改変してあります。

# 川下の風景④

## ～人生は川の流れるように～

米津 達也

### 【意図と現実】

先日新聞で、新型コロナウイルス感染症の影響で一斉休校になり、解除後に学校に行けなくなった、という子どもの体験談を目にした。特に原因なんてない、まさか自分が学校に行けなくなるとは思ってもみなかった、という言葉は私にも身近な思いとして聞こえた。

私の娘は苦勞してその高校に入った。学力的には危ういが、中学校から推薦をもらい、彼女なりに努力して合格をもらった。高校に行ったら将来の為に英語を勉強したい、そんな希望を多く語り、順風満帆に高校生活がスタートするかに思えた。そこに新型コロナウイルスに伴う休校措置。卒業式も、入学式も、通常の授業すら開けない状況。約二か月の休校期間を経て、ようやく短縮授業から開始。あっという間に夏休みが来た。彼女の異変はいつからだったのか。夏休み明けから顕著に症状が現れた。朝になると腹痛でトイレから出ることも出来ない。週末は大丈夫でも、月曜日になると食事もまともに摂れない。そして、進級に必要な単位を取得できず、学校からは退学か転学の選択肢を勧められた。この間にも幾度か学校とのやり取りもあり、彼女なりにギリギリのラインで踏ん張ってきた。おそらく、それは親の期待に応えようとする行動だった、と思うと申し訳ない。彼女自身も「どうして自分は学校に行けないのか」と悩んでいたのだろうか。学校からの最終結果が出た日、娘と二人で泣いた。

人生は何が起こるか分からない。そして、それは誰のせいでもないことも多い。彼女の人生は割に順風満帆だと思っていた。それを願ってもいたが、そうならなかったことの現実の口惜しさもあった。しかし、今思えば、そんな大したことでもない。彼女は自分で選んだ通信高校に転学し、昼から夜にかけてアルバイトをしている。好きじゃない勉強を続けるより、バイト先で学ぶことが多いような気もする。

「意図と現実」これは、先日、草津で開催されている団士郎さんの家族療法研究会で言われた言葉だ。意図する未来と、現実の差。上手く行くとときもあれば、大きく軌道修正を求められる現実もある。大概は軌道修正さえ上手くやれば現実は何とかなる。問題を抱えた人は、その軌道修正が上手く出来ないのかも知れない。

### 【理想の老後】

高度経済成長期をひた走ってきた夫は、定年退職後の老後についてどんな思いを持っていたのだろうか。自分は散々海外や国内を飛び回ってきた。有名な観光地も廻ったし、地の人と交流を深めることで、観光ガイドにも載っていない穴場スポットや料理を食べることもできた。定年退職後の老後には、妻と共に再訪し、あの頃の話聞かせてやろう。河川敷近くの貸農園を借りて、やったことのない土いじりをやってみるのも悪くない。働いていたころは台所に立つことさえなかったが、夫婦で育てた野菜を使って料理に挑戦するのもいい。息子家族と同居す

れば、孫と一緒に暮らすこともできる。結婚して建てたこの家も古くなったし、一層のこと二世帯住宅にしてやるのもいい。それだけの蓄えと投資は出来るし、そうすることで自分が思い描く老後の未来を具現化できる。

妻は仕事が好きだ。結婚前も仕事を楽しんでいたが、子どもが生まれてからは家事の追われて働くことが叶わなかった。仕事で留守が多い夫の代わりに家を守る、そんな価値観が強い社会でもあったから、妻は一生懸命にその役割を果たした。時に厳しく、口煩い夫だが、よく働き、家族の為に尽くしてくれた、という感謝の気持ちがある。そんな夫が思い描く理想の老後。二

人でそんなことを語ったことはないが、それは幸せな未来だと思っていた。

### 【現実】

おそらく、途中までは思い描いていた未来だった。傍から見ても「理想の老後」「理想の家族」。お金も愛情も伴った家族像。しかし、人生は思いもよらないことが起こる。歳を重ねれば、当然病気や健康問題と対峙しなければならない。妻の物忘れ症状の顕在化。それでも最初は気づかなかった。身近な家族が変化に疎い、ということが多い。そして、妻の症状に気付いたのは妻が長く続けていたパート先だった。「最近、こんなことを言われた」「近頃、仕事の回数が減っていないか」そんな会話が夫婦間で交わされることなく、随分と気づくのが遅れた。認知症には様々な薬やケアが提案されるようになったが、現時点では治る病気ではない。徐々に病気は進行していくが、進行具合や症状の表出には個々に差がある。それは環境因子、特に身近な家族が重要な要因となることも多い。

「どうして勝手に洗濯機にさわるんだ」「ゴミはここに捨てるんじゃない」「朝早くどこに行くんだ」「勝手にお店の商品にさわっちゃいけない」夫の妻に対するダメ出しは多く、短期記憶の低下、見当識障害が顕著になってきた妻にとっては、ストレスの多い日常だった。妻のストレスは、夫のストレスにもなるし、それはお互い様だった。

二世帯住宅で暮らす息子は、そんな父の対応を責める。父の関わり方が高圧的で否定的だから母は何もできなくなる。こういう工夫をすれば、こういう関わり方をすれば上手く行くはずだ。なるほど、それはとても常識的なことだと思うが、あまりにも常識を語り過ぎていないか、と違和感がある。

### 【意図と現実】

夫を交えて家族会を開いたとき、夫が語った言葉は「どうしてこんなことになったのか」「治るものなら治って欲しい」「結局、私が悪いんでしょうか」というネガティブなものが多かった。妻の夜間不眠傾向に合わせて起きている夫は、疲れ果てた表情で語るが、普段、心の隅で思っていた後悔や口惜しさの思いを、家族の中で語ることがあったのだろうか。常識を語る息

子はどうか。そんな親子を見ている息子の嫁の思いはどうか。年頃の孫はどうか。そして、病気を患いながらも、かつてのように家族の中で役割を果たそうとする妻の思いは語られただろうか。

私たちの意識は、現実を紡ぐ言葉を探している。人生、山あり谷あり、と分かったような標語は誰でも知っているが、実際に現実が山なのか、谷なのか、それはあえて語られなければ分からないような気がする。それを語れる家族がいて、それを聞いてくれる家族がいて、何より理想も現実も共有できる家族であれば望ましい。私があの晩、娘と共に流した涙のように。

2021. 11. 14



*miho Hatanaka,*

産まれることにも、老いていくことにも、人が生きることや姿、在りように関心をもつ。生活するということとはごく単調なことの繰り返しのようであるが、それぞれの人の生き方が日々の所作にもあらわれるものだと思う。今回は、食べ物に纏わる話と、一編の詩を。



#### 【第4話 もやしのひげ根に想う】

もやしのひげ根を取るようになったのはごく最近である。育ち盛りの子どもたちがいる食卓を調べていたころにはそのように手間をかけることもなかった。口に障るようになったのは、落ち着いて自分の食事ができるようになったからか。彼らは今それぞれに、自分や家族の食事を作るようになってもやしをどのように調理しているだろう、彼らがまだごく幼い頃でも気にせずにしたことをやや申し訳なく思う。ひげ根で思い出すのは、末の子が幼児の頃、やはり幼い子を持つ友人の家を訪ねた時に彼女が私と話をしながらひげ根の始末をし、せっせと手を動かしていたことである。「ああ、そのように手間をかけるのか!」と感心したものの、見倣うことなく長く過ごした。気にはなっていたその“行為”を今、する私は、かつての母の食卓を想う。

母はまた、大家族を抱える主婦であった。3世代の家族の世話一切を遣り繰りするのは大変なこともあっただろう、私にとっての母の思い出は、食事を作る後ろ姿や、洗上がった洗濯ものをぱんぱんと叩いてのばす音、階段の隅・廊下を丁寧に雑巾がけする

といった“働く”姿に纏わる。その母がもやしのひげ根をどのようにしていたかは覚えていないが、細かく刻まれた菜っ葉の漬け物や、くたっとするまで煮た煮物が祖父や祖母のためのことであったのは覚えている。歯ごたえもなく子どもの口には不要な手間のようにも思えたが、今となってはその細やかさの意味が感じられる。母はまた、“今のちある者”だけではなく“いのちなき者”の食事も調えた。仏前に、正月には雑煮の丸餅を小さく切って白みその御汁をかけ、盆には精進料理を幾品も用意して供えた。雑煮はともかくとして、なすや干し椎茸、こうや豆腐の炊いたんなどは、私も今でこそ喜んで頂くが、子どものころは色も地味な、おいしくもないものとしてありがたく感じなかった。それでも「お盆にはご先祖さんがみんな帰ってきはるんえ」などと大人たちから繰り返し聞いて育った身としては、仏壇のなかの大小の仏さんごとに幾つもの器が並べられ、明らかに普段とは違う“もてなし”をする様や、いつときして仏壇から下げたお下がりを戴くことは、みえないものとのつながりを感じる事ごとであった。

母についてまた思い出すのは、夕飯の支度をしながら涙をぼろぼろとこぼし、たまねぎを切っていたことである。それも一度や二度のことではない。私はそれに気がつく、タオルの端を水で濡らして母に「はい」と手渡した。幼いながらに、「たまねぎを剥くとは、これは大変なことだな」と思いながらも、何か感じるどころがあったのかもしれない、私は、そうやってなんとなく母の傍にいて過ごした。大きくなって自分がたまねぎを切ってみると気づくことであるが、確かに目には染みても泣くほどのことはない。切る前に冷蔵庫で冷やすといった技のようなことも知ると、「母はよほど鈍くさかったのかなあ？」と思うこともあった。

でも、いや、だから違うんよー。

たまねぎについて、ずっと尋ねることもなかったが、先日、2年ぶりに帰省した折に、ふと思い出してその話をしてみた。すると母は、「そうやねえ…。そういうこともあったかもしれへんねえ…」となつかしそうに言った。後日には、誰に言うともなく「おばあちゃんのお世話ができて、よかったんや。私は」と、独り言ちてうなづいた。母は、“父に”、ではなく祖母に“嫁いだ”ような感じさえもっているのかもしれない、そうやって自分の生きてきた日々を肯定しているようであった。過ぎた日々の事ごとについては知る由もない、晩年、すっかり人が丸くなって母を一番の頼りにしていた祖母は、几帳面で筋の通った、凜としたひとであった。

その祖母はもちろん、父も、子のいなかった伯母もみんなその手で看取り、母はこの数年ですっかり歳をとったように感じる。今年、まだ夏が終わったばかりの頃、涼しくなったら久々に我が家にやって来ないかと誘ったことがあった。その話に、大喜びをした母からなかなか返事が来ずに電話をかけてみると「やっぱり、やめとくわ…」とのこと。あれほど出かけるのが好きだった母に、新幹線などを乗り継いでの遠方への旅はもう、要らないのかもしれない。

今日、我が家の庭の銀杏、樺、桜、もみじ…、樹々は色づいて美しい。葉が覆う地面を見ながら、母に見せたいな、と思う。「この家に母が来ることは、もうないのかもしれないな…」と思いながら、見上げると空はきれいな晴れだった。



【farm の思い出】

どの季節にも  
風景のなかに なつかしい と感じる “気配” のようなものがある  
よく晴れた秋の庭を見ながら、

アメリカで暮らしたころの、farm に向かう道を  
今日は思い出す

大きなパンプキン  
機械でぎっくりと束ねたわら  
シナモンと粉砂糖をまぶしたりんごのフリッター

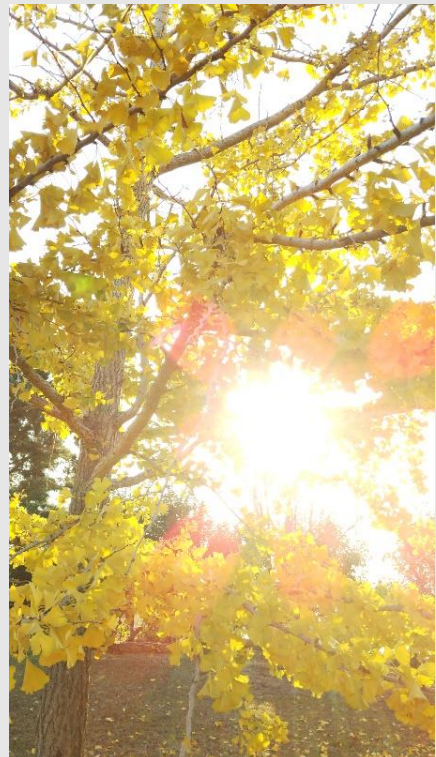
その農場に向かう田舎道を 車で走った

子どもたちがまだ 幼い頃  
小さな くつ で喜んで駆け回り

今日、そのことを思い出すとは…！

わたし は

その景色をこころのなかに持っている



*autumn*

## 福祉教育への挑戦(4)

# 福祉教育と私

高井裕二

### 福祉教育の第一印象は…

高等専修学校に関することを中心に投稿していますが、今回は福祉教育と自分の関わりについて言葉にしていきたいと思います。長年、社会福祉士として相談業務に携わってきましたが、大学院(修士)では教育学を学んでいますし、もともと高校の教員を目指していました。「福祉教育」は非常に多義的であり、ここまで十分に定義せずに使っていますが、①小・中・高など学校教育の中での福祉教育、②地域住民への啓発等も含めた福祉教育、③専門職養成を目的とした福祉教育などがあります。私の一番の関心は①にあります。この中でも教科「福祉」と教科外活動の中で取り組まれている福祉教育にも分けることができます。

当時の私の教育観に大きな偏りがあり、お叱りを受ける覚悟で書きますが、大学院生時代の私の中では「教科外活動」の福祉教育の印象から、福祉関係者の行う福祉教育について抵抗がありました。その理由は「福祉業界の方は総合的な学習(探求)の時間を単なる体験の時間だと捉えていないか」という疑問からです。

少し古いですが、平成20、20年改訂の学習指導要領の中で「総合的な学習の時間」は、以下のような目標の記載がされていました。

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』の「第5章 総合的な学習の時間」より引用

上記にある「横断的」という表現、加えて「教科の横断性」という言葉を頻回に目にするようになっていました。例えば、私が当時見学した中学校では、携帯電話会社と中学校が連携して、携帯ストラップのデザインをする(美術)、価格を考える(経済)、商品のキャッチコピーを考えることや授業後に携帯電話会社にお礼の手紙を書く(国語)といった教科の横断性を持たせた取り組みをされていました。そのため、福祉ではどのような横断性が見られるのかと関心を持っていました。

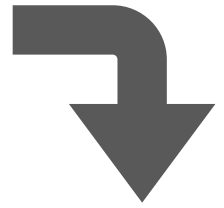
しかし、私が福祉関係者に同行して経験した福祉教育は、車イス体験と高齢者疑似体験を文字通りただ「体験する」するだけでした。一番印象に残っているのは、ある小学校の総合的な学習の時間に行われた低学年を対象とした車イス体験です。まだ小さい身体の子どもたちに福祉関係者と教員が、車イスに生徒を乗せてそれ以外の生徒(4人)に車イスを持ち上げさせて階段を登るように指示をしていました。持ち上げる生徒は手も震えており、「怪我したら危ないですよ」と生意気ながら職員らに声をかけましたが、「何事も経験ですから」と言われますし、生徒に感想を尋ねても「言われているからやってるだけ」という反応でした。車体を持ち上げるのが大変なので、エレベーターがあることの大切さを考えさせたり、持ち上げる時は大人に助けを求めることを考えたりするなど、その中でのおねらいはあったのかもしれませんが、授業時間も限られており、体験だけで終わってしまいました。

このような経験から、「福祉教育って創意工夫も何もしないもの」と苦手意識を持ちました。

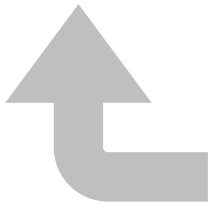
### 「貧困な福祉観の再生産」という言葉に出会って

印象が変わったのは、地域包括支援センターに勤務してからです。地域住民に福祉に関心を持ってもらうために、今度は自分が福祉教育に携わるようになります。苦手意識は払拭できていないものの、福祉教育に関する書籍を読むようになり、ある本に出会います。それは原田正樹先生の『共に生きること 共に学びあうこと -福祉教育が大切にしてきたメッセージ-』です。この本は福祉教育の歴史、理念だけでなく、福祉教育の形骸化という問題意識から「福祉教育の三大プログラム」に批判的な視点で検証を試みられています。三大プログラムとは、疑似体験(車イスやアイマスク体験)、技能・技術の習得(手話、点字など)、施設訪問のことを指し、十分なふりかえりを行わずに形だけでやっているものは、理解の対象を一方向的に「支援が必要な人」「何かをしてあげる人」と捉えてしまい、「貧困な福祉観の再生産をしてしまう」と言及されています。福祉領域の研究者がこのような問題提起を行っていること、そして単なる体験を越えた福祉教育の奥深さ、面白さを認識することができました。この本との出会いが私の学力重視の福祉教育観を変え、豊かな福祉観について考えるきっかけになりました。

現在は大学と高等専修学校で勤務しているため、教育と福祉どちらの観点からも福祉教育を考えることを意識しています。今回は自己語り为主になりましたので、次回は学生・生徒との関わりに戻りたいと思います。



## 特別支援学校の専門性を求めて



著：二階堂哲  
企画：渡辺修宏  
小幡知史  
二階堂哲

### はじめに

対人援助学会 2020 年次大会において、渡辺修宏先生、小幡知史先生、そして私、二階堂哲の3名で、企画 ワークショップを開催しました。

そのワークショップのタイトルは、「対人援助実践をリポートするこの1冊」でした。

対人援助臨床で行き詰ったら、リポートを試みる。

そんなリポートのスイッチは、もしかしたら良書なのかもしれない。

そんな思いを伝えたくて、思い切って手を上げた企画でした。

第1回から第3回までの“語り”は、共同企画者である渡辺先生、小幡先生によって綴られましたが、今回は二階堂がそのバトンを引き継ぎ、2020年度の対人援助学会の企画ワークショップで私が紹介させていただいた、私にとっての「対人援助をリポートしてくれた良書」について語りたいと思います。

はじめまして。私は、二階堂と申します。

渡辺先生や小幡先生を引き継ぐには力不足ではあるのですが、私の体験を記したいと思っています。

現在、私は、茨城県にある特別支援学校で教員をしております。

## 初任者の悩み

17年ほど前から、私は、特別支援学校教員として働きだしました。最初に配属されたのは肢体不自由児を主とした特別支援学校で、準ずる教育課程の生徒に世界を教えたり、重度重複課程の生徒の自立活動でリラックスするための体操をしたりしていました。

それまでは教育実習以外の現場の経験がなく、毎日が初めての体験ばかりで、驚きの連続でした。

障害の種類においても程度においても、多様な生徒がいました。そうした多様なニーズに応えるための高い専門性が求められる特別支援学校において、先輩方は自分の専門性と呼べるものを持ち、それぞれの授業で実力を発揮していました。

一方で、自分にはそういったものがなく、様々な障害を抱える生徒に自信をもって伝えられるものがないことを痛感していました。

そして働きながら、専門性を模索する日々が続きました。

## A先生と、応用行動分析学との出会い

現場で初任者を指導してくれるのは、クラスの担任、社会科担当のA先生、そして、全体の研修を調整してくださる先生の3名でした。その中でもA先生は、指導の根拠を大切にされている方で、私はその人から大きな影響を受けました。

臨床心理士の資格を保有しているA先生は、WISCなどのアセスメントに基づく指導の重要性や、自主研修に参加する意義について熱く語り、その先生の勧めもあって、私は特別支援教育士の資格を取得することになりました。

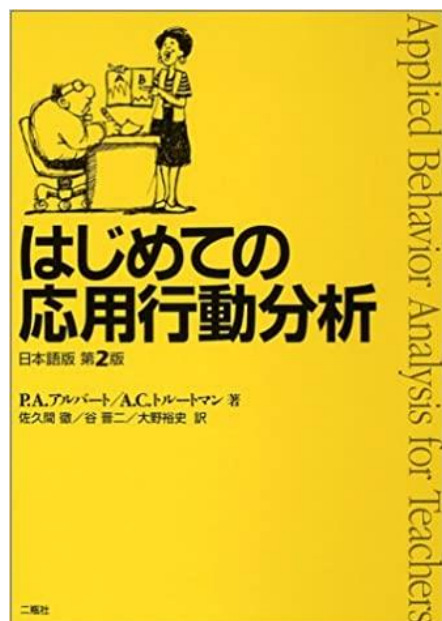
特別支援教育士は、当時「軽度発達障害」と呼ばれていた学習障害(LD)や注意欠陥・多動性障害(ADHD)、高機能自閉症などの教育の専門家の育成を目指して作られた資格で、2年間、土日や長期休業期間を利用して、理解や支援方法について学びました。

そこで、2004年に発売された「はじめての応用行動分析」という本に出会いました。この本には、それまで悩んでいた障害の重い子に対する客観的なアセスメントや具体的な支援方法が理路整然と書かれていて、衝撃を受けました。これまで悩んでいたことの答えが、すべて書いてあったのです。

早速、本を参考に、唾液でシャツを汚してしまう生徒への介入を行いました。その生徒は、口の中に指を入れてしまう癖があり、そのせいで唾液がでて前掛けやシャツがびしょりと濡れてしまっていました。そこで、非対立行動分化強化を用いた介入として、マラカスを持ってもらうことにしました。マラカスの音が強化子となり、マラカスをずっと手放さないため、口の中に手を入れる行動が激減し、唾液の問題も解決しました。



こんな単純なことで行動が変わることに驚くとともに、この経験から、私は特別支援学校の教師としての専門性を、応用行動分析学の学習と実践によって確立していこうと決めました。



P. A. アルバート (著), A. C. トルトマン (著),  
佐久間徹 (訳), 谷晋二 (訳), 大野裕史 (訳) (2004)  
『はじめての応用行動分析 日本語版 第2版』

## 東日本大震災

それから数年間、自主研修に励み、ロボースの早期集中行動介入やポーターページ・プログラム、絵カード交換式コミュニケーションシステム (PECS)、アクセプタンス&コミットメントセラピー (ACT) など、行動分析学 (または応用行動分析学) に基づく様々な介入方法を学びました。

また、A 先生の紹介で、常磐大学で夜間に行われていた行動分析学研究会へも参加させていただき、主催者であった森山哲美先生 (常磐大学名誉教授)、そして、渡辺修宏先生、小幡知史先生と出会い、行動分析学のさらなる奥深さを知ることにもなりました。

そのような中、2011年に起きた東日本大震災が、私の進むべき方向性を変化させました。当時、福島との県境にある北茨城特別支援学校 (茨城県北茨城市) に勤めていたため、地震と津波、そして原子力災害の影響を強く受けたのです。

震災で身内を亡くした知人がいたこともあり、この災害は、生きることの意味を深く考えるきっかけとなりました。ストレスフルな状況が続く中で、この状況を打開すべく ACT を

真剣に取り組んでみようと思ひ、本を何冊か読んでみましたが、よく理解できませんでした。とくにヘキサフレックスの左側に該当するマインドフルネスが難しく、実際に体験する以外にはないという結論に至りました。

実際にマインドフルネスの体験ができる場所を探したのですが、どこも参加費が高額で挫折しました。代わりに見つけたのが、マインドフルネスの源流である小乗仏教の瞑想法が無料で学べる施設でした。

勇気を出して、その千葉県にあるヴィパッサナー瞑想センターの10日間合宿に参加しました。そこでは、最初の数日間、鼻から出入りする呼吸をひたすら観察するように指導されました。そして、講座が進むと、今度は身体感覚を観察するように指導されました。この講座では一貫して、痛みや心地よさを客観的に観察することだけを指導されました。

この、身体感覚を冷静に、ありのままに観察する術を獲得できたことが、教育現場でも役に立つこととなりました。マインドフルネスな態度を保つは難しく、日々実践をしているのですが、瞑想で迷ったときに参考になっている本が、2016年に発売された「自由への旅 マインドフルネス瞑想 実践講義」でした。平易な文章で瞑想のヒントが書かれていて、初心者から上級者まで瞑想を実践するうえで参考になる本です。



ウ・ジョーティカ（著），魚川祐司（訳）（2016）  
『自由への旅「マインドフルネス瞑想」実践講義』

## そして現在

応用行動分析学を実践していくうえで、生徒にとっての環境側にいる「私」がマインドフルネスな状態を保つことの重要性を、日々感じています。応用行動分析学の知識と技術とともに、「介入している自分」と、「介入される側の児童・生徒」を注意深く観察し、自分と子供たちが「共にある」ことを大切にしています。

まだまだ十分な実践には至っていませんが、尊敬する森山哲美先生や渡辺修宏先生、小幡知史先生の実践を励みに、対人援助職であることを誇りとしながら、今後も働いていきたいと思っています。

つづく

## 中国のセクシャルマイノリティ支援 — II

劉 強 (リュウ キョウ)

立命館大学大学院 人間科学研究科

### 前回まで

今回は、中国におけるセクシャルマイノリティを支援する100以上の団体が存在していると述べた。今回は、私の博士論文における調査に協力を得ている団体の概要や活動内容などについて触れていきたい。

### 団体の概要

今回紹介したいのは、出色伙伴（以下、英語名の“Trueself”と記す）という支援団体である。“Trueself”は2008年に発足した。発足当時は男性同性愛者一人と、男性同性愛者の息子を持つ母親一人により立ち上げられた。本部を中国の広州市に置き、設立当初はごく小さな組織であった。その後、十数年間の発展により、現在は全国規模の機関になり、全国70以上の都市にボランティアチームを有し、2018年には、ボランティア登録者数は5000人を超えた。また、ボランティアは主にセクシャルマイノリティ、セクシャルマイノリティの子どもを持つ親で構成される。ボランティアの中には、普段自身の仕事に従事しながら、自由に使える時間を使い活動を行うボランティア、

定年退職後、ボランティア活動を一つのキャリアとして身を投じる人もいる。

“Trueself”の活動経費はほとんど有志の寄付により賄われている。国から支援を得られないなかで、当事者たちは自身の力で機関の影響力を高め、現在は国内で最大のセクシャルマイノリティの支援機関になっている。セクシャルマイノリティの権利の保護とともに、カミングアウトをめぐる支援も求められている中国社会において、この機関は重要な役割を果たしている。

### 活動内容

“Trueself”の一つメインの活動は、セクシャルマイノリティへカミングアウト支援を提供することである。カミングアウトとは、自分の性的指向や性自認を他人に打ち明けることである。このような行為が、多様な性の存在が認識されていない社会においては、決して容易なことではない。その状況を打破するため、カミングアウトをめぐり、助言やアドバイスなどを提供する団体が生まれ、今回で紹介する“Trueself”も、そのうちの一つである。ここで提供するカミングアウト支援は、カミングアウト

という行為の主体であるセクシャルマイノリティ本人へサポートを提供するだけではなく、彼/彼女らのカミングアウトする相手、とりわけ、親たちへのサポートも視野に入れている。“Trueself”はこのような支援活動を持続的に提供し、現在は多様な支援方式を持っている。

まず、支援にあたり、充実した研修制度が設けられている。研修は、初級の「レインボークラス」と上級の「レインボー協力営」に分かれている。参加者数や研修内容もそれぞれ異なっている。

支援はハイブリット式で行われ、対面での支援のほか、積極的にオンラインツールを利用する支援も行われている。特に、新型コロナウイルス感染症が猛威を奮っている中、オンラインによる支援は大きく役に立った。オンライン支援の場合、ボランティアはライブ配信やホットラインを通じて支援を行い、支援を希望する人を個別連絡先の追加とチャットグループに招待している。その後、チャットアプリを通じて遠隔支援を行い、必要に応じてオンライン支援からオフライン支援に切り替える。オフライン支援の場合、数多く開催されるイベントを通じ、コミュニティを形成し、凝集性を高めている。相談者の要望により、その家族が実際の生活の場に仲介者として入り、家族間で起きるカミングアウトをめぐる諸問題を自身の経験を活かし、支援を届けている。オフラインイベントの中では、特に注

目されているのは二つある。それは全国規模の懇談会と地域小規模のシェアリング会であり、子どものセクシャルリティを受け入れた親、あるいは、まだ受け入れてないが、参加者と自分の経験を共有したいと思う親たちが自分の話をする場である。それ以外にも、周りに同じ経験を持つ人のいない家族、あるいは公の場に姿を現すことに否定的な家族に対し、出張型で支援を提供している。

また、広報活動に力を入れるボランティアも存在する。ボランティアが積極的にテレビや新聞の集材に応じて、公の場で自分の経験を語り、セクシャルマイノリティへの関心を高めるための取り組みを行っている。

そのほか、“Trueself”は講演会を開催し、多様な性の存在、法律や政策などの知識付与活動を行っている。研究者への研究支援も行い、学生のフィールドワークやインターンシップも協力している。

## 今後の予定

次回以降の連載では、上記で紹介した支援活動について、ボランティアとのやり取りを含めて詳しく紹介していきたい。



## 島根の中山間地から Work as Life

### 第3回

#### 故郷とグループ

野中 浩一

#### わが故郷

2年前、用事で千葉県銚子市を訪れた。

銚子市は漁業と醤油が有名な港町で、私が思春期を過ごした場所だ。

約15年ぶりに訪れる故郷をググってみると、母校が統廃合されたこと、第2の夕張と目されるほど財政危機にあることが書かれていた。

実際に訪ねてみると、子どものころ足しげく通っていたショッピングセンターは3軒とも跡形なく、ネットに圧されてか書店やゲーム・ホビー屋、雑貨屋やレンタルショップも根こそぎなくなっていた。

唯一、昔ドリカムやB'zなど多くのCDを買ったCD店が、閉じたシャッターが並ぶ銀座通りの一角、錆ついた鉄骨がむき出しの建物の奥で、今も変わらず明かりを灯しているのが印象的だった。

私が銚子で過ごしていた1990年の人口は85,138人(0-14歳比率17.2%、65歳以上比率14.9%)。

そして2018年の人口は60,556人(市の統計で確認できる2015年時の0-14歳比率9.0%、65歳以上比率33.7%)。

時代と人口の大きな変動の中で、自分には何ができるのか、考えるきっかけをもらった気がした里帰りであった。

その日の夜、久々に会食した友人たち。オッサンになってはいるもののあの頃とかわらず。だからこそ記念写真など撮る気にもならず、友や郷愁とはそういうものかもしれないと自分を納得させ、住んでい

た頃には触れることのなかった地元土産で1枚。

## わが娘の故郷

今の私は、島根県雲南市に住んでいる。



私は小さい頃から、父の転勤により全国を転々としてきた。

生まれてから18歳までで、京都、兵庫（神戸）、福岡（北九州）、福岡（小倉）、鹿児島（鹿屋）、東京（押上）、東京（東向島）、そして千葉県銚子市と、生活拠点が変わっていった。

その後、家を出て名古屋と東京で10代後半～20代を過ごし、島根県雲南市に移住したのが28歳手前であった。

20代で無職のまま島根県雲南市に移住した私と妻は、

その年の4月に移住・入籍、5月に妊娠、9月に名古屋で結婚式、12月に起業、3月に長女出産と、まずまず変化に富んだ1年間を過ごした。

その2年後に誕生した次女も含め、私の娘たちは生まれも育ちも島根県雲南市である。

良いか悪いか、転勤しない生活を選んだ私の娘たちは、他の土地を知らない。

田園風景が広がるこの地域。

家の裏では毎年ゆずや柿が実り、一歩家を出れば草花が香る。

もちろん田舎暮らしはいいことばかりではない。

春や秋は「カメムシ」の大群が発生し、夏は刈っても刈っても「雑草」が伸びてくる。

冬の朝は玄関や車の周りに積もった「雪」をかき出すことから始まる。

こうした思いどおりに行かない不便さについて、その時々には勘弁してほしいと思いながら、まんざら悪いばかりでもないとも感じている。

例えば、うす曇りと積雪が続いた数日の後。太陽と青空に恵まれ、雪どけの田園が視界に広がる中で、清涼な風に包まれたときに湧き上がる充足感は、便利な都市部に住んでいた頃には知らなかった感覚である。



## 地域コミュニティの知恵

昔は「出身どこ？」と聞かれると答えに窮した。サラリーマンの父の全国転勤の知らせは突然だ。1ヶ月後には家が段ボールだらけになり、友人から別れのプラモデルをもらい、新たな学校で知らない顔にとり囲まれる。

そんな私が20代後半から、自分の家庭を築くため雲南市に移住した。代々その土地を守り育ててきた方々のおかげで、15年間、今の家に住まわせていただいている。

田畑が広がる私の住む地域は、今も様々な当番や集まりがある。毎月定例の自治会、お葬式の手伝い、神社の掃除、道路愛護の草刈り、慰安旅行、地区民運動会など、私が移住前の都市生活で経験したことのない行事ばかりである。

そうした地域交流の中で、ふとご近所同士のぐちを耳にすることがある。小さい頃から家族ぐるみで知



っている者同士だからこそ、よそ者では想像しえないような積年のすれ違い、そのチリツモ(※1)が口をついて出る場面に出くわす。

一方、長年住み続けているがゆえにご近所同士が必ずしも良い関係とは限らない中で、それでも地域の行事や話し合いや協力が滞ることなく、むしろ誰もが「しっかりやらないと何を言われるかわからないから」という名目～その名目は、試験があるから勉強を頑張ろう、友人が遊びに来るから部屋を片付けようといったモチベーションアップの方便と思われる～のもとで、仕事と同じかそれ以上の勤勉さをもって、日々の地域ごとが行われている。



### 1月恒例のとんど祭の様子

こうした地域の集まりそのものに慣れていなかった私は、特に合間の休憩時間が苦手であった。たとえば7月の道路愛護(地域の草刈り・清掃活動)の時。作業の合間、日陰に集まり休憩をする。誰ともなくよもやま話が始まる。2人組がいくつかできたり、それが合わさり4~6人くらいの輪ができたりしながら、新しく開通した道路の話題や隣の自治会の様子など笑いを交え話している。

移住したての20代後半・30代前半の頃は、私の父くらいの年齢の方々ばかりの集いにどう参加してよい

か分からず、そんな慣れない気兼ねから、その時間がいつまでも続く長いものを感じられた。休憩の終わりが決まっていないことも多く、その時々塩梅次第という曖昧さも時間が長く感じられる一因であった。

しかし移住後数年が経ち、私が趣味や仕事としてプレイバックシアター、インプロ、グループエンカウンター、ドラマセラピーなど様々なグループ(※2)に関わるようになって後、この地域の余白の時間は、グループとして大変意義深い秀逸な構造を含んでいるように感じるようになった。

エンカウンター・グループという言葉が知らなくとも、日本の地域コミュニティの中には、身近な人々が集い、相互理解をし、1人1人を尊重しながらも適度な距離感を保つ知恵が含まれている。私が島根県の中山間地域の一地区で暮らす中で得た発見であった。

## 故郷とグループ

家族、学校のクラス、地域の会合、職場のチームなど、人と人が集団活動する場があり、そうした身近な場が人を支えている。しかし人を支えあうはずの場にいつらなくなる人がいる。いられなくなり去る人もいる。場や集団がよりよく機能し、集団を形成する1人1人の支えになるとはどういうことだろうか。

カール・ロジャーズの言葉を引くと、(ファシリテーターとして)「グループをそのありのまま正確に受け容れる」と報いが大きく、「その人が伝えようとする正しい意味を理解しようとする努力」が、グループにおける私の行動のなかで一番重要で、また最も多いとしている。加えて、グループのメンバーに対しては「私と同じくらいに治療的であるし、ときには私自身よりも、もっと治療的になる」とし、扱いにくい人を診断と治療の対象物として扱うのではなく「人間としてかかわり続ける」ことがはるかに治療的であるとも述べている。

前述の自治会においてもファシリテーター(※3)的役割を担う促進的な方が数名おり、その時々で役割の濃淡が自然と変化しているように感じられる。

また村山正治が提唱するPCAグループでは「今の自分を肯定しながら仲間と相互理解していく試み」として「自分らしさの肯定」「メンバー相互のつながり」「お互いの相違の尊重」を人間像としている。「一人ひとりを尊重しながら、つながりをもつ、バラバラで一緒」そして「はじめに個人ありき」の関係性の中で「初期不安」の緩和を重視するグループにおいて、村山は「やっぱり人間は自分自身に向き合う場所をあまり持っていないんじゃないか。つまりエンカウンター・グループというのは、安心して、人の力を借りて自分自身に向き合う場であり、そこからその人なりの知恵が出てくる。そういう場を提供してきたように思います」とも述べている。



人々が「その場」にいること自体の不安や緊張を和らげ、安全だと感じられる中で、他者を鏡としてそこに映る自分自身と向き合う機会は、制度や規範が成熟した社会においてより減少するように感じている。アーヴィン・D・ヤーロムは「今このアプローチがメンバーの関与する度合いを大きくするものである」と述べているが、成熟した現代社会の中で「今ここ」を意識しなければならないほど、未来や将来に駆り立てられている人が多いのかもしれない。

ダニエル・Z・リーバーマンとマイケル・E・ロングは著書「THE MOLECULE OF MORE」の中で、「ドーパミンはどんな時も未来に備えることを見据え、あらゆるものをより多く手に入れることに力を注ぐ」としている。対して、「今、ここ」での「感覚や感情から生まれる喜びをもたらす」のがセロトニン、オキシトシンなどの化学物質であると述べている(※4)。近い将来に向けてもっと欲しがる獲得衝動と、今を感じ・味わい・満たされる感覚と、本来、人はそのバランスをとって生きているはずである。

しかし少なくとも私の目に見える世界は、未来の利益を獲得したがること、将来への備えを求めること、つまりドーパミン優位だと感じている。家庭や教育の場もその影響を免れていない。

人は生まれてすぐに勉強を始め、進路を考え、将来に備えるわけではない。家庭の中で、家族とともに個人対個人で安心できる関係性を長年育み、友人との遊びの中で楽しみながら他者との違いや自己理解を深める。そうした親しい関係や日々の体験が土台となり、その上に学習や進路や仕事などの社会的な能力向上や役割が積み重なる。そうした今ここを楽しみ感受する土台が必要なのである。そうした土台形成が十分ではない中、ぐらつく土台の上に家を建てることは困難を極める。

高校3年生になる男の子が不登校だった中学当時を振り返り「たまにしか学校に行けなかった中で、行くたびに進路の話をされるのがしんどかった」と語った。不登校とはドーパミンに駆り立てられる大人と、まさに目の前の絆や安心や喜び体験(セロトニンやオキシトシン)の土台を必要とする子どもとのズレの問題でもある。将来への備え・勉強・進路以前に、必要なことがある。今、その子にとって安心して過ごせる場所があるのか。笑顔で迎えてくれる人がいるのか。楽しいと思える日々があるのか。

故郷と呼べる場所がどこか迷うほど故郷の多い私が、行き場を探す若い子たちの対話と活動と学習の場でグループ形成に関わっている。私がこの集いの場づくりの仕事を通じていつも頭の中に思い描くイメージは、田園が広がる中、生活も仕事も休憩も遊びもないまぜになった一緒の学び合い、今を生きる人々による故郷の営みの光景。それは私にとっての銚子であり、雲南であり、川上四郎画「裏の畑」の姿である(※5)。

(足立美術館ホームページより「裏の畑」)

[https://www.adachi-museum.or.jp/archives/collection/kawakami\\_shiro](https://www.adachi-museum.or.jp/archives/collection/kawakami_shiro)

### <語句注釈>

※1 チリツモ：塵も積もれば山となるの略語

※2 グループ：本著では、心理的安全性が保証された場の中で、成員の自己理解や相互成長を促進するグループアプローチ全般のことを指す。1960年代以降、パラダイムシフトの時期のアメリカで生まれ、参加者とファシリテーターとが短期集中的に集う、人間回復運動としてのエンカウンター・グループと、著者が運営する高校生が集うフリースクールのように日常的に集う中でのグループアプローチとの線引きはせずに記述している

※3 ファシリテーター：グループにおける促進者。「参加者の心理的安全性を保証」し、「今、ここで素直に自己開示すること」「自らを受容し他者からの受容に気づくこと」「頭で考えることよりも体全体でその瞬間を感じる」となどを促進する

※4 今ここの化学物質：著書の中で現在志向の神経伝達物質であるセロトニン、オキシトシン、エンドルフィン、エンドカンナビノイドをまとめて「ヒア&ナウ (H & N)」と呼んでいる

※5 「裏の畑」の姿：大人のコミュニティと子どものコミュニティが互いに目に見え、手が届く、時間や空間を一緒に共有する中で互いを感じられる地域社会の姿

### <引用・参考文献>

アーヴィン・ヤーロム著 岩田真理訳 (2007) 『ヤーロムの心理療法講義』 白揚社

ダニエル・Z・リーバーマン、マイケル・E・ロング著 梅田智世訳 (2020) 『もっと！愛と創造、支配と進歩をもたらすドーパミンの最新脳科学』 インターシフト

H.カーシェンバウム、V.L.ヘンダーソン編 伊東博、村山正治監訳 (2001) 『ロジャーズ選集(下)』 誠信書房

村山正治編著 (2014) 『「自分らしさ」を認めるPCAグループ入門 新しいエンカウンターグループ法』 創元社

中島義明、安藤清志、子安増生、板野雄二、繁耕算男、立花政夫、箱田裕司編 (1999) 『心理学辞典』 有斐閣

## 夫の腎臓と、笑うわたし

両角 晴香

高校の同級生と7年ぶりに再会した。1980年生まれの我々は、40代になってはじめて顔を合わせる。メンバーの一人は、「さっちゃん」。

さっちゃんとは高校時代に一度も話をしたことがなかった。大学生になって急に仲良くなり、恋のこと、夢のこと、青臭いことはすべて打ち明けてきた特別な友人だ。

けれども、7年ぶりの再会とあって、どこかぎこちない。

さっちゃんといえば、腎臓が悪い私が入院した時にお見舞いにきてくれた人。学生時代に音楽活動をしてきた私が京都でライブをすることになり不安そうにしていると、京都まで同行してくれたのもさっちゃんだった。後に、京都の前日にお父様が倒れたことを私に隠して京都に来てくれたことを知り、何度も何度も謝ったのは切ない思い出だ。(お父様は無事回復しました)

楽しい思い出も苦い思い出もあるさっちゃんと40代になり再会。なのに、ぎくしゃくしていることがもどかしかった。

この7年間、私もさっちゃんも心境の変化があったせいだろう。

私は夫から腎臓を一つ分けてもらう夫婦間腎臓移植を受け、25年ぶりに持病を手放すことができた。

笑うとキムタクに似ているのにずっと独り身だったさっちゃんは、今年、地元広島的女性と結婚して家庭を持った。聞けば、出会って3ヶ月のスピード婚で、お相手は歯科医院を営む女医さんとな。あのシャイなさっちゃんが惚れ込んだ女性としあわせな家庭を築いている。本当によかったと思った。

しかし、会話は盛り上がらなかった。ぎこちないのは、話し言葉のせいもあった。私は東京に暮らし、さっちゃんも海外を転々としていたせいかな、広島弁がスツと出てこない。

もたもたしていると2時間の会食は終了。お会計を、と店員さんに急かされると、「お前さ」と、さっちゃんが口を開いた。

「お前、不妊治療まだ頑張っとんか？」

急にデリケートな話を振られたことにも驚いたが、仲良しとはいえ異性のさっちゃんに不妊治療の話なんかしたっけ？と戸惑った。（共通の友人のゴージャスに聞いたのかな？）

「一応頑張っとるけど、来年の誕生日に不妊治療は卒業しようと思っとる」と、ありのまま伝えてみる。

「そうか。旦那さんからもらった腎臓を大事にせんにゃーね」と、何かを飲み込むさっちゃん。

「さっちゃん、どしたん？」と聞くと、「いや、実はうちも不妊治療しとるんじや」とさっちゃんは無表情のままカミングアウトをした。

ここからは、一気に10代の自分たちに逆戻り。店を出るなり近くのマクドナルドに飛び込んで、「これまでどんな治療をしてきたのか」、「不妊治療をする人の心と体の痛み」について、私は妻の視点で、さっちゃんは夫の視点で語り合った。

きついね、つらいね、よくがんばってるね。私はもう諦めかけてるけど、さっちゃんの奥様は30代でお若いから大丈夫。

そんな話を一通りすれば、どんどん話がウェットになっていく。これは、不妊治療をしている当事者にしか理解できない話かもしれない。我々は、スマホを取り出して、まるで我が子の写真を見せ合うように受精卵の写真を見せ合った。

不妊治療の最終段階は、体外受精だ。体外受精をしているということは、あらゆる治療を尽くしたけれど妊娠できないのであって、体外受精を経て受精卵ができたことは、患者にとっては奇跡のようなもの。受精卵は我が子のように愛しい存在なのだ。

「ああ、この子は美しいね。いい子」

私たちは、互いの受精卵のかたちをチェックした。凸凹がなく円形状に整っている受精卵は生命力が強く、妊娠の確率が上がると医師に教わったためだ。でも、「いい子」だなんて。相手は受精卵なのにね。この妙な感覚を、誰でもないさっちゃんが理解してくれたことがうれしかった。

ちなみに、我々の話を隣で聞いていた同級生は、「ほほーこれが受精卵か。勉強になるわ」と大人の対応をしてくれた。同級生の間に、偏見はない。ただただ、仲間のこれまでと、これからを受け入れる。

結局、マクドナルドで2時間話し込み、広島弁を取り戻しつつあるところで、お開きとなった。

帰りの小田急線では、親の死の話になった。

「お前の母ちゃん亡くなったんじゃろ。実はゴーロから聞いたんじゃけど、お前が家族のこと大好きなの知ったけん、なんて言葉をかけたらいいいんかわからんで。何年も連絡できんかった」とさっちゃん。

「いやいや、さっちゃんもお父様がお亡くなりになったんじゃろ。お母様はどうしとってん？」と私。

親の死。40代になると珍しいものではなくなる。もちろん悲しい出来事だけれど、この時の文脈は悲しいものではなかった。

未熟だった私たちが親離れして、自分の道を歩みはじめたという前向きな話だった。親の死を通して互いの成長と老いを実感できる。それも生きてこそだと思えば、ありがたいものだと感じできる。

「じゃ、またな」

先に電車を降りるさっちゃんがハラハラと手を振った。4代のおじさんになっても、笑うとやっぱりキムタクに似ていた。

文/もろずみ・はるか

ライター・医療コラムニスト

広告制作会社を経て2010年に独立。中学1年生の時に慢性腎臓病を発症。18年3月、夫の腎臓を移植する手術を受けた。

- ・連載（ウートピ） [https://wotopi.jp/archives/cat\\_summary/kidney](https://wotopi.jp/archives/cat_summary/kidney)
- ・連載（yomiDr.） <https://yomidr.yomiuri.co.jp/column/jinzou-morozumi/>
- ・YouTube <https://www.youtube.com/channel/UCyAM15SCKtBfsqTxk7HTbhA>
- ・ラジオ <https://885fm.jp>



# かぞくのはなし きむら あきこ

## 第一話 手元のジェノグラム

### その 1

団士郎先生の、「家族理解ワークショップ」で、家族の学びを始めて、10年以上が経ちました。ワークショップのプログラムには、ジェノグラム面接演習というメニューがあります。二人一組で、インタビューをする人、される人、或いは、三人一組で、インタビューする人、される人、面接を観察する人というような形で、ジェノグラムを使った面接の演習をします。

「ジェノグラム」というのは、三世代以上を盛り込んだ家族の関係図です。このジェノグラムを使った面接が、想像以上に、家族を理解するための道具になっているのです。相談援助職としては、是非ともジェノグラム面接の腕を磨きたいと感じます。日々、相談援助の現場でジェノグラム面接を行っていますが、ワークショップでの演習は、また新たな発見に出会います。それは、インタビューをするという役だけではなく、インタビューを受ける、という役割を体験するからです。言ってみれば、被援助者体験を通して援助者を観察する機会でもあるからでしょう。

先日、これまでのワークショップの中で経験したジェノグラム面接の記録を振り返ってみました。そこには、10年前の私のジェノグラムがあります。どなたかが私にインタビューをしながら、私のジェノグラムやエピソードを描いて（書いて）くれたものです。このようなジェノグラムが、10枚ほどありました。ワークショップは10回以上参加していますし、面接演習も10回以上経験しています。それでも、手元に残っていたのは、10枚ほどのジェノグラムでした。戻らなかったものや、もしかすると、私自身が無くしてしまったものもあるでしょう。残った10枚のジェノグラムには、今よりも若い私と家族が存在しています。聴き手によって残された、「当時の私と家族」の記録がそこにあるので

す。今回は、手元のジェノグラムを使って、面接を受ける側（被援助者側）から、ジェノグラムとジェノグラム面接を振り返ってみたいと思います。

## ジェノグラム面接 演習のモヤモヤ

「では、ご家族のことを教えてください。」

面接者（いわゆる援助者の立場）の最初のセリフです。面接を受ける私（いわゆる被援助者の立場）は、どこから話そうかな、と一瞬頭の中の整理をしましたが、次のように答えました。

「今は、一人で暮らしています。離れています。息子が一人と娘が二人います。」

面接者は、手元の紙の上に、○や□（性別を表す記号）を記入しようとして、その手を止めました。私の顔を見て、「ええと・・・旦那さんは・・・離婚ですか？」と聞き返しました。

一瞬たじろぐ私。そして、「離婚・・・しました。」と答えながら、心の中が、ざわざわしました。私の心のざわざわとは関係なく、面接者は、○と□と家族メンバーを結ぶ線、夫婦をつなぐ線に、斜めの斜線をササッと二本描きました。

その後も、インタビューは続きます。前半8分、後半15分の面接。ずっと残る、私のざわざわ感。面接が終了した時に、なんとも言い難い疲れと不快な気持ちが残ってしまいました。

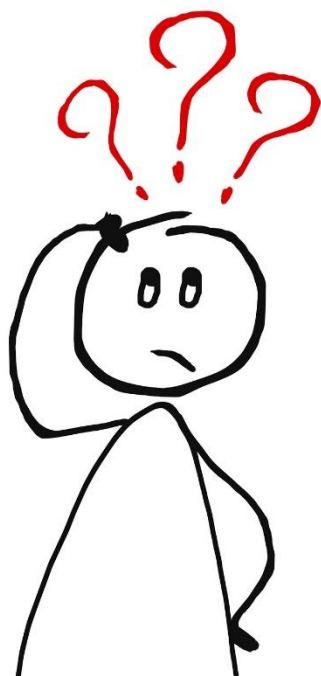
互いの役割を終え、面接についてのフィードバックです。私は、自分の身に起こっているざわざわ感を言葉にしてみました。

「私が最初に家族メンバーを伝えた後、夫が紹介されないことについて、『離婚したのですか。』という直球質問は、きつかったです。離婚について、隠すつもりはありませんでした。でも、自分以外の人から『離婚したのですか。』という直球質問は、なんだかしんどかったです。」率直な感想を伝えました。

面接者は、「ごめんなさい。では、なんと質問したら良かったのでしょうか。」と私に問いかけました。

家族の紹介をしてもらった時に、当然、登場しても良いはずの家族メンバーが紹介されなかった時（私の場合には、子どもたちの父親の存在）、面接者はそこに疑問を持つでしょうし、疑問を持ったまま面接を進めても、何か面接者は落ち着かないままかもしれません。先の面接開始場面では、どのような問いかけをされれば、私は穏やかに答えられたのでしょうか。

「今は、一人で暮らしています。離れています。息子が一人と娘が二人います。」



① 今は・・・と言うと、その前は、どのような感じでしたか？

② お子さんたちの、お父さんはどうされていますか？

③ 息子さんや娘さんは、お幾つですか？いつ頃から、離れたのですか。

④ お一人暮らしは、いかがですか？

他にも、質問フレーズは考えられますが、上記のような質問をされると、たぶん、②や④あたりの質問で、私は、自分が過去に離婚をしたことで、子どもたちの父親のことを語らなかつたという事実を伝えるのではないか、と思います。

私は、このジェノグラム面接演習の時には、自分のことをできるだけ正直に話したいと思っています。「離婚」という自分の身に起こった出来事も、隠すつもりはありません。でも、家族紹介に夫（子の父親）が登場しない理由は離婚に限ったことではないのです。様々な理由があるはずなのに、ピンポイントに「離婚ですか。」という質問に、「はい！大正解！！！」とはならないのです。（クイズじゃないのだから・・・）

当然ながら、面接者に悪気はないのは理解しています。私は、被援助者体験を通して、質問フレーズは丁寧に生み出す必要があると感じました。そして、語りだした人が、どのような言葉を使っているかに心を寄せて聴くことができ

ると、相手が何を語るのか、語りたいのか、面接者は謙虚になれるのではないかと思うのです。

ジェノグラム面接の演習では、現実の相談面接とは違い、被援助者役が、必ずしも、課題や悩みを抱えているわけではありません。ですから、困りごとを語りだす、というわけではないのです。面接者は、できるだけニュートラルな気持ちで相手の語りに心を寄せることが大切です。実際の相談面接の場合では、困りごとを抱えた来談者が、主訴という名の困りごとを面接場面で語ろうとします。けれども、その主訴は一旦横に預けておいて、「ご家族のことを教えてください。」という声掛けをすると、「家族」を入り口に、家族に起こった情報や思いが語られます。事実の一つでも、事実の語り方は一つではありません。事実をどのように語るのかは、語り手が選択できますが、そもそも、聴き手が、語りを受け取ろうとする姿勢がないと、語り手は語りたくもありません。

私が、私の「今」について、あるいは「家族」について語りたかったのは、離婚の話ではありませんでした。面接において、訊きたいことと語りたいことにズレが生まれると、援助者が被援助者に対する理解にたどり着くことは難しいかもしれません。（被援助者は、訊かれないのではなく、聴いて欲しい。）援助者視点では、ともすると「情報」収集に重きがおかれてしまうことがあります。事実情報は、尋ねられれば簡単に答えることができます但也有すが、事実に関する「事情」や「思い」については、尋ねられ方によって、答え方も変わってきます。それは、単純に、「質問力」という括りではないような気がします。

「今は、一人で暮らしています。離れていますが、息子が一人と娘が二人います。」

この語りだして、私が続けて話したかったことは、子ども達が成長して、一安心したことや、私自身も一人暮らしが板についてきたところで、ようやく自分の人生を生きている実感を得て毎日過ごしている、ということでした。手元のジェノグラムには、三世代が盛り込まれた私の家族情報がしっかりと描かれていました。けれども、私が語りたかったことや家族の特徴が浮かび上がったものではありませんでした。「聴いてもらえた。」と実感する面接ができるようになるためには、やはり練習が必要です。この時の面接演習は、心にモヤモヤしたものが残りましたが、その経験があったからこそ、実際の相談面接の場面では、聴き方に留意することを特に意識できるようになったのは大きな収穫でした。

おわり



## 対人援助学マガジン読書会報告

### 対人援助学マガジン読書会（第3回）実施報告

2021年10月29日に第3回目の「対人援助学マガジン読書会」をオンライン（Zoomミーティング）で開催しました。

第3回の指定図書は、岡崎正明さんの「役場の対人援助論」で、最新号に加えて、執筆者の岡崎さんからのリクエストで連載第2回、第8回、第10回、第13回、第16回の原稿を読んだ読者で集まりました。編集部を含め8名の読者と、執筆者の岡崎さんをご参加くださいました。役場における対人援助のことだけでなく、社会的な観点も含めた対人援助のあり方をめぐってさまざまな話題が展開されました。

### 第3回読書会指定図書執筆者：岡崎正明さん

行政職員として、窓口に持ち込まれる“相談事”をめぐる「役場の対人援助」について、コミュニケーションや関係性、仕組み、服装など、毎回様々な観点から考察する「役場の対人援助論」を第8号から連載。現在39回目を連載中で、間もなく連載10年を迎える。

（執筆者短信等から抜粋）



## ◆第4回読書会のご案内◆

対人援助学マガジン第4回読書会を下記の要領にて開催いたします。

読書会では、指定図書を事前に読んだ参加者が集まり、読書を通して得た気づきや感想、意見を共有することで、より深く、より広く、マガジンを楽しむことができると考えています。

期日：2022年1月21日（金） 21時から23時

定員：10名程度（先着順）

指定図書：「ああ、相談業務」（最新47号7回連載中）

※当日までに指定図書の最新号を読んでおいてください。

※可能な範囲でバックナンバーおよび前の連載も読んでみてください。

執筆者：河岸 由里子氏

執筆者紹介：（執筆者短信等から抜粋）

かうんせりんぐるうむ かかし主宰。家庭支援、家族支援、子育て支援の現場での実践を重ねるとともに、大学や専門機関等での講演も多数。対人援助学マガジンは創刊号から連載し、「我流子育て支援論」「境界あれこれ」などの連載を経て、現在は「先人の知恵から」と「ああ、相談業務」のダブル連載執筆中。

申込方法：

お申込みはメール：takashi\_otani7929@yahoo.co.jpまで、件名を「読書会参加希望」としてお送りください。開催期日が近づきましたら、Zoom ミーティングの情報をお送りします。

編集部：大谷多加志

## 対人援助学マガジン執筆者トークライブ (オンライン)実施報告



2021年11月25日(木)の21時から23時という日程で、「対人援助学マガジン第2回トークライブ」が開催されました。第2回の話者は「路上生活者の個人史」を連載中の竹中尚文さんです。

参加者は約10名で、前半は「信仰と共感」をテーマにした竹中さんのトーク、後半はフロアも含めたディスカッションという2部構成でした。

前半は仏教や仏事の本来の意味や社会の中で果たしてきた役割、竹中さんの支援活動などについてお話頂き、後半はそれらの話題から刺激を受けて、参加者の個人的体験にも触れながら、活発なディスカッションが行われました。

ご参加くださった皆さんと、話者を引き受けて下さった竹中さんに改めて感謝申し上げます。

また第3回のトークライブも企画する予定です。

読書会やトークライブの開催情報は、FacebookやTwitterなどのSNSも活用して発信していく予定です。

◆マガジン公式 Facebook

<https://www.facebook.com/taijinenjyogakumagazine>

◆マガジン公式 Twitter

<https://twitter.com/taimagahenshubu>

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

今号からの新連載が二本。どちらも新しいタイトルでの再登場である。連載継続のまま新タイトルに変わっていった方も、複数のタイトルを連載中の人もいる。一方、連載をしていることが何年経っても記憶定着しない執筆者もあって、毎回僅かながら督促対象になる。これ、苦言を呈しているのではない。それで多様なのだと考えようとしている。

大所帯の執筆陣である。それぞれに個人の事情も発生する。マガジン連載を中心に生きているわけではない。思いがけないこととの遭遇も少なくない。それも含めての長期連載だから休載がでるのもやむなしである。

編集部の予定に、全員が合わせすぎないことにも意味はあるのだろう。しかし編集者は几帳面でないと、雑誌なんて直ぐ発行遅延、合併号、休刊なんてことになる。

仕事じゃない、ボランティアなんだから・・・なんて気持ちで、発行がズルズル遅れた薄っぺらい学会ニューズレターの編集後記に、「なかなか原稿が集まらず、多忙に任せてついつい発行が遅れてしまいました」・・・などと何の反省もない定型文を書いてしまえる俗物が嫌いである。

世に棲息するそんなありきたり群に反旗を掲げ、スマートな個人連帯としてのマガジンが、そろそろ五〇号なんて節目を意識し始めている。

\*

執筆者短信を見ていると、マガジン執筆者の間で「ネコ」を飼う人が増えているらしい。連載「そうだ、ネコに聞いてみよう」の増殖能力は絶大である。面白いことがいろいろあるもんだなあ、到着原稿を見ながら思いを巡らせているところだ。

### 編集員(チバ アキオ)

こんなことも編集会議で話題になった。「自分をどう満足させるか?」「どう満たすか?」である。

若いころそれを行うことで自分が満足できていた行動でも、年を重ねるとその行動では満足できなくなっていく。自分自身も変わる。この世には変わらないものはない。体を使うことはそもそもできなくなることもある。「こんな一日を過ごしたくはなかった…」、一日の終わりに誰しもそう、思いたくない。「これをしている自分が好き」と思うことがあればうれしい。

とはいえ、自分自身が満足できる行動はそんなに多くはない。「千葉さん、趣味は何ですか?」といわれることもある。「趣味」といわれると困る。ずっと仕事では大変ですよ、趣味を持った方がいいとも言われる。趣味といわれても、こうして編集会議をしたり、編集をしていたり、読書会をしていたり、トークライブをしていることに満足している。趣味か?といわれるとある意味趣味かもしれないがそうでもないような気もする。

就労支援の福祉施設に勤務していたころ、私はしきりに就労が本務の施設なのでこうあるべき!生活施設とはちがうのだから!ということに縛られていた。そんな時にスーパーバイザーに言われた。「千葉君、働くことも生活やで」と。今やコロナでのオフィス縮小というリフォーム市場では、働くように暮らし、暮らすように働く、そんな早く出勤したくなるようなオフィスづくりが話題と聞く。行きたくなる場所にしていくことに、趣味も仕事もない。やはり全て生活なのだ。

対人援助学マガジンの活動もある意味生活であり、暮らしなのだ。書く人は書くし、読む人は読む。集まることもあるし、オンラインでつながることもある。さらにマガジンの連載テーマは人々の生活そのもの。こうしてそれぞれのコミットの仕方でマガジンを取り込みながら、暮らす人たちの集まりなのだ。あらためて思った昨今のマガジン活動でした。

### 編集員(オオタニ タカシ)

マガジン47号を無事に送り出し、2021年も間もなく年の瀬を迎えます。個人的な区切りですが、10号から編集にかかわるようになって、もうすぐ丸10年を迎えることとなります。就職したばかりの新人の頃、講師として来られていた団編集長に

「とりあえず10年やらない」と言われたことは今でも記憶に残っていて、少なくとも10年以上に渡って「辞める」という選択肢が頭に浮かばなかったのは、この言葉の影響が大きいと思っています。だから、マガジンの編集もこの10年の区切りを超えられそうなことは、ちょっとだけ誇りです。

コロナ禍を経て、リアルに会っていた人とオンラインで会うという機会ができ、またコロナの感染が落ち着いたことで、この期間にオンラインで出会った人と初めてリアルに会うという機会も生じてきました。

リアルとオンラインの二重の関係性は、コロナ禍が生み出したものであり、今後も続いていくと思われます。個人的には、不定期で連載している「執筆者訪問」での体験もこの二重の関係に近いものがあると感じています。リアルの劣化版や代替としてのオンラインではなく、より複合的なつながりとして機能するオンライン・オフラインの関係性をどう楽しめるかが、時代から問われていることであるように思います。

## ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

### マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

## 対人援助学マガジン 通巻47号

第12巻 第3号

2021年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第48号は2022年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2022年2月25日！

## 執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

**執筆資格は学会員であること。** 現在非会員で書いていただく事になった方には、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

## 対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

## 表紙の言葉

モノクロ漫画に色彩を一つだけ加える  
とすると赤は映える。赤いモノを探して、それをテーマにヒトコマ漫画を描くやり方がある。

ポスト、赤信号、サンタクロース、トマト。稲荷の鳥居に日の丸、中国の国旗、そして「血」。

吸血鬼や献血、殺人現場、輸血、いろいろ場面が思い浮かぶ。

表紙漫画の場合、バキュームカーの連想で、献血車を書いてみた。チャプチャプ混合された ABOAB 型のハイブリッド輸血運搬。

こんなあぶないモノはない？のだろうね。混ぜるな危険！か。最近血液サラサラ剤の服用者が多いらしいから、大丈夫かも。

団士郎 (2021/12/15)